
エレメンタルジェレイド～麻帆良で輝く光～

フィロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレメンタルジェレイド〜麻帆良で輝く光〜

【Nコード】

N2489M

【作者名】

フィロ

【あらすじ】

学校からの帰り道。気紛れで普段使わない道を通ったら美少女が道路で寝ていた。ほっとく訳にもいかず、家に連れて帰る。そして目を覚ました少女から聞かされた話。自分は人ではなく、武器だという。ごく平凡な麻帆良生徒と淒く変わった少女が織りなす不思議なお話。物語は原作開始より少し前。ハーレムではありませんし、チートでもないです（多分）。エレメンタルジェレイドの原作キャラは出す予定です

プロローグ

春が近いというのに、吹きつける風は肌寒い。当然か、まだ二月の半ば。少し歩みを速めながら、帰路に付く。

「そつえば、今日は月が出るのが早いな」

空を見上げれば、薄っすらと月が見える。……………月は好きではない。昔に何があったのか、という訳ではなく、ただ嫌なのだ。見つめていると落ちてきそうで、不安になる。そんな話を話すと友人は「ユニークな発想だね」といって、俺が奢った餡蜜を頬張るだろう。確かに、自分でも変な考えだと思う。だが、何故だかそんな考えが頭をよぎるのだ。だからなのか、俺は月よりも太陽の方が好きだ。

「ん？」

考え事のせいか、俺は普段あまり使わない道を歩いていた。此処からだとかからは少し遠い。まだ引き返せる程度の距離だ。

「まあ、いいか」

そう呟き、歩く。空は朱に染まり、徐々に蒼き闇が広がっていく。そんな風景は嫌いじゃない。けどやはり、俺は夜から朝に変わる景色を見る方が好きだ。

「？」

目の前、暗くて見えないが『ナニカ』いる。大きさに大型犬だ

ろうか。近づくと。

「……………女の子？」

そこには太陽と同じ色の髪を持った少女が横たわっていた。

「死体……………なわけないか」

耳を澄ませば、少女の呼吸が聞こえる。

「見付けたのも何かの縁だろうし」

そういつて少女を抱き上げ、驚く。軽い、それも羽の様に。

「ちゃちゃつと帰るか」

歩き出す。さて、今日の夕飯は冷蔵庫の残りで足りるのだろうか、そんな事を考えながら、俺は子供の頃、大好きだった祖父の言葉を思い出した。

「人の縁えにしというのは不思議な物だ。そして不思議故に何が起きても不思議ではない。そして人はその不思議に対して、どう行動するかで決まる。お前はその時、どんな行動をする？」

あの時は答えよりも、質問自体が良く分からなかった。今でも、答えを出せるかどうか分からない。だが、少なくともこの少女との出会いで、質問の答えが出せるだろうか。

「どう思うっ？」

何故か、寝ている少女に話しかけてしまう。そんな俺が可笑しく
て笑う。さて、帰りますか。

「ラッキー 問題なさそうだ」

そんな声が聞こえ、目を覚ます。最初に見えたのは。

「知らない……天井だ」

「起きたのか？」

すると男がやってきた。上半身を起こし、男を見る。まだ、少年
と言っていいほどの外見。黒いツンツンした髪に山吹色の瞳。背は
高い方だろう。

「誰だ、貴様は？」

「名前を聞く時はまず自分から。礼儀だろう？」

確かに一理ある。少し癪だが答える。

「私はノーチェⅡプリマム」

「俺は山吹 天^{あまこ}」

ヤムブキ「アマト？逆だろうか。不思議な響きを持った変な名前だ。

「今、変な名前だと思ったな？」

「思った。それで？此処は何処だ？」

「俺の家。というかお前は家出か？それとも迷子か？」

「家は元々ない。迷子と言われると確かに迷子だ」

そういうと、アマトは何か考えている。

「行く宛てや、知人は？」

「……………ない」

嘘を言った。知人はいる。だが、此処にはいない。それに帰った所で。

「そうか、腹は減ってるか？」

「は？」

「腹が減ってるなら飯でも食ってけ。行く所ないなら、うちに住め。どうせ俺しか住んでないからな」

「待て！……いきなり何を言っている！……というより、何で初対面の相手を住まわせる！？普通、追いだすだろ！……！」

そういつと、私のお腹が鳴った。

「腹の方も元気がいいな。少し待ってる。簡単な物作ってやるから」

そういつて、アマトはキッチンの方に歩き出す。顔が熱い。

「ほらよ」

出されたのは Pasta だった。

「……………」

「嫌いだったか？」

「いや」

そういつて、Pasta を食べる。美味い。そう、素直に言えるほど美味しかった。

「どうだ？」

「美味い」

そういつと、アマトは嬉しそうに笑う。

「何故だ？」

「ん？」

パスタを食べ終わり、アマトに聞く。

「何故、此処までする？」

「それは」

そういつて、口ごもる。

「誰かを助けるのに理由がいるのか？」

そう言われ、言葉が出ない。今の私はとても間抜けな顔をしているのだろう。

「そうか、お前は『お人好し』か」

「そうだな。よく言われる」

そういつて、笑う。つられて私も笑う。

「それで？」

「ん？」

「家に住むか？」

「……………気が向いたらな」

そういつて、皿を渡す。

「なんだ、お代わりか？」

「違う！！！」

ノーマ（本人からそう呼べと言われた）が風呂に入っている。不思議な少女だ。雰囲気もそうだし、何処か猫を連想させられる。

「家がない、か」

その時の表情は哀しそうな表情でもなければ、嬉しそうな表情でもない。まったく、何ともない様な表情だった。彼女にとって、帰るべき場所、帰りを待っている者がいる場所というのは無いのだろうか。

「おい」

「ん？おお、俺のお古でも似合ってるな」

昔着ていたパジャマをノーマが着ている。

「私の服は？」

「洗濯する。結構汚かったからな」

そういつて、カップを二つ取る。

「ココアがいいか？それともコーヒー？」

「ココア、少し甘め」

そういつと、リビングにあるソファーに座ってテレビを見始める。俺は言われた通り、ココアと自分が飲むコーヒーを作る。ついでに冷蔵庫に買い置きしてあるチョコを持ってリビングに向かう。

「チョコがあるけど食べるか？」

「貰う」

そういつて、ココアを一口飲んでから、チョコを一欠けら口に入
れ。

「んむっ?!」

固まる。俺はそれを不思議そうに見つめながらチョコを食べる。ゆつくりとノーマはチョコを飲み、その倍くらいココアを飲んだ。

「な、なんだ。この恐ろしく苦いチョコは？」

「何って『カカオ99%』のチョコだけど」

そういつと、ノーマが驚いている。値は張るが、かなり美味しいのだ。特にこの苦みが。

「よく平然と食べられるな」

「これを食べると他のチョコが甘ったるくなるぞ。他に菓子があるけどどうする？」

「苦くないのを持って来てくれ」

要望通りに甘いチョコを持ってくる（前に友人から勧められた物）すると、ノーマは持ってきたチョコを食べて満足そうな笑顔を作る。

「そういえば」

「ん？」

ノーマが思い出したように聞いて来る。

「此処は何処だ？」

「何処って麻帆良だよ」

「違う。大陸と国の名前だ」

聞かれ、首を傾げる。当たり前のことを何故聞いて来るんだ？

「此処は正確に言えば、大陸じゃなくて島国。名前は日本」

「ニッポン？」

その言葉に首を傾げるノーマ。

「地図はあるか？」

俺はノーマに世界地図を見せる。

「地図はこれだけど」

すると、ノーマは食い入るように地図を睨んだ後。

「どういう事だ？」

そう呟き、うんうん唸り始める。結構、面白いので暫く眺める。

「はあ~~~~~」

十分位唸った後、ノーマが俺の方を見る。

「非常に不本意だが、暫く世話になる」

「そうか」

そういつて、コーヒーを飲みほし、キッチンに持っていく。ノーマも飲み干したココアのカップを持ってきた。

「世話になる前に、お前に話さなければならぬ事がある」

「なんだ？」

聞くと、ノーマは庭の方に歩いて行った。仕方なく付いていく。

庭に出ると、ノーマは俺に背を向けている。

「先ず私は普通の人間ではない。エディルレイドという者だ」

「エディルレイド？」

ノーマが頷く。すると俺に近づき。

『撥ね玉はねたまの直照ひたる（てる）祈ねぎに契ちぎり籠こん』

唄を謳う。すると、ノーマが太陽の輝きを放ちながら、俺の腕に集まる。

『これが私の、エディルレイドの姿だ』

俺の両腕がさっきの輝きと同色の翼があった。

「これは凄いな」

そついつて、翼を眺める。

「これだけ？」

『は？』

「いや、話ってこれだけ？別に俺はこれぐらいで、お前を泊めたりするのを止めたりはしないぞ？」

そついうと、両腕から光が溢れ、ノーマの姿を形作る。ノーマは俺に背を向けているので、表情は分からない。

「本当によく分からない人間だ。お人好し過ぎる」

「人生は選択の連続。何を選択しようとも絶対に後悔はしないように。というのが祖母の口癖だね。俺はお前を家に泊めるのを選択しただけだ」

「今の姿を見てもか？」

「今の姿を見たからだ」

そういうと、ノーマが振り向く。少女にしては年季の入った不敵な笑みを浮かべて。

「後悔するなよ？」

「なるべくしないようにする」

そういつて、笑う。

その後、エディルレイドの説明を聞き、ノーマを部屋に案内して、俺は眠った。明日からどんな日常が待っているか楽しみだ。

プロローグ（後書き）

どうも、作者のフィロです。あれ？プロローグが長い。おかしいなwww

え〜と、主人公は何処にでもいる様な、しかし何処にもいない様な少年です。んでもって、ヒロインは『エレメンタルジェレイド』で登場する光属性のノーマ。作者はレンやキアよりもノーマの方が好きです。設定なんかはまた今度になると思います。意見、感想、応援は大歓迎です。因みに、作中で出て来た『カカオ99%』チョコは作者が昔、興味本位で買って食べ、地獄を見たお菓子（なのだろうか？）です。もし食べてみたい方は食べる時に、大量の砂糖、もしくは甘いココアをご用意してください。では、次回の更新をお楽しみに。

Re・No:1「日常その1」

「ん？」

朝、何か違和感があり、目を開くと。

「スー、スー」

ノーマが寝ていた。あれ？昨日、部屋案内したよな？取り敢えず、起きようとしたら、右腕に抱きついてきた。動けない。でも、起きないと朝食が作れない。

「悪いな」

そういつて、ゆっくり起こさないようにノーマを剥がし、代わりに枕を抱かせてやる。

「むっ」

不機嫌そうに唸りながら、枕を抱きしめる姿がとても可愛い。

「つと、朝飯作んなきゃ」

俺はそのまま、キッチンに向かった。

「獣たちの戦いが世に終わりをもたらす時 冥き空より、女神が舞い降りる 光と闇の翼を広げ至福へと導く『贈り物』と共に」

その声には私は目を覚ました。アマトだろうか、何処か不思議な詩を謳っている。まだ眠い瞼を擦りながら、階段を降り、リビングの扉を開ける。だが、アマトの姿が見えない。

「深淵のなぞ それは女神の贈り物」

アマトの声が聞こえた。外からだ。取り敢えず、声の方に歩いて行くと、アマトが庭に続く窓に腰掛け、朝日を浴びながら本を読んでいる。

「ん？起きたのか」

本を閉じて、私の方を見る。

「止めるな」

「え？」

私はそういつて、アマトの隣に座る。

「その本だ。途中で止めたら気になる」

そういつと、一瞬呆けたアマトは笑い、本を開く。

「深淵のなぞ それは女神の贈り物 われらは求め 飛びたった

彷徨いつづける心の水面に かすかなさざなみを立てて 三人の友
は戦場へ ひとり捕虜となり ひとり飛び去り 残ったひとり
は英雄となった」

アマトの座っている場所は丁度、朝日が入る場所で気持ちがいい。

「明日をのぞみて散る魂 誇りも潰え 飛び立とうにも翼は折れた
惜しめない祝福とともに 君は女神に愛された 世界を癒す 英
雄として」

アマトの声を目を瞑って聞く。

「君よ 飛びたつのか？ 我らを憎む世界へと 待ちつけるは た
だ過酷な明日 逆巻く風のみだとしても 復讐にとりつかれたる我
が魂 苦悩の末に たどりつきたる願望は 我が救済と 安らかな
る君の眠り」

何処か謳うように、祈るように言葉を紡ぐ。

「君よ 因果なり 夢も誇りも すでに失い 女神ひく弓より す
でに矢は放たれて 君よ 希え 命はぐくむ 女神の贈り物を い
ざ語り継がん 君の犠牲 世界の終わり 人知れず水面をわたる風
のごとく ゆるやかに 確かに」

アマトが空を見上げる。つられて私も見上げる。空は見事に青空
だ。

「約束のない明日であろうと 君の立つ場所に必ず舞い戻ろう 星
の希望の雫となりて 地の果て 空のかなた はるかなる水面 ひ
そかなる牲となろう」

そういつと、本を閉じる。

「おい、まだ残っていただろう?」

「そろそろ朝飯食べないと遅刻する」

そういつて、リビングに向かう。仕方なく、私も付いていく。朝食は軽く焼いたトーストに目玉焼きとベーコン。

「普通だな」

「悪いな。昨日は忙しくて買い物が出来なかったんだ」

そういつて、意地の悪い笑みを浮かべるアマト。

「フンッ」

目を合わせない様にして、トーストを齧る。

「ごちそうさん」

「早いな」

アマトがもう、食べ終わっている。そして、何か紙に書き始めた。

「何を書いているんだ?」

「地図。外に出る時に困らない様にな」

そういつて、メモ紙を渡される。

「この大きな建物は？」

「学校。もう一つ、街から離れた場所にある建物は図書館島といって、島が図書館になってるんだ」

面白そうだな。

「まあ、学園の生徒かそれと一緒にしないと入れないけどね」

「なら連れて行け」

そういつと、アマトは苦笑しながら「その内な」といつて、立ち上がる。今気付いたが、アマトの服装が変わっていた。

「変な服だな。軍服か？」

「いやいや、学生服だから」

そういつて、小さめのカバンを担ぐ。

「おっと、そうだった」

そういつと、アマトは懷から長方形の何かを取り出した。

「じつとしてるよ？」

そういつと、長方形の何かが光る。

「よし。んじゃ、行ってくる」

何がしたかったんだ？不思議に思いながらアマトを見送る。

「それにしても、どうするか」

朝食を片づけ、先程の場所で、日光浴をしながら考える。すると。

「ミャー」

庭に一匹の猫がやってきた。親からはぐれたのか、白い子猫だった。

「どうした？はぐれたのか？」

そういつて、手を伸ばす。すると子猫は私の手に顔を擦りつける。

「親がいないのか？」

撫でながら聞くと、子猫が鳴く。何故だが、私の問いに答えている様に聞こえる。

「そうか、お前も私と同じ独りなのだな」

そういつて、子猫を抱きしめる。子猫は文句も言わず、私に抱きしめられる。

「どんなに言葉を重ねても、私達エディルレイドと人間は根本から違う。互いを道具として見る。その間に信頼や愛情などありはしない」

そういつて、果たしてそうだろうか考える。思い出すのはグレイアーツと一緒に闘った二人だ。あの二人は互いに信頼しあい、私達を打ち負かした。そしてアマトだ。アイツの目は真っ直ぐすぎる。何故、あそこまで真っ直ぐな瞳が出来るのだろうか。

「アマトの前では嘘なんて無意味だろう」

何となく、そう思ってしまう。あの瞳で見られると「全部お見通しだ」と言われている様な気がする。実際はそんな事はないのだが。

「それに、アイツの雰囲気」

暖かく、柔らかな雰囲気。何処か太陽を思わせる雰囲気だった。だからなのだろうか、アイツのベッドに忍びこんで寝た時、とても寝やすかった。

「いや、別に一人で寝るのが怖いとかじゃなくてな」

誰もいないのに慌ててしまう。そんな私を見ている子猫は首を傾げる。

「はあ、本当アマトは何なんだろうな？」

答えが帰らないと分かっているけど、口に出さずにはいられなかった。すると子猫が私の腕から逃れ、私に背を向け、顔だけ振り向いて鳴く。

「外に行くのか？」

その言葉に子猫が鳴く。何処か視線が「一緒に行こう」と語りかけている。

「そうだな。丁度暇だったし、外に出てみるか」

そういつて、机に置いてあるメモ紙と紙幣が数枚と硬貨が幾つか入れている財布を持って、外に出る。

「おっと、鍵を閉めなくては」

思い出し、鍵を閉める。

「それでは行くぞ!」

子猫が鳴く。

「しかし、何時までも名無しというのは可哀そうだな」

考える。思えば、何かに名前を付けるといのが無かったせいか直ぐに思いつかない。流石にビーネンリッター様の猫と同じような名前にしたくない。ふと、アマトが読んでいた本の題名を思い出す。

「よし、今からお前の名前はラブレスだ」

子猫、もといラブレスが鳴く。

「よし、名前も決まった所で出発だ、ラブレス!」

そういつて、歩き出す。何故だかとても気分がいい。

学校に行く前に、カメラと歩きながら書いた手紙を祖父の所に送った。そして、学校に付く。

「何か、厭に騒いでないか？」

「そうか？何時も通りだぜ？」

俺は何時の間にか隣にいるリーゼント野郎（古い）豪徳寺が答える。確かにそうだな。

「何でも、中等部のクラスに子供先生が赴任したみたいだぜ」

「マジか？ていつか情報早いな」

「そこかしこで噂になっているからな」

後ろからやってきた中村と大豪院が状況を話してくれた。

「成る程。それで？その子供先生ってのは、見た目が子供みたいに童顔&低身長なのか？」

「いや、本当に子供らしいぜ」

そういつて、山下がやってきた。これで何時ものメンバーが揃っ

た。

「マジかよ。学園長の奴何考えてんだ？」

「確かに珍しいな」

「まあ、俺達には関係ないか」

そういつて、机につく。因みに俺の四方は見事にコイツ等が固めているのだ。しかも、意図的なのか偶然なのか、小学校から席が全く変わってない。故にコイツ等とは昔からの腐れ縁。中間や期末はコイツ等の世話をしている感じだ。

「そういえば、そろそろ期末だな」

そういつと、大豪院以外の三人が身体を震わす。因みに大豪院はそこそこ勉強が出来る。

「今度も頼むよ」

「期末期間中、昼飯奢るからさ」

「頼む、アマちん」

「誰がアマちんだ。まったく、しゃあねえな」

そういつて、承諾する。そういつと、担任のガンドルフィーニ先生がやってきた。長いので、ガン先と呼んでる。

「朝のHRを始めるぞ？席に付け」

ガン先が出席を取る。そして簡単なHRを終わらせた頃に俺は手を上げる。

「ガン先、質問」

「なんだ、山吹」

別段、嫌な顔をせず聞いて来るガン先（そりゃあ、高一の時から呼び始めて、更に他の生徒まで広まったから、慣れるよな）。

「中等部に子供先生が赴任したっていう噂があるけど、本当？」

「情報が早いな。本当だ」

本当に何を考えてんだ、コイツ等。

「質問は以上です」

「分かった。次の時間は英語だから準備しておけ」

そういうと、教室を出るガン先。さて、噂の子供先生が何処に赴任したのか後でアイツに聞いてみるか。

「お前ら、『今日は』ちゃんと教科書持って来たよな？」

そういうと、豪徳寺と山下が親指を立てるが、中村が苦い顔をしている。

「見せてやるから、豪徳寺か山下に席変えてもらえ」

「サンキュ、アマちゃん」

そういつて、豪徳寺と席を変える中村。同時に英語の教師が入って来た。ふと、窓の外を見る。ノーマは何をしているだろうか。

「ふむ、中々美味しいな」

そういつて、近くのベンチに座り、先程買った鯛焼きというドーナツの様な物を頬張る。ラプレスには冷やした物を食べさせ、今はご満悦の様だ。時刻はそろそろ昼になろうとしている。此方でも時間の流れや時刻を表す物が同じで良かった。

「さて、昼食は何にするかな」

アマトから渡されたメモ紙を見る。幸いな事に学校周辺の店が書いてある。

「歩きながら食べれる店を探すか」

そういつて、歩き出す。意外に早く店が見つかる。どうやらホットドックを売っているようだ。取り敢えず、大きめのホットドックを一つ買う。そして歩きながら食べる。

「美味しい」

空腹を満たす為と考えていたが、これはこれで美味しい。

「気が向いたら、また食べに行くのもいいな」

売りこのおばさんも気前が良かったし。次は何処に行ってみようか。メモ紙を見る。

「図書館島は学生と一緒にやなきゃ入れない、とっていたな」

という事は後はアマトのいる学校。少し距離があるが、行ってみるか。

「終わった」

中村が頂垂れている。まあ、何故だか今日の授業全部、俺達に回答を要求してきたから当然だろう。

「んじゃ、俺は先帰るわ」

「おう」

「また明日」

四人に手を振って、歩き出す。校門を出て、中等部の方に向かう。
「いたいた。龍宮」

声を掛けた相手。身長180cmにスタイル抜群の容姿という中学生とは思えない褐色の美人に話しかける。

「やあ、^{あまこ}天さん」

にこやかに微笑む龍宮。

「それで、どうしたんだい？」

「お前に頼まれた物と桜咲のと、後は今日、赴任した子供先生について情報を聞きに来た」

「もう、来たのかい？」

驚かれる。俺は朝方、届いた大きなケースを龍宮に渡す。龍宮はそれをその場で開く。

「おお?! 各種銃器のメンテナンス用具にカスタマイズ用のパーツまで。本当に君の御爺さんは何者だい？」

「んなの、俺が知りたいよ。っと、桜咲」

「山吹さん。どうも、どうしました？」

サイドに結った黒髪の少女桜咲が、相変わらず木刀入れにしては

長い布袋を肩に担いでやって来る。

「お前が頼んだ物だ」

「もう、来たんですか?!」

拳大の袋を渡す。中身はお札に、なにか書かれた板だったり、俺にはよく分からない物だ。

「ありがとうございます」

礼儀正しく、お辞儀する桜咲。うむ、龍宮もこれくらい礼儀正しければ、文句なしなんだが、無理だろうな。

「それで、二人に聞きたいんだが」

「ああ、今日来た子供先生の事だね」

「そうそう」

「私達の担任になりましたね」

「そう、か。まあ、頑張れ」

そういつて、苦笑する。すると。

「なんだ、此処にいたのか」

声に振り向くとノーマが白い子猫を抱えて立っていた。

「散歩か？」

「暇だったからな。此处が学校か？」

「まあ、そうだけど。麻帆良はどうだった？」

「うむ。それがな」

それから嬉しそうなノーマの話を聞く。すると。

「ああ、天さん。出来れば私達に説明してくれないか？」

「ああ、悪い。ノーマ、この二人は俺の友人で、あつちの色々デカイのが龍宮 真名。その隣にいる眼つきの鋭いのが桜咲 刹那だ。二人とも、コイツは居候のノーチェェプリマム」

「「居候？」」

頷き、事情を説明する。

「ノーマは俺の爺さんの知り合いの孫でさ。友達がいない子なんだ。だからそれじゃ駄目だって考えたノーマの祖父が俺の爺さんに頼んだわけ。それを承諾した爺さんは手っ取り早く麻帆良にいる俺の家に居候、という訳だ」

「嘘だね」

「嘘ですね」

「嘘が下手だな」

なんと、俺が半日費やした嘘を一発で見抜きやがった。

「本当のことを話しなよ。今なら警察に突き出す前に半殺しで済ませるから」

笑顔でそういつて、銃（ゴム弾………多分ね）を構える龍宮と袋から木刀を取り出す桜咲。俺はため息を吐いて観念し。昨日の出来事を話す事にした。

「ふうん、そんな事があったのか」

それから立ち話もなんだからと（俺の奢りで）近くの甘味処に寄っている。

「まあ、山吹さんの性格上、襲ったりはしませんから安心ですね」

そういつて、白玉を頬張る桜咲。知り合ったばかりの時より、少しだけ図々しくなったような気がする。

「ま、感謝はしているぞ」

そういつて、白猫もといラブレスと一緒にわらび餅を食べている。ペット持ち込みは禁止です。

「少し心配だから、今日はお邪魔しようかな」

そういつて、本日五杯目の餡蜜を頬張る。もう突っ込まん。

「おい、龍宮」

「いいじゃないか。刹那だって、久しぶりに天さんの手料理を食べたいだろう?」

そういつと、桜咲が黙る。

「いいのか?話が進んでいるぞ?」

「構わんさ。しっかりと管理人に連絡入れて、材料代を出してくれば、文句ない。それとラブレスだが」

「ん?」

「ちゃんと自分で世話をしろよ?それが約束出来れば、家に住まわせて大丈夫だ」

そういつと、ラブレスが嬉しそうに鳴く。

「ありがとう」

小さく感謝するノーマ。その後合計五千円を払い、近くのスーパーに寄る。

「アマトを一言で表すとしたら?」

いきなり、ノーマが聞いて来る。

「……………いい人ですね」

「お人好しが服を着ている」

あんまりだな、龍宮。そしてそれで納得するなノーマ。

「やっぱり、人数が多い時は鍋だね」

そういつて、買い物かごにどんどん材料を入れる龍宮。俺はそれを見ながら、割り勘分を計算する。

「
（自主規制）円です」

「三人で 円だ」

「結構、高いな」

「お前が考えも無しに入れたせいだろ。それにそれをずっと眺めていた山吹さんも悪いです」

「セツナが言えることではないな」

「お前もな、ノーマ」

「さっさと払わないと、後ろが混んできてるぞ？」

会計を済まし、家に帰って早速調理開始。因みに誰一人として手伝ってくれない。一時期前は桜咲も手伝ってくれたのだが、手伝っても手伝わなくても、味は変わらないと龍宮に説得（？）され、今

では龍宮と同様。

「まだかい？」

「そろそろ限界です」

こんな感じだ。因みに二人はノーマと一緒にラブレスと戯れている。生まれ変わったら猫になりたい。

「ほら、出来たから退け」

「待ってました」

嬉しそくに騒ぐ。三人。ラブレスには事前に冷やしといった猫まんまを与えている。

「……いただきます」

なんだかんだ言っで、俺はこうやって皆で馬鹿騒ぎするのが好きなかもしれない。まあ、騒ぐのと出費が釣り合わないが。

次の日、目覚めると何故だか俺のベッドに三人が侵入していた。しかも、起きた時桜咲と顔が近かったせいかな、起きた桜咲に平手さされた。お陰で目が覚めたが、散々である。

Re・No:1「日常その一」(後書き)

どうも、作者です。お気に入りが10件嬉しいです。今回は日常編。更に主人公のお爺ちゃんが凄い事に。まあ、それは置いて、冒頭に書いたラブレス。作者はFF?よりも?派ですが、このラブレスは大好きです。物語とはあんまり関係ありませんけどwwwそして桜咲と龍宮との交友関係。因みに主人公は他にも3・Aとの繋がりが幾つかあります。そしてほぼ、ネタキャラとして出て来た四人組。作者的にこの四人は好きなので、出したかったキャラです。

長くなりましたが、プロローグを見て興味を持った読者の皆さま。めげずに頑張っていきたいので、応援宜しくお願いします。

Re・No:2「裏の顔」

「郵便です」

昼ごろ、配達の人から小包と服が来た。

「ノーマ」

「どうした？」

リビングにいたノーマはラブレスと一緒に床に転がっている。

「ほら、俺からの贈り物」

そういつて、ノーマに小包と服を手渡した。

「何だ、これは？」

先ずは小包を開けて説明する。

「身分証明書に保険書。これが無いと何もできないからな。んで、この書類は転入届。後は女子中等部の制服。まあ、これを着るのは新学期からだな」

「待て、何で私の身分証明書やら、保険書やらあるんだ？」

「作ったからな。爺さんに頼んで」

「何時？」

「先週」

「お前の爺さん。何者だ!？」

確かに、俺も気になる。たった一週間、更に写真と名前だけの人間に身分証明書、保険書等々、生活に必要な物を取り揃え、更に転入届に、制服まで用意するのだ。本当に何者なんだ、爺さん？

「今度聞いてみる」

「そうしてくれ」

取り敢えず、今はやることがある。

「んじゃ、制服着てくれ」

「は？」

「は？じゃない。サイズが合っているかどうか確かめるから着替えて来い、と言っているんだ」

「ああ、分かった」

そういつて、部屋を出る。隣の部屋から衣擦れの音が聞こえるが、それだけで欲情するほど、俺はウブじゃない（泊りに来る龍宮や桜咲が良く隣の部屋で着替えているせい）。戻って来たノーマを見る。

「そんな、ジロジロ見るな」

「ああ、悪い。結構似合ってるじゃないか。何処かキツイ場所とかは？」

「特に無い」

爺さん、いい仕事するね。その後、着替え直したノーマと一緒に買い物をしていると。

「ん？」

「どうした、ノーマ」

「いや、妙な気配がな」

そういつて、郊外の森を見つめるノーマ。

「行ってみるか？」

「いや、もう消えた」

そう言つて、さっさと歩いて行ってしまう。俺も少しその森を見た後、ノーマの後に続く。

「ほい、出来あがり。どうした？」

「いや、また妙な気配がな」

夕飯が出来上がり、リビングにやって来るとノーマがやはり先程の森を見ていた。

「飯食って、まだ気配が消えなかったら行ってみるか？」

「……………そうだな」

今の間は何だ？

「よし、食べ終わった。行くぞ！アマト」

「張り切るのはいいが、口に食べ残しが付いているぞ？」

そういうと、服の裾で口元を拭おうとしたノーマは何を考えたのか、俺に顔を近づける。俺はため息を吐いて、拭いてやる。

「ほらよ」

「うむ、ありがとう」

此処最近、ノーマは随分、感謝の言葉を送ってくれる。結構、嬉しかったりする。

『撥ね玉はねたまの 直照ひたる（てる）祈ねぎに 契ちぎり籠こん』

ノーマが俺の腕に翼となって現れる。この姿になるのも久しぶり

な気がした。

「んじゃま、行きますか。気配は残っているんだな？」

『ああ、しかも先程より多くなっている』

それは奇妙だな。少し急いでみるか。俺は森に向かって飛び立ち、盛大にこけた。

『この愚図が。たった二回の契約で簡単^{リアクト}に飛べるものか』

「ちょっと悔しいな。もう一回!!」

今度は軽く地面を蹴って、羽ばたいてみる。すると今度は上手くいった。どうやらさつきは力み過ぎたようだ。

「よし」

『ふん、二回目で出来たのに上機嫌だな。よし、行くぞ。それと飛びながらでいい、私の話を聞け』

「了解」

俺は夜空を飛翔しながら森に向かう。ふと、月を見上げる。不思議とノーマと一緒にいる時の月は嫌な気分にはならなかった。

ぬかった。どうやら昼間の侵入者は私達の能力を調べるため、今のコイツ等が本命。

「ハアツ!！」

『甘い!!!』

私の剣を黒い翼を持った妖怪が受け流す。次いで、後ろに控えていた鬼が棍棒を薙いで来る。咄嗟に手に持った野太刀『夕風』で受け流す。

『敵は一人ではないぞ?』

「ぐうつ!？」

防御で身動きが取れなかった私に異形の剣が襲い、吹き飛ばされる。傷自体は浅いが、木に背中を叩きつけられ、動けない。

「ぐつ、まだです」

足元がふらつく。なんとか『夕風』を杖にして、立ち上がる。

「ぐあっ!！」

「うわっ!？」

いきなり後ろから衝撃が来た。見ると龍宮がいた。

「龍宮?!」

「ぬかった。悪い刹那」

そういつて、立ち上がる。周りには妖怪が見えるだけで十体。気配を探れば、その倍はいるだろう。

「どうする?」

『ちよろずか 千万華に化して(けして)』

「今、考えている所」

考える。どうすれば、この状況を打破出来る? 高畑先生は此処に来るまで、時間が掛かる。

『まし 汝に澄まん(すまん)』

ふと、空耳だと思っていた謳が聞こえた。龍宮も周りを見ている。上か?

「え?」

そこには両腕が太陽の輝きを持った翼を羽ばたかせた馴染みの顔がいた。

『ルカ・カタルシス 光芒淨穢!!!!!!!!!!』

両翼から太陽の輝きを持った光の弾丸が周りの妖怪達を一掃する。そしてゆっくりと私達の前にやってきた彼は、普段通り。

「よう、怪我なんてしてどうした？」

明るく話しかけて来た。

目の前に桜咲と龍宮がいる。見る限り立っているので精一杯のようだ。

『アマト、分かってるな？』

「ああ、分かってる。二人の治療は後で出来る。だから今は」

集まって来た妖怪達に向かつて。

「可愛い後輩を苛めてくれた奴らにお礼しなきゃな」

そういつて、飛び上がる。羽ばたき、急降下。いきなりの行動について行けない奴らはそれだけで、倒せた。それを避けた奴には光の羽を御見舞いする。

『なんや、この兄ちゃん』

『無茶苦茶強いで』

その言葉に動きが止まる。俺って強いのか？

『愚図が！……動きを止めるな！……！』

「うおおっ？！」

ノーマの言葉で咄嗟に跳びのく。同時に俺がいた場所に棍棒が降
つて来る。

「危ねえ」

『まったく、戦闘中に呆けるとは余程死にたいらしいな』

「アホ、まだ色々やりたいことがあるんだ。簡単に死ねるか。それ
に」

『それに？』

「俺が死んだら、寂しいだろ？」

『ば、馬鹿者！？わ、私は別に』

「誰もお前の事を言っていないぜ？」

『ぐっ』

「ほら、来たぜ」

『分かってる……！』

それから少し苦戦したけど、妖怪達は一掃できた。

「終わり、かな？」

『ああ、気配が消えた。もう、契約を解くぞ』

そういつと、翼が輝きノーマが人間の姿になる。俺は腰のポーチから小さい救急箱を取り出し、二人に近づく。

「えっと、なんで山吹さんが？それにノーチエが翼になって」

「説明は、してくれるよね？」

「ああ、ちゃんとする。けど、先に怪我の治療が先だぞ？」

そういつて、治療を始める。木にぶつけた背中では打ち身程度だったので、湿布を貼るだけ。怪我も擦り傷や浅い切り傷だけだったので、軽く消毒して絆創膏を貼る。

「おし、これでよし」

そういつて、ノーマを見る。ノーマはため息を吐く。

「では、説明は私からする」

その後、俺が受けた説明を二人にした。二人は結構、驚いていた。

「あれ？高畑先生。どったの？」

「それは僕のセリフなんだけどね」

高畑先生が苦笑しながらやって来た。

「出来れば、学園長の所に来てくれないか？」

俺は取り敢えず、ノーマを見る。ノーマが頷く。

「了解です。後、桜咲を担いでくれませんか？流石に二人は担げないので」

「分かった」

その後、龍宮をおぶり、学園長の所まで歩く。何故だか、桜咲が羨ましそうに見ていた気がする。

「今日はありがとう。助かったよ」

「どういたしまして。それと、ちゃんとした礼ならノーマに言つてやれ、アイツが妖怪の気配に気づかなかったら、俺自体が動かなかったからな」

「そうか、でも私は天^{あま}さんに礼を言いたいんだ。後、その……………」

格好良かったよ」

最後のは小さすぎて聞こえなかったが、聞き直すのは野暮だろう。暫く歩き、やっと学園長室にやってきた。

「学園長、高畑です。入りますよ」

そういつて、部屋に入ると妖怪ぬらりひょん、もとい学園長が座

っていた。取り敢えずソファーに龍宮を座らせる。

「ふむ、大体の事情は高畑君から聞いて分かっておる」

そういつて、ノーマを見る。

「君はエディルレイドじゃね？」

「私を知っているのか？」

そういつと、学園長は笑って。

「そんなに詳しくは知らんよ。ただ、魔法世界に存在する。希少な種族と聞く」

そういつて、色々と話し始める。魔法の事、この学園の本当の姿、魔法使いの事、魔法世界という異世界が本当に存在する事。聞きながら、これって勧誘しているだろ、と思い始める。実際、説明が終わった時は勧誘されたし、しかも断れば、今夜の記憶は消すとか言いやがる。流石にそれは御免なので、了承する。

「本当に良いのかね？」

「俺に興味持たせようと話しているのは分かっています。癪ですけど、まあ知り合いが闘っていて、それを知らんぷりは後味悪いですね」

そういつて、俺は警備員の主な仕事を聞いた後、家に帰された。さてさて、そろそろ期末だけど勉強に身が入るかな？

Re・No:2「裏の顔」(後書き)

どうも、作者です。今回は短めの御話。そしてエレメンタルジエレイドの世界と魔法世界が同一世界。ちよつと無理があつたかな？ですが、原作キャラと絡ませたくてこうしました。これも『うさみ空賊団』の為です。ええ、ウサミミの為！！！！！！では、次回の更新をお楽しみに。

Re・No:3「期末試験と図書館島」

「ほら、今回のテスト範囲を纏めて置いたから各自で勉強しろ」

「うわっ?!分厚っ!?!」

「でも、勉強になるんだよねあゝ」

「何事も我慢だ」

「サンキュ、アマちゃん」

四人がそれぞれ感謝の言葉を述べる。それを聞いた後、約束通り、昼飯を奢らせる。それから午後の授業を終わらせて、帰ろうとする。

「こんにちは、山吹さん」

「高音さん?」

あまり接点がない人物に会った。そして彼女も魔法使いだと言い始めた。しかも。

「山吹さんは一般人なのに、この麻帆良の為に闘ってくれるんですよ?」

何というか、凄く誤解している。しかも、俺の意見を聞いてない。しかも「一緒に『立派な(マギステル)魔法使い(マギ)』を目指しましょう」とか言って嫌に爽やかな笑顔で去って行った。

「何だっただ？」

買い物を済ませながら考える。確かに結果的には麻帆良を守る事には繋がるが、俺は単に知り合いを守りたいから闘う訳で、赤の他人なんか知らない。というか、大抵の人間はこういう考えだろう。取り敢えず、この考えは後で、キッチリ話しておかないと。

「ただいま」

リビングに入るが、誰もいない。出掛けているのだろうか、取り敢えず冷蔵庫に食材を入れ始める。

「ミヤ」

「ただいまラブレス。ノーマはいるか？」

聞くと、ラブレスは一鳴きして、歩き始める。ついて行くと縁側でノーマが昼寝していた。ただ、もう夕方なので、少し寒そうであった。

「仕方ないな」

窓を閉め、適当な毛布を掛けてやる。するとノーマが俺の手を掴む。

「起きては、いないな」

腕を外そうとするが、その時に凄く泣きそうな顔を浮かべるので、仕方なく隣に座って、膝枕をしてやる。

「ん？」

それから暫く時間が流れて、時刻は夕飯時。ノーマが目を覚ました。

「帰って来たのか？」

「ああ、ただいま。後、そろそろ手を離してくれないか？夕飯が作れない」

そういうと、ノーマは俺の手を離さない自分の手を見て、顔を赤くした後、直ぐに手を離す。

「んじゃ、夕飯作るな」

それから簡単な夕飯を作って、食べている間、何故だかノーマの顔が赤い。

「どうした、ノーマ？どっか悪いのか？」

「い、いや、何でもない」

そういつて、夕飯を食べる。

「あっ」

「どうした？」

ふと思い出した。そういえば。

「今日、本返すのに忘れてた。仕方ない、飯食ったら行くか」

「本を返す場所は図書館島か？」

「ああ、そうだけど」

そういつて、思い出す。そういえば前に図書館島を案内する約束だったな。

「一緒に来るか？」

「うん!!!」

そう答えたノーマは凄く可愛かった。思わず、頬が緩んでしまう。

「さあ、行くですよ!!!」

夕映さんが張り切っている。どうしてこうなったんでしたっけ？

早めに寝ようとしたらアスナさんに連れて来られたんですね？

「あの、これは一体」

「面白そうな事やってるな？」

あれ？誰だろう。

「ふふ、分かりますか？そうです！！今私はとても昂っています！！！」

「よければ、教えてくれないか？」

「いいでしょう。これは噂ですが、この図書館島には持っているだけで頭が良くなる『魔法の本』があるのです」

ええっ！？そんな物がここにあるんですか？！

「ほうほう、それで？」

「私達はそれを手に……入れよう………と？」

「ふゝん、『図書委員長』である俺の目の前で本を盗むか、いい度胸だな？綾瀬、早乙女、近衛、宮崎」

そこにいたのは山吹色の瞳を持ったお兄さんだった。隣には皆さ
んと同じ年くらいの女の子が呆れていた。

「や、山吹さん？どうして？」

「いやな、今日返すつもりの本をさっきまで忘れててな。んで、ちよつと遅いけど返しに来たら、お前らがいたんだ」

「あうゝ、最悪やゝ」

「ちよつ？！そんなにやばいの！？」

「勿論！！ぬかったわ、山吹さんは最後に図書館島出るのに、もう帰ったと思っていた自分が馬鹿だった」

「あ、あうゝ。夕映ゝ」

皆が怯えています。そんなに恐ろしい人には見えないんですけど。

「さて、今ここで帰れば、一週間本の貸し出し禁止は無しにして三日にしてやる。どうする？」

「うゝ、一週間手持ちの本だけで我慢するですか？」

「なに言ってる？今借りてる本は即返してもらうぞ」

そういうと、悲鳴を上げる夕映さん。本当に本が好きなんですネ。

「それで？その本を探すのはいいとして、なんで噂の子供先生を連れて来てるんだ？」

「え？連れて来たんはアスナやえゝ。お願いやから、貸し出し禁止は無しにしてゝ」

「まあ、流石に俺でも本の貸し出しは制限くらいしか付けられない

から貸し出し禁止は無理だがな。んで？アスナだっけ？なんで連れてきた？知つての通り、此処図書館島では盗難防止の為に様々なトラップが仕掛けてある。そのトラップは俺達『麻帆良図書委員』や『図書館探検部』でも把握しきれてない。中にはかなり危険のあるトラップも存在する。なんで、そんな場所に『子供』を連れて来たんだ？」

「うっ、それは」

「人には言えない秘密か？」

「アンタには関係ないでしょ！！！！それよりもアンタ誰よ！！！！！」

「それはお前には関係のない事だろう？」

「ぐっ」

アスナさんが押し黙る。こういう時は先生である僕が何とかしないとイケないんだけど、僕も状況があんまり呑み込めてないし。

「あ、あの」

「ん？」

それでも、僕が何とかしないと。

「お願いします。行かせて下さい！！！！！！！！！！」

「却下」

皆が山吹さんを見る。山吹さんは笑って。

「な？人間やれば出来るんだから先ずはやってみろって」

そういつて、図書館島に入り始める山吹さん。

「いや、見た感じ勉強が出来そうな感じだったんだけどね」

「人は見掛けによらんでござるな」

「それで、どうするアル？戻って勉強するアルか？」

「ウチ的にはそうしたいな。流石に山吹はんは怒らせたくないし」

「う、うん」

「どうしたの、明日菜？」

「え？いや、あの山吹先輩ってどうやって、成績上げたか本屋ちゃん知ってる？」

「えっと、地道に点を上げていましたよ。高校に上がってから平均で80点キープしてましたし」

僕も含めて皆が感心する。やっぱり努力に勝る者はないんですね。

「でも、それは時間を掛けて上げたんでしょ？でも、私達には時間が無いの」

そういつと、僕に向く。

「そういえば、ネギ。アンタ最下位になったら大変な事になるって
言ってたけど、実際アレはどういう意味？」

「え？えつと、最下位を脱出出来ないと教師を続けられなくて」

その後、さつきよりも大きな叫び声があがりました。

「これでよし。まったく今日の最後の委員誰だよ。色々鍵が空いて
たし」

「そのお陰で色々回れたから私は満足しているがな。ん？」

「だけど。かなり時間使っちゃった。さっさと帰ろうぜ、ノーマ。
ノーマ？」

回りを見るが、ノーマの姿が見当たらない。もしかして、勝手に
奥に進んだのか？そういえば、ノーマの奴「ん？」って何か気付い
たな。さっきの奴らが諦めずに奥に向かって、それを見付けたノ
ーマが興味本意でついて行ったと。

「あんの猫が」

多分、追っても見つからんだろう。まあ『図書館探検部』がいる

から大丈夫だろうとは思うが。

「帰ったら覚えてるおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

届くか分からないが、取り敢えず叫んでみる。

今、何か聞こえた様な。

「気のせいかな」

「あれ？アナタは確か、さっきの」

「ノーチェ！！プリマムだ」

「なんで、アンタがいるのよ？もしかして、私達を監視する為に」

「ド阿呆。そんな事に興味ない。ただ、一人でこの図書館を動くより、団体行動の方が効率がいいんだ」

「なんの効率よ」

「うわぁっ、見て下さいよ、アスナさん。これなんか珍しい魔導書で」

先程の子供が本に触ると何処からか矢が飛んでくる。

「コラコラ、不用意に触ると危険でござるよ」

細めの女が笑いながら矢を飛んできた矢を手で取り、折る。

「罾に引つ掛かる確率が減る。どうやら、この階から罾が凄いやだ」

「いい性格してるわね」

それから皆で奥に進む。本棚の上を歩いたり、何故かある湖を渡ったり、まるで。

「まるで『ファイ ルファン ジー』だな」

「やめて〜。今私も同じ事考えてた。モンスターとエンカウントしそつだから言わないで〜」

リボン（で、いいのだろうか）を持った少女が叫ぶ。そして私達は『魔法の本』が置いてある場所についた。

「ラスボスの間アル」

「という事はカオスとか皇帝とか暗黒の雲とかゼロムスとかネオエクスデスとかケフカとかセフィロスとかアルティミシアとか永遠の闇とか出て来るのか？」

「どれ一つとして、倒せる訳ない！！！！！！」

『フォッフォッフォ、此処から先を通りたければ、ワシの出す問題

を解くのじゃ
』

「「タイタンだ！……！！」」

「さっきから何話してんのアンタ達は！……！！」

それから（何故か）私も巻き込んで、ツイスターというゲームをやった。だが、猿女のせいで、見事にゲームに敗退、足場を崩された。ああ、ついて来るんじゃないかった。

Re・No:3「期末試験と図書館島」(後書き)

どうも作者です。FF??を批判する人が多いけど、自分的には良作だと思う。まあ、バトルシステムがもろオンライン向きなのがちょつと苦手でしたけど(私はネットゲーが大の苦手です。ゲームと並行してチャットとか無理www)? - 2も時々でいいから思い出して下さい。

今回は図書館島。これは原作を読んで疑問に思う。明日菜はともかく、なんでネギが付いていくのに疑問を挟まないんだお前らww主人公としての立場は分かるけど、見事に職場放棄とか舐めてるとしか言いようがない。そんな感じの突っ込みを天に入れて貰いました。次回は幻の場所と並行して、天の日常を描く感じです。上手く書けるかな。では、次回の更新をお楽しみに。

Re・No：4「幻の地底図書館、期末に向けて 1日目」

「アマちゃん」

「ん？どうした？」

「此処が分からない」

「此処は」

図書館島に本を返してから一日が経った。ノーマがいない事によって変わった事と言えば、夕飯時が少し寂しくなったり、ラブレスの元気が無い位だろうか。

「薫。その問題間違ってるぞ。もう一度公式見直せ」

「なに？……………本当だ。サンキュ」

今日は休み。俺達は図書館で勉強中。どうも、男子寮は無駄に暑苦しいからいたくない。それに俺の家から反対方向なので、遠回りになるのだ。それを知っている四人が気を使ってなのか、単に寮に戻ると違う事に気を向けてしまうのか、知らないが、図書館で勉強が当然になっている。どうでもいいが、リーゼントが図書館にいると物凄い違和感がある。

「む、もうこんな時間か」

時計を見ると、四時を回っている。昼飯が終わってからだから、大体四時間近く、勉強してたのか。よくダレなかったな。

「んじゃ、今日はここまでにするか」

「まだ半分も終わらせてない」

「まあ、後一日あるし、頑張ろうぜ」

「そうだ。焦っても上達しないぞ？こういうのは格闘技と一緒にだな」
確かに似てるな。

「んじゃ、イメトレに『ブラックジャック』やろうぜ」

おい、山下。それは全く関係ない。けど、ま。

「息抜きは必要だよな」

何故だが、私は今、授業を受けている。

「この問題はノーマさん、お願いします」

「……………なあ、別に生徒じゃない私が授業受けても意味ないんじゃないか？」

「でも、やっぱり仲間はずれは駄目じゃないですか」

このネギという小僧。アマトに負けず劣らずのお人好しだ。だからなのか、この茶番にも付き合っている。何故茶番なのか、それはコイツ等と落ちたこの場所で一番早く目覚めたのが私だったのだ。そして興味9割と退屈しのぎ1割で色々探して見ると、あっさり出口が見つかった。だが、何故か扉には問題らしき言葉が書いてあった。まあ、此处最近やっと『日本語』というのを読み書き出来るようになった私に専門的な問いが答えられる訳が無い。だからアホらしいと思いつつ、勉強を受けている。別に家に帰って、いきなり学力が上がった事を教えてアマトを驚かせようという事ではないからな。

「これでいいか？」

「はい、正解です。それにしても凄いですね。たった一日教えたのに直ぐ覚えるなんて」

「こんな物、基礎教育を怠ってなければ普通に出来る」

「ちょっと、それって私達を馬鹿にしてない？」

「そんな事は言っていない。一々人の言葉に突っかかるな。馬鹿に見えるぞ？」

最後の部分に言葉尻を上げ、更にム力つく笑みをブレンドしてやる。

「ア、アアアンタ喧嘩売ってるわね！？いいわ、買ってやろうじゃないの！！！！」

「アスナさん。落ち着いて」

「まったく、猿のように顔を赤くして、みっともないな」

「ノーマさんも挑発しないでください」

コイツ等というのは中々楽しい。

「ほい、ブラックジャック」

「ぬあゝ！！！！！」

「なんとという鬼引き」

「なんで、そんなポンポンブラックジャックが出るんだ？」

「イカサマ？」

「失礼な。ちゃんとブラックジャック以外も出てるだろ？」

俺自身、かなり運がいい。結構宝くじに当たったりする（まあ、その直後に龍宮と餡蜜を食べて、消えるのだが）。

「さて、俺は帰るかな」

「おう、じゃあな」

皆と別れて、家に帰っていると。

「山吹さん！！！！！！！！」

「おふっ！？」

桜咲が水月（鳩尾の事）にタツクルをかまして来やがった。

「ど、どうしたんだ？」

「お、お嬢様が」

「お嬢様って、近衛の事か？」

因みに近衛と桜咲とは実家が同じ京都で、近衛の家とは昔から（爺さんの話だとかかなり古い時から）繋がりがあったので、近衛がお嬢様なのは、知っている。

「やっぱり、戻ってないのか？」

「私、このちゃんがないと、どないしたらっ！！！！！！！！」

動揺しすぎて、京都弁に戻るのはいいのだが、力を入れるのを止めてくれないだろうか。意識が。

「何をやっているんだい？」

その時見た龍宮は何処か後光が射していた。

「ご飯出来たえ」

コノカがご飯を作ってくれた。アマトが作ったご飯ではないので楽しみだ。

「いただきます」

「コノカ、これは何だ？」

「餃子や」

「コレは？」

「ラーメンや」

「コレは？」

「チャーハンや」

「コレ黙って食べなさいよ」煩いな。私の勝手だろう」

「まあまあ、アスナ。そんなに珍しい？」

「うむ、アマトが作るのは魚だったり、野菜を中心とした料理が多いから、こういう料理は初めてなんだ」

「ふむ、やはりノーマは山吹さんと一緒に住んでいるんですね」

ユエがラーメンを啜りながら聞く。成る程、そうやって、食べるのか。

「まあな、外に食べにいかないのかと聞いても「家で食べた方が早いし、安い」と言われてな。家で食べている」

「自炊が出来る男の人か」

マキエが何か考えながらチャーハンを食べる。

「今度皆で行ってみようか」

「ゴホッ!？」

その言葉に思わず咳き込み、食べていたチャーハンをネギにかけてしまった。

「済まないネギ」

「あう」

ネギの顔を拭いてやる。

「流石に迷惑やて」

「でもでも、料理の勉強って事にすれば大丈夫じゃない？」

「それでも、迷惑やて」

そういつて、やんわりと諭すコノカ。いや、アマトの性格だと迷惑とは思わないと思うぞ？まあ、後で、『あの』チョコを溶かした物を飲まされるかもしれないが。

「来ても問題ないと思うぞ？アマトが大好きなチョコもくれるだろうし」

「アマトさんってチョコ好きなの？！」

「ああ、私も食べさせられたのだが、アレは食えん」

「えゝ、チョコが苦手なのって、損してるよ」

「いや、『普通のチョコ』は大丈夫なんだ。ただ、『あの』チョコは」

その言葉に私以外の皆が首を捻った。

「成る程、行方不明の近衛が心配のあまり、混乱して通りかかった天さんを押し倒した。そういう訳だね？」

「い、いや、別に押し倒した訳では「なんだって？」いえ、何でもありません。ごめんなさい」

夕飯を作っている傍ら、二人の話（というより、龍宮による尋問）を聞いている。桜咲は正気に戻り、先程の事を思い出してか、正座して真っ赤にした顔を俯かせている。そして龍宮は腕を組んで、仁王立ちしながら桜咲を見下ろしている。

「飯が出来たぞ」。龍宮、その辺にしとけ。桜咲、気にしてないから俺は問題ない」

「気にしてない？」

怪訝な表情を浮かべる龍宮。俺は真顔で。

「人の、しかも男の家に平気で泊ったり、平気で着替えたり、果てには勝手に寝床に侵入してくるんだ。あの程度は全然問題ない」

「確かにそうだね」

そういつて、笑う龍宮と更に顔を赤くする桜咲。

その後、当然のように泊る二人に仕方なく勉強を付けてやる事にした。

「いやゝ、悪いね。丁度分らない事があつて。ありがたいう」

「まったく、白々しいな。元々勉強を付けて貰いに来たんだろうが」

「はっはっは、何の事かな」

「まあいい。コーヒー淹れるから待ってろ」

その後、カカオ99%のチョコを溶かしたコーヒー（誰が何と言おうとコーヒー）を飲ませた。そして、次の日当然の如く、俺の寝床に侵入している龍宮にため息を吐く。本当に何がしたいんだ、こいつは？

Re・No:4「幻の地底図書館、期末に向けて 1日目」(後書き)

どうも、更新が遅くなって申し訳ありません。少しリアルが忙しくて更新が出来ませんでした。仕事って大変だな(しみじみ)

今回は一日ずつ分けて書くこうと思います。まあ、二話だけですけど。で、なんで二つに分けるのか、それは単純に長くなって、読者の皆さんが付かれる可能性があるからです。そして、一つにすると、誤字脱字が目立つ可能性があると思うからです。

次回は天と龍宮の日常的な話。そしてタイタン(ゴーレムとは呼びません)再登場、そして地下脱出です。お楽しみに。

Re・No:5「地下からの脱出 期末に向けて 2日目」

さて、どうしようか。目の前には気持ちよさそうに寝ている龍宮。起きるのは簡単だが、面白くない。少し悪戯でもしてみようか。

「ん……………」

頬を触って見る。うゝん、柔らかい。なんかやってる事変態だなま、いつか。勝手に入って来たの、コイツだし。

「意外に肩が小さいんだな」

抱きしめてみないと分からないもんだな。

「何をしているんだい？」

「勝手に寢床に入って来たから、勝手に悪戯をしてる」

そついうと、龍宮がもぞもぞと動き始める。ん？いや待て、朝でそこは拙い。ってやめ。

む？今、アマトの悲鳴が聞こえた様な気がしたが、気のせいかな。

「汗臭い」

「うん。流石にね」

「二日も入っていないから当然アル」

という事で、近くの滝で水浴びをする。

「ノーマの髪って綺麗だよね」

マキエが私の髪を手取る。

「まるで、絹アル」

クーフエイも同じように私の髪を、ってお前達、髪を引っ張るな。

「ん？ネギじゃないか、どうした？」

「えうつ！？」

見ると、顔を真っ赤にしたネギが立っていた。どうやら、私達の様子を見に来たらしい。

「何か用か？」

「えっと、その前に何か着た方がいいと思うよ」

「ん？別に子供に見られて恥ずかしいという訳ではないから問題なかろう？」

そういつて、腰に手を当てる。

「う、ごめんなさい……！！！！！！」

顔を真っ赤にしたネギが走り去る。

「さて、私は戻るとするか」

「んじゃ、後でね」

その後、昨日見付けた出口（だと思う）を眺める。

「うーん、やはり分かん。勉強はしているのだが」

まだ日本語（というより漢字）をマスターしていないので、上手く翻訳できない。

「仕方がない。後で、皆に教えるか」

その方がいいだろう。すると、マキエの悲鳴が聞こえた。

「それで？どうして二人はあんな状態だったんですか？」

「いや、発端は龍宮なんだが、止まらなくなっただけ」

「うん。私も少し反省している」

あの後、悪戯（何処にとは言わない）しようとした龍宮を必死に止め、何故か龍宮が馬乗りになった所を桜咲に見られる（しかも、結構激しく動いたせいで、両者ともども息が荒く、衣服や髪が乱れ、汗だくという最悪な状態）。

「反省してるなら、別に問題ありません。さっさと朝食にしましよ
う」

「そうだな」

桜咲に促され、朝食を作る。

「私はシャワーを浴びて来る。なにせ、天さんが『激しかった』からね。汗が凄いよ」

『激しかった』という言葉に桜咲の顔が赤くなり「失礼します」といって、家を出る。まあ、出る前に昨日作ったサンドイッチを持たせたので、特に気にしない。ったく、龍宮め。

「ミャー」

ラブレスが俺の足に顔を擦りつける。桜咲と龍宮が来たお陰で、少し元気を取り戻した様だ。

「そうだな、今日は少し豪華な夕飯にするか？」

そういうと、ラブレスが鳴く。何故だか、そろそろノーマが帰っ

て来ると思っただからだ。

「ま、その前に朝飯だな」

そういつて、朝飯を作り始める。今日の夕飯は何にするかな。

「どうした、ってアレはタイタン?!」

「ゴーレムです!!!危険ですので、離れて下さい」

ネギが私の前に立って、杖を構える。ん?待て、お前『魔法使い』か?だったら、魔法は秘匿する物だろ?!

「くられ、魔法の矢!!!」

なにも おこらなかった。

「まほうのや?」

フォロー位はしてやるか。私はネギの肩に手を置いて。

「ゲームのやり過ぎだな」

「ち、違います。いや、えっと違わなくはないんですけど」

「と、取り敢えず。まきちゃんを助けるわよ!!!!!!」

「ついでに魔法の本も手に入れるです」

「分かったアル」

「了解でござる」

そういつて、クーフェイがタイタンの足を殴り、よろめかせる。
そしてカエデがマキエを助け、ついでにマキエがリボンを伸ばして、
魔法の本を手に入れる。

『無駄じゃ。ここから出るには三日掛かるぞい』

「滝の裏」

ポツリと私が呟く。すると、驚いたように震えるタイタン。

「皆コツチだ。さっき出口を見付けた」

「本当なの?!」

「さっきの『滝の裏』という言葉にタイタンが反応しただろう?だからあそこにあるのは本物の出口だ」

「でも、なんで出口なら開けられたでしょ?」

「.....問題がある」

そういつて、滝の裏にやって来る。

「げえ、問題ってそういう意味?!」

「ぼ、僕が」 でござるな「え？」

ピンポンという音と共に扉が開いた。

「やった、開いた!!!」

「もしかして、これが魔法の本の効果？」

そんな訳ではないと思うが、今は地上に出る事が第一だ。

「で?なんで、俺はお前の買い物に付き合ってるんだっけ？」

「いいじゃないか、どうせ暇なんだろう?」

どうせは余計だ。まあ、暇だな。

「にしても、買いすぎじゃないか？」

「女の子は買い物が多いものさ」

そこは、胸を張って言うものなのだろうか？

「で？まだ買うのか？」

「勿論！！！」

今日はかなり体力を使いそうだ。

「後ろから来るぞ！！！！気を付けろ！！！！！」

「分かってるわよ！！！！！」

アスナが先頭を走って、私が一番後ろ。何故かだと？もしもの時に足場を崩せるようにだ。私一人でも謳は歌えるし。まあ、そこまです威れないんだが。

「もう少し」

「済みません。長瀬さん」

「なあに、構わんでいじめるよ」

まったく、呑気だな。

『待つんじゃない』

そろそろ煩くなってきたな。手っ取り早く殺るか？

「ノーマさん。立ち止まっちゃダメです」

「ギャンツ!？」

か、髪を引つ張るな!!!!!!!!!!

「くそ」

ジンジンする。

「エレベーターだ」

「しかも直通」

全員で入り込むが、ブザーが鳴った。

「なんでこんな時に」

「でも、ほら見て後ちょっとで大丈夫みたい。ほら」

アスナが片足を外に出すとブザーが止む。それだけで、体重は減らない様な。何となく勘に従って、アスナから本を奪い取る。

「ちよっ、何すんのよ!!!!!!!!!!」

「こうするんだ!!!!!!!!!!」

大きく振りかぶって、本を投げる。すると、ブザーが鳴り止み、扉が閉まる。いきなり襟首を掴まれる。

「アンタ、折角手に入れた魔法の本を」

「聞きたいんだが、アレを持って返って、本当に試験を受けられるのか？」

「え？そりゃあ」

「どうなんだ、ネギ？」

いきなり、話を振られ、驚くが、直ぐに頷き。

「基本、試験中に私物の持ち込みは禁止です」

「だろう？しかも、持っている人間しか頭がよくならないんだ。どうやって、全員の成績アップをするつもりなんだ？」

穴だらけである。それに気付かなかったのは、単に混乱していたのか、頭の中が本当に花畑なのか。……………恐らく後者だろう。

「でも、アレのお陰で分からない問題も解けたし」

「という事は、お前達はネギやコノカの頑張りを否定するのか」

私の言葉に皆が気付いたように顔を上げる。やれやれ、やっと気付いたか。

「さっきの問題だがネギとコノカがやっていた授業にあった筈だが？」

そういつと、皆が思い出し、頷き始める。

「そういつ事だ。あの問題を解いたのは間違いなくお前達の力だよ」
言つと、同時に地上に着いたのか、扉が開く。私達を出迎えたのは。

「よかったあゝ」

「夕映ゝ、皆ゝ」

安堵の表情を浮かべたハルナとノドカ、そして。

「さて、説明してもらおうか？」

ラプレスを肩に乗せた悪魔が立っていた。

取り敢えず、全員を家に案内させ、身なりを整えさせる。そして全員を居間に正座（強制）させ、ただただ睨む。

「あゝ」

「なんだ？」

「僕ら、何で正座させられてるんでしたっけ？」

「知りたいか？」

「はい」

ネギの言葉に頷き。俺は口を開く。

「先ず最初に、ネギ。お前は教師だろう？だのに今回の行為を自分の生徒がやると知っていながら、注意しなかった事、更にお前がいなくなつた事で2 - Aの授業効率が大幅に下がった。何か弁明は？」

「無いです」

「ちょっと、何もネギのせいじゃ」

「そうだな。んじゃ、次は神楽坂 明日菜。お前は図書委員でもないので、夜に図書館島に無断で入った事、これは図書委員と図書館探検部以外の生徒もだな。更に本人の意思を無視し、更に教員のネギを連れてきた事。それと教員がこの時期、一人抜けるとどうなると思う？」

「し、知らないわよ！！！」

「知つとけ、何もネギはお前達のクラスだけ受け持つてる訳じゃないんだぞ？他のクラスにも影響するだろう？因みに今回は土日と授業をやっていなかったなので、問題なかったが、だからといって、許

される行為じゃないのは分かるよな？」

「うう〜」

やっと、自分達のやった事を理解したのか、皆が肩を落とす。

「んで、ノーマ」

「なんだ？」

コイツだけ正座していない（無視された）。

「ラブレスが元気なかったぞ。今度出掛ける時はちゃんとラブレスも連れて行け」

そういつて、首を曲げて骨を鳴らす。慣れない事をする、肩が凝る。

「説教はお終い。各自は今回を教訓として、以後気を付ける事。因みに破った場合は、休日潰して、図書館島の整理に駆け出すからな了解？」

「了解です」「了解です」「了解です」

「んじゃ、もう遅いから夕飯でも食っていけ。それと、風呂使いたかったら、好きに使え。騒ぐなよ？」

そういつと、皆が嬉しそうにはしゃぐ。騒ぐなって。

「アマト」

「ん？」

ノーマが気まずげに。

「済まない」

「なに、少し心配しただけだ。気にするな」

そういつて、夕食の準備をする。さて、見事に大所帯だな。今日は鍋だな。すき焼きでもするか。

「卵が……………無い……………だと?!」

「どうかしましたか？」

今の時間は八時。ギリギリだな。

「ネギ。お使いできる?」

「出来ますけど」

俺はかなりの速度で、お金と買う物のメモを渡す。

「コレを三つ買って来てくれ」

「ええ?!十個入りを三つですか?!」

「いや、買い置きもなくなったからついでだ。いいか、割るなよ?」

「はい！行ってきますー！！！」

何故か、杖を持って外に出るネギ。そして十分後。いやに機嫌のいい笑顔で戻って来たネギの袋には卵と一緒に福引券が数枚入っていた。聞いてみると気のいい店員さんがくれたようだ。

「そうか、でも俺あんまり福引やんないから。お前にやるよ。お使いのお礼としてさ」

そういつて、福引券をネギに渡す。そして調理を始める。

「ああ、好い匂いすると思ったら、好き焼きか」

「好き焼き。やったあー！！！！！」

後ろではしゃいでいる中二ども、だから騒ぐなって。

「ミヤ」

「分かってるよ。お前の分も用意してやる」

嬉しそうに鳴くラブレス。すると、呼び鈴が鳴った。なあ、んか嫌な予感を感じながら、ドアを開けると。

「やあ、なんか好い匂いがしたから来たよ」

「帰れ」

そういつて、ドアを閉める（一瞬）前に玄関に侵入してくる龍宮。くそっ、反射速度がもう少し早ければ、俺はため息を吐いて。

「リビングで待ってる。直ぐに出来るから」

「あ、そうだ。天さん」

クルッと振り向き。凄く爽やかな笑顔で。

「お肉多めね」

「地獄に堕ちろ」

冷やかに答える。その後、『うつかり』龍宮にすぎ焼きをぶちまけようとしたが、勿体ないので断念。皆で仲良くすぎ焼きを突きました。まあ、材料入れる係の俺はそんなに食えなかったけど（でも、近衛が幾つかキープしてくれた。感謝、感謝）。

「ほら、神楽坂。そこ間違ってる」

「え?!」

「綾瀬、その公式間違ってる。ノーマ、そこ、文脈がかみ合っていない」

「はうつ?!」

「何だと?」

「大変だね。天さん」

「龍宮、勝手に冷蔵庫開けて物色するな。それと今日は早めに寝ろ

よ？明日、遅刻しましたじゃ、格好つかんだらう？ネギも今の内に寝とけ」

「えっと、じゃあ、お言葉に甘えて」

その日は日付が変わるまで、勉強会をして過ごした。次の日、物凄い音に目を覚ますと目覚ましが砕け散っていた。近くには物凄く気持ちよさそうに寝ている龍宮。今度請求しよう。二度寝するには時間が足りないので、のんびり朝食を作る。そして朝食が出来たと同時に皆を起こしにかかる。起きない奴は蹴り起こし、皆仲良く朝食を食べる。

「んじゃま、昼には戻って来るから」

「ああ、行つて砕けて来い」

「不安になる声援はノーサンキューです」

「じゃあ、頑張れ」

「じゃあ？！..」

「他に言葉はないでござるか？」

「さっさと、行くぞ」

「歩くのが早いよ、天さん。もう少し女性に合わせて」

「.....」

「走り始めたアル!？」

流石に、朝っぱらから女子と登校は自殺行為だろう。取り敢えず、教室で軽く予習したいので、全力ダッシュ!!!!

Re・No:5「地下からの脱出 期末に向けて 2日目」(後書き)

どうも、作者です。はい、地下探検終了です。んで、次回で期末試験編は終了。その先数話は春休み編。まあ、番外の様な物で、ネギがいい感じに子供になる予定です。では、お楽しみに。

Re・No：6「パーティ」

昼休み、俺達は円を組んで睨みあう。手には一枚の紙。

「行くぞ?」

俺が尋ねる。皆が頷き。

「……せいの、せつ!……」

全員が同時に成績表を出し、確認する。

「ま、余裕で一番」

「同じく、余裕で二番」

「キープ!……三番!……!」

「初!……!……四番」

「……ビリッケツ」

上から俺、大豪院、山下、中村、豪徳寺である。

「んじゃ、何時も通り、ビリッケツが昼飯奢れよ」

「なんか、最近出費が多いのは気のせいだろうか?」

「……気のせいだ」

「そうか」

そんな他愛無い話を続けながら、食堂に向かう。因みに昔から昼飯はコイツ等と一緒に食う事になっているので、食堂で食べるのだ。

「そついや、あの見事にアンバランスな女子中等部の2 - Aが学年でトップになったってよ」

「マジか?!」

「マジだ。先程放送があつたろう?」

「そついや、あつたな」

「お前ら、喋るのはいいが、口の中片づけてからにしろ」

行儀が悪い。今日は授業が無いので、HRが終わった後帰る事になった(なんか、ガン先が嫌に笑顔だったが、何かあつたんだろうか)。取り敢えず、スーパーでリンゴが安かったので大量に購入。騒動があつたが、アイツ等も頑張ったんだ。何か作ってやるか。

「ただいま」

家に帰るが、ノーマがない。ちゃんと言いつけを守っているのだろう。ラプレスもいなくなっている。取り敢えず、リンゴの皮を丁寧に剥いた後、調理を始める。

「さて、作ったとして、どう持っていくか。……………」

…真正面から行くしかないよな」

こういう時、ノーマがいるとお使いとして行かせられるのだが、無い物ねだりしても仕方ない。

「後は焼き上がるまで待つだけか」

そういつて、リビングに入る。TVの前にはファコンとプレステーション。そして散乱しているファイルファンジー。最初に興味持ったノーマにやらせてみたら、はまったらしく、俺がいない昼間の時間になりにやり込んでる様だ。今は五作目をやっている筈である。

「片づけるよ。ん？」

ゲームを片づけていると、机の上にメモ紙が置いてあった。何々。

『コノ力達に何故かうちあげパーティーというのを誘われた。じよしりょうという所に言ってくる』

うーん、微妙に漢字を間違えているのが面白い。それにしてもノーマ、よくやった。これで女子寮に堂々(?)と入れる。そう思っている、完成したようだ。

「んじゃ、行くか」

しっかりと包み、家を出る。

何というか、誰かこの状況を説明してくれないだろうか。

「無の力！……！」

「私は人間をやめるぞー！！！！！」

「ウウウボアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！」

「いまでも パワーを テンションに」

「いいですとも！！！！！」

「ギアアアアアアアアアム！！！！！！！！！」

「カメエエエエエエツ！！！！！！！」

何か、異常に煩い。ああ、全て吹き飛ばしたい。メガフレアとかで。

「ゴメンナア。ウチら皆、何時もこんなんよ」

「何時もなのか？」

だとしたら、よく死者が出ないな。そしてネギは皆にもみくちやにされ、酷い事になっている。

凄いな、アイツ。というより、メガネの奴が小さく言っていたが、確かに常識人だ。それと、その何時も笑顔の奴。どこまでハイテンションなんだ？そしてお前達は勘違いしている。

「アマトはそんな人間じゃないぞ？むしろ人じゃない。アイツは人の皮を被った化け「ノーマ？」もの？」

後ろを振り向くと、本人が立っていた。血の気が引く音がしつかりと聞こえる。そして後ろで騒ぎ始める少女達。

「ったく、こんな所で嘘を言つなよ」

「う、嘘ではないぞ。一昨日見せた顔を忘れたか！？」

「あれは、勝手に三日も家を留守にした罰だ」

「うつ……………?!」

そういつて、私の頭を掴み、強引に下げさせる。

「えゝ、新学期から皆さんと同じクラスに転入する我が従妹。ノーチエ＝プリマムです。どうぞ宜しく」

そして凄いい叫び声。ああ、耳が痛い。それから色々な質問が飛び交う。

「それで？なんで山吹先輩がここに来てるんです？」

それから少しして、先程から色々世話を焼いてくれるアキラがアマトに聞く。アマトは思い出したように地面に置いた包みを開ける中には。

「ノーマの紹介と学年トップのお祝いにアップルパイを少ないが焼いてきたんだ」

そういうと、やっぱり甘い物が好きなのか、クラスの皆から歓喜の悲鳴が上がる。煩い。

「美味しい！！！！！！」

「普通に売れるよ。コレ！！！！！！」

「意外な特技発見！！！！直ぐにプロフィール更新しなきゃ！！！！！！」

若干一名、違う方向で動いているが、まあいいだろう。そんな感じでパーティが終わり、帰り道。

「どうだ？仲良くなれそうか？」

「お前は私の父か？」

なんで、そんなに心配なんだ？

「だって、お前の性格だと馴染めなさそうだろ？それに」

それに？

「家族だからな。心配するのは当たり前だ」

そういつて、頭を撫でて来る。初めてだと思った。人間に『家族』と呼ばれたのは。ビーネンリッター様からはどちらかというと『大切な宝物』という扱いを受けていた。他の人間からは言わずもがな道具、もしくは武器呼ばわり。だからだろうか、その言葉がとても嬉しくて。

「はあ、何泣いてんだよ」

何時の間にか、涙を流していた私を優しく抱きしめてくれた。お陰で涙が止まらない。ふと、視界の端でラブレスが嬉しそうに明後日の方を向いている。

「？」

視線を上げると、そこにはニヤニヤと意地悪く笑っているマナがいた。

「~~~~~っ!!!!!!!!!!!!」

「ゴフツ?!」

思わず、アマトを突き飛ばす。その際、拳を握っており、そのせいでアマトにボディーブローを叩きこんでしまった。

「マ、マママママナ?! 何処から見てた?!」

「うーんと、『お前は私の父か?』って所から」

つまり、最初からである。恥ずかしい。今の私の顔はリンゴのよう
に真っ赤だろう。それをマナはニヤニヤと眺めている。

「ええい、見るな!!!!!!!!!!」

「そう言われると、じっくり見てしまうな」

私の顔をがっちり固定して、目を合わせる。更に顔が熱くなる。

視線だけ動かして、アマトを見るが、アマトは地面に倒れ伏して痙
攣している。ええい、使えない奴め!!!!!!!!!!

結局、アマトが起きるまでの十分間。私は真っ赤な顔をマナに見
られていた。マナは終始笑顔だった。

Re・No：6「パーティ」（後書き）

ええ、今回はかなり少なめです。ぶっちゃけ、最後辺りが書きたかったので後悔はしていません。そして感想ありがとうございます。因みに2・Aで天のファンクラブに入っているのはチア三人組です。この三人は後々絡ませる重要なキャラです。作者的に大好きなキャラですし。それでは次回をお楽しみに

Re・No：7「ノーマの春休みその一 ネギとゲーム」

「ん」

目が覚め、リビングに降りる。普通ならいる筈のアマトがいない事に気付く。

「アマト」

キッチンにもいない。何処に行ったのだろうか。すると、机に一枚のメモ紙が置いてあった。

『ノーマへ。少し高校の方に行ってます。朝食と昼食は冷蔵庫に入っているんで、それを食べる事。それと、出掛ける時はラブレスを連れていく事。以上』

「本当にアイツは私の親か？」

そんな事を言いつつ、嫌な気分にならないのは、何故なんだろう。

「とにかく、朝食を食べないと」

その言葉に足元にいたラブレスが同意の声を上げる。

「さて、どうするか」

取り敢えず、外に出るか。

「という感じで、外に出てみたものの、何するか」

適当にぶらつく。すると。

「あ、ノーマさん」

振り向くと、ネギがいた。

「おはよう。魔法使い」

「え?!」

ネギが凄く驚いている。

「この前のタイタンに追いかけられた時に分かったんだ」

「ゴーレムです。あ、あの、この事は「お前がゲームのやり過ぎで自称魔法使い（笑）だ」という事が分かった」ち、違いまゝす!!!」

「ふつ、否定するのも無理はない。確かに恥ずかしいからな「いや、確かに恥ずかしいですけど」だが、お前は甘い。なんで、「魔法の矢」なんだ? 『ファイア』でも『ブリザド』でも『サンダー』でもいいじゃないか!!!!!!」

「えっと、何ですかそれ?」

その言葉に私の時が止まった。まさか、この年で『時間圧縮』を使えるとは。それよりも。

「ファイ ルファン ジーを知らない……………だと?」

「えっと、何でしょう、それ」

衝動的にネギの手を引き、家に連行した。

「え、えっと、僕はどうし「黙れ」は、はい！！！！」

そういつて、ファ コンにソフトを入れて、起動する。

「え、これって」

「これがファイ ルファン ジーだ。やってみろ」

そういつて、コントローラーを渡す。ネギは興味があるのか、コントローラーを握り、ゲームを始める。

「おお！！！！」

ゲームを始め、簡単な説明をした後、どんどんのめり込んでいくネギを見て、私も最初はこうだったんだな、としみじみ思う。

「やった！！！！」

最初のボスを倒しただけで、この騒ぎよう。ああ、私もこうだったな。そんな事を感じながら、ネギがゲームをやる姿を眺めていた。

「いや、悪いな。二人とも、買い物付き合わせて」

「構へんよ」

「そうそう、アップルパイのお返しだから、気にしないで」

学校での用事が終わり、夕方の街を歩いていると偶然、神楽坂と近衛に会い、自分が夕飯の買い物をしている最中だと教えると、手伝いを申し出てくれたのだ。断るのも、悪いので申し出を受ける事になった。流石に女の子二人に荷物持ちはさせたくなかったが、いかんせん、先日のすき焼きのせいで食材の在庫が心もとないのも事実。結果、三人分の荷物になった。

「にしても、買いすぎじゃない？」

「それがな、毎日のように夕飯をたかりにくる奴がいるせいで、食材の減りが凄いんだ」

「災難やね」

まったくだ。お、家が見えてきた。

「そうだ。時間があるなら家に来ないか？お茶位なら出すぞ？」

「うーん、どうしよっか」

「ウチは構へんよ」

「じゃあ、お言葉に甘えます」

二人の言葉を聞き、扉を開けると。

「やった！！！！」

「おお！！！よくやった！！！！」

何やら、聞き覚えのある声達が叫んでいる。リビングに向かうと。

「ん？お帰り」

「あ、お邪魔してます」

ノーマとネギが仲良くゲームやっていた。まあ、やっているのはファイ ルファン ジーだが。

「随分と楽しそうだな」

「ハイ！！ノーマさんのお陰でこんな面白いゲームに巡り合えました！！！」

おお、そんなキラキラした瞳で言うと、本当に年相応だな。まあ、この年代の子供は外か家で遊ぶもんだからな。

「そんなに面白いんか？」

「ハイ！……このゲームはですね」

近衛とネギが話し始める。俺は買ってきた物を冷蔵庫に収めながら、ふとある物に気付く。

「ノーマ、昼飯食ってないな？」

「ん？ああ、ネギとゲームしてて忘れていた」

そういつと何処からともなく、腹の虫が抗議を上げる音が響いた。振り向くと、皆頬を染めて、そっぽを向いている。

「……………夕飯、食べていくか？」

「ウチも手伝います」

「すみません。ご馳走になります」

「頂きます」

「さっさと作れ。ほら、ネギ。続きをやるぞ」

「あ、はい」

ノーマとネギがゲームを再開する。俺も早速、調理を開始する。

「今日は何作るん？」

「ん、そうだな。鮭が人数分あるから塩焼きかな」

「ほんなら、ウチは和え物作るわ」

「頼む。食材は好きなの使っていいから」

そういつて、先ずはお米を研ぐ。これを忘れると大変である。ふと、後ろを見ると。

「ちよつと、ネギ。そこは『たたかう』でしょ？なんでアイテム使うのよ」

「なに言ってる。此処は『まほう』を使った方が良いに決まってるだろ？何故攻撃しないんだ？」

「二人とも、よく見てください。味方は皆、LPが半分以下ですよ？それに攻撃しても倒しきれないかもしれません。そこで、安全を取ってアイテムで回復です」

等と、三人で話しあっている。ああ、本当に子供なんだなあ。としみじみ思ってしまう。

「どないしたん？」

「ん？こつやつて、改めて見るとネギも子供なんだなあつてさ。今までは教師っていう括りでしか見てなかったからさ。少し驚いた」

本当、何時の間にか『子供先生が当たり前』って思ってたよ。なんで、そんな事が当然なんだろうな？普通、不自然だろうに。ああ、やっぱり麻帆良にある独特の空気の所為だろうか。

「取り敢えず、今は料理だ。料理」

「美味しく作るで」

その通り。さて、次は鮭を焼かないと。

「だからそこは『たたかう』でしょう?」

「いえ、此処は『まほう』で」

「アスナ。お前、さっきから『たたかう』しかネギに強要してないか?」

「え? そうかな」

「『たたかう』だけの単細胞め」

「なんですつてえ!!!!!!」

「ご飯出来たえ」

「ほら、ゲームは一旦セーブして、こっちに来い」

「はい」

「ふん、命拾いしたわね」

「まさか、私ではないよな？」

「仲がええな」

「これなら、友達にも困らなさそうだ」

「煩いぞ、アマト。私も本気を出せば友達には困らん。

「どんな本気だ？」

「とにかく、今は食事よ」

「そういつて、食事を始める。む、中々美味い。

「コノカ、コレはコノカが作ったのか？」

「美味しい？」

「うむ！！」

「あれ？このお味噌汁。ちょっと変」

「使っている出汁が違うからそう思っただろう」

「このかさんとは違う味だけど、美味しいです！……！」

目をキラキラしながら夕飯を食べるネギ。べ、別に可愛いとは思
ってないからな。

「それで？ネギは飯食ったら寮に帰るのか？」

「え？あ、そつか。僕、寮だっけ」

「アンタ、今気付いたの？」

「まあ、今日くらい泊ってもええんちゃう？」

「まあ、ノーマもネギの事気に行ったみたいだし。別に泊っても構
わないぞ？」

「いいんでしょうか？」

それで、なんで私を見る。

「そういう事は自分で決めろ。………私は別に構わ
ないが」

「じ、じゃー、お言葉に甘えさせてもらいます」

「という事になったが、構わないか？二人とも」

「ウチは構わんで」

「私もいいわよ」

「という事だ。んじゃ、ネギ。取り敢えずゲームは九時でやめろよ

「？」

「あ、はい。分かりました」

いい具合に落ち込んでいる。

「今日は、充分ゲームやったろ？また明日来ればいいさ」

「いいんですか？」

「いいに決まってるだろ？それにどうやらノーマもネギの事が気にいったみたいだし」

「ふんっ」

私の反応を可笑しそうに見つめるアマト。

「それに今日はある物を借りて来たからな。三人で見よう」

「ある物？」

「映画だ。ちょっと古いかな」

そういつて、取り出したのは黒い長方形の『ビデオテープ』と呼ばれる物だ。

「どんな映画なんですか？」

「ん？SF物。まあ、見てのお楽しみだ」

その後、夕飯を食べ終わり、アマトはコノカとアスナを寮まで送っていくと言って、出掛けてしまった。

「コノカはともかく。アスナは別に送っていかなくてもいいんじゃないか？」

「確かに、そうですね」

それから十分後にアマトが帰って来た。時間は丁度九時。

「時間だ。ゲームは明日にして、風呂に入るぞ」

「えっと、アマトさんですか？」

「もしかしてノーマと入りたいのか？」

「い、いいえ！！！！」

そこまで必死に否定されるのも、どうかと思うが。ゲームを切り上げたネギはそのまま、アマトに着いて行く。

「そんなとこに突っ立ってないでこっち来い」

「は、はい」

僕は言われるままにアマトさんの前に座る。

「んな、縮こまんや。別に取って食おうとしてる訳じゃないんだから」

苦笑交じりにそういうと、身体を洗われる。

「えっと、アマトさん。僕自分で洗えます」

「まあまあ、今日は俺に洗われる」

そういつて、身体を洗ってもらい、代わり番子に僕がアマトさんの身体を洗いました。力加減が上手く出来ずに、終始くすぐつたいと言われた。その後、頭を洗って、湯船に浸かります。

「どうした？さっきから」

「えっと、結構鍛えているんだなあって」

本とかで見る。ゴツゴツとした岩みたいな筋肉じゃないけど、アマトさんは無駄な肉が無く、見事に腹筋が割れている。

「まあ、友達に付き合っていると自然にな」

そついつて、湯船のお湯で顔を洗う。ふと、アマトさんの右手に気付く。何時もは指が出るグローブを付けている右手だ。

「アマトさん。それ」

「ん？これか？不思議だろう、生まれた時からあつてさ。何でも俺のご先祖様が関係しているとかで、俺の一族には必ず、右手の甲にこんな物がつくのさ」

そういつて、誇らしげに見せる右手の甲には太陽の形をした絵が刻まれていた。

「ふゝ、いい湯だった」

アマトとネギが戻って来た。さて、私も入るか。

「ネギ、アイスあるけど食べるか？」

「あ、頂きます」

「私の分も残しておけよ？」

そういつて、風呂に入る。

「ふゝ」

ネギ・スプリングフィールド。最初は頼りない少年とと思っていたが、中々面白い奴だ。私には分からないが、弟というモノはネギの様なのだろうか。

「家族、か」

呟き、先日のアマトが私に伝えた言葉を思い出す。嬉しかった。とも思いつし、やっと自分にも、という思いもあった。

「幸せ、なのだろうか」

よく分らない。口まで浸かり、ブクブクと泡を立てる。分からないと言え、アマトだ。アイツはなんで、右手を見せようとしない。風呂を上がったも、右手にタオルを持って隠してあるし。寝る時は白い薄手の手袋を付けているし。聞いてみると「肌が良いんだよ」肌を気にする歳か？

「む」

考えれば考えるだけ、どんどん思考にはまっていく。

「ノーマ」

「な、なんだ!？」

いきなりアマトに呼ばれる。

「いや、逆上せてないか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そついつて、湯船から上がる。もう、別にいいか。

「んじゃ、見るぞ」

「映画のタイトルはなんですか？」

「ん？『エイリアン』だ。ちょっと怖いぞ」

「ふん、作り物程度に何を怖がる必要がある」

その後、映画を見終わり、寝ようとしたら、部屋にノーマとネギが付いてきた。聞いてみると。

「えっと、暗闇に一人で寝ると、不安で」

「べ、別に怖いから来た訳じゃないぞ！……ただ、今日はそういう気分なんだ！……！」

二人の言葉に苦笑を浮かべる。まあ、たまには川の時で寝るというのも、悪くないな。

Re・No:7「ノーマの春休みその一 ネギとゲーム」(後書き)

どうも、作者です。京都編を書いていて、重要なエヴァ編をすっかり忘れていたドジな私wwwなので、エヴァ編を書くまで、少しネタとして書いた作品を幾つか上げる予定です。ええ、今回はネギが歳相応に遊ぶ者です。教師と言ってもまだ10にもなっていない子供。原作では、主人公だから忘れがちですが、まだまだこの年代の子供は外や家で友達と遊びたいはず。作者もそうでしたから、学校の木に登って落ちかけたり、野球してて、手が滑って振り抜いた瞬間、バットが明後日の方に飛んでいったりと、今思い出しても懐かしい。

そんな子供の遊びを一切(これは作者の妄想)知らないネギは、一読者として可哀そう。と思い、この話を入れました。お気に召したでしょうか?感想など頂けると嬉しいです。

因みに自分、コミック派なので、今の原作展開は知りません。そこんところはご了承してください(だって、毎週マガジン買ったなら金がすぐ尽きますしwww)。

春休み編ではチア三人とノーマの絡み、天とネギの絡み&ネギの精神的成長(原作では近くに見本となる人間がいなかった為、あまり成長できなかったと勝手に認識しています)を書いていきたいと思います。では長々と失礼しました。次回の更新をお楽しみに

Re・No：8「ノーマの春休みその二 ノーマの小さな願い」

「へい、その可愛いお嬢さん!!!!!!」

いきなり呼びかけられた。見ると、三人の少女。この前、アマトのファンだと言った三人組だ。

「アマトさんについて教えて欲しいんだけど」

「他を当たれ」

そういつて、歩き出す。

「ちょっと待った。私達の質問に答えてくれたら、クレープ奢るから」

クレープとはあれだろうか。前にアマトが作ってくれたクリームやフルーツが一杯のお菓子だろうか。あれ以来食べていないが、とても美味しかったのは覚えている。

「.....クレープが先だぞ?」

「やり!!--」

「んじゃ、こっちだよ」

そういつて、手を引かれる。ああ、どんなクレープにしよう。

「お邪魔しま〜す!!!!!!」

ネギがやってきた。三日目となると慣れてきた。

「おう、ちょっと待ってる。直ぐに出来る」

そういつて、慎重にオーブンからある物を取り出す。

「わぁ、クッキーだ」

「先にリビングにいる。紅茶も淹れて持って来てやるから」

「はい!!!!!!」

元気よく返事すると、リビングに向かった。そして一分もせずにゲームの起動音が聞こえる。昨日、朝から夕方までぶっ続けでゲームをやり、一作目をクリアしたネギ。今日から二作目にチャレンジである。

「凄い!!!主人公に名前が付いてる!!!!!!」

驚くのはそこなのか。苦笑しながら、紅茶を淹れる。

「味わって食べるよ?」

「頂きます」

そういつて、美味しそうにクッキーを頬張るネギを見て、頬が緩んでしまう。

「どうかしました？」

「俺って弟がいないんだ。だから弟ってこんな感じなのかな、って思ってたさ」

そういつと、ネギは照れたようにはにかんで。

「僕もお兄さんがいなくて、お兄さんってこんな感じで優しいのかな、って思います」

「そっか」

それから他愛のない会話をしながらクッキーを頬張り、紅茶を飲み、二人で一緒にダンジョンを攻略したりと楽しんだ。そんな時。

「ただいま」

「「「お邪魔します」」」

妙に上機嫌なノーマの声と、緊張気味の少女の声が三つ聞こえた。出迎えてみると。

「アマト！！！！クレープを作った人間は天才だな！！！！！！」

「うわっ、生の山吹先輩だ」

「感激」

「山吹先輩の家!!」

瞳を輝かせ、頬にクリームを付けたままのノーマが語る横で、この前、積極的に質問してきた三人娘が瞳を輝かせている。

「どうしたんですか?」って、釘宮さん、柿崎さん、椎名さん?!

「「「ネギ先生?!」」」

「取り敢えず、全員上げ」

全員をリビングに迎えて、改めてクッキーと紅茶を振るまう。

「凄い、美味しい」

「こっいつの好きなんですか?」

「ラブレス可愛いよ」

若干一名、ずれてるが無視。

「まあ、好きな方だな。お菓子と違って男女関係なく好かれるから
そういうと、黒髪の少女（釘宮だったか）は熱心にメモ帳に記入
している。」

「はあ、幸せ」

釘宮の隣で感涙（！？）しながらクッキーを頬張る少女（柿崎だつたな）。

「ラブレスもクッキー食べる？」

「ミャー」

ラブレスと一緒にクッキーを食べている少女（椎名）。

「そこは『まほう』じゃないのか？」

「此処は『たたかう』です」

テレビの前で議論を繰り広げるネギとノーマ。危なく、ため息が漏れそうになった。

「アマト、クレープ作ってくれ」

「材料が無いからまた今度な」

それを聞いて、不機嫌になるノーマを宥める。

「なんか、二人って兄妹みたい」

「うん、なんか扱いに慣れてるって感じだよな」

「まあ、一緒に暮らせばそれなりに慣れてくるさ」

苦笑しながら、ノーマの頭を撫でる。

「それで、そろそろ門限だけど大丈夫か？」

「え？ああ、本当だ。すいません、これで失礼します」

「また、来てもいいですか？」

「こら、美砂。先輩に悪いでしょ」

「別に構わんさ」お邪魔しまゝす」毎日のようにコイツ等が来てるから」

そういうと、龍宮、桜咲、そしてこの前、かなり強引に質問をしてきた、赤髪の少女がやってきた。

「今日『も』夕飯を食べに来たよ」

「ご馳走になります」

「な、こっちが断らないと分かっているからこそ、こつやって夕飯をたかりに来るんだ」

「まあ、今日は食材を買って来たから、勘弁してくれ」

「ネギ先生、何をしているんですか？」

「ゲームです」

「へー、此処が山吹先輩の家かー、男の家だから結構汚いと思ってたら綺麗ですね」

「ふむ、後輩にこんな酷い事言われると、今日の夕飯は手抜き物になってしまいそうだな」

そういうと、龍宮が殺意を込めて少女を睨む。

「あ、いや、そういうことじゃなくて、とても山吹先輩らしい家だなあって」

冷や汗を流しながら喋る少女を見て、少し笑い。

「冗談だよ。君達はどうする？夕飯食べるなら、一緒に作るけど」

「どうしょつか、円」

「なんで、アタシに聞くのよ。まあ、桜子もあんな状態だし、お言葉に甘えます」

そういえば、椎名は何をしているのか、と視線を巡らせると、ラプレスと一緒に丸くなって寝ていた。それに苦笑しながらキッチンに向かう。

「あ、手伝います。流石に全部任せると気が引けますし」

「サンキュ」

釘宮が手伝ってくれる。人数が多いので助かる。

「何時もこれくらい作ってるんですか？」

「そうだな。大体四、五人分かな」

「大変ですね」

苦笑しながら釘宮が言う。俺も苦笑を返す。

「でも、俺が作った料理を美味しそうに食べるのを見るのは好きだからな。それだけで作った甲斐がある」

「そうですか」

そういつて、微笑む釘宮。それから互いに料理のアドバイスをしながら夕飯を作る。

『きさま はんらんぐん だな』

「選択間違えた！！！」

「まあ、経験値と金が稼げるから問題ないだろう」

ネギが悔しそうにゲームをやる姿を眺める。

「それにしても、凄い熱中ぶりだね」

「そんなに面白いんですかね？」

「面白いぞ。これはやってみないと分からないがな」

「私はちょっと、こういう感じのゲームは苦手です。もっと自分で動かせるゲームが好きなので」

「だったら、桜咲はこっちのゲームかな？」

アマトが料理を運び終えて此方にやって来た。手に持っていたのは『武 伝』というゲーム。

「結構、面白いぜ？主人公はオニギリと決闘が好きな少年だ」

そういつて、セツナに渡す。

「貸してやるから、やってみな」

「分かりました」

嬉しそうにゲームを手取るセツナ。

「今日の夕飯はなんだ？」

「ん？結構、豪華だぞ」

言われ、視線の先を見ると本当に豪華な食事が並べられていた。

「エビフライにハンバーグ、コロッケと。これはまあ、子供が好きなメニューだね」

「文句があるなら食わんで結構」

「毎日ありがとうございます」

笑いが起きる。皆と一緒に笑いあう。楽しい。素直にそう感じる。ただ楽しければ、楽しいほど、この『現実』が『夢』の様に思えてしまう。これは私が寝ている時に見ている『夢』。目が覚めればまたあの虚ろな、人形の様な日々が続くんじやないか、そう思う時がある。私は夜が嫌いだ。その想いが一層強く出る時間だから。だからこそ、朝アマトが起こしに来てくれた時はとても嬉しい。ああ、アマトはちゃんという。そう、感じられるから。

「どうした？ノーマ」

「もしかして嫌いだった？」

「い、いや全部好きだぞ。ただ、これほど豪華な料理はアマトも作ってくれなかったからな」

「俺とお前だけじゃ、こんなに食えないだろう」

「それもそうだな」

そういつて、笑いあう。もし、これが夢であったとしても、せめてもう少しの間だけ、此処にいさせて欲しい。

Re・No:8「ノーマの春休みその二 ノーマの小さな願い」(後書き)

神よ。もし『エレメンタルジエレイド』をもう一度アニメ化するなら、ノーマの役を『坂本真綾』にしてください!!!!!!

どうも、作者です。今回はちよつとシリアス(かな?)なお話。エディルレイド故『当たり前』の幸せを知らないノーマにとって、天との生活は正に『夢の様な』生活。だからこそ、この生活は自分が夢の中で思い浮かべた『空想の世界』と思ってしまう。そんな感じで書きました。ほのぼののからいきなりシリアス(?)に発展し、驚かせてすいません。

そして、お待たせしました。ようやくエヴァ編を完成させました。今回はエヴァ編、と見せかけて、新学期が始まるので、すっかり忘れていたキャラ設定を書こうと思います(いらなとか言わないで!!!!)。エヴァ編は今日中か、明日の早朝に上げるつもりです。何故、すぐ上げないかというと、微調整をしたら、誤字脱字があるわ、あるわwwwちゃんと修正してから上げようと思います。では、皆さま感想、ご意見等ありましたらお願いします。作者はむっちゃ喜びますので、要望も構いませんよ。『此処はこうした方がいい』とか『このキャラを出してくれ』等など。では、長々と失礼しました。次回の更新をお楽しみに。

キャラ設定

名前：山吹天
やまぶき あまこ

所属：麻帆良高等部二年（新学期から三年）

部活：帰宅部

委員会：図書委員

趣味：読書、日向ぼっこ、料理

家族構成：両親は既に他界。育ての親は京都の祖父母（但し祖母は天が麻帆良に引っ越した時に他界）他にノーマ、ラブレス

好きな物：笑顔、家族

嫌いな物：涙

ご存知、この作品の主人公。外見は中肉中背、山吹色の瞳と中性的な顔が特徴。髪は短く切り揃えている。声も若干高いせいか、初対面の人間の何人かは女性に間違われる事も少なくはないらしい。性格は『お人好し』誰にでも分け隔てなく接することが彼の長所。

名前：ノーマ・プリマム

所属：新学期より麻帆良女子中等部三年

部活：未定

委員：未定

趣味：ゲーム、ラブレスと一緒に日光浴

家族構成：不明

好きな物：家族、天の作る料理、お菓子全般

嫌いな物：物を手荒に使う人間

はい、今作のヒロイン、ノーマです。さてさて、部活と委員はどうしましょうか。敢えて委員はスルーにしてみるのも面白いですね。では、次回はいいいよエヴァ編。さあ、頑張るぞ！！！！

Re・No：9「新学期 桜通りの吸血鬼」

「ど、どうだ？おかしな所は無いか？」

「ああ、大丈夫だ。可愛いぞ」

アマトの言葉に恥ずかしくなる。私の服装は女子中等部の制服だ。

「不安か？」

「少し、な。だが、ラブレスがいるから大丈夫だ」

そういつて、ラブレスを抱える。

「動物の持ち込みは禁止だ」

「なん……………だと!？」

絶句である。

「まあ、大丈夫だ。近衛も神楽坂もいるし、良かったなクラスが3-Aで」

そう、私の転入するクラスはネギが担任を務めているクラスなのである。確かにそれなら不安はないのだが。

「ラブレスは半日一人ぼっちか？」

ラブレスの頭を撫でる。心なしかラブレスも少し悲しそうな表情

をしている。

「まあ、ネギなら大目に見てくれるだろう」

「それはそれで駄目な気がするが」

アマトの言葉を見無視して、ラブレスを持ち上げる。ただ、これから電車に乗るのにこの状態は流石に駄目だ。

「ラブレス。少し狭いが、鞆に入っていてくれ」

そういうと、ラブレスは素直に鞆の中に入ってくれた。

「よし、行くぞ、アマト！！！！」

「ま、いっか」

そういつて、家を出る。

「あ、おはようございます。アマトさん。ノーマさん」

「おはよう山吹さん」

「おはようノーマ」

「ああ、おはよう」

隣を見ると、恥ずかしいのか、もじもじしているノーマがいる。
軽く肘で小突く。

「う、お、おはよう」

ぎこちないが、仕方ないだろう。なんせ、昨日から興奮のあまり、
寝つけずにいたのだ。これで、修学旅行は大丈夫なんだろうか。

「なによ、ノーマ。何赤くなってるの？」

「煩いぞ、アスナ」

「なんですって」

「ほらほら、さっさと行かないと遅刻するぞ？」

「そうですよ。行きましょう」

ギリギリ電車が出る前になんとか乗りこめた。

「新学期かあ」

「今年は楽しい一年になりそうだ」

「どうしてですか？」

俺はよく分かっている。ネギに笑って。

「なんとなくだ」

「あ、着いたわよ」

「じゃ、お先に」

「あ、待って下さいよ」

そういつて、走り始める。ノーマはというと。

「多すぎ、うね」

登校している生徒にうんざりしている。

「改札抜けたら、真っ直ぐ走れ。一番奥が女子エリアだから」

「連れて行ってくれないのか？」

「アホ、俺はこっちだ。頑張れよ」

そういつて、走る。

アマトの後姿を見た後。

「ラブレス、出てきていいぞ」

鞆を開けると、ラブレスが出て来る。ラブレスを抱えて走り出す。

「それにしても、凄い人だな」

上手く前に進めず、齒がゆい。

「あれ？ノーマじゃないか」

「マナか」

何時の間にか、マナが隣で走っていた。

「ラブレスも連れて来たのか？」

「仕方ないだろう。家に独りで置いて行くなんて私には無理だ」

「まあ、確かにそうだな」

走りながら、ラブレスの頭を撫でるマナ。

「さて、少し急ぐよ」

「うむ」

マナに合わせて走る速度を速める。

「ノーマの奴、ちゃんと間に合ったかな？」

「どうしたよ、天」

「ん？いや、何でもない。それよりも、豪徳寺。山下の奴、どうしたんだ？」

そういつて、山下を見る。山下は窓の外を見ながら物憂げにため息を吐く。その姿は恋する乙女のそれである（いや、山下は男なのだが）。

「なんでも、一目惚れしたらしいぜ」

「誰に？」

「さあ、ウルスラの方が濃厚だけど。そこまでは分からんね」

豪徳寺が両手を上げて降参のポーズを取る。

「何でも、あの超優等生、高音・D・グッドマンに惚れたらしい」

「大豪院。マジか？」

「マジだ。この前、山下と一緒にあった事がある」

「その時か」

俺が聞くと、大豪院が頷く。因みに高音さんは優等生というよりも男子からは融通が利かない『委員長』としての渾名が広く反映している。

「にしても、山ちゃん、無謀だぜ。あんなレベル高い女。彼氏の一人、二人いるのにな」

そういう、豪徳寺の言葉に山下が少し項垂れる。

「そうでもないぞ」

「なぬ?!」

凄い食い付きだな。

「高嶺の華ってのは、それだけで自分には不釣り合いだと思ってしまつもんだ。現にお前がそう思ってるだろ？」

「た、確かに」

「他の奴も同じだよ。『この人には俺よりも他にいい男がいるに違いない』って思ってた勝手に諦める。実際、高音さんの彼氏なんて見た事無いぞ?」

「おう、俺も知らないぜ」

そういつて、やって来たのが中村だった。

「ほら、俺らの中で一番情報を早く手に入れてる中村も知らないん

だ。充分、チャンスはあるぜ？」

「そうだな。確かに、そうだよな。んだよ、悩んで損したぜ。なら、早速アタックだぜ！！！！」

「待て、待て」

舞い上がる山下に釘を打っておく。

「いきなり話しかけたら、不自然だろう？それにお前の事だ、いきなり告白するんだろ？」

そういうと、山下が『駄目なの！？』的な顔を作る。俺はため息を吐き。

「お前、知りもしない女子がいきなり『好きです』なんて、言われたらどう感じる？」

「ええ？そりゃあ……………驚くな」

「だろ？高音さんも同じだ。先ずは知り合いから、んで、友達、最終的に告白。少し大変だが、告白を学祭最終日にやるとするなら、今日から動かなきゃ駄目だ」

「くっ、どうすれば。頼む、皆俺に力を貸してくれ！！！！」

そういつて、両手を合わせ、頼み込む中村。

「さて、諸君。親友の頼みだ。断る理由は皆無だが、いかんせんタダは無いと思うが？」

「確かにそうだな」

「なら、学祭前まで昼飯は山ちゃんの奢りで手を打たないか？」

「豪徳寺、それは少し酷だろう？せめて、一か月にしろ」

俺達が簡単な会議をして、改めて山下を見る。

「今日の昼飯『特上Aコース』を全員分奢ってくれるなら、手を貸すぜ？」

「余裕だ。サンキュ皆！！！！」

そういつて、笑顔で親指を上げる山下に俺達も親指を上げる。さて、どうやって接近するか。

「ノーチエ・プリマムです。宜しく」

『宜しくね』

ああ、煩い。なんでこんな煩いクラスなんだ？室内だからエコーが掛かって、耳があ。

「えっと、ノーマさんの席は明石さんの後ろです」

「分かった」

そういつて、席につく。隣にいたのは私よりも少し幼い外見の少女だった。先ずは挨拶が肝心。そうアマトに言われたのを思い出し、声を出す。

「ノーチェ・プリマムだ。ノーマでいい。宜しく」

「……………エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

長い沈黙の後、挨拶を返した。前の席（確かアカシ）が「エヴァちゃんが喋った」などと驚いている。

「ネギ先生。そろそろ時間ですよ」

「あ、そうでした。皆さん、今日は身体測定です。脱いでください」

爆弾発言。歓声に包まれる教室。

「煩いクラスだ。もう少し静かに出来ないのか？」

「全くだ」

私の意見に同意を示すエヴァンジェリン。どうやら、意見が合うみたいだ。それにしても身体測定か、此処の人間は私達を知らないといっても、身体に宝石が埋め込まれていたら驚くよな。少し慎重に動かないと。

「ミャ」

「……………なんで、猫がいる？」

「ラブレス。昼休みまで、自由にしていいたのに、もう探索は終わったのか？」

私の言葉に肯定の意味を含んだ声を上げる。

「茶々丸。昼休みまで世話をしろ。これではクラスの奴らがまた煩くする」

エヴァが前にいるチャチャマルという女性（ロボット？）に命令する。チャチャマルはなんの不満も無く「分かりました」と答えると、ラブレスを優しく持ち上げる。

「済まないな、エヴァ」

「貸しーだ。これのお返しは、そうだな。何か美味しいお菓子とお茶で返してもらう」

「分かった。アマトに頼んでおく」

そういつて、着替えを始める。この制服というのは脱ぐのが面倒だ。

「そういえば、『桜通りの吸血鬼』って知ってるか？」

昼飯、『特上Aコース』を食べていると中村が思い出したように話を振る。俺は思い当たる節があるので、答える。

「アレだろ？桜通りで吸血鬼に襲われたあ、って奴。あれ、確かデマだろう？」

「そうでもないぜ？」

意地悪く笑う中村。コイツはこういった怖い話やオカルト話が好きな奴だ。

「今日の朝、被害者が見つかったんだよ。それもアンバランスな3-Aの所に」

その言葉に反応する。

「本当か？」

「俺の情報は、速い、正確がもつとうだぜ？その子の首筋には噛まれた跡があつたんだって」

「で？なんで、お前が知ってたんだ？」

「そのクラスに朝倉っていう報道部の子がいるんだけど、友達でな。情報はそこからだ」

成る程、速い訳だ。だが、これならイケル。

「山下、いい感じに高感度を上げる方法を浮かんだぞ」

「マジか!？」

「ああ、いいか」

「

俺は皆に考えた事を話す。

「吸血鬼、か」

「そう、桜通りの吸血鬼」

ミサが話す内容を半分聞き流しながら、耳を傾ける。

「お前はいると思うか？ノーチェ」

「ノーマでいい。私は自分の目で見なければ信じないタチだ。だから何とも言えん。だが」

「だが？」

私は笑って。

「吸血鬼ぐらい、いても不思議ではないだろう？昔から『火のない所から煙は立つ』ともいうしな」

「正確には『火のない所に煙は立たない』です。ノーマさん」

茶々丸の言葉に恥ずかしくなる。くっ、日本語は難しい。

「ハッハッハ。面白いな、お前は」

そういつて、快活に笑うエヴァンジェリン。

「ええい笑うな、エヴァンジェリン！！！！！」

「ハッハッハッハ！！！」

「楽しそうですね」

「ミヤ」

チャチャマルとラブレスの声がしたが、無視だ。今はこの笑っているエヴァンジェリンを黙らせねば。

R e - N o : 9 「新学期 桜通りの吸血鬼」 (後書き)

どうも、作者です。先ず最初にすいません。早朝に上げると言うたのに、修正と追加に時間が取られました。次回もネギの出番は少ないかも。次回の更新をお楽しみに。

Re・No:10「吸血鬼とエディルレイド」

「じゃあ、また明日ね」

「また明日」

「またねー!!」

「ああ、お前達も早く帰れよ」

マドカ、ミサ、サクラコと別れて歩き出す。時刻はもう夕方を過ぎて、夜になっている。

「少し遅くなったな。怒っているだろうか？」

そういいながら歩いて、ふと気付く。

「桜通り……………か」

ミサが言っていた吸血鬼の話を思い出した。

「吸血鬼ね」

そう思って、歩き出す。すると、いきなりラブレスが腕から離れる。

「どうした？」

聞くも、ラブレスは茂みの方に走っていく。慌てて追いかけると。

「ここから離れる……!」

「……なにやってるんだ。エヴァンジェリン」

黒いマントに黒い三角帽子姿のエヴァンジェリンがいた。

「ノーチエ、いや、これはその」

顔を赤くして、視線を泳がしている。それで少し分かった。確か、アマトが言っていた。

「ハロウインの予行演習か」

「違うわ……!」

思いっきり否定された。そう言われ確かに、と思う。

「ハロウインは秋だったな」

「そこから離れる……!」

ハロウインではない。ならば何だろうか。

「隠し芸?」

「お前は私を何だと思っているんだ?」

殺気を滲ませながら聞いて来る。私は少し考えて。

「寂しがり屋」

「殺す!!!!!!!!!!」

エヴァンジェリンが真っ赤になって怒鳴るが無視。

「それで?なんでこんな所にいるんだ?」

私が聞くと、エヴァンジェリンは何かを思い出したのか笑みを浮かべる。

「忘れていた。おい、ノーチエ、お前に頼みがある」

「私に出来る事なら、可能な限り協力するが」

そういうと、エヴァンジェリンは何というか『悪役』っぽい笑いを上げて。

「お前の血を貰おうか」

「貧血なんだな」

「だから違う!!!!!!!!!!」

そう叫ぶと懷から試験管を取り出す。中にはなにやら怪しい液体。少し警戒する。即座に謳えるように息を吸い込み。

「待てえーっ!!!!!!!!!!」

「ッ?!」

いきなり横手からの大声で驚く。見てみると。

「僕の生徒に何をする気だ！！！」

杖にまたがったネギがいた。

「やっと来たか」

私は試験管を投げる。

『フリーゲランネクセルマティオー
氷結 武装解除』

試験官が弾け、ネギの服の一部がはじけ飛ぶ。

「おおっ！！！」

ネギは少し驚いたが直ぐに反撃を開始する。さて、どれほどの実力かな？

『魔法の（・）^{サギタ} 射手！！^{マギカ} 連弾・光の（ー）^{セリエス} 9（キ）^ル 矢^ス』

ほう、中々の魔力を込められているな。だが、その程度ならこれで充分。

ニウイス・カースス
『氷爆！！！！』

試験官に入っている魔法液が弾け、魔法の矢を相殺する。だが、少しばかり威力が足りなかったのか、一本だけ相殺されず、突っ込んできた。少し驚くも、障壁で防ぐ。

「成る程。10歳にしては中々の魔力だ。流石は奴の息子だな」

先程の応酬で指が少し切れていた。垂れる血を舐める。

「えっ?!君は僕のクラスのエヴァンジェリンさん!?!」

どうやら、帽子は飛んでしまった様だ。まあ、いずれ分かる事だから気にする事もないか。

「おお！！！！!!」

さつきから煩いな。後ろを振り返ると。

「凄いな、ラブレス。魔法使いというのは本当だったのか。てつきり30過ぎのオッサンだと思ってた」

すっかり忘れていた。そういえば、コイツがいたんだっけ。

「の、ノーマさん。危険ですから離れてください！！!!」

「大丈夫だ。この程度、どうってことはない」

その言葉が癪に障り、懷から試験管を取り出し、投げつける。

『魔法の（・）射手！！氷の（・）17（グラキ）矢』
サギタ マギカ セリエス アーリス

試験官が弾け、17本の矢が放たれる。対するノーチエは余裕の笑みを浮かべて両手を前に突き出す。

『千万華に化して』

光が両手に収束する。呪文？いや違う。これは確か。

『カタルシス 浄穢！！！！』

集束されていた光が氷の矢を相殺する。ノーチエは少し不満そうに声を上げて。

「やはり、この程度か。私『だけ』ではコレぐらいしか相殺できないとは」

そういつて、不機嫌な顔をして腕を組む。

「えっと、ノーマさん。今のは」

「ネギ、お前が今気にする事は私の事か？」

そう言われ、ネギがハツとなる。

「そ、そうでした。エヴァンジェリンさん。なんでこんな事をするんですか？」

そうだったな。優先するべきはネギであり、ノーチエは後回しだ。

私は試験管を取り出す。

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ」

魔法を繰り出し、空を飛ぶ。さあ、追って来い。

エヴァンジェリンとネギが飛び去った。ネギを焚きつけたのは私だが、ナチュラルに無視されるというのは中々辛い物があるな。

「さて、私も帰るか」

「こんな遅くまで何をやっとするかあっ!!!!!!!!!!」

「ギャンツ!?!」

いきなり頭に衝撃が走る。頭を抑えて見上げると、アマトがいた。

「あ、アマト。い、今火花が散った」

「そうか、ほら帰るぞ」

「一人で歩ける!!!!!!!!!!だからはっなっせ!!!!!!!!!!」

結局、襟首を掴まれ、引きづられながら、家に帰った。助かった

のはちゃんと夕飯を用意してくれていた事と、説教をしなかったことぐらいだろうか。何故かアマトの機嫌が良かったのが少し気になったが。そして翌日。

「おはよう、ノーマン」

「サクラコ。私はヒーローではないから、そんな呼び方はやめろ」

「そうだよ。ノーマはこんなに可愛いんだから、そんな色気のないあだ名はなし」

「ええい、抱きつくな。撫でるな、その手の動きを止めろ」

「朝っぱらから楽しそうね」

マドカ、お前はどうか見たら、この光景を楽しそうに見えるんだ？

「というより、桜子。ノーマは既に渾名なんだから、そこから違うのに派生しなくていいの」

「そつえば！……！！」

やっと、気付いたか。それよりも。

「いい加減離せ」

「チア部に入るなら、離してあげるわよ」

「誰が、あんな恥ずかしい格好するか……！！」

「そう？慣れるとあの格好もいいよ」

マドカまで？！くっ、味方はいないのか。

「それ〜に〜、チアの服着たノーマ見たら、山吹先輩何て言うのか気になるし」

その言葉に動きが止まる。本当に何て言うのだろうか。苦笑して「なにをしているんだ？」いやいや、笑顔で「似合ってるぞ」言う筈が無い。だが、もし言われたら。

「ありやりや、効果テキメン？」

「だね」

「ノーマってクールっぽいけど可愛い所あるよね」

はっ、何を考えてるんだ、私は。

「き、却下！却下だ！！！！！！」

「まあまあ、先ずはお試しという事で、明日の放課後、ね？」

渋々、本当に渋々申し入れを受ける事にした。席に着き、隣にエヴァンジェリンがいない事に気付く。

「そういえば、エヴァンジェリンがいないな」

「ノーチエ様」

声の方にはチャチャマルがいた。

「ノーマでいい。なんだ？」

「マスター、エヴァさまがお昼頃に屋上で話がしたいと」

「……………分かった」

何かあるな。面倒だが、行くか。それにしても、今日のネギは元気が無いな。昨日、なにかあったのだろうか。

「ノーマ、お昼はどうする？私達は食堂で食べるけど」

「済まん、今日は弁当を持って来たんだ」

「おお！？それはもしや、山吹先輩が作った弁当！？」

「そうだが？」

「頂戴！！！！！！」

そういつて、飛びかかるミサを避けて、さっさと逃げる。向かうは屋上。

「遅いぞ、何をしていた」

「授業をサボって、此処にいた奴には聞かせん」

というか、自然にチャチャマルがいる。少し込み入った話になりそうなので、ラブレスを預ける。

「それで？何の用だ？ハロウィンの手伝いか？」

「その話から離れる。まあいい」

そう、区切りをつけ、私を見る。

「お前、エディルレイドだな？」

「何だ、それ？」

取り敢えず、とぼける。

「ふん、とぼけても無駄だ。学園長の爺に聞いたら、あっさり答えてくれたぞ」

あの、洋梨爺、何を考えているんだ？

「まあ、心配するな。誰にも言わんさ。その代わり」

「昨日の『仮装エヴァンジェリン』画像を学校に配るな、か？」

そういつて、懐からデジカメを取り出す（操作はアマトが教えてくれた）。そこにはエヴァンジェリンが昨日の三角帽子と黒マントを着ている姿が映し出されていた。

「何時の間に撮ったんだ？！」

「何時の間にかだ。チャチャマル、コレをパパラッチに送るんだ」

「分かりました」

「止める！！！！茶々丸、お前も何故、簡単に了承する」

ゼエゼエと息を吐きながら睨んでくるエヴァンジェリン。私はデジカメを仕舞って。

「まあ、冗談はさておき「本当に冗談か？」……………半分本気」

更に睨んでくるエヴァンジェリン。

「要求はなんだ？^{リアクト}契約なら無理だぞ？後、私の身体も」

「お前は私をなんだと思っているんだ？まあいい。私からの要求は一つだ」

そういつて、これぞ『悪役』という様な笑みを浮かべるエヴァンジェリン。

「私の仲間になれ」

「いいぞ」

即答した。別に断る必要もない。私の言葉にエヴァンジェリンが危うくこけそうになる。

「お前、もう少し悩んだらどうだ？」

「いや、ネギの敵になるというのも面白そうだな。それに洗脳をされて強制的にネギと闘わされ、最後には洗脳を解いてくれたネギ

と共にお前を倒す！！！！浪漫があると思わないか？」

「済まん、その浪漫は分らん。それに洗脳などする気はない」

なに、この浪漫が分らんだと。それに洗脳しないとは、それならラプレスが人質、もとい猫質にされて無理矢理闘わされる、というシチュエーションもいいな。

「それよりも、お前は何者なんだ？魔法使い、というのでは無さそうだが」

「私は吸血鬼だよ」

クツクツと笑いながら答えるエヴァンジェリン。

「吸血鬼とはアレか？満月に向かって吠える奴」

「それは狼男だ！！！！」

真っ赤になって、叫ぶエヴァンジェリン。

「冗談だ。ふむ、吸血鬼か」

此処は本当に飽きない所だな。

「楽しそうだな」

「うむ、なんだか楽しくなってきた！！！」

さて、そうと決まれば弁当を食べなければ、包みを開ける。今

日はハンバーグ（ミニ）とサラダだ。

「ほう、美味そうだな」

そういつて、ハンバーグを一つ取られる。

「おっ！？結構美味い」

「っ？！」

「そんな顔するな。私の弁当を分けてやるから」

そういつと、後ろのチャチャマルが弁当を広げた。中には色取り取りの料理が入っていた。

「仕方ないな。貰ってやるか」

唐揚げを食べる。うむ、美味い。

「だが、アマトには敵わんな」

「ほう、面白い事を言うな。私の茶々丸より美味しい物を作れるだ
と？」

「ああ、僅かだがアマトの方が上だ」

そういつて、笑う。

「ふん、ならば本当にそのアマトという奴が上か、茶々丸が上か、ハッキリしようじゃないか」

「いいだろう。但し、負けたらペナルティを受けて貰うぞ?」

「望む所だ。ならば、明日の夜私の家で料理対決だ!!!」

「いいだろう」

そういつて、同時に高笑いする。絶対にギャフンと言わせてやる。

「という事だ。分かったか?」

「残念だが、分かん」

家に帰ると、ノーマが真剣な表情で「話がある」と言ったので、何だと思ったが。

「料理対決、ねえ」

「不満か?」

首を傾げるノーマ。此処最近、感情表現が多くなっており、非常に可愛い。さておき。

「優劣を競うのは好きじゃないんだ」

ナンバー1よりもオンリー1。有名な歌にもあるしな。

「だが、もう決定事項だ」

「無茶苦茶だな」

苦笑する。まあ、暇でもあるし。付き合うのもいいだろう。

「明日の夜か？」

「そうだ。頼んだぞ」

そういつて、ラブレスと戯れるノーマを見ながら、俺は明日のメニユーを考える。

Re・No:10「吸血鬼とエディルレイド」(後書き)

あるえ、ちょっとバトル書いたら、違うバトルになっちまった作者です。やっと、エヴァ編、ノーマは女子寮じゃないからカモとは会ってません。次回はちょっとギャグっぽい話にしようと思います。

Re・No：11「料理対決」

「おお、結構可愛いじゃない」

「そ、そうか？」

放課後、約束の時間までは余裕があるので、マドカ達との約束『お試しチア部』というのをやっている。それにしても。

「この服はちょっと」

露出が多い、なんかスースーする。

「まあ、慣れれば大丈夫だよ」

正直、慣れたくはない。

「んじゃ、早速フォーメーション教えるからね」

それから、基本的なフォーメーションや踊りを練習した。ちよつと楽しかったのは内緒である。その後、家に帰ってアマトと一緒にエヴァンジェリンの家にやって来た。

「ふっふっふ。待たせたな、エヴァンジェリン！！！！」

「フッフッフ。待っていたぞ、ノーチエ！！！！」

「仲いいな、コイツ等。ああ、茶々丸。昨日はノーマが世話になったな。お詫び、というかお裾分け。実家から送られたんだけど多く

てな」

「ご丁寧にも。では早速、お茶のご用意をしますので、寛いでいて下さい」

そういつて、キッチンに消える茶々丸。後ろでは二人が揃って高笑いをしている。さて、どちらが先に酸欠になるかな？

「お茶の用意が出来ました」

「早いな」

少しして茶々丸が現れた。因みに二人は同時に酸欠になってダブル・Ｏである。今はソファーに少し苦しそうに寝ている。だが、お茶とお菓子が来たと聞き、こちらにやって来る。子供だ。

「おい、アマト。今私を子ども扱いしなかったか？」

「さあ？」

とぼけて、カステラを食べ、紅茶を飲む。家では緑茶を主に飲む（紅茶は来客用。コーヒー、ココアはたまにしか飲まない）ので、カステラを紅茶で飲むというのも面白い。

「ほほう、これはいい品だな」

「そうだろう？」

「なんで、お前が得意げなんだ？ノーマ」

呆れながら、思う。ノーマにとっては友達の家に来た事になるの
だろうか？結構仲良しに見えるし。

「さて、そろそろ調理に掛かったらどうだ？」

「そうだな」

「ん？ああ、そういえば」

そんな用事で来てたな。

「聞いてなかったが、誰が審判なんだ？」

聞くと、二人が同時に手を上げる。頷き、キッチンに向かう。

「茶々丸、ちよいと相談がある」

「何でしょう」

俺が小声で話をする。

「しかし、それでは勝負が」

「俺はそんな勝負するより、一緒に食卓囲んで笑顔で飯食いたいん
だが」

そういつて、笑う。何か思う所があるのか、茶々丸も笑って。

「そうですね。そうしましょう」

そういつて、俺達は調理を開始する。

キッチンから香ばしい匂いがやって来る。

「フッフ、茶々丸が本気を出せば、アマトという奴の料理を超えるぞ？」

「ふふふ、アマトを甘く見るなよ？」

お互いに牽制する。此处で引けば、負ける。そう思ったからだ。

「お前ら、テーブル拭いてくれ」

言われた通り、二人でテーブルを拭く。不思議と調理をしている人間には敵わない。二人でやっているのはテーブルが大きすぎて微妙に手が届かないからである。

「せめて、後五センチ背が高ければ」

「ふん、見苦しいぞ。まあ、私より背が低いのは仕方が無い事だがな」

その言葉に腹がたった。

「ほお、私より背が高いたと？それはお前の方じゃないのか？」

「いい度胸だ。ならば、比べてみるか？」

「望む所だ」

そういつて、向かい合う。

「ふっ、私の方が高いな」

「フッ、どうせ背伸びしているのだろう？小さい女だ」

「小さいのはお前だろう？」

「なに、ドングリの背比べしてるんだ、お前ら」

アマトが大皿を持ってきた。

「「コイツと私、どっちが上か測れ」」

「いきなりだな」

そういつて、ため息を吐きながら、近くにあったメジャーを手に取る。

「さて、一番公平な測り方は」

そういつて、メジャーで頭の上から私とエヴァンジェリンまでの橋を作る。

「おお、見事に同じ身長だ」

「「ふざけるなー！！！！」」

同時に叫ぶ。

「「コイツと同じ身長など考えられん、不正をするな」」

「分かった。分かったからステレオで喋るな。茶々丸」

「なんでしょう？」

幾つかの皿を持ってチャチャマルがやって来た。

「コイツ等の体格を測って、何処が違うか、探しといてくれ。俺は料理を運んでおく」

「了解です」

そういうと、茶々丸は私達をジッと見つめる。思わず生唾を飲み込んでしまう。

「「ど、どうだ？」」

「はい。やはり身長は同じです。ですが、胸のサイズは若干、ノーチエ様の方が大きいです」

くっ、少し悔しいが女性らしい部分が上で何よりだ。

「しかし、ノーチエ様は些かお腹が膨らんでおります」

「なに?!」

「ああ、寝る前のお菓子食い過ぎだな。やめろと言ったのに」

「仕方ないだろう。美味しい物は美味しいんだから」

「フン、ざまあないな」

「ふん、まあ、胸がデカイからそれでいいだろう」

そういうと、エヴァンジェリンが悔しがる。

「結局、ドングリの背比べか」

その『ドングリの背比べ』というのはなんなのだ？

「ほれ、飯が出来たぞ」

運ばれた料理を見て、思わず声が漏れてしまう。テーブルには色々な、それも見た事無い料理が置いてある。そこで、ふと疑問が生まれる。

「「どれが誰の料理だ?」「」

「全部、俺と茶々丸が作った料理だ」

「正確には一緒に作った料理です」

「ということとは」

「この勝負は？」

「元々、勝負する気なんてないから」

「これが一番の安全策です」

「嫌なら食わんで宜しい」

くっ、こんな物を食べないなんて拷問だ。どうする？そう思ってたエヴァンジェリンを見ると。エヴァンジェリンも同じように考えている。

「ふむ、少し味が薄かったか？」

「いえ、コレぐらいが丁度いいかと、アマト様、この料理はどうでしょう？」

「スープにしては少し濃い目だな」

等と話しながら食べていく。素晴らしい料理がどんどん減っていく。

「ああ……………」

その声を漏らしたのはどちらだったか。その言葉を聞いた瞬間、私達は同時に料理を口の中に入れ。

「「美味い！！！！！」」

同時に驚嘆した。それから「これも美味いぞ」「いやいや、此方も負けてない」などと言いながら食事を楽しんだ。

「『『『』』馳走様』『』『』」

その後、アマトとチャチャマルが食事を片づける。私達は食後の一杯を楽しんでいると所だ。

「そういえば、お前が私に協力するのをアイツは知っているのか？」

「そういえば、教えていなかったな」

「何をだ？」

丁度、いいタイミングでやってきたアマトに昨日の昼の事を話す。

「本当、お前は勝手だな」

苦笑しながら答える。まったく、興味本意で敵になるなよ。

「協力はするのか？」

エヴァが聞いて来る。

「まあ、ノーマが決めた事だ。おれがどうのここの言おうと、コイツの意見は変わらないだろう」

そういうと、ノーマが頷く。

「まあ、俺もまだ一般人から抜け出せてない新米以下だし。色々勉強しないといけないな」

「そういえば、エディルレイドがなんなのかも教えていなかったな」

ノーマが思い出したように呟く。そうなのだ。俺もまだエディルレイドを『武器に変身する人間』という認識しか無いのだ。

「うむ、ならばまずはエディルレイドの事を教えるか」

「その後は魔法の事だな」

これは、徹夜で勉強会、かな？

Re-No:11「料理対決」(後書き)

作者です。結構力オスな料理対決にしようと思いましたが、調理側が真つ当な人格者なので断念しました。何時かやりたいな、力オスな料理対決。次回は一般人の天に勉強タイム。お楽しみに。

Re・No:12「説明タイム」

「さて、まずは私達『エディルレイド』から説明するぞ?」

チャチャマルが用意してくれたホワイトボードを背にして、立つ。

「まず『エディルレイド』というのは『武器種族』とも呼ばれる、特殊能力を持った生命体だ。身体を武器に変化させ、人間と一体化したり、サポート等をする。『エディルレイド』は、その力ゆえに貴重な存在とされ、裏では物同然に高額で売買される。外見は私を見た通り、人間とそう変わらない。違いがあるとすれば、身体の何処かにある『核石』エレメンタルを見付けるしかない。他に特徴として寿命が人間より遥かに長い事だな」

「物のようにって。可笑しいだろ?なんで人として扱ってやれないんだ?『エディルレイド』だって俺達と同じように笑ったり、泣いたり、怒ったりするのに」

珍しく、怒気が籠った声を上げるアマトを見て、何故だか嬉しくなる。

「人間とはそういうモノだ。一度武器と、道具と判断したなら人として扱わない。奴隷がいい例だな」

エヴァンジェリンが何かを思い出すように呟く。私は咳払いをして。

「次に『核石』エレメンタルについてだ。コレは『エディルレイド』の命とも言える石だ。割られたり、奪われてしまうと、武器化能力が失われ寿

命も急速に縮まってしまふ。エディルレイドと人間を判別できる、唯一の方法である『核石』の有無だが、外から見えない様に隠している『エディルレイド』が多い。コレは危険から身を守る為でもあり、自分が『エディルレイド』であると隠す為でもある。また『核石』は、身体のだの場所にあるかや、色、形などが種族によって違う。因みに私の『核石』の場所は秘密だ」

「だろうな」

「別に俺は気にしないけどな」

呆れた風なエヴァンジェリンの笑みと、アマトの無邪気な笑みを見て少し胸が暖かい。

「続いて『真名』だ。『真名』とは『エディルレイド』が持つ本名の事。通常『エディルレイド』は愛称を名乗って、本名は隠すんだ。私の場合は愛称が「ノーマ」であり『真名』が「ノーチエ・プリマム」となる。まあ、3-Aの奴らは私の『真名』を知っているが、問題ないだろう。では何故『真名』を隠すのか、それは『真名』を知られると封印されるからだ」

「封印？」

頷き。

「『エディルレイド』を封印する為に『封煌符』と呼ばれる特殊な布を使う。普通の『エディルレイド』ならこれだけで充分だが、訓練された者となると『真名』を知らなければ通用しない」

「なんで封印なんかするんだ？」

「恐らく、売買する時、暴れない様にする為だな？」

「そうだ。次の話に行くぞ？次は『七煌宝樹』。これは『エディルレイド』の中でも、極めて貴重な一属だ。世界に七つしか存在せず、他の『エディルレイド』よりも高い能力を持っている。詳しくは私も把握していない為、省く。次に『同契』^{リアクト}だ。これは『エディルレイド』と人間が一体化する為に結ぶ契約の事で、その後の一体化の行為も含まれる言葉だ。『エディルレイド』は、一人の人間としか『同契』できず、契約者が死なない限り、『同契』は解除されない。その為、『エディルレイド』を狙ってくる輩は先に契約者を狙う。だから、もし私を狙ってきた奴らがいたら気をつけるよ？」

「了解」

険しい表情で頷くアマト。

「次に『同契者』^{ブレジャー}の説明だ。『同契者』とは『エディルレイド』と『同契』した人間の事で、他にも『武器種族使い』、『使い手』とも呼ばれる。ここから戦闘関連になるからしっかり聞いておけ。『契約者』に大切なのは、『エディルレイド』との親密度。シンクロ率が高ければ高い程、攻撃はスムーズになっていく。また逆に、契約中に信頼関係が崩れただけで、能力に影響が出る事もある。故に初契約で上手く闘えないのは、シンクロ率が低いからだ。『同契者』に求められるのは『エディルレイド』への理解だ」

「成る程、深く理解しあえば強くなる、か」

「少し、難しいな」

当たり前だ。簡単に理解出来るなら苦労はいらん。

「次に『謳』だ。『謳』とは『エディルレイド』が持つ特殊能力の事だ。『同契者』と『エディルレイド』が『同契』する時に『エディルレイド』がうたう『同契の謳』、技を発動させる『同契者』と『エディルレイド』がうたう『朋誦の謳』、『エディルレイド』が一人でうたう『響応の謳』の三種類が存在する。『同契者』は、事前に『エディルレイド』から謳を教えてもらう必要があるが、シンクロ率が高まった場合、『同契者』が知らない『謳』をうたえる事もある。また長くうたう『謳』はそれだけ技の威力も強力になる」

「成る程、そこは魔法の呪文と似ているな」

「けど、長くうたうだけ、無防備だよな。いつそのこと動きながらうたうか？」

「それでは舌を噛みます」

呑気だな。咳払いを一つして気を取り直す。

「次に『属性』だ。『属性』とは生まれた時から『エディルレイド』に宿っている、能力や種類の特徴の事だ。現在では18種類の『属性』が解明されており、理論上では後6つの『属性』が存在すると言われている。また『属性』の力には優劣があり、この力関係は4つのグループに分ける事が出来る」

ホワイトボードにリングを4つ書く。

「先ずは『ファースト・グリタリング第一煌環』、『地』は『風』に、『風』は『火』に、『火』は『水』に、『水』は『緑』に、『緑』は『智』に、そして『智』

は『地』に強い、といった感じで一周する。

次の『第二煌環』も、『美』は『音』に、『音』は『盾』に、『盾』は『剣』に、『剣』は『愛』に、『愛』は『虚』に、『虚』は『美』に、という風になっている。

セカンド・グリタリング
サード・グリタリング

次の『第三煌環』も同様に、『光』は『闇』に、『闇』は『動』に、『動』は『静』に、『静』は『生』に、『生』は『死』に、『死』は『光』に強いとなっている。

フォース・グリタリング

最後の『第四煌環』は現在研究中で、リングでない可能性も秘めている。そして煌環が判明していない『属性』は『陽』、『月』、『門』と存在する」

「結構、多いな」

「少し頭が痛くなってきた」

「此处で軽く問題だ。私の属性である『光』はどの属性が闘いやすく、どの属性が闘いにくい？アマト答える」

「『闇』が闘いやすく、『死』が苦手」

正解だ。こんな短期間で正確に答えるのは凄いな。

「私達『エディルレイド』の説明は以上だ」

「では、次に魔法の説明をしてやる。まあ、その前に十分ほど休憩を入れるぞ」

エヴァンジェリンがさういうと、チャチャマルと一緒に部屋を出る。別に部屋を出なくても、いいだろうに。少しアマトを見る。アマトは真剣に何かを考えている。

「なあ、ノーマ」

「な、なんだ？」

少し驚きながら聞く。アマトが凄く真剣な顔で。

「明日の朝食、何がいい？」

ずっこけた。そりゃあ、もう盛大に。しかも外に出ていたエヴァンジェリンも同じようにずっこけて部屋に入ってきた。

「「今の話を聞いて、言う事はそれだけかぁー！！！！！！！！！！」」

同時に叫ぶ。アマトは物凄く驚いている。

「なんか、反応するべきだったか？」

「「当たり前だ！！！！！！！！」」

エヴァンジェリンがアマトに向かって指を指しながら。

「お前は、さっきの説明を聞いて、ノーマに対して何か言う事がないのか？」

「別に。さっきの説明を聞こうが、聞くまいが俺にとってノーマの見方は変わらんからな」

「ど、どんな見方だ？」

聞く。アマトは笑って私の頭を撫で。

「お前がなんであろうと、俺の家族だというのは変わらないよ」

その言葉に茫然として、頭を撫でられ続ける。

「お前、もう少し違う見方は出来ないのか？」

「ノーマは俺の家族であり、大切な『人間』だ。それは変わらない」

『人間』と言われ、顔を上げる。

「私が『人間』？」

「俺にとって、『人間』の定義は感情表現が出来る奴だ。だからお前も吸血鬼のエヴァンジェリンもアンドロイドの茶々丸も俺にとっ
ちや『人間』だ」

そういつて、笑うアマト。私は手を振り払って、背を向ける。

「ふ、ふんっ！……お前は本当に『お人好し』だ！……」

自分でも声が震えているのが分かる。頭を撫でられる。

「そういう事だ。もしかして、今の話を聞いて俺がお前を怖がると思
ってたのか？」

凶星である。

「安心しろ。まかり間違っても、俺がお前を怖がるなんてないから」

「……………本当だな？」

不味い、泣きそうだ。

「本当だ」

後ろから抱きしめられる。

抱きしめた瞬間、ノーマが泣き始めた。多分、今まで溜めた不安が無くなった所為だろう。俺は無言で抱きしめてやる。

「私達はいない方がいいか？」

「いや、泣き終わった後大変だから此処にいてくれ」

ノーマが泣き終わり、エヴァにかかわれた後、エヴァから魔法の事を詳しく教えられた。魔法は『エディルレイド』みたいに複雑ではなかったため、比較的簡単に覚えられた。そして説明が終わり、気が付くと夜中になっていた。泊っていけと煩いエヴァを丁重に断って家に帰った。

Re・No:12「説明タイム」(後書き)

どうも、作者です。書店で探していた物が見付かり、テンションがハイのまま、執筆しました。やっと買えました『エレメンタルジエレイド』アルティメットガイド』何処にもなくて、どうしようか毎回悩んでいましたが、これにて一件落着。それにしても、書いていて分かるのですが、エディルレイドの属性って多いですね。これ考えた東先生は素直に感動します。

ノーマの心配を何のその、天の回答はとても愛情溢れる物です。因みに天視点だとノーマは『ちよっと、我が儘な妹』という感じです。さて、この二人に恋愛させようか、それとも他のキャラと恋愛させようか、悩み処です。次回はネギ達が茶々丸襲撃(原作と少し違うかも?)です。お楽しみに

Re・No:13「襲撃」

「やはりクレープは外で食べた方が美味しい！！！！」

「やれやれ」

学校からの帰り道、ノーマに捕まると早速、クレープを奢らされた。ノーマは満面の笑みでクレープを頬張っている。そんなとき。

「ん？アレはネギと神楽坂か」

「む？」

目の前、数メートル先で物陰に隠れている二人を発見した。

「なにやつ、むぐっ！？」

声を掛けようとしたら、ノーマに口を抑えられる。

「馬鹿者。今私達は敵同士なのだぞ？声を掛けてどうする？」

「そう言われてもな。しかし、あの二人はなんで隠れているんだ？」

前の二人が移動を始める。ふと、その先には見覚えのある人物。

「茶々丸？」

「成る程、不意打ちでチャチャマルを仕留め、エヴァンジェリンを空腹にさせて弱らせる作戦だな」

「微妙に違う気がするけど、まあいい。どうする?」

そういうと、ノーマはクレープを平らげ、ニヤリと笑い。

「決まってるだろう?不意打ちには不意打ちでお返しだ。アイツ等がチャチャマルを襲っている時に横合いから思いっきり殴る!!!」

そういつて、高笑いするノーマ。ここ最近、ノーマが変わった。いや、これが素なんだろうか?というか、頬にクリームがついていと迫力が半減だ。というより可愛い。

「ちよつと動くなよ?」

「む?」

頬のクリームを拭ってやる。

「それでは行くぞ!」

「へいへい」

張り切るノーマの後ろを付いていく。

本当にいいんだろうか。確かにエヴァンジェリンさんや茶々丸さんを放っておくと僕が危険だ。けど、その為に自分の生徒と闘うなんて。それに野良猫に餌を与えるなんて、茶々丸さん、凄くいい人（ロボット？）なのに。

「アニキ！！今がチャンススヨ！！！！！」

肩に乗ったオコジヨのカモ君が促す。本当にこれでいいのかな。

「おお、始まったぞ！！！！！」

「分かったから、もう少し静かにしろ」

なんでこんなテンションが高いんだ？そう思いながらネギ達の闘いを見る。神楽坂の身体に薄い光の膜が現れたと思ったら、凄い勢いで茶々丸に接近した。そのまま、殴ると思ったらデコピン。

「そろそろ私達の出番か？」

「そうだな」

そういつて、立つ。そして立つ事によって視点が上がり、ある物が見えた。

『魔法の（・）射手！！』
サギタ マギカ

アスナさんの攻撃を捌いていると、横から十一本の光の矢が飛んでくる。今なら回避も間に合う。

「ですが」

後ろを振り返る。

「避けてはいけませんね」

楯になるように立つ。すると、目の前からやってきた光の矢を別方向から来た光が打ち消す。

「えっ！？」

ネギ先生が驚いている。光がやって来た方向を見ると。

「クッククク、ハッハッハッハ、ハアーツハッハッハッハッハッハッ！
！！！！！！！！」

高笑いするノーチエ様と呆れてため息を吐いているアマト様が立っていた。

ノーマが笑い終わるのを待ってから聞く。

「なんで高笑いなんだ？」

「悪役の登場には高笑いと相場が決まっている」

ああ、確かにエヴァも高笑いするな。

「やいやい！！！テメエらは何者だ！！！！！！」

声が聞こえるが、姿が見えない。姿を消す魔法だろうか。

「姿は見えぬが、声は聞こえる。おのれ、姿を見せぬ卑怯者め。さつさと出て来い」

「お前、人の事言えないだろう？」

「何の事だ？」

うわゝ、暴君だ。

「オレッチは此処だ！！！！！！」

と、ネギの頭に白い獣（多分、オコジヨだろう）が現れる。それ

を興味深そうに見つめるノーマ。

「ほう、何時の間に腹話術を覚えたんだ、ネギ？」

「オイラは別に人形じゃねえ！！！！オコジョ妖精だ！！！」

「まあ、それは置いといて」

「置いとかれたっ？！」

俺はため息を吐きながら喋る。

「ネギ、俺は別にお前の行動を責めたりなんかしないからな」

「え？」

怒られると思ったのだろう。ネギが驚いている。確かにネギの行動は決して褒められた事ではない。だが、ネギにとってはこれを選ぶしかなかったのだろう。エヴァの話聞く限りでは、別に命までは取らない、と言ってはいたが、そんな事をネギは知らない。だからこんな行動を起こしたのだろう。

「戦いは最後に生き残った方が勝ちだからな。お前の行動は正当な物だ。けどな」

茶々丸の後ろ、捨て猫だろうか、段ボールの中に猫が数匹いた。

「あつ」

「もう少し、周りを見た方がいいぞ？」

そういつて、俺はなにか企んでそんな顔のノーマを引っ掴み。

「んじゃ、俺らは帰るわ。茶々丸もあんまり遅くなるとエヴァが心配するぞ？アイツ、お前の料理に依存してるから」

「分かりました。では、ネギ先生。また明日」

「離せ、これから私が考える限りで、ネギに精神的ダメージを与えようと考えていたのに」

喚くノーマを引きずりながら家に帰る。さて、茶々丸は今日の事をエヴァに報告するだろうか？

Re・No:13「襲撃」(後書き)

どうも、悪役の基本は『高い所から主人公達を見下ろして高笑いしながら現れる』と考えている作者です。今回は予告した通り、茶々丸襲撃。といっても、内容が薄いので、短いですが。原作を見ながら思っのですが、やっぱりネギは凄く正直ですよ。不意打ち、奇襲、騙し打ち、等々『試合』というゲームの枠組みでは卑怯と言われますが、実際の『戦争』では当たり前ですよ。こと『戦争』において『平等』や『正々堂々』なんて言葉皆無です。先ず、体格からして違う。互いの武器や性能が違う。戦力差が違う。けっして一対一ではなく多対多なので、不意打ち、援護による銃撃。こんな中で『正々堂々』なんてアホらしい、と作者は思います。まあ、漫画の主人公なんて『正々堂々』真っ向から闘うモノが多いですから仕方ありませんが。因みにこの作品のネギはエヴァ戦から色々戦法が変わります。原作より、畏や『卑怯』と取られる行動を取らせてみたいかと(ネギファンの皆様すみません)、考えるかぎりではエヴァ戦で使った捕縛結界。アレをもう少しイジッてみようかと思えます。

では、長々と付き合って貰い、ありがとうございます。次回の更新をお楽しみに

Re・No:14「ノーマの土曜日」

「ほら、もっと足を上げる」

「これ以上、上げたら見えるだろう!？」

「いいの、見せて大丈夫な物履いてるでしょ?それに見せた方が盛り上がるわ!!!」

「ほら、桜子みたいに豪快なポーズを!!!!!」

「いゝやゝ!!!!!」

今日はサッカー部の練習試合。なんやかんやで私はチア部に入部した。今は恥ずかしいのを我慢しながら応援している。というか。

「お前ら!!!!!!!試合に集中しろっ!!!!!!!」

サッカー部の奴らは皆、私達に注目している。くそっ、こうなるなら止めておくべきだった。

「恥ずかしい?」

「当たり前だ!!!!!!!」

「慣れると気持ちいいよ!!!!!!!!!」

「慣れたくない!!!!!!!!!」

そんな事を言いながらも踊る。ううう、習慣って怖い。

「頑張れー！！！！」

「負けるな」

「ノーマ、もっと声を上げて。悔しいけど、皆ノーマに大注目だから」

「嬉しくない」

そんなこんなで、試合が終わるまで応援を続けた。

「やっと、終わった」

「おつかれ。はい、ポカリ」

差し出されたスポーツ飲料を飲む。

「それにしても、今日は疲れたね」

「なんか、皆ノーマが叱る度に笑顔で頑張るよね」

「そのせいで私達も応援したけど」

「な、なんだ？私の所為か！？」

なんか、三人が私を見つめる。

「あ！！いた」

声の方を見るとアスナがいた。

「あれ？どうしたの、明日菜」

「ああ、うん。御免三人とも、ノーマ借りていい？」

「別にいいよ。今日はもう終わったし」

なにか深刻そうな顔のアスナに付いていく。

「何の用だ？」

「素直に聞くけど、アンタと山吹先輩はネギの敵？」

腕を組んで聞いて来るアスナ。そういえば、ネギと同室だったな。

「ああ、敵だ。この前の桜通りの後でな。エヴァンジェリンからスカウトされた」

「なんで？！ネギは酷い事されてるの！？」

クツクツク。上手く動揺しているな？

「実は、な。エヴァンジェリンに『従わないならラブレスの命は無いぞ』と脅されて仕方なく」

「えっ？」

おお、驚いている。そしてなんだか気まずそうに視線を逸らすア

スナ。

「そうよね。ネギと結構仲が良いアンタ達だもん。無理矢理なら納得できるわ」

「けどよく。あの時、高笑いしながら現れなかったか？」

アスナの肩からあの白くて細長くて毛むくじやらのモノが出てきた。甘い、その程度の反論など予測済みだ。

「それはな、エヴァンジェリンの命令を無視できない様に暗示を掛けられたらしいんだ。しかも、直接脳に働きかける物だから何をしようとも、疑問に思わないんだ」

「くっ、なんて酷い奴なの！！！！！」

「くっ、外道なんて言葉じゃ足りねえ！！！！！！！」

ハッハッハ！！！！！！上手く騙された様だな。いやはや、私の話術も捨てた物ではないな。まあ、何故かアマトには勝てないが。

「よし！！！！安心してノーマ。私達が絶対、ラブレスを取り戻してあげるから！！！！！！！」

「あ、ああ。頼む」

あれ？なんか戦意が上がってるな。これが『敵に砂糖を送る』か？

「あ、そうだ。ネギが何処にいるか知ってる？」

「いや、私はさっきまでチア部にいたから」

「そっか、そうだね。んじゃ、またね」

土煙を上げながら走るアスナを見送る。

「さて、戻るか」

今日は三人と『カラオケ』という所に行くのだ。娯楽の為にうたうのは苦手だが、興味あるからな。

「お邪魔するよ」

「お邪魔します」

「お前らな、もう少し遠慮しろよ」

今更な言葉を言いながら、丁度焼き上がったパンケーキを持ってくる。それだけで、目の前の少女二人は瞳を輝かせた。次いで、紅茶を付け加えると瞳に加えて、輝かんばかりの笑みを浮かべる。こっぴどく見ると歳相応の少女何だが。

「で？今日はなににきたんだ？まだ夕飯には早いだろう？」

「ングッ？そうでした。すっかり忘れてました」

「まったく、こんな美味しい物が出るから忘れるんだ」

ほほう、いい度胸してるな。

「パンケーキはいらないみたいだな」

そういつて、皿を下げようとする。

「仕事の話だよ。だから皿を下げないで」

少し涙目で喋る龍宮が可愛いと思ってしまう。それを誤魔化す為にため息を吐きながら向かいに座る。

「仕事？警備員か？」

「はい、『大停電』の日に召集が掛かります」

明々後日『大停電』という学園全体の電子機器をメンテする。イベントというか行事がある。

「暗闇に乗じて、つてか？」

「まあ、そんな所だね。詳しい事は私達も知らない」

「生徒には知る必要はなし、か？」

「少なくとも、生徒を闘わせてるのですから、それはないでしょう。単に忘れてるだけだと」

「あの爺さんの事だから否定出来んな」

そういつて、軽く笑う。何時の間にかパンケーキは無くなっており、二人の視線が俺を射抜いている。その瞳は期待に満ち、且つ、子供のように輝いている。俺はため息を吐いて。

「確か、この前買った団子があつた筈だから、持ってくる」

そういつて、皿と紅茶を下げる。流石に団子と紅茶は合わないかな。

「いやあ、それにしても天さんの家に行くと幸せになれるね」

「そうだな。ノーマが羨ましいよ」

「いつその事、ウチの子になるか？」

「冗談で言つたのだが、思いのほか二人が真剣に考え出した。

「うーん、流石に天さんを『兄さん』と呼ぶのはちょっと抵抗があるね」

「嫌ではないんですけど」

「冗談だつたんだが」

そんな話をしながら、用意した団子を食べ始める二人。コイツ等が来ただけで家のエンゲル係数は凄い事になるんだが、まあ、気にしない。

「ただいま」

暫くしてノーマが帰って来た。少し声がおかしい様な。

「ああ、疲れた」

そういつて、鞆を投げ、ソファーに飛びこむノーマ。

「カラオケか。見事に喉が嚙れてるな。ほら、着替えて来い」

「うう」

無理矢理立たせて、部屋に行かせる。鞆の中にあるチアガールの服を洗濯籠に入れ、喉にいい飲み物を作る。

「うん、手慣れてるね」

「一緒に住めば自然に慣れるさ」

そういつと、着替え終わったノーマがやってきた。

「ほら」

「うむ」

喉を鳴らしながら豪快に飲み干す。そして二人に目が合うと談笑しながら、団子を食べ始める。

「夕飯は「頂きます」だよな」

苦笑しながら、夕飯の準備をする。あの二人もたまに来るならもつと歓迎したいのだが（今でも十分か）何せ、週四で家に来るからな。無駄に紅茶や緑茶を美味しく淹れる事やお菓子を作るスキルが異常に上がるのだ。嫌じゃないのだが、出費が。

「そろそろ爺さんに仕送りしてもらっかな」

でも、爺さんの事だから「店の手伝いをしろ」って言い出すんだろ。そんな光景を頭に浮かばせながら、ため息を吐く。本当、俺ってば前途多難だな。

Re・No:14「ノーマの土曜日」(後書き)

どうも作者です。今回は間の日常編。時期的には茶々丸襲撃から次の日(まあ、会話文見れば一目瞭然ですけど)の話ですね。因みにノーマは無事(?)チア部に入部。そして練習試合でデビュー。これからもチア部との絡みはありますので、お楽しみに

Re・No:15「果たし状と風邪」

「ええっ?! ノーマさんとエヴェンジェリンさんが風邪! ?」

エヴァンジェリンさんと闘う決意を昨日の朝に決め、早速『準備』をして、果たし状を渡そうとしたのですが。休みなのは仕方ないですね。

「でも、ノーマさんも休みなのか〜大変だな」

「それならお見舞い行ってきたら?」

追い付いてきたアスナさんがそういう。

「成る程」

納得する。やっぱりお見舞いに行った方がいいですね。

「ふっふっふ、風邪などお前に感染^{うつ}してゴホッ! ! ! ! !」

「はっはっは、ざまあ無いなノーマゴホッ! ! ! ! !」

「お前ら、『安静』という言葉を知らんのか?」

なんで俺まで仮病扱いで学校休まなきゃならんのだ？確かにノーマからラブレスを守る為に遠ざける必要があるが。

「おい、飯はまだか？ゴホッ」

「早くしろ。ゴホッ」

ええい、この我がまま姫どもが！！もう少し待ってなさい。これでも食べやすく消化にいいお粥作ってるんだ。

「ほら、出来たぞ。ゆっくり食べよ？」

お粥を食べ始める二人。

「んむ、やはりアマトのご飯は美味しいな」

「そうだな。食べたなら眠くなった」

「此处で寝るなよ。って寝やがった」

ため息を吐きながら、二人を担いで一緒の部屋に『隔離』する。

「さて、面倒だが看病するか」

先ずは服を脱がし、濡れタオルで汗をしっかりと拭く。その後、新しい服に着替えさせる。そして風通しを良くする為に窓を開ける。次にこまめに水分補給をさせる。汗を多く流さないと治りが早くないからな。

「アマト」

「なんだ？」

ノーマが呼ぶ。

「クレープが食べたい」

「風邪を治したら食べような」

そういつて寝かせる。

「私はアップルパイを」

「分かったから寝ろ」

二人を寝かせる。結構元気だな。この分なら午後には元気になってそうだ。

「ん？」

部屋を出ようと立ちあがるもノーマに腕を掴まれて動けなくなっていた。起きているのか、と思ったが、寝ている様だ。

「しょうがないな」

苦笑しながら床に座る。まあ、起きるまで待つのもいいだろう。

「ただいま戻りました」

天さまに頼まれた買い物を済ませ、家に戻る。ですが、誰もいません。

「天さま？」

マスターの部屋に入ると天さまがいました。

「今までの恨みだ」

「おお、面白い顔になっているな」

マスターとノーマさまに悪戯されていました。しかも、完全に熟睡しているせいで、されるがままです。

「お前もやってみろ」

「え？でも私は」

「いいから、主の命令だ」

マスター、卑怯です。渋々、起こさない様に頬を引っ張る。天さまの顔が変わり、面白い。

「お、へえ、おおっ！！！！！」

「チャチャマル？」

「凄い楽しそうに引っ張ってるな」

此処を引っ張ると、こうなるんですね。では、こっちは？鬱陶しそうに唸る天さまが可愛い。そして瞳を開けた天さまと目が合った。

「あ……………」

そこで、やっと自分がやっている事に気が付いた。ゆっくりと両手を上げ、親指で人差し指を抑え、私の後ろにいる二人の額にデコピンを喰らわした。

「いっつつつつつつたあああああーっ！！！！！！！！」

「ぬあああああーっ！！！！！！！！」

ベチンツ、と痛々しい音と共にお二人が転げまわる。天さまが立ち上がると二人の襟首を掴み、猫のように持ち上げ、ベッドに放り投げる。天さまは欠伸を一つした後。

「病人は寝てろ」

そういつて、部屋を出て行きました。

「うゝ、何なんだアイツは」

「なんで、茶々丸だけやられないんだ？一番楽しんでいたのは茶々丸だろ？」

多分、病人であるお二人が遊んでいるからでは？私は後を追うように部屋を出た。その時に二人に振り向いて。

「安静にして、速く治さないと天さまが困りますよ？」

そういつて、注意したが、案の定。

「「分かった。もっと困らせる！！！」」

満面の笑みで返される。

「それで？なんでネギがエヴァの家を家捜ししているんだ？」

「えっと、そんなんじゃないですね。僕はエヴァンジェリンさんに果たし状を」

「果たし状？」

「はい！！！！！！」

嬉しそうに『果たし状』と書かれた紙を見せる。

「ふうん」

「あゝ！？駄目ですよ。返して下さい」

何とか果たし状を取り戻そうとするネギの頭を右手で抑えて果たし状を流し読んでから丁寧に畳んで返す。

「こんな事せず、今からエヴァを倒せばいいじゃないか。アイツなら風邪でダウン中だぞ？」

「え？そんな。吸血鬼が風邪を引くなんてありえないですよ」

笑って流すネギ。

「その通りだ」

視線を上げると、エヴァが危なげに階段の手すりに座っている。息が荒いのは動いて熱が上がったせいだろう。

「私が風邪ごときで倒れると思ったら大間違いだ」

俺はエヴァに気付かれない様に近づき、腕を振り上げて。

「ギャンツ?!」

ゴツンツという音と共にエヴァの頭を殴る。涙目で見上げるエヴァを無視して襟首を持ち上げる。

「まったく、まだ体調が悪いんだから寝てろよ」

「は、離せ!!!!!!今から坊やを血祭りに。ていうかい加減、こ

の扱いを何とかしろー！！！！」

そのまま、エヴァを部屋のベッドに放り込む。

「ネギ、後任せた」

「へ？」

「今から俺と茶々丸は薬貰ってくるから、その間、二人の看病頼むな」

「え？二人って、ええー！？」

困惑するネギを置いて、外に出る。外には既に茶々丸が待機していた。

「いいのですか？」

「ネギなら大丈夫だ。元から人が良いから寝込みを襲うなんてまず無いだろう」

「いえ、マスターたちの事です。口ではああ言ってますが。二人とも、天さまの介護が嬉しい様で」

「だからだよ」

茶々丸が少し意外そうな顔をする。中々可愛いもんだな。俺は笑って。

「アイツ等に少しお灸を据えてやらないとな。何時までも俺が甘や

かす訳ないさ」

「意地が悪いですね」

茶々丸の言葉に笑う。

「まあ、茶々丸の事が心配なのもあるがな」

「え？」

「だって、昨日の今日だろ？それに女性の一人歩きは結構危ないからな」

そういつて、茶々丸の頭を撫でる。

「えっと、その。ありがとうございます」

「うし、行くとするか」

「はいっ」

元気のよい茶々丸の声と共に街へと歩き出す。

Re・No:15「果たし状と風邪」(後書き)

どうも、作者です。今回は風邪を引いた二人に甲斐甲斐しく(?)世話を焼く天。そして眠った天に悪戯する茶々丸です。え?ネギはおまけですよww次回茶々丸とデート&二人の我が伧姫に翻弄されるネギです。お楽しみに

Re・No:16「デート? 我が仮姫二人」

「あの、天さま。重くないですか?」

「大丈夫だよ」

茶々丸が心配そうに覗きこむ。俺は笑って答える。

「あの二人の事だから、元気になったら何か作れって言うからな」

「それでこの荷物ですか?」

茶々丸が買った物を見る。野菜、肉、魚、果物から色々な素材がスーパーの袋が両手から下がっている。

「まあ、少し多かったけど、問題なし」

「そうですか」

安心したように微笑む茶々丸。そういえば、茶々丸とは何度か会ったりしているが、ちゃんと話した事なかったな。

「なあ、茶々丸はノーマの事どう思ってる?」

「ノーマさま、ですか?」

茶々丸は意外そうに、そして少し残念そうに聞き返し、少し考える。

「そう、ですね。マスターの友人。いえ、どちらかというと同類でしょうか？喧嘩したと思えば、次の日には直ぐに仲良くなりましたし。意見が割れる事もまずありません」

そういつて、茶々丸が楽しそうに二人の共通点を話します。脱線したな、と考えるが、面白いので黙って聞く。というより、茶々丸よ。自分のマスターをノーマと同等って。まあ、どちらも超！！我が俤姫だから確かに同類か。

「こんな所でしょうか。どうかしました？」

「いや、意外と楽しそうに話すんだな〜って」

そういつと、恥ずかしいのか顔を伏せる。

「私も少し聞いていいですか？」

「ん？構わないけど」

そういつと、嬉しそうに笑って。

「じゃあ、天さまの話を聞かせてください。ご実家の事とか、子供の頃の話とか」

「あんま、面白くないぞ？」

「それでも聞きたいんです！！！」

真剣な表情に驚きながらもそんな表情が可愛いと思ってしまう。

「分かった。でも、流石に立ち話もなんだからもう少し落ち着いた所に行こうか」

そういつて、歩き出した。

「そういつて、はぐらかさないで下さいね？」

「分かってるよ」

何だろうが、今日の茶々丸は積極的だ。

「お腹空いた〜!!!」

「は、はい。確か此処にアマトさんが残したお粥が〜」

「喉乾いた〜!!!」

「待つて下さい!!!」

冷蔵庫から程良く冷えたスポーツドリンクを取り出し、お鍋に残っているお粥を温めて持つていく。

「お〜そ〜い〜!!!」

「はやく〜!!!」

「あう、何で僕が」

言われた通り、二人にお粥とスポードリンクを渡す。けど、お二人はジツとお粥とスポードリンクを見つめて。

「飽きた」

「え？」

「飽きた」

二人が手足をバタつかせる。危なく床に落ちそうになったお粥を掴む。底の部分を。

「熱っ!? あっっ!!」

急いで机にお粥を置く。瞬間、スポードリンクのボトルが飛んできた。

「わあっ?!」

ギリギリでキャッチ。

「チイツ!!!!!!」

心底、悔しそうに舌打ちする二人。あれ? 僕って何しに來たんでしたっけ?

「どこから話すべきか」

「では、ご実家の事から」

あれから天さんがはぐらかさないか心配でしたが、少し大きめの公園に来てちゃんと話してくれています。

「実家は着物とか和服を扱っている店だ。その跡取りになるのかな、俺は」

「結構、裕福な家庭なんですね」

そういうと、少し唸る。

「どうだろうか、そんな感じの生活はしなかったな。もの心ついた時から、着物の着付け方とか、料理の作り方とか、日常生活の作法やったりしてたな」

「充分、裕福だと思いますよ」

苦笑する。

「他には、ないんですか？子供の時とか」

そういつと、天さまの顔が少し赤くなる。多分、恥ずかしい思い出なのだろう。

「あるんですね？」

「ない」

そういつて、そっぱを向く天さま。そうまでされると聞きたくありません。

「教えてください」

「ダメだ」

何か思い出したのか頬が少し赤い。これは益々聞かなくてはいけませんね。

「はあゝ、やっと寝てくれました」

そういつて、椅子にだらしく座る。ああ、今姉さんがだらしないって言った様な。

「ううゝ、やめろゝ。サウザウンドマスター」

エヴァンジェリンさんがうなされている。父さんの夢を見ているのだろうか。

「アマト、それだけは許してくれ」

ノーマさんもうなされている。不謹慎だけど二人がどんな夢を見ているのか凄く気になります。

「あう、気になるなあ」

頭の中に変なテロップが出てきた。

どちらの ゆめを みますか？

エヴァンジェリン

ノーマ

「エヴァンジェリンさんにしよう」

父さんの事も気になるし。僕はエヴァンジェリンさんの横に立って、呪文を唱える。

「どうしても、駄目ですか」

「駄目だ。それに俺の昔話なんて面白くない」

あれから公園を出て、街をぶらつきながら、しつこく聞く。本当は早く帰ってネギ先生を手伝わなければと思うが、何故だか天さまと二人で話していたいと思う自分がいる。

「それは、聞いてみないと分かりません」

「それでも、話したくない」

絶対に私と視線を合わせない様にしながら歩く天さま。やはり嫌なのだろうか。けど、諦めません。

「なんでそこまでして聞きたいんだ？」

「天さまの事をもっと知りたいからです」

そういうと、驚いたように天さまが振り向く。何をそんなに驚いているのでしょうか。今の言葉を少し反芻する。天さまの事をもっと知りたい、それではまるで。

「茶々丸？」

「あ、えっと、今のは言葉のあやです。その、別に深い意味はあり

ません！！！！」

「そ、そうか」

少し驚きながら頷く天さま。

「……………帰るか」

「はい」

その後、家に帰ると全回復したマスターとノーマさまに苛められていたネギ先生を見付けました。

「勝手に夢を覗きおつて、覚悟は出来ているんだろうな？」

「手を貸すぞ、エヴァンジェリン。仮にとはいえ、私はお前と協力関係だからな」

「あつゝ、天さゝん。なんで助けてくれないんですかゝ！！！」

「自業自得だ」

「では私は夕食を作りますので」

そういつて、キッチンに向かいます。後ろからネギ先生の悲鳴が聞こえましたが、優先するべきは夕飯の支度です。

Re・No:16「デート? 我が俤姫二人」(後書き)

どうも、作者です。『エヴァ風邪をひく』も終わり、次回は決闘です。戦闘シーンはちょっと自信ありませんが、自分が納得するまで頑張りたいと思うので、期待しててください。

Re・No：17「開幕 大停電の決闘」

「蠟燭買った？」

「バッチリだ」

放課後。豪徳寺と山下の会話を聞きながら思い出す。そういえば今日は年に二回ある大停電の日だ。

「確か、八時からだったな」

「どうした？ 蠟燭でも買い忘れたか？」

「それもあるけど。ちょっとな」

そういつて、苦笑する。ふと、外を見ると見慣れた奴がいた。俺はゆっくりと鞆を持って立ち上がる。

「もう帰るのか？」

「ああ、蠟燭と夕飯の買い物もなくちゃいけないしな」

そういつて、皆と別れる。俺は外、校門前で仁王立ちしている奴を見て苦笑する。

「何してるんだ？ ノーマにエヴァ」

「遅いぞ」

「お前、今日は大事な日だから早く帰ってこい、という言葉をお忘れなのか？」

不機嫌、一目見てそうだと分かる顔の二人。どうやら学校が終わってから此処ですっと待っていたらしい。

「んじゃ、ケーキを食べながら作戦会議するか」

「早く行くぞ!!!!!!!!!!!!」

先程の表情とは一変、輝かんばかりの笑顔を浮かべる二人を見て更に苦笑する。

その後、エヴァの家で自作したケーキを振るまう。

「天さまはこういうのが好きですね」

「ん？まあな」

そういつて、幸せそうにケーキをパクついている二人を見る。

「さて、作戦会議だな」

「む？そうだったな」

エヴァが思い出す。

「事を起こすのは午後八時だ」

「大停電と同時刻か」

「そうだ。そして大停電と同時にお前達が坊やを私の所に連れて来るんだ」

「そこで、お前らが戦闘開始か？」

「そうだ。最強の魔法使いと言われた私の実力を坊やに見せてやる」

そういつて、高笑いする姿は正に『悪役』だ。頬にクリームが付いていて台無しだが。そしてノーマはお代わりを目で訴えている。ため息を吐きながら、ケーキを切り分ける。

「む？こら、ノーマ。二個目なんてズルイゾ！！！！」

「お前も貰えばいいだろう。なあ、アマト」

「ちゃんと用意してあるから大丈夫だ」

「それならいい」

そういつて、笑顔で二個目のケーキを食べ始めるエヴァ。さて、夕飯の準備でもするか。

「前祝いだ。酒の摘まみも用意しろ」

「デザートで我慢しろ」

飲めない訳ではないが、酔っ払いの相手は面倒なんだ。

「豪華な物を期待しているぞ」

「はいはい」

「お願いします」

「はいはい、って茶々丸。手伝ってくれないの?！」

振り向くと、二人と一緒にケーキを食べている。あれ?お前って料理食べたの?

「はあ、分かった。けど出てきた料理に文句言つなよ?」

半端な料理は出せないな。そう思って、調理を開始する。
夕飯を終えて、時計が午後の八時を指す。俺はそれを確認して立ち上がり、横にいるノーマを見る。

「時間だな」

「ああ、行くぞ」

「その前に」

ノーマの頬に付いている食べ残しを拭いてやる。

「む、御苦労」

「お前な」

呆れ、そのまま大浴場に入る。中には茶々丸と女性。そしてよく中等部で見かける仲良しの四人組。何故か、彼女達がネギを誘き寄せたようで、俺達は全く仕事をしていない。

「時間通りだな」

妖艶。その言葉が当てはまる女性だ。俺は呆れながら。

「どうしたエヴァ？大人に見られて欲しいお年頃か？」

「違うわアホ！！！！雰囲気だ。雰囲気！！！！！！」

幻術を解き、元の姿になったエヴァが吠える。そこでようやくエヴァだと気付いたノーマが手を叩く。

「面白い魔法だな。私にも使えるのか？」

「なんに使う気だ？」

「当然、大人の姿になって、世にいる男どもの性欲を駆り立てよう
と思っている」

「それも面白そうだな」

コイツ等、アホだ。ため息を吐く。

「まあ、今回はお前達の出番は無い」

「じゃあ、なんで呼んだんだ？」

「それはだ。最近、私の為に尽くすようになった執事に褒美をやる
うと思つてな」

「執事って俺の事か？」

「お前以外に誰がいる？」

殴りたい。でも、後にしよう。

「で？褒美ってのは？」

「お前達。コイツの相手をしてやれ。停電が終わるまでな」

「「「「はあくいつ」「」「」」」」

元気のいい声と同時に襲いかかる（比喻じゃなくて本当に襲いかかって来た）四人。それを避け、又は勢いを利用して、風呂に投げ込む。

「いきなり何すんだコラアツ！！今の受けてたら確実に死んでるわ！！！」

「なあ、私にはなにか無いのか？」

「ノーマは私と坊やの闘いを特等席で見るとういづのはどうだ？」

「面白そうだ」

俺の話は無視か！？すると、茶々丸が近づく。助けてくれるのか、そう思っていたら。

「えい」

嬉しそうな掛け声でロープを取り出し、笑顔で両腕と両足を縛りやがった。

「うおっ!？」

そして浴場に放り投げられる。そうしてからペコリと頭を下げて。

「どうぞ、ごゆっくり」

ゆっくり出来ねえよ!!!!!!!!!!そう言おうとしたら、四人組がゾンビのように俺に群がって来る。ヤバイ。マジでヤバイ。何とていうか貞操の危機!？

「そろそろ坊やが来るな。アマトがいるとややこしくなるから、離れるぞ」

「私は隠れてる」

おい、コイツ等をなんとかしろ!!!!

「エヴァンジェリンさん!!!!!!」

「よく来たな坊や」

大浴場にエヴァンジェリンさんと茶々丸さんがいた。

「パートナーはどうした？一人で来るとは無謀だぞ？」

「そんな事より、まき絵さんは何処ですか？」

そういうと、エヴァンジェリンさんは可笑しそうに笑って。

「他人の心配が出来るとは余裕だな。安心しろ、アイツの催眠は解いておいたよ。今頃は部屋で寝ているさ」

その言葉に安心する。そして懷から魔法銃を取り出す。

「ほう、魔法銃とは珍しいな」

「確認します。エヴァンジェリンさんが勝つたら、僕の血を吸い取り。僕が勝つたら、父さんの情報を教えて貰います」

「まあ、坊やが私に勝つというのは無理だがな」

その言葉を聞いて、魔法銃を窓に向かって発砲。ガラスを破壊する。

「む？」

いきなりの行動に軽く驚いているエヴァンジェリンさんを置いて杖に乗り、外に出る。

「いきなり、逃げるとは。確かに此処は狭く、障害物も多いから闘いにくい」

だが、外に出てだけでは何も変わらないぞ？

「行くぞ茶々丸」

「っ！？お待ちをマスター！！！」

「？」

そこで一旦止まる。瞬間、割れた窓から魔法の矢が複数飛んできた。

「チイツ！！！」

だが、甘い。障壁で防御する。

「少しは楽しめそうだな」

外に飛び出す。坊やは大浴場からかなり遠い位置で飛んでいた。どうやら最低限の誘導だけさせて自分は距離を置く戦法を取るようだ。

「クッククック、考えているじゃないか」

これは予想以上に楽しめそうだ。

「はい、先ずは服を脱ぎましょう」

「その前にこの縄を解かないと脱げないんだが」

「それもそうだね」

「じゃあ、縄を外しますね？」

四人がそれぞれ足と腕の縄を外す。縄が外れた瞬間、四人に力の限り、拳骨を入れて気絶させる。

「『『『『キュ』』』」

痛い。無理に頭殴るんじゃないで、腹にすれば良かった。まあ、一般人と甘く見られてもらっては困る。

「あの四人組というのは結構、体力使うからな」

ノリが体育会系、通越して超人系だからな。まったく、努力と根性論は嫌いじゃないが、程度があるだろう。

まあ、それよりも床で寝ているコイツ等をどうにかしないと。

「運ぶにしても一人ずつだな」

そういつて、近づくとも一人足りない。何処だと思っていると後ろから抱きつかれた。背中になんか柔らかい物が当たる。

「先輩の匂い。お日様の匂いと同じだ」

「離れろ」

腕を剥がそうとするも、剥がれない。そういや、こいつら半吸血鬼になっているんだっけ、どうするべきか。

「山吹先輩」

「はあ」

ため息を吐くと同時に気絶していた子も起きる。どうやら逃がしてくれないらしい。怪我だけはさせない様にしなくては。

「そろそろ、どうした」

エヴァンジェリンさんの攻撃を魔法銃で凌ぐ。そろそろあの場所だ。後ろを向き、まだ追い付いてないのを確認する。そして懷から瓶を数個放り投げ、素早く呪文を詠唱する。

「大気よ 水よ（アーエール・エト・アクア） 白霧となれ（ファクタ・ネブラ） 彼の者等に（フィク・ソヌム） 一時の安息を（ブレウエム） 眠りの霧！！」
ネブラ・ヒュプノーテエイカ

瓶が弾け、白い霧が視界を遮る。

マークシマクケレラティオー
「最大加速！！！！」

一気に加速して、目的の場所に到達する。

「距離は開いてる。今の内に」

最終調整だ。

「ふう」

何とか全員、気絶させる事に成功。もう、面倒だからこのまま放置しよう。大浴場から抜け出し、外に出る。

「……………帰るか」

「帰るな！！！！」

後ろから跳び蹴りと共にノーマの突っ込みが襲いかかった。

「さっさと行くぞ」

「お前、もしかして置いてけぼりに「いいから、行くぞ！」はいはい」

でも、何処にいるか、分からない。そう思っていたら、橋の方で何かが光った。

「分かりやすいな」

間に合うかな？

「成る程、眠りの霧を目くらましに自分は距離を取る。そして私は呪いで学園の外に出られない。それを上手く利用して此処に来たのか。中々せこい事を考えるじゃないか。だが、ここまでだよ」

そういつてエヴァンジェリンさんが歩いて来る。どうやら僕にはもう、何も出来ない。もしくは何かしたとしても、叩き伏せられる自身があるのだろう。エヴァンジェリンさんがその場所に足を置く。

突然、足元が光り、魔方陣が浮かび上がる。そして光が私達を縛る。

「これは捕縛結界！？」

「はい。ですがそれだけではありません！！！」

坊やの言葉と同時に私達の左右から地面とは異なった紋章が現れる。瞬間、身体が痺れる。

「これはっ?!」

「これは僕のオリジナルの結界呪文『雷の紋章』です。対象の動きを電撃で阻害させます。ただ、阻害させるだけなので威力は全然ありませんが」

そういつて、地面に手を置いて始動キーを呟く。すると、雷の紋章から紫色の球体が幾つも出てきた。一目見ただけでかなりの魔力が籠っている。

「これも僕のオリジナル。『雷の紋章』で相手を動けなくしてから、これで仕留める。見て分かる通り、これは魔力の塊です。しかも、制御が難しく暴走しやすい物です」

その言葉を聞いて、嫌な考えが頭をよぎる。坊やの顔は（自分では気付いてないかもしれないが）あの時浮かべていたナギの笑顔と

同じだ。

「これでチェックです」

そういつて、坊やは杖に跨り、距離を取る。何とか抜け出そうと力を入れるが、身体が痺れて思うように動けない。

「くっ、やるじゃないか」

此処まで考えついているとは。成る程、最初からこれを狙って魔力を極力使わない様にしていたのか。そう考えた瞬間、視界が白に染まった。

Re・No:17「開幕 大停電の決闘」(後書き)

どうも、作者です。今回はアスナが来るまでの話。書いていて思いました、結構無理矢理な気がするな。あ、元ネタはディシディアの皇帝さまで。OPの奴ね。持ちキャラも皇帝さまで。トラップを置いて、障害物の陰に隠れて「いんせき」ばっかやってますwwwでは次回がエヴァ編ラスト。お楽しみに

Re・No：18「決着 大停電の決闘」

ゆっくりと橋の上に降りる。エヴァンジェリンさんがいた場所は濛々と煙が立ち込めてよく見えない。

「よしっ！……！」

拳を握る。これで倒せはしないまでも幾らか傷はついている筈だ。

「ネギ……！！！」

「アニキ」

アスナさんとカモ君がやってきた。

「大丈夫、ネギ？」

「アニキ、今の爆発つてもしかして」

僕が頷く。カモ君が絶句する。アスナさんは僕と後ろにある煙を交互に見て、ため息を吐く。

「ねえ、もしかして援軍いらなかったんじゃない？」

「いえ、援軍は有難いです。まだエヴァンジェリンさんも倒れてないと思いますし」

「アニキ、それは考え過ぎだぜ？あんな大爆発だ。まず無事じゃないぜ」

「カモ君。樂觀過ぎだよ」

「その通りだ。坊や」

その声が聞こえた瞬間、背中に衝撃が走った。

ふう、流石にあの爆発は堪えたな。障壁を茶々丸の方に回し過ぎた所為だな。

「無事か、茶々丸」

「はい、ですが脚部をやられたので戦闘は無理かと」

ふむ、だが問題あるまい。そう思っていると先程氷の矢で貫いた坊やが風となって消える。やはり囷か。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精（ウエニアン
ト・スピリトウス・グラキアーレス） 大気に満ちよ（エクステン
ダントウル・アーエーリ） 白夜の国の（トウンドラーム・エト）
凍土と氷河を（グラキエーム・ロキー・ノクティス・アルバエ）
クリュスタリザティオー・テルストリス
こおる大地！！」

フルグラティオー・アルピカンス
「白き雷！！！！」

上から降って来た雷を氷の一撃で迎え撃つ。さっきの魔法で魔力を少なからず使っているのに、これほどの物を撃てるとは。

「成る程、囿で私を紛らわして、その隙に止めか。十歳にしては抜け目ないな」

「色々と勉強しましたから」

そういつて、笑う。すると懷から小さな結晶を取り出した。

「それは魔力の増強剤か？」

「はい、どんなに魔力があっても、相手は最強の魔法使い。これぐらひは用意しませんと」

そういつて、結晶を砕く。流石に奴の息子だな。

「面白いな。なら、少しは本気を出してやろう」

コレを使うつもりはなかったんだがな。

「っ！？ラス・テル マ・スキル マギステル」

何か感じ取ったのか、急いで詠唱する。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い（ト・シュン
ボライオン）我に従え（ディア・コネート・モイ・ヘー）闇の女
王 来たれ（エピゲネーテート）とこしえの（タイオーニオン）
えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリュスタレ）！！！！」

！・バシレイア

クリュスタリネ

ロコース・ウンブラエ・レーゲナンス

「影の地統ぶる者 スカサハの（スカータク）我が手に授けん（イン・マヌム・メアム・デット） 三十の棘もつ（ヤクルム・ダエモニウム） 愛しき槍を（クム・スピーニス・トリーギンタ）」

スタグネット

コンプレクシオサレメントウム・プロ

「固定！ 掌握 魔力充填」

私が行った事に何か感じ取ったのか、右腕に掲げた雷の槍を構える。だが、少しだけ遅かったな。

ヤクラーティオー・フルゴリス

「雷の投擲！！！！！」

飛んできた槍を目にしながら笑う。悪いな、坊や。私の勝ちだ。

アルマティオーネ

ニブルヘイム

「術式兵装 『極寒牢獄』！！」

轟音と共に『雷の投擲』が弾かれ、橋の外に吹き飛ばされる。

「え？」

エヴァンジェリンさんを見る。

「ふふ、まさか此処まで楽しめるとはな」

美しい金髪は冷たい水色に変わり、身体は不健康に青白い。だが、そんな容姿とは裏腹にその姿は一つの彫刻の様に美しい。

「さて、何処まで耐えられるかな？」

ゾクツと背筋が寒くなり、反射的に屈む。瞬間、今まで頭があった場所にエヴァンジェリンさんの腕があった。

「ほう、よく避けたな」

余裕の笑みを浮かべながら、腕を振る。風圧と冷気が同時に襲いかかる。

「くうっ！？」

「そら、反撃しなければ死ぬぞ？」

エヴァンジェリンさんが腕を振るう度に小さな氷塊が襲ってくる。それを必死に避けながら呪文を詠唱する。

「闇夜切り裂く（ウーヌス・フルゴル） 一条の光 「コンキデンス・ノクテム」 我が手に宿り
て（イン・メア・マヌー・エンス） 敵を喰らえ（イニミークム・エ
ダット） フルグラティオー・アルピカンス 白き雷！！！！！！」

坊やが魔法を放つ。が、難なく弾く。今の坊やではこの程度だろう。コレを使っただのは大人気なかったかな？

「いけません、マスター！！！」

茶々丸の言葉を聞いた瞬間、街の方で明かりを見付けた。時間切れ？瞬間、私の身体を痛みが襲う。

「くあっ！？」

そのまま、落下する。不味いな、人間の状態で落ちたら、死ぬ。それに私泳げないし。来る衝撃に目を瞑る。

「とつとと」

軽い衝撃の後に聞きなれた男の声が聞こえた。

「つたく、こんな時間に身投げとは。吸血鬼はやる事が違うな」

「天……………」

見ると、ノーマと同契した天が私を背中に乗せて器用に飛んでいる。

「茶々丸、ちゃんと受け取れよ」

そういうと、私を背中から降ろし、両足に引っ掛けると、勢いを付けて蹴り飛ばした。

「んなあゝっ！！！！！！」

そのまま、茶々丸の方に飛んでいき無事、キャッチされる。そして降りてきた天に向かう。

「殺す気が、貴様！！！！！」

「生きてたんだから別にいいだろ？」

「結果オーライ、だ！」

ノーマの言葉を聞き流し、同契を解いた天の胸に飛びかかり、揺らす。だが、天の言葉と同時に頭突きを貰い、地面に転がる。それを見たノーマが笑い転げている。

「なにが可笑しいか。アホノーマ！！！！！」

「何だと、このバカエヴァ！！！！！」

目の前で、小動物が戯れているのを無視しながらネギに近づく。

「おう、派手にやられたな。ネギ」

「アマトさん。どうして？」

取り敢えず、何か言いそうなネギに、傷を突いて黙らせる。その後、腰のポーチから小さな救急箱を取り出す。

「小さな傷で良かったな」

「痛いです！！！」

抗議を上げるネギを無視して、治療を続ける。

「ほい、出来たぞ」

「あ、ありがとうございます」

ネギの頭を撫でて、今度は喧嘩している小動物に近づく。

「ふむ、どうしたものか」

二人の喧嘩はヒートアップして言葉では止められそうにない。

「仕方ない」

消毒液の蓋を開ける。そして。

「それ」

二人に降りかける。丁度、傷が出来た場所に消毒液が当たったのか、二人が悲鳴を上げて転がる。

「ほら、二人とも帰るぞ？」

そういつて、エヴァを茶々丸の方に投げ、ノーマを担ぐ。

「お前らもさっさと帰れよ」

そういつて踵を返す。

「ちょあっと、待ちなさい！！！！」

やっぱり素直に行かせてくれないようだ。

「なに？」

「さっきの羽は何？なんかノーマになったけど。ていうか、その『説明するの？』ていう顔止めて！！！！」

「姐さん、落ち着けて」

明日菜が喚いている。個人的にはさっさと帰って寝たいのだが。

「ネギも知りたいのか？」

「え？はい」

何とか答えたネギだが、かなり疲れている。

「また今度な。今すぐ説明が必要か？」

「え？あ、いや別に今すぐじゃなくていいわね」

「んじゃ、明日な」

そういつて、歩き出す。結局骨折り損のくたびれ儲けである。俺、来る意味あったか？

Re・No：18「決着 大停電の決闘」（後書き）

どうも、作者です。原作より早く『雷の投擲』を使えるネギに。原作ではまったく使わなかったエヴァの『闇の魔法』。名前はオリジナルです。とにかく、エヴァ編も終わり、次回からいよいよ京都編。さて天はどうやって京都に向かうのか、お楽しみに。

Re・No：19「父親の話」

「なあ、なんで私がお前と一緒にカフェでコーヒーを飲んでいるんだ？」

「コーヒーではなくカフェオレだ」

「どちらも同じだろう」

昼休み、珍しくエヴァから昼食を誘われ、ついて行くと此処に付いた。

「まあ、サンドウィッチを食べただけでいいだろう」

「サンドイッチだ」

「どちらでもいいだろう。今日は珍しくアマトが弁当を作らなくてどうしようかと思っていたのだから」

そういつて、卵サンドを頬張る。ほお、美味しいな。

「まったく、少し聞きたい事があつてな」

「聞きたい事？」

エヴァが頷く。

「前々から気になっていたんだ。お前達、エディルレイドは「あ、エヴァンジェリンさんにノーマさん」ちっ、間が悪い」

言葉の方に目を向けると、ネギとアスナが立っていた。

「こんにちは、エヴァンジェリンさん」

「ふん、お前と気易く挨拶する仲になった覚えはないぞ？」

「マスターはこういつてますが、その実、喜んでいます」

「誰が喜ぶか！！！！」

チャチャマル、何時の間にいたんだ。

「それで？何しに来たんだ？」

「えっと、父さんの事を聞きに来たんです」

「後、ノーマが何者なのかもね」

「おい、坊や。あの時、言った言葉を忘れたのか？確かに坊やが勝てば奴『千の呪文の男』サウザンドマスターの事を話すと言った。そして私はそれに同意したが、私は坊やに負けた覚えはないぞ？」

「でも、アマトさんが助けなかったらあのまま、河に落下して僕の勝ちでしたよ？」

「それはどうでもいいだろう？」

「別にいいじゃない。ちゃちゃっと教えてあげなさいよ」

「アスナ。情報と言う物は簡単に渡す物ではないぞ?」

「何だよ?」

振り向くアスナに指を立てて、教える。

「情報は共有するよりも、独占した方が自分に有利なんだ。だからおいそれと他人に教えられるものではない」

「でも」

「まあいい。奴の事は私も多くは知らん。私の知っている情報は公式発表された物と同じでそれ以上は知らん。私の呪いもいつか解いてくれる、という約束だったが、今となっては叶わなくなつた。まあ、だからといって奴に対して怨みごとを言うつもりはないがな」

そういつて、私を見る。

「え?でも、ネギ」

「はい、ちょっとおかしいです」

「何がだ?」

「六年前、僕父さんにあつたんです。父さんの杖もその時に貰いました」

身を乗り出して、喋るネギ。その言葉に一瞬呆けたエヴァだが、ゆつくりと笑みを浮かべる。

「そうか、奴は生きてるのか。ハハハハ！！そうか」

嬉しそうに笑う。それからカフェを出て教室に戻る。

「まあ、まだ生きていると決まった訳ではないがな」

「でも、手掛かりはこの杖だけなんです」

「京都に行ってみる。一時期、奴が拠点にしていた場所がある筈だろう。そこに行けば、なにか手掛かりがある筈だ」

「京都、か」

「どうかしたの？」

アスナが聞いて来る。

「いや、アマトが前に言っていたのだが、京都に実家があると言っていたのだ」

「山吹先輩の実家？どんな所？」

「いや、そこまでは聞いてないんだ」

私の言葉にアスナが興味が無くなったのかネギと話し始める。

「でも、丁度良かったのでは？」

「ん？」

「来週に控えている『修学旅行』の行き先は京都ですので」

その言葉に私とネギの声が重なった。

放課後、授業が終わり、夕飯の買い物を終えて、帰っていると携帯が鳴った。

「ん？」

画面には『爺さん』と映っていた。爺さんが俺に連絡なんて珍しいな。

「もしもし」

『おう、天か。久しぶりじゃな』

相変わらず、歳を感じさせない声だ。本当に九十超えてんのか？

「どうしたんだ？爺さんが電話なんて」

『なに、久しぶりに孫の声が聞きたくなっただけじゃよ。それでどうじゃ？学校の方は』

「充実してるよ」

ノーマのお陰で。

『そうか、それでの。来週一杯空いておるじゃろ？』

「いや、学校なんだが」

『ふむ、そうか。ならワシから近衛門に頼んでおくかの』

「待て、爺さん。なんで俺が実家に戻らないといけない」

そついうと、爺さんは一拍置いて。

『寂しいんだもん』

「切るぞ」

『ワシが悪かった。なに、店の方でお手伝いさんが一人急に出来なくなつての。代役が必要になつたんじゃ』

「それで、俺に白羽の矢がたつたわけか」

『そついう事じゃ。頼めるかの』

俺はため息を吐いて。

「爺さんの頼みだ。断る訳にはいかないだろう」

『うむ、お主の様な孫を持てて、ワシは幸福者じゃ』

電話を切り、家に帰る。すると、ノーマが居間で唸っていた。

「どうしたんだ？」

「アマトか。大事な話だから、よく聞いてくれ」

何時になく、真剣な表情に俺もついつい対面に座る。

「修学旅行って何だ？」

取り敢えず、ノーマの額にデコピンする。転がりまわるノーマを放って『修学旅行』と書かれたしおりを見る。そして行き先を見て固まる。

「よりもよって京都か」

「どうした？」

ノーマが額を擦りながら聞いて来る。即座に肩に手を置いて。

「いいか、ノーマ。俺の実家に行くな」

「なん「いいな？」「あ、ああ」

首を楯に振るノーマに満足して俺は台所に行く。その時、ノーマがニヤリと笑っているのに気付かなかった。

電話が鳴り、取る。

『久しぶりじゃな。近衛門』

懐かしい声だ。

「おお、まだ生きておったのか」

『そう、邪険にするでない。別にあの時の事を責めに來た訳でもない。それにアレはワシにも責任がある』

やはり気にしているのか。幼馴染の言葉に少しだけ昔の事を思い出す。

「それで、どうしたんじゃ？」

『なに、来週一杯天を貸して貰おうと思ったんじゃ。こちらの手伝いが一人減つての。その代わりじゃ』

「それだけか？」

『それだけじゃ』

なにか企んでいる訳ではなさそうじゃな。

「分かった。じゃが、いきなり生徒一人を休ませるのも。変じゃな。病欠にするか」

『そうじゃな。風邪で充分じゃろ』

それから暫く昔話で盛り上がり、書類仕事が出来なかったのは内緒である。

アマトはもう寝ているだろうか？ベッドの上で横になりながら、昼間のエヴァンジェリンの言葉を思い出す。

「お前達、エディルレイドは同契した場合、同契者は死なないと再度同契出来ないと言っていたな？では何故、天と同契したんだ？自分がエディルレイドと分からせる為なら核石を見せるなり、他に方法があつただろう？」

それは私にもよく分からない。見ず知らずの私を警戒せずに世話してくれたアマトに警戒心が薄れた。確かにそれもある。だが、それだけでは同契しなくてもいい。では何故か、それは、多分。

「アマトが私に似てたから？」

何処が、とは分からない。だが、何故か似ていると思ったのだ。アマトは『同類』だと。どうして、こんな事を思ったのか私にも分からない。そんな事を考えながら、私はゆっくりと眠りについた。

Re・No:19「父親の話」(後書き)

どうも、作者です。今回はちょっと短めです。今回は何故、ノーマが簡単に同契したか。何人か、こういう感想を頂き、丁度いいから書くか。みたいな感じで書きました。何故、同契したのか、という詳しい事はちゃんと考えていますが、どうもこじ付けに近い感じで悩んでいます。いつその事、ご都合主義にしたいですが、作者はご都合主義が嫌いなので、出来ない。まあ、これはじっくり、ねっとり考えて書こうと思います。次回は旅行の一つ前、チア部、天、ノーマが原宿に行きます。ご期待下さい。

「やつほー!!!いい天気!!!」

「本当よね」

休日、ノーマの付き添いで原宿にチア三人とやってきた。椎名が元氣一杯の声を上げ、横にいる柿崎が同意する。

「ほにゃらば、早速、カラオケ行くよ。目指せ、九時間耐久!!!」

「よっし、歌っちゃうよ!幾らでも」

「「くらくら」

俺と釘宮が二人を諫める。ノーマはそんなに原宿が珍しいのか、あっちいたりこっちいたり、変な男に絡まれないか心配だ。

「おっと、そこのお嬢さん。俺とあそばっ?!!」

思った通り、ナンパしてきたナイスガイ(笑)の顔面を蹴り飛ばし、よく分かってないノーマの襟首を掴む。

「なにをするか」

「アホ、当初の目的を忘れてどうするか?少しは釘宮を見習え」

そういつて、釘宮達を見ると、釘宮達は『ゴージャクレープ』を食

べていた。

「ほう、面白そうな味だな。よし、私も見習って一つくれ!!!」

ため息を吐きながら、クレープを食べて、苦いと叫んでいる奴らを眺める。嗚呼、今日は買物出来ないな。

「先輩、先輩」

「ん？」

柿崎が手招きしている。何故か、皆隠れている。

「どうしたんだ？」

「馬鹿者。早く隠れろ」

仕方なく、電柱の近くにあるマスコット人形の後ろに隠れる。小さなマスコット人形の後ろに隠れる女子中学生四人と男子高校生一人。シニールだ。気にしない方がいいな。そう思って、四人が見ている方を見ると。

「ネギと近衛か」

ネギと近衛がショッピングをしていた。中々いい雰囲気である。

「こ、これは」

「もしや」

「デ、デート!？」

「二人が、か？」

「さあ、どうだろうな」

そういつて、二人を見る。なんか違和感が。ショッピングはいんだが、品のチョイスがちょっとな。

「どうした？」

「ん？なんか買おうとしてる物が変わってる」

「そんな事はいつでもいいの!!!!今はこの大スクープを知らせてなくては」

そういつて、携帯を取り出す柿崎。そんな柿崎に呆れていると、視線を感じた。それとなく、周りを見てみると、珍しい人物がいた。

「桜咲……………」

桜咲が物陰に隠れて様子を見ている。なんか、無駄にピリピリしてる様な気がする。取り敢えず放置。触らぬ神に何とやらだ。

「やっぱり、デートだね？」

「かなりいい雰囲気」

「どうする？」

「へい、そこのお嬢さんたばっ?！」

なんで、こう沸くかな?さっきからあっち行ったり、こっち行ったりしているノーマを三人の所に持つていく。

「んじゃ、やりますか」

「何をだ?」

「チアリーダーとして!!!!」

「二人の恋を!!!!」

「全力で!!!!!!」

「!!応援するのよ!!!!!!」

元気だな。ノーマは面倒くさそうな顔をしているが、三人に無視されている。これは俺も手伝わなくちゃいけないんだろうか?

「ちょーっと、待ったー!!!!!!」

柿崎の携帯から大音量が響いた。待て、携帯ってそこまで音出せたか?

『3-Aのクラス委員長として命じます!!!!先生と生徒の不純異性交遊は絶・対・厳・禁!!!!!!断固阻止ですわ!!!!!!柿崎さん、釘宮さん、椎名さん、ノーマさん、そして近くにいる山吹先輩!!!!あの二人が必要以上に接近しないように見張って下さい!!!!!!よ・ろ・し・い・ですわね?』

「『『『は、はい！？』』』」

凄い迫力だな。というより雪広よ。なんで俺がいると分かった？

「仕方ないね。じゃあ、正体がバレないように変装をば」

取り敢えず、往来で着替えを始めたアホ三人とエアガンを取り出し、笑みを浮かべているノーマに拳骨入れておく。

「アイタ」

「あう、山吹先輩の拳骨。嬉しいのやら哀しいのやら」

「柿崎、アンタもうダメね」

「なにするか、アマト」

「お前らな、もう少し場を弁える場を。着替えるなら人がいない所で着替えて来い。それと、ノーマ。直接的な妨害はなしだ」

それから変装した三人と一緒にネギと近衛のデート(?)を見守る。といつても見守っているのは俺だけで、他の四人は思いつきり妨害して楽しんでいる。俺はというと、そんな四人に呆れながら、俺達の後ろで隠れている桜咲を見ていた。そういえば、桜咲は近衛の護衛だと言っていたな。だけど、護衛者がちゃんと護衛していない様に見えるんだが、意味があるのか？

「先輩」

「ん？ああ」

「どうやら、移動するようだ。まあ、俺には関係ないか。こういうのは本人が何とかしないとイケないし。」

「で？何時まで続ける気だ？」

「今日一杯！！！」

「取り敢えず、柿崎に拳骨を入れた後、四人の襟首を引っ掴む。」

「ほら、お前らは修学旅行の準備で来たんだろ？」

「ちょっと待つて。今凄く大変な所なんだから」

「大変？」

「四人から手を離して二人の方を見ると、近衛がネギを膝枕していた。」

「ネギの奴、はしゃぎ過ぎたのかな？」

「くう、このかの奴、羨ましいわね」

「彼氏にやらせてあげれば？」

「なに言ってるの。あんな奴とつくに別れたわよ。それに子供を膝枕するっていうのがいいんじゃない」

「膝枕がそんなにいいのか？」

「お前は毎日やってるから珍しいとは思わないか？」

「「「えっ!？」」「」」

「「「こらアマト。それは内緒だと言ったじゃないか!?!?!」」」

「「「内緒!？」」「」」

「「「う、いやその癖になってしまつてな」」」

「「「癖!？」」「」」

「どんどん、墓穴を掘っていくノーマが面白い。取り敢えず、近衛がこっちに気付いていたので、こっちから近づく。」

「おっす」

「あゝ、天さん。どないしたん？」

「いやな、最初はノーマ達の買い物に付き合う筈だったのに、何時の間にか目的が変わったんだ」

「そういうと、近衛は朗らかに笑つて。」

「天さんがいても、駄目なんか？」

「最近、俺の対応に慣れた所為か、普通の突っ込みじゃ効果が無くなつてきてな」

「ほんなら、トンカチ使う？」

「いや、俺が使ったら洒落にならんから。使うとしたらコレだろう」
そういつて、さっき買ったハリセンを取り出す。

「おお、本格的やな」

「そついや、ネギと一緒に買い物してたけど、何してたんだ？」

「ああ、コレ？コレはな」
「コラ」
「ほえ？」

声の方を見ると、神楽坂と雪広が走って来た。

「もしかして、天さん？」

「柿崎が連絡したのは雪広だけだと思ったけど」

二人がやって来る。同時にノーマ達もやってきた。

「こ、こここのかさん、ネギ先生に膝枕など、私がしたいですわ！
！！！！！！」

いや、話題そこじゃないだろ。

「あちゃ、もしかしてバレテしもつたんか？」

近衛がそういつと、ネギが起きる。

「あ、アスナさん。ど、どうしたんですか！？」

「どうやら、バレテもったみたいや」

「ええっ！？そうなんですか」

取り敢えず、誰か説明してくれないか？ノーマなんか頭の上に出
来た？マークに齧り付いてるし。

「う~~~~ん、こうなったらしゃあないな」

「そ、そうですね。一日早いですけど」

そういつて、ネギがポケットから箱を取り出す。

「はい、アスナさん。4月21日の誕生日おめでと~~~~ございます」

成る程、今日の買い物はコレか。俺は釘宮達が神楽坂にプレゼン
ト（二人を妨害した時に買った様だ）を渡すのを呆れながら見守る。

「む、私は何も用意していないぞ」

「俺もだ。まあ、明日ケーキ作って渡せば大丈夫だろう」

「そだ。これから皆でカラオケ行かない？誕生日祝うのにさ」

そういつて、椎名が俺を見る。いい度胸してやがる。まあ、神楽
坂の誕生日を祝う為なら構わないか。

「仕方ないな」

「「「やったあゝ!!!!」」」

「い、いいんですか、先輩」

「大丈夫、大丈夫。割り勘だから」

「へ？奢ってくれるんじゃないの？」

世の中、そんなに甘くないよ。

Re・No:20「原宿 応援少女隊+ 出撃!!!」(後書き)

どうも、作者です。今回は神楽坂の誕生日プレゼント編です。こういう、どつきりはいいですね。作者も大好きです。勿論驚かす側ですけどwwww次回はようやく修学旅行。さて、戦闘能力自体は素人の主人公は闘い抜けるのか?原作キャラも出ますよ。お楽しみに

Re・No：21「初めての修学旅行」

「アマト、起きろ」

「何だよ。まだ家出る時間じゃないだろ？」

目を擦りながら起きるアマトを見下ろしながら、話す。

「早く、朝食の準備をしろ。私はお腹が減っているんだ。後、一人で待つのは詰まらないからついでに起こした」

すると、アマトの目がスッと細くなり、ベッドの下から白い何かを取り出す。

「アマト？」

瞬間、スパーン、という音と共に頭の上で衝撃が走った。

「なにをするか……！」

「まったく、朝っぱらから騒々しい奴だ。少し待ってろ、支度するから」

そういつて、アマトが部屋から出る。私も暇なので部屋を出て、アマトを追う。

「アマト、京都とはどんな所だ？」

朝食を作っている最中、後ろからノーマが質問してくる。京都ね。

「そうだな。景色がとても綺麗な場所だ」

「他には？」

朝食を作る傍ら、ノーマの質問に答える。朝食を持っていく頃には子犬の様にウズウズしていた。

「京都。楽しみだ。なあ、ラブレス」

「猫は連れていけないぞ？」

俺の言葉に絶句するノーマ。

「大丈夫だ。世話は俺がしてやるから」

そういつて、笑うもノーマは不機嫌そうに頬を膨らます。

「さ、そろそろ時間だろう？」

「む、そうだったな」

そういつて、二人で食べる。その後、自分の荷物を持って、ラブ

レスと一緒に玄関で待つ。

「む、見送りか？」

「ああ、一人でちゃんと行けるか心配だからな。駅まで行く事にした」

そういつて、一緒に駅まで向かう。

「楽しみだな」

今日は待ちに待った修学旅行。行き先は華の京都。どんな所なんだろう。

「アニキ、浮かれてる所悪いんだけどよ。大丈夫なのか？京都には関西呪術協会の妨害があるって話しだし」

「大丈夫。ちゃんと準備はしてあるよ」

それと、カモ君。幾ら電車の人が少ないからって、喋っちゃ駄目だよ。

「それもそうッスネ」

そういつて、カモ君が鞆の中に隠れる。同時に大宮駅に着いた。電車から出て待ち合わせ場所に向かうと、何人が集まっていた。

「おはようございます!!! 皆さん、早いですね」

「待ちきれなくて始発で来ちゃったよ」

「それは流石に早いだろう」

「そうですね。ってアマトさん!？」

何時の間にか隣にアマトさんが立っていた。アマトさんは笑って

「おはよう、ネギ」

「あ、おはようございます。アマトさん、どうしたんですか？」

「ノーマの付き添いだ。後、東京駅に用事があつてな」

確かに、ノーマさんは放つとくと何処か違う所に行きそうだ。

「じゃあ、東京駅まで一緒ですね」

「あんまり、はしゃぎ過ぎるなよ」

「はい!!!!!!」

僕の返事にアマトさんが苦笑する。

さて、取り敢えず東京駅に付いた。京都行きの新幹線はアツチだったかな？皆に気取られない様に自然に離れる。

「ええと、発車が10：26か。ノーマ達と同じ電車だな」

取り敢えず、ネギ達の車両から三両離れているので大丈夫だろう。そう思つて、電車に乗り込む。席に着くと同時に隣の席に置いた鞆の中からラブレスが出てきた。

「あんまり、騒ぐなよ」

注意すると、ラブレスが頷く。暫くして、電車が動き始めた。さてさて、久々の京都だな。

「『青眼の 龍』の攻撃！！滅びのバーストス リーム！！！！！！」

「うわぁ、やられた！？」

「はっはっは！！！！粉碎！！！！玉砕！！！！大喝采！！！！！！」

見たか、私の切り札を。これでお菓子は頂きだ！！！！

「ああ、パルがやられた」

「ノーマ、なんでここぞという時にそんな引きがいいの？」

フッフッフ、これぞ秘奥義、デ ティニードロー！！！！！！

「さて、お菓子を貰おうか？」

「くっそ、羽が生えただけの白いトカゲめ」

そういつて、ハルナがお菓子の箱を開けた瞬間、カエルが飛びだした。

「へっ？」

瞬間、カエルが私に向かって跳んできた。取り敢えず叩き落とす。

「む？新手の悪戯か？」

「と、とにかく。集めるよ」

袋を渡され、洪々カエルを集める。

妙に聞き慣れた騒ぎ声に目を覚ます。また何か騒いでるな？ラブ
レスは俺の膝の上が気に入ったのか、丸くなって動かない。

「まったく、アイツ等は何処行っても変わらないな」

苦笑を浮かべながら、目を瞑る。カラオケの疲れもあるし、ノー
マのお陰で朝早く起きる事になったから、まだ眠い。

「これで全部だな？」

「びつくりしたあゝ」

まったく人騒がせなカエルだ。席に戻って外を見る。何時の間に
か景色が変わり、思わず見入ってしまう。

「そろそろ京都だねゝ」

「楽しみゝ」

本当に楽しみだ。

「そろそろか」

そういつて、荷物を静かに纏める。ラブレスは満足したのか、隣の席で身体を伸ばしていた。

「満足したか？」

問いながら、撫でてやる。ラブレスは嬉しそうに鳴いた。暫くして、京都駅に着いた。

「さて、少し歩くぞ、ラブレス」

そういつて、電車を降りる。ラブレスはまた鞆の中に入っていた。改札を抜け、外に出る。京都駅の前には色々な人がいた。腕時計を見ている背広の男性。談笑しながら歩いて行く外国人の団体。黒い長髪の美人が隣にいるエメラルドグリーンの髪の少女と一緒に周辺地図を見ながら唸っていたり。取り敢えず俺も地図を見に行く。

「さて、ええつと？」

爺さんの家は此処から少し歩くんだよな。あ、やっぱりあった。『山吹屋』という店を見付ける。

「意外と遠いな」

といつても歩いて十分程度か。すると、鞆の中からラブレスが飛びだした。

「ん？こら、ラブレス」

ラブレスはお構いなしに隣で唸っていた女性二人に近づいていく。するとエメラルドグリーンの少女がラブレスに気付く。

「どうしたの？」

その言葉と一緒に手を出す。ラブレスはそのまま撫でられる。

「まったく、ラブレス」

近づく。少女が俺に気付いた。ノーマとは違った可愛い少女である。

「ラブレスっていうんですか？」

「ん？ああ」

少女はラブレスを少しだけ撫でると持ち上げて。

「あんまり、ご主人さまを困らせちゃ、駄目だよ？」

ラブレスは少女の言葉を聞き、俺に振り向き、直ぐに少女の後ろ。地図を見ながら唸っている女性に向かって走り出した。

「ん？うわっ！？」

そしていきなり女性の服に向かって跳んだ。女性は驚き、倒れてしまう。

「姉さん、大丈夫？」

「大丈夫か？ラブレス」

ラブレスの首を掴んで俺の目線に合わせる。ラブレスは何故、持ち上げられているのか分からず、首を傾げている。ため息を吐きながら、肩に乗せる。

「済まなかった。大丈夫か？」

「あ、ああ。驚いただけだ」

そういつて立ち上がる。くっ、この差し出せし右腕はどうすれば。

「京都は初めて？」

「ええ、そうです」

まあ、そうだよな。

「京都は入り組んだ道が多いから迷いやすい。気をつけてね」

「あ、ありがとうございます」

勢いよく頭を下げる少女に苦笑しながら歩き出す。

「おお~~~~~~~~っ!!!!!!!!!!!!!!」

清水寺から見る景色は何とも言えない物だった。

「こらこら、落ちるぞ」

マナに襟首を掴まれ、引き戻される。

「いい所だな、京都というのは」

「そうだな。景色もいいし、空気も美味しい。何より甘味が素晴らしい」

そういつて、小さな団子を食べる。買うのが早いな。

「それにアマトの実家があるというではないか」

「それは本当かい？」

「うむ、確かアマトの机に『山吹屋』という店のチラシがあった」

私の言葉にマナが驚く。

「驚いたな。天さんがそんな有名な店の人間なんて」

「そんなに、有名なのか？」

「それについては私が説明するです」

ユエがやってきた。飲んでいるジュースは『フルーツジュース抹茶味』なんか飲みたくない。

「呉服屋『山吹屋』は江戸時代初期の頃より、京都の顔とまでいわれる程の呉服屋です。古い型にはまらず、古くからの伝統を残しながら、流行を取り入れ、大胆にアレンジされた着物は若者に大人気だそうです」

「因みに私も『山吹屋』の浴衣を一着持っているんだ」

誇らしげにマナが喋る。それで益々興味を持った。

「行ってみたいな」

「行くなら明日の自由時間にした方がいいです」

「そうだね。その時は私も一緒に行こうかな」

笑いあう。マナと班が同じだったのは良かった。

さて、どうしたものか。

「えっと、やっぱり迷惑でしたか？」

先程の女性二人が一緒に付いてきたのだ。まあ、別に構わないんだが。

「迷惑じゃないよ。でも、見ず知らずの俺に付いて来て大丈夫なのか？」

「君はそんな悪人に見えない。それに僕たちも道案内がいた方が観光しやすい」

「姉さん！！！」

成る程、俺はガイドね。

「まあ、京都は故郷でもあるから案内はお手の物だけだね。でも、先に俺の用事を済まさせて貰うよ」

「ああ、構わないよ。僕たちも急いでる訳じゃないし。……まだ宿も取ってないし」

今聞こえちゃいけない事を聞いた様な。まあ、聞き流そう。そうこうしている内に目的の場所に着いた。

「いらつしゃい。あら、若じゃないの」

店番をしていた初老の女性が俺を見て笑顔になる。俺は苦笑して。

「茜さん。若は止めて下さい」

「なに言ってるの。跡取りなんだから若よ」

因みにこの若という呼び名。こちら辺では俺の愛称になっている。店番をしているおっちゃんやおばちゃんが呼ぶのは構わないが、子供にまで言われるのはちょっと。

「若？」

「ああ、俺此処の跡取りだから。皆そう呼ぶんだ」

「凄い」

そんな凄い物じゃないけどね。

「なんじゃ、やっと帰って来たか」

奥から紺の和服の上に白い羽織を掛けた老人が出てきた。

「ただいま。爺さん」

「天よ。後ろの二人は？」

「さっき、知り合ってたね。京都の案内する事になったんだ」

そういえば、名前をまだ聞いてなかったな。

「申し遅れた。俺は山吹 天だ。宜しく」

そういうと、二人も俺に倣って自己紹介してくれた。

迂闊でした。護衛の私がつとしっかりしていれば、こんな事には。いや、考えるのは後だ。今は、目の前にいる猿女からお嬢様を取り戻す。

「お嬢様を返せ！！！！！」

京都駅。駅の中でお嬢様を担いだ、女性。私の後ろには神楽坂さんとネギ先生。私は叫ぶと同時に走り出す。瞬間、上から殺気が来た。

「くっ」

咄嗟に『夕風』で防御が出来たのは僥倖だった。もし、防御が間に合わなかったら、首が飛んでいた。

「遅いですえ。月詠はん」

「ええ、助けたのにその言い草は酷いですえ。こっちは小太郎はんと楽しい一夜を棒に振って来たんですから」

ゴスロリ衣装に身を包み、太刀と小太刀を持った月詠という少女が身体をくねらせながら喋る。

「まあ、仕事やから働きますけど。すぐ終わらせます」

その言葉と同時に私は踏み込み、斬りつける。が、難なく太刀で受け止められてしまう。

「せっかちですなあ。まあ、その方がウチとしても嬉しいです」

一旦離れる。月詠は小太刀を逆手に、太刀を順手に持ってゆつくりと構える。

「ウチとしては今回のお仕事にはなんの興味もないんです。やから別に返してしまっても構いまへん。どちらかというとそっちの方が楽です」

「なら」ですけど依頼人がどうしても言いますから「そうか」

もう一度、踏み込もうとした瞬間、突然背中に衝撃が走った。振り向くと巨大な熊のぬいぐるみが立っていた。式神か！？ネギ先生達の方にも同じような猿のぬいぐるみが邪魔していた。

「ちゃんと周り見ないと駄目ですえ」

そういつて、足早に女性が立ち去ろうとする。

「まったく、その通りじゃな」

朗々と声が響いた瞬間、女性の目の前に一人の老人が立っていた。

「なっ！？」

「まったく、近頃の術者はなつとらんな。人払いの結界だけで安心するのは早計じゃぞ？」

紺の和服に白い羽織を掛けた老人。その姿を見た瞬間、月詠が老人に向かって斬りつける。

「ふむ、即座にワシを一番の障害と見て、潰しに來たのは称賛に値する。じゃが」

月詠の一太刀を老人は手で、正確には指で刃を摘まんて止める。

「見くびり過ぎじゃ」

その言葉と共にベチンツと凄まじく痛そうな音が響いた。

「あうっ!？」

そういつて、月詠は額を抑えながら、ピョンピョン跳ねまわる。

「一体何者や!?!?!」

女性が叫ぶ。老人は女性に向き合い、歩きながら。

「まったく、最近の若いもんは礼儀がなっておらん。まあ、質問には答えてやるかの」

そういつと同時に老人の姿が掻き消え、女性の目の前に現れた。

「ワシは通りすがりの好々爺じゃ」

またもや、ベチンツという音が響く。

「あうっ!？」

あまりの痛さに女性がお嬢様を離す。老人はお嬢様を優しく抱きかかえると私の目の前に現れた。

「怪我はないようじゃな」

「あ、ありがとうございます!!!」

急いで頭を下げる。

「くっ、あんなよく分からん爺さん相手にしたらやりにくい。逃げるで月詠はん」

「ううゝ、まだ痛みますゝ」

二人が逃げる。女性は「次はお嬢様を貰いますえゝ」といつていた。だが、月詠は「小太郎はんに慰めてもらいますゝ」となんとも変な言葉を残して去っていった。

「あ、あのありがとうございます」

「ほっほっほ、気にするでない。幼馴染に貸しを作ってやっただけじゃ」

幼馴染?この人の歳で幼馴染というと。

「ん？」

お嬢様が目を覚ました。

「このか、大丈夫？」

「アスナ、どしたん？ああ」

お嬢様が老人を見て驚く。

「山吹爺ちゃん。どないしたん？」

「なに、孫からの連絡でな。お主がこっちに来ると聞いたからの。久々に挨拶に来たんじゃ」

そういつて、笑う老人は正に好々爺だった。ん？孫。

「あの、もしかして山吹 天さんの」

「ん？天ならワシの孫じゃが」

これぞ、空いた口が塞がらないという事だろう。

「まあ、積もる話は置いて、帰りなさい。そのままでは風邪を引いてしまうぞ？」

そういつて、お嬢様に自身の羽織を被せる。

「話がしたいのなら、明日ワシの店に来なさい」

そういつと、老人は風の様に去っていった。暫く私達はその後ろ姿を追っていたが、お嬢様のくしゃみで宿に戻る事になった。

Re・No:21「初めての修学旅行」(後書き)

どうも、作者です。一日終了。さて、この話でエレメンタルジェレイドの原作キャラが出てきましたが、分かりましたかな？まあ、それは置いといて天の爺さん登場。モデルはNARUTOの三代目火影です。闘う爺さんはいいですよね。東方不敗、山本総隊長、三代目火影、自来也等々、結構大好きです。因みに天に対しては徹底して裏の世界について話していません。これは木乃香と同じです。次回は爺さんの正体と天の昔話、のどかの告白です。お楽しみに

Re・No:22「山吹屋」

「アマト、コレは何処に置くんのだ？」

「それは奥の棚に置いてくれ。こんな所か。んじゃ、朝飯にするか」

早朝、タダで泊めてもらうのは悪いと言われたので、取り敢えず簡単な掃除を行う事にした。

「お前が作るのか？」

「安心しろ。それでも家事はちゃんとこなせる」

そういつて、笑う。俺は厨房に向かう。途中、パジャマ姿の少女、リイリアに会った。

「おはようリイリア。眠れた？」

「おはようございます。はい、床で寝るのはちよつと不思議でしたが、よく眠れました」

「洗面台はアツチだから。顔洗って寝癖直して来な。凄い事になってるぞ」

「はい」

因みに二人は姉妹だそうだ。黒髪の方が姉のラサティ。二十歳と言っていたが、同年代に見えてしまう。今会話をしたのが、妹のリイリア。歳は17だったっけ？豪徳寺が好きそうな少女だ。アイツ、

可愛い、妹系が好きだからなあ。犯罪に手を出さないか心配だ。

「さて、何が残っているかな？」

「鮭が残っているから塩焼きはどうじゃ？」

「そうだね。ていうか、爺さん。ちゃんとバランスよく飯食ってる？」

振り向き、豊かな白髪 of 老人。祖父である山吹 たかと 天斗に問う。爺さんは苦笑して。

「安心せい。ちゃんと食べておるよ。しかし、一人で食事を取ると腕が落ちてしまって困る」

「それは仕方ないな。んじゃ、飯の準備するから、爺さんは居間でラサティの将棋相手してくれ」

昨日、将棋に興味を持ったラサティに簡単なルールと駒の役割を覚えさせたら、深夜までずっと相手させられた。まあ、全勝したから文句は言わないけど。

「なんじゃ、ワシは手伝わなくていいのか？」

「ああ、たまには爺さんに俺の料理食わせたいからな」

そういうと、爺さんは嬉しそうに笑いながら居間に向かった。さて、先ずは味噌汁だな。

トンツトンツトンツ、とまな板にリズムよく包丁が当たる音が聞こえ、その中に何かが焼ける小さな音が聞こえる。そして風に乗って感じる芳しい匂いにお腹が鳴る。それに少し恥ずかしくなりながら厨房に行くと、青のエプロンを付けたアマトさんが朝食を作っていた。

「なにか、手伝いますか？」

「ん？ああ、そうだね。床下から味噌を取ってくれないかい？」

そういつて、アマトさんは足で床を軽く叩く。叩いた場所には金具が付いており、それを引っ張ると、板が開き、小さな空洞があった。成る程。だから床下というのか。

「あの、どれが味噌ですか？」

聞くと、アマトさんは「しまった」という様な表情を作り、苦笑しながら。

「赤い蓋が味噌だよ。ちょっと重いから気をつけて」

言われ、赤い蓋の容器を持ち上げる。そしてアマトさんの隣に置く。

「ありがとう。後は運ぶ時に手伝ってもらってから居間にいいよ」

「はい」

居間に行くと、姉さんが難しい顔をしながら『シヨウギ』という物をやっていた。向かいに座っているアマトさんの御爺さんが楽しそうに見つめている。

「此処だ」

そういつて、駒の一つを進める。

「残念じゃが、そこではいかんぞ？ほれ、王手」

「あつ！？」

御爺さんが駒を進めると、姉さんが悲鳴を上げる。それが面白くて笑ってしまう。

「おお、リイリアちゃん。どうじゃ？ワシと一局。ラサティちゃんは筋がいいんじゃが、素直すぎてすぐ読めてしまつ」

「ううゝ。もう一回！！！」

「もう、姉さん。ごめんなさい、私にはちょっと難しいな」

「はっはっはっ！……！最初は誰でもそういつのう。天も子供の頃はそいつて、渋っていたがな」

「昔話はいいけど、孫のプライバシーは守ってくれよ？」

そう言いながら、アマトさんがやってきた。手伝う。

「アマト。朝食が終わったら一局」

「仕方ないな」

そんな話をしながら朝食を食べる。朝食を終えた後、食器を洗っているアマトさんを手伝う。

「悪いな」

「いえ、早く終わらせないと。姉さん、結構我慢弱いですから」

そういつて、姉さんを見る。姉さんは腕を組んでアマトさんを睨んでいる。そのアマトさんは苦笑しながら。

「そうだな。さっさと終わらせるか」

結局、姉さんはアマトさんに勝てませんでした。

「さて、そろそろ店を開ける時間じゃな」

「なら、俺も着替えるか」

そういつと、アマトさんが部屋を出て行きました。それを見送ったお爺さんが顔を近づけてみます。

「どうじゃ？お主たちも着物を着てみんか？」

「え？いいんですか？」

「うむ、代わりに店の手伝いをしてもらうがな？ああ、難しい事はせんよ。簡単に言えば、天と一緒に接客やつてくれれば、いいんじゃない」

「断る。僕は客商売が苦手なんだ」

「もう、姉さん。それだけなら私も手伝います」

そうして、無理矢理姉さんも誘う。

「それは良かった。そろそろ茜さんも来る頃じゃから。その時に着付けしてもらうといい」

そして更に顔を近づけ。

「因みに天の着替えは覗いても構わんぞ？」

「誰が覗くか！！僕は部屋に戻るからな」

そういつて、姉さんは部屋を出て行きました。

「意外にウブじゃの」

「お爺さん」

呆れてしまう。姉さんだって女の子だもん。すると姉さんの悲鳴が聞こえ、次いで天さんの悲鳴も聞こえた。

「ああ、この家入り組んでおるからワシが付いて行った方が良かった

たかの？」

「アマトさん！？姉さん！？」

急いで声の方を行くと、姉さんが服の乱れたアマトさんに馬乗りしていた。二人が私に気付く。私は二人に視線を合わせない様にする。そんな、確かに二人は仲がよさそうに見えたけど。

「昼間から、それは駄目だと思う」

「「違っうつ！！！！」」

「よし、行くぞ！！！」

「行ってくて何処に？」

「三人は『山吹屋』って呉服屋知らない？」

「ああ、聞いたことある。もしかしてそこに？」

「折角、京都に来たんだから。記念にね」

「え？ノーマさん達も行くんですか？」

ネギ達がやってきた。

「ああ、アマトの実家だからな。アマトの子供の時の話とか聞けそうだ」

「聞いてどうするんだい？」

「別に、聞くだけだ」

そういつて、歩き出す。急いでネギが付いてきた。

「アマトさんの実家って本当ですか？」

「ああ、本当だ」

何やら、ネギとアスナ、セツナが驚いているがどうしたんだ？

「ありがとうございますあゝ！！！！！！」

大分慣れたな。そう思いながらリイリアを見る。桃色の花柄が特徴的な可愛らしい和服。茜さんが選んだみたいだが、見事だと言える。

「おい、アマト。なにリイリア見てニヤついている」

「そんな事はない」

呆れながらラサティを見る。紺の和服に身を包んだラサティ。長い髪は後頭部部分で結い上げ、紐の代わりに花を象った櫛で止めている。

「なんだ、言いたい事があるなら言え」

なんか、不機嫌なラサティ。俺は苦笑しながら。

「いや、和服が似合ってるなあ、って」

そういつと、ラサティが顔を赤くしている。それを見ているリイリアが笑う。

「せ、世辞はいいから。仕事をしろ!!!」

「ははっ、分かったよ」

そういつて、ラサティから離れる。

「姉さん、ああ言ってますけど本当は嬉しいんです。あんまり男性に褒められた事ありませんから」

「こら、リイリア」

ラサティがリイリアに向かう。それを見ながら苦笑していると。

「お、此処か」

「大きいですね」

「先輩ってこんないい所のお坊ちゃんなんだ」

聞き慣れた。今この場では聞きたくなかった声を聞いた。ため息を吐きながら、商売だから仕方ない。と諦める。

「御免下さい」

「はい、いらつしゃいませ」

『え？』

見事に声がハモル。それに少し笑ってしまう。そしてラサティとリイリアがやって来る。

「知り合いか？」

「学校の後輩だ」

そういつて、笑う。

「えっと、なんでアマトさんが此処に？」

「爺さんの頼みでな。実家を手伝う事になった。後、この二人は同じお手伝いだ」

「ラサティだ」

「リイリアです」

「あ、どうも」

「なんじゃ、騒々しい」

奥から爺さんが出てきた。

「昨日はありがとうございました」

「昨日？」

「はて、何の事だったかのう？」

爺さんがとぼける。

「へえ、やっぱりいい物があるねえ」

「ふむ、メガネの少年と鈴のお嬢さん、竹刀袋を持ったお嬢さんは奥に来なさい。話したい事がある」

「なんかしたのか？ 爺さんが奥に来させるなんて説教しかないぞ？」

「ええっ！？」

「アホ。説教ではないわ」

そういつて、四人は奥に行ってしまう。仕方ないので、今いる奴らの相手をする事にした。

「さて、茶でもどうかな？」

「いえ、お構いなく」

笑顔で言われる。ふむ、とっておきの玉露を出そうと思ったが駄目だったか。

「先ず、話をする前に。自己紹介をせねばな。ワシの名は山吹 天斗。この店を取り仕切っておる」

「ネギ・スプリングフィールドです」

「神楽坂 明日菜です」

「桜咲 刹那です。お会いできて光栄です。『瞬神』の天斗様」

「ほう、これはまた懐かしいのう」

微笑む。佇まいといい、雰囲気といい何処ぞの堅物剣士を思い出す。

「えっと、『しゅんしん』って何ですか？」

「あ、二人は知りませんよね。えっと、『瞬神の天斗』というのは

「私達の世界ではとても有名な英雄なんです」

「英雄!？」

「はっはっはっ。そんな大層な物ではないがな」

「いいえ。天斗さんの偉業、それは凄い物です。何て言っただって、千を超える悪魔や鬼を当時の学園長と一緒に退治したんですから」

「そんな事もあったかの」

そして、刹那のお嬢さんがつらつらと懐かしくも腹立たしい、クソ爺との昔話を話しだす。どうやら、ワシと会った事でテンションがレッドゾーンを超えたようだ。話を聞いている二人は呆れるどころか、どんどんハマっている。

「そろそろ本題に入っているかな？」

「あ、すいません。熱くなりすぎていました」

顔を赤くして謝る姿に思わず微笑む。咳払いをしてから。

「さて、君たちも知っている通り、敵の狙いは木乃香嬢唯一人。犯人はワシよりも、総本山にいる木乃香の父が知っている筈じゃ。というより、ワシは表の事もあるからあまり派手に動けん。昨日はあまりにも露骨な手を使っておったから助けられたが、巧妙な物を使われるとワシは何も出来ん。感知や陰陽道は近衛の方が長けていたからの」

「そうですか。では、緊急用の式神を置いておきます」

そういつて、札が煙になり、小さな式神が出てきた。

「しかしな。此処には表の人間が多すぎる。簡単に電話では駄目かの？」

「流石に結界内に入ってしまうと携帯などは通じなくなるんです。通じるとすれば、念話やこういった式神しか駄目なんです」

『不束者ですが宜しくお願いします。私の事はちび刹那と呼んでください』

ペコリとお辞儀する姿に頬が緩む。すると、何時の間にか部屋に入って来たラブレスがちび刹那に襲いかかる。

『ひゃあっ！？何ですか？わひゃっ！？舐めないでください。私で遊ばないでえ〜』

どうやらちび刹那が気に入ったのか、服の襟を咥えると、外に出て行ってしまった。それを見送るワシと皆。

「ふむ、あの場合はどうするかの？」

「えっと、どうしましょう」

乾いた笑いが木霊した。

「うゝむ」

「どうした、綾瀬。なんか探し物か？」

真剣に悩む綾瀬が気になり、声を掛ける。

「はい、のどかに合う和服を探しています」

「それなら茜さんに聞くといい。茜さん」

「はい、どうしました若」

俺は苦笑しながら、宮崎を指さして。

「あの子に合う和服を選んでくれないか？というより、なんで宮崎に選ばせないんだ？」

「のどかにとって今日は大切な一日なのです。その為には晴れ着を着て気を引き締める必要があるのです」

「ゆ、夕映ゝ。そんな事なくていいよ」

「大切な日ねえゝ。もしかして告白でもするのかい？」

茜さんの言葉に宮崎が真っ赤になる。

「お相手はもしかしてメガネの坊や？」

「あ、あうう」

宮崎が顔を俯かせる。同時に俺を押しつけ、店にいた全員が宮崎に群がる。自然に蚊帳の外になった俺は隣にいる茜さんを見る。

「にしても、よく気付きましたね」

「なに言ってるの？こういうのは普通に気付くだよ。普通にね。本当に昔から若は鈍感ねえ、これじゃ、若を好きになった子が報われないわ」

「ふうん」

「さあ、これからは女の子の話。男は外に行って、時間潰して来なさい」

「ちえ」

不満を漏らす、文句は言わない。俺と爺さんの暗黙のルールその一『茜さんの命令は絶対遵守』だ。怒ると怖いからな。

「了解。んじゃ、行ってくる」

そういつて、俺は外に出る。さて、何処に行こうか。

若が渋々、店を出ていく。久しぶりに帰って来たけど。根は変わらないわね。さて、私は手を叩くと騒いでいる女の子達に喋る。

「さあ、のどかちゃんの為に一番の服を選ぶわよ。手伝ってくれる子にはもちろん若の少年時代の話をアルバム付きで話してあげるわ」

その言葉に異論を上げる子は誰もいなかった。

「若だ」

「おお、若。久しぶりじゃないか」

「若。出来たての団子があるから食って行くかい？」

気さくだなあ。俺は挨拶を返しながら、笑う。貰った団子を食べていると、目の前にある角から少年が走って来た。ツンツンした黒髪の活発そうな少年だ。少年は俺を見付けると急いで目の前まで走って来た。

「兄ちゃん。後ろから変な子来るけど、俺の事教えんといてっ！！」

いきなりの事、しかも切羽詰まってる。俺は笑って。

「その角、人一人入れるスキマがある。隠れてな」

「おおきに!!!!!!」

俺が指示した角に少年が飛びこむのと、少年が曲がって来た角から少女が来るのは同時だった。所謂ゴスロリという服なのだろうか。まるで外国のお人形のような衣装を着ている少女は俺を見付けると、近づき。

「あゝ、今黒髪で、活発そうで、美味し……………ああ、いやいや格好いい男の子来てません？」

今、変な単語が聞こえた様な、否、気にしない。俺は何ともない様な表情と声で答える。

「その子なら、俺無視して、真っ直ぐ進んで行っただぜ」

「ありがとうございます。あゝ、もう。小太郎はんもシャイなんですからあゝ。待っててなあゝっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

叫び声（嬌声？）を上げながら、風のように走る少女を見送り、見えなくなってから角の方に声を掛ける。

「もう、出てきてもいいぞ？」

「あゝ、助かったわゝ。ほんま、おおきに。兄ちゃん」

ネギとは正反対の笑顔を浮かべる少年。

「団子でも食うか？」

「ええんか？」

「なに、ちょっと時間を潰さなくちゃいけないから。この団子と近くの茶屋で奢るから少しだけ話し相手になってくれるか？」

そういうと、少年は何か分かったのか、苦笑して。

「お互い、女が相手だと苦勞するなあ」

「ははっ、反論できないな。で？答えは？」

少年は笑顔で頷く。俺達は近くの安くて美味しい茶屋に向かう。

Re・No:22「山吹屋」(後書き)

どうも、作者です。いやあ、ちょっと悪乗りしすぎでしたかな？天の昔話などは次回です。期待していた方、すみません。因みにこの作品では月詠は小太郎LOVEです。いや、二次創作にそういうのが少なくて、それに私自身、月詠が好きなので敵にしたいくなな。と考えて、なら仲間にしようと考えてこういう設定にしました。性格は小太郎LOVE。因みに根っこは変わっていないし、それに少し手を加えて、美少女、美少年が大好き。流石二刀流wwwん？美少年が好きっていう事は……………フェイト逃げて……………超逃げて……………な、感じですね。次回もお楽しみに

Re・No:23「昔話 のどかの告白!!」

アカネさんが棚の奥から一際分厚い本を取り出す。表紙には『成長記録』と書かれている。

「さて、そろそろ話が終わる頃だね」

「すみません。待たせたみたいで」

噂をすれば、ネギ達がやってきた。

「ネギ先生、今から……………観光……………しませんか？」

ノドカが頑張っている。

「いいですよ。あれ？のどかさん、和服に着替えたんですか？凄く似合ってますよ」

ノドカの顔が赤くなる。そのまま、二人は外に出て行った。

「さて、二人の後を追うのもよし。残って若の昔話を聞くのもよし。どっちにする？」

勿論、アマトの昔話に決まっている。そんな私達にアマトの祖父は苦笑していた。一瞬、コノカを見ていた様な気がしたが、気のせいかな？

「ほんでな。その月詠がな『誕生日プレゼントは何がいいですか』って聞いてきたんや。俺、あんまそういうの考えた事なかったから、何でもええって言うたんや。そしたらな」

「そしたら？」

「誕生日の日にな。大きな箱が部屋にあつたんや。開けてみたら。全裸にリボン巻いた月詠がニッコリ笑って『誕生日プレゼントはウチです』言うてな。もう、アイツの行動原理が分からん」

そういつて、団子を頬張り、茶を啜る。犬上 小太郎を見る。

「キツイな」

「そうやろ？俺はそんな手の込んだ物やなくてもええ、って言ったけど。流石にアレはストレートすぎや」

「いや、その子も悩んだと思うぞ？方向性がかなり間違ってるけど」

そういつて、茶を啜る。時間はそろそろ昼になる頃だ。昼飯も外で食うか。

「見付けましたえー！！！！！！！！！！」

声と共に例の少女、月詠がやってきた。なんというか、ヤバい。特に目が。

「今日是一緒に京都でデートの約束でしたやろ？」

「え？そやったつけ？」

普通なら、キレる返答に月詠は身体をくねらせ。

「ああ、忘れっぽい小太郎はん。ドジっ子やわあゝ」

なゝんか、目が虚ろだなあゝ。今の内に自分の世界にトリップしている月詠から離れる。

「昔の若はねゝ。それはもう、恥ずかしがり屋だったのよ」

「本当か？全然そうは見えないんだが」

「若も成長したからね。そこは克服したんじゃないかしら」

「他には？」

「そうねゝ。この時の若も可愛かったわゝ」

開いたページには五歳位のアマトと三歳位の女の子が知らないお姉さんに抱き上げられていた。

「あれ？この人、木乃香に似てない？それにこの子も木乃香に似てる」

「ほえ？お母さん」

「なんで、コノカとコノカの母親がアマトと一緒にいるんだ？」

私達の視線がアマトの祖父に集まる。

「なんじゃ、詠春も近衛門も教えてなかったのか？」

「なにを？」

「近衛門の妻、つまりお主の祖母はワシの妹じゃ」

「へ？」

「という事は、山吹先輩とこのかつて」

「ハトコになるのかのう」

私達の叫び声が上手い具合に重なった。

「悪いなあゝ、兄ちゃん。昼飯まで奢ってもらって」

「気にすんな」

そういつて、頼んだ天ぷら蕎麦食べる。

「なあ、ずっと気になってたんやけど」

「ん？」

「その右手の模様、なんなんや？」

そういえば、コレを隠していなかったな。

「コレは、そうだなゝ。俺が俺である印？」

「なんで、疑問形？」

そういつて、笑いあう。

「って、コラァッ。誤魔化すな」

「悪かったよ。少し長くなるけど？」

「構へん、構へん。時間はたっぷりあるんやから」

小太郎が笑いながら喋る。俺も笑って話し始める。

「ワシと、妹の日向ひなた、そして近衛門は子供のころからの腐れ縁でう。よく一緒になって、馬鹿やって、毎向日向に説教されたのう」

何時の間にかアマトの昔話から祖父の昔話に切り替わっていた。コノカは淒く興味深そうに聞いている。

「あの頃はここ等辺も更地でのう。朝から夕方まで駆けまわっていた」

「はいはい。お年寄りの昔話よりも、今は若のお話よ」

そういつて、アカネさんが昔話を再開する。

「ううん、お婆ちゃんの話聞きたかったなあ」

「それなら木乃葉このはに聞けばよかつた？」

「そやね、今度お母やんに聞いてみるわ」

それからアカネさんが作った昼食を挟んで話の続きをした。アカネさんの味付けは少し薄味だった。

「き、綺麗ですね」

「はい、来てよかったです」

景色が凄く綺麗。のどかさんと京都を観光するのは楽しい。けど、アマトさんの実家をじっくり見れないのは残念です。『ワフク』と
いうのも興味ありましたし。

「ネギ先生？」

「え？ああ、すみません。次は何処に行きましょうか？」

いけない。今はのどかさんの相手をしなくちゃ、『ワフク』を見る
機会はまだあるんだから、そんな急がなくてもいいよね。

「ええ、本当なんですか！？」

「本当よ。若が来たら、言ってみなさい」

なにやら、中が騒がしいな。

「ほな、兄ちゃん。昼飯ご馳走さん」

「ああ」

小太郎が歩き出す。どうやら、約束を守りに行くようだ。

「帰りましたよ」

『あ、お帰り。天ちゃん』

口を揃えて言った言葉に固まる。その呼び名はアレか？ゆつくりと茜さんを見ると、茜さんは凄く楽しそうな顔で懐かしい『当時』の写真を開いていた。

「その話は止めてよ。爺さん！！！！！」

「なにを言うておる。ワシの事ではないのだから、ワシが止める理由はない。それにあの状況でワシが止めたら、確実に白い目で見られる。それは嫌じゃからな」

くっ、どうするか？

「いやあ、驚いたよ。先輩ってちゃんと着飾れば『女の子』に見えるんだね」

そう、『天ちゃん』というあだ名は。昔、七五三の時に茜さんがふざけて、俺に女の子の着物を着せたのだ。その時の俺は女の子用と知らず、躊躇いもなく、それを着て、街を歩いたのだ。故にその時についたあだ名が『天ちゃん』。

「でも、可愛いねえ」

「本当、男の子には見えないね」

「じゃあ、今着ればどうなるんだろう？」

椎名の一言を聞いて、その場にいる全員が俺を見る。

「待て、色々可笑しいだろう。流石にこの年で女物は」

「大丈夫。天さんは線も細いし、顔も中世的だから大丈夫だよ」

「何がいいかな？」

近衛！！！！！！お前は何でそんな嬉しそうな顔をしながら服を選んでいる！？

「待て、落ち着け。話せばわか

」

結局、着物を着せられ、しかも写メに撮られた。その後、顔が火照ったネギと宮崎がやってきたが、今の俺には会話に飛びこむ力がなかった。

「その、月詠」

「何でしょう?」

「朝は、逃げて悪かったわ」

ああ、小太郎はんが正直に謝って。凄く貴重です。

「ウチは気にしてませんよ」

「お詫びに今日一日だけ、お前の言う事聞いたるわ」

今、なんと?言う事を聞く?ウチの言う事を小太郎はんが聞いてくれる?

「だ、大丈夫か?月詠。なんや顔が赤いで?熱でもあるんか?」

そういうと、ウチの額に小太郎はんの額が当たる。い、幾らなんでもそれはあ。

「うおっ!?!どないしたんや、月詠?!」

はうう。嬉しいんやけど、ちょっと残念や。

R e - N o : 2 3 「昔話 のどかの告白！！！」（後書き）

どうも、作者です。今回で新しい設定。主人公と木乃香は血縁！！！！！！この作品では木乃香のお母さんも出るからお楽しみに。因みに小太郎と月詠は大体こんな感じの仲です。では、次回もお楽しみに。

Re・No:24「一日の終わり」

「フッフッフ、私の『青眼の究 龍』に敵うモンスターがいると思っているのか？」

「甘いな。諦めたらそこでデュエルは終わる。行くぞ、私のターン。ドロ―!!」

マナがカードを引く。馬鹿め。私のモンスターに敵うモンスターなどいない。

「どうやら、私にも勝機があるようだ」

「ふ、ふん。どんなカードが来ようと無駄な事だ」

「どうかな？私は魔法カード『洗脳 ブレインコントロール』を発動。800ポイントのLPを払い、『青眼の究 龍』を貰うよ」

「なにっ！？だ、だが私のLPはそれだけでは倒せない」

「そうだね。私は場にいる『ビッグシールドガードナー』を生贄に『暗黒魔族ギルファア・デーモン』を召喚。更に魔法カード『大嵐』でフィールド上の魔法・罠カードを破壊」

「しまった!？」

「私の勝ちだな。二体のモンスターでダイレクトアタック!!!!」

「くそ。負けた」

「ふふ、中々楽しめたよ。じゃあ、約束通り、帰りに持たされた天さんお手製のお団子は貰うよ」

「ああゝ。一番楽しみにしていた、みたらしがあゝ」

美味しそうに団子を頬張るマナ。

「ううゝ、団子があゝ」

「んゝ、流石天さんの作った団子は違うねえゝ。こつ、自然に口の中に広がる甘みがなんとも」

くうゝ、調子に乗りおつて。

「ならば、今度は別のデッキで勝負だ。私のD・HEROデッキの恐ろしさを見せてやる！！！！！！」

「いいだろう。ならば次は修学旅行から帰った時の夕食を決める権限を賭けよう。さて、私の宝玉獣デッキに勝てるかな？」

夜はこれから。カズミがなにか言っていた様な気がするが。無視だ。

「「デュエルッ！！！！！！！！」」

「もう一勝負!!!!!!」

「もう、勘弁してくれ。何戦するつもりだ？」

「僕が勝つまでだ」

「寝ろ」

と言いつつ、駒を元に戻す俺は本当にお人好しなんだな。

「まだやってるんだ。姉さん、アマトさん、お風呂空きましたよ」

「ああ、後で入る」

「んじゃ、先に入るかな」

「待て、僕との対局はどうなる？」

「充分やったろ？もし、続きがしたかったら、風呂で対局するか？」

「なっ?!」

「冗談だよ。今日は諦めて明日にしろ」

そういつて、風呂場に向かう。やっと、解放された。脱衣所で服を脱ぎ、湯船に浸かる。

「ふう」

息を吐き、力を抜く。今日は色々あり過ぎて、疲れた。

「アマト、ちょっといいか？」

「ラサティ？まさか本当に？」

「違う！！！！その、なんだ。まだ礼をしてなくてな」

「礼？」

聞きながら、身体を洗う為に風呂から上がる。

「泊めて貰った礼だ。その、私なりに色々考えてな」

そういうのと同時に衣擦れの音が聞こえた。え？待て、もしかして。嫌な考えが浮かぶのと同時に扉が開かれた。

「その、礼として背中を流す事にした」

「それ以外にしろよ」

小さく呟く。振り向けば、多分ラサティがいるのだろう。男として振り向きたい欲求があるが、流石にガン見すればどうなるか分かっている。

「動くなよ？」

「動かないよ」

されるがまま、背中を流される。何というか、気まずい。

「か、痒い所はないか？」

「大丈夫だ」

短く、答える。かなり緊張しているのか、元からなのか、手に力を入れ過ぎだ。洗ってもらった背中がヒリヒリする。しかもその上に熱湯を掛けられてはたまったものではない。仕返ししてやる。

「んじゃ、次は俺の番だな」

「え？」

「え、じゃない。さつさと、背中向ける。そっち向けないだろ？」

「いや、でもこれは私がお前にお礼でやってる訳で」

「三秒で振り向くからな？」

そういつて、キッチリ三秒後に振り向くと、ラサティの背中があった。俺はラサティの背中を見て、仕返しをしえやろうという気持ちが無処かに行ってしまった。

「は、早くしろ」

「ああ、悪い」

背中には、決して小さくはない傷が幾つか見られた。一体、どんな生活をしたらこんな傷がつくのだろう、そう考えながら背中を洗

ってやる。

「ん、こら、くすぐりたいぞ」

「ああ、すまん」

「き、傷の事は心配するな。痛かったらちゃんと伝えるから」

「ああ」

答え、少しだけ強く擦る。背中を流しながら、思わず呟く。

「肌、思ったより白いんだな」

「い、今は関係ないだろ!？」

「それに髪も綺麗だし」

一旦口に出すと止まらないのが人である。次々とラサティの身体的特徴（胸とか尻は流石にNG）を褒めながら背中を洗う。ふと、ラサティが黙ってしまう。

「もしかして、顔赤くなっている」

「なっていないっ!?!?!」

と言いながら、横から見える顔は真っ赤だ。俺は湯を掛けて泡を落とす。

「あ、ありがとう」

「それはこっちのセリフだろ？」

「そうだな」

そういつて、笑う。

「んじゃ、俺は上がるよ」

「そうか」

何処となく残念そうな声になった。

「もしかして、一緒に入りたかった？」

「そんな訳あるかつ！……！！！」

怒鳴りながら、振り向く。そう、振り向いたのだ。

「あ………」

「え………？」

急いで目を逸らす俺にゆっくりと視線を降ろすラサティ。

「見たな？」

「見てない。断じて見てない。思ったより胸が大きいなあ、とか考えてない」

言ってから後悔する。

「そうか、死ぬ覚悟は出来ている様だな」

嫌な汗がダラダラ流れる。どうする？どうすれば、この状況を打破できる？

「覚悟、はっ?!」

ラサティが足を滑らせた。急いで手を掴む、だが、急ぎ過ぎて後ろに転んでしまう。

どすんっ、とお風呂場の方で音が聞こえた。姉さんが騒いでいるのかな？

「もう、姉さんたら」

お風呂場に向かい、扉を開ける。

「もう、姉さん。近所迷惑だ……か………ら」

私は目の前に広がる光景に言葉が出ない。仰向けになったアマトさんの上に姉さんが乗っているのだ。その、裸で。

「い、ごめんなさい。邪魔だよね！……！」

急いで扉を閉め、お風呂場を出る。

何やら騒がしい。折角の月夜だというのに。

「騒がしいのう」

ワシの言葉に肯定するようにラブレスが鳴く。視線を少しだけ上げる。丸くなっているラブレスの上にちび刹那が寝息を立てている。すると、リイリアちゃんがやって来た。

「どうした？眠れぬのか？」

「お爺さん」

何やら、真剣な顔をしながら聞いて来る。

「明日はお赤飯炊いた方がいいかな？」

その言葉にワシは首を捻るしかなかった。

Re・No:24「一日の終わり」(後書き)

どうも、作者です。はい、ノーマはネギに全く興味が無いので、夜の大イベントには参加しません。代わりに天の夜を書いてみました。因みにこの後、天は腹に『吼号穿・籠』を当てられ、気絶。朝まで放置です。次回はシネマ村と総本山の話です。ご期待下さい。後、カードは気にしないでください。単に書きたかっただけです。原作の方も2003年なのに、色々と先取りしてますから。

Re・No:25「狗神と瞬神」

「という訳でな。今日は店を開かん」

「いきなり言われても困る。まあ、二人に京都を案内出来るから文句は言わないけど」

そういつて、苦笑する。何でも、近衛の実家に行く事になったらしい。しかも俺やラサティ達も連れて行くようだ。

「ワシは先に行って、話を付けて来る。お前達はのんびりと来るといい」

そういつて、外着に着替えた爺さんは家を出て行った。

「さて、俺達も観光するか」

「そ、そうだな」

「どうしたの、姉さん」

ラサティが朝から様子が変である。まあ、理由は分かるけど。

「俺はちよつと着替えて来るから先に外に出ててくれ」

そういつて、自分の部屋で外着に着替える。そういえば、ネギはどうなったんだろうか？

「まあ、関係ないか」

今は観光に専念しないとな。取り敢えず、龍宮との教訓で財布の中身は多めにしておく。これだけあれば問題ないだろう。

「んじゃ、行きますか」

「さて、今日は何処に行こうか？」

「ん、この『シネマ村』なんてどう？面白そうだよ」

「いいかも。なんか面白そうな事が起きそうな予感がするよ」

「お、桜子がそういうなら、行ってみる価値はあるかもね。ほら、ノーマ、ちゃんと起きる」

「む」

まあ、深夜近くまでデュエルしてたからな。仕方ないだろう。

「ノーマは私が運ぶから、移動しようか」

「お願いね。真名」

私はノーマをおぶる。意外と軽いんだな。私の背中が気になったの

か、小さく唸りながら、ゴソゴソと動いて、動かなくなる。まるで猫だな。

「取り敢えず最終目的地が『シネマ村』だけどそこに行くまで何処に行こうか？」

「山吹先輩の所は？」

「流石に二日連続で行くのは失礼でしょ？アツチは仕事もあるんだし」

そういえば、ラサティだったか。昨日のお手伝いさん。嫌に天さんと仲が良かったような？昔からの付き合いなのだろうか？いや、それにしても歩き方や重心の起き方が一般人と違っていた。アレは裏の人間だ。という事はこっちに来てから知り合ったのか？こっちに来てから、という事は知り合って一日位であんな仲良くなったのか？私なんて、普通に仲良くなるのに三日掛かったのに。なんだか腹が立ってきた。別に天さんが誰と仲良くなるうと勝手だけど。なんだかな。

「置いてくよ」

「あ、ああ」

急いで、歩き出す。なんだろう、この気持ち、もやもやしてイラつく。こういう時は何か甘い物を食べるしかない。

「なあ、『シネマ村』まで甘味巡りでもしないか？」

「あ、いいかもね。ようし、お土産なんて考えないで、どんどん梯

子するぞぉ」

「「おおー！！！！」」

「んあっ！？なんだ、どうした？」

突然の大声に跳び起きるノーマ。やっと起きたか。そう思ったら。

「アマト」。夕飯には起こせ」

等と言いながらまた寝始めた。どうやら私の背中では天さんと同じくらい寝心地がいいらしい。

「なんだか複雑だな。ん？」

ふと目の前を見覚えのある姿が通り過ぎた様な気がした。見てみると。

「あれは天さんのお爺さん」

昨日会った、天さんの祖父が肩で風を切りながら颯爽と歩いていた。変だな、今日は店を開けていないのか？

「どしたの？」

「いや、何でもない。行こうか」

ずり落ちそうになるノーマに注意しながら歩き始める。

「おお、なんや今日はツイてるなあ。デュエル イスクが二人分空いてるわ」

「まったく、今はそんな事にかまけてる場合やないやろ？」

「ええやないか。息抜きや、息抜き。おおい、新入り」

台に二人分の料金を入れて、最近やってきた白髪の新入りを呼ぶ。白髪の新入りは俺の声に気付く。

「なんだい？」

「今からデュエルやらへんか？お前のデッキも見てみたいし」

「まったく、今は仕事中だろ？そんな事してていいのか？」

「さっきまで、格ゲーやってたお前には言われたくあらへん」

ゲーセンに入っけいきなり格ゲー、しかも『北斗の』でト使い始めるとは思いませんかった。しかも勝てへんし。やっぱトは酷いわ。初心者でも勝てるって、どんだけ性能がいいねん。

「それに、お前のデッキに興味あるからな。確か、アルカナやったっけ？あの運任せデッキ」

そういった直後、新入りの雰囲気が変わった。

「僕のアルカナが運任せ？いいだろう、そこまで言うならデュエルしてあげるよ」

そういつて、デュエ ディスクを左腕に装着する。まずは五枚引いて手札を確認する。悪くない手札や。

「デュエル！！！！！！」

もきゅ もきゅ もきゅ もきゅ……………

もつぎゅ もつぎゅ もつぎゅ もつぎゅ……………

え？この音はなんだって？ラサティとリイリアが白玉を食べてる音だ。因みに上がリイリアで下がラサティだ。

「食べないのか？」

「ん？これでも食べてるぞ？」

俺は少しずつ食べる方が好きだ。というか、この食べてる音の所為で食べる速度が落ちるのだ。気持ちが悪い訳じゃない。逆だ、真逆だ。可愛いのだ。リイリアは凄く幸せそうに『もきゅもきゅ』し

てるし。しかめっ面のラサティも何度も頷きながら『もつぎゅもつぎゅ』してる。それを目の前で眺めながら同じ物食べれるか？俺は無理だ。今俺の内面では凄い勢いでもう一人の俺が悶え苦しんでいる。そのお陰で何とか白玉を食べているのだ。もし、もう一人の俺がいなかったら、今頃そこら辺でのたうち回っている。世界は何かの犠牲あってこそ、という事を改めて理解出来た。

「あの、本当に全部奢りでいいんですか？」

「え？ああ、大丈夫。今日は結構多めに持ってきたから代金の事は気にしないでいいよ」

そういつて、笑いながら白玉を頬張る。二人とも、食べる量は龍宮に遠く及ばないので、そこは楽だ。

「済まないな。本当は割り勘なのに」

「気にするな。手持ちはそんなに多くないんだろ？だったら遠慮せず奢られる」

「そうだな。此処はお言葉に甘えとしよう」

そういつて、笑いあう。

「二人とも、仲がいいね」

「そうか？」

「うん。昨日も、その、仲が良かったみたいだし」

瞬間、時間が止まった。不味い、この状況は非常に不味い。だが、ここで慌てて返しても駄目だ。かといって、自然に返そうものなら凄く勘違いされそう。

「リイリア、昨日言っただろう？昨日のはアマトが無理矢理だな

」

コラアツ。そこ何、嘔吐してんだ。ていうか、なんで俺が悪いんだ？元はと言えば、お前が強引に風呂場に入ってきたのが悪いんだろ。まあ、確かにラサティはとも、否、凄く魅力的な体つきでしたよ。龍宮や桜咲とは違う魅力の持ち主でしたよ。こちらと健全な18歳。そういう事には興味バリバリですけど。自分を抑える手段はちゃんと持っているからね！？

「そ、そうだったの」

「騙されるな、リイリア。元はと言えば、コイツが強引に風呂場に入ってきたのがいけないんだ」

「なっ！？」

「え？」

取り敢えず、当たり障りのない様に昨日の事をダイジェストで伝える。

「姉さん、そのやり過ぎだよ」

「いや、それ以外、思いつかなかったんだ。他に思いついたのだった、コイツと布団で」

「ストップ。なんでお前がそんなの知ってるんだ？そんなに興味津々だったのか？」

聞くと、ラサティは声にならない声を上げて頭から煙をあげる。どうやら、処理限界を超えたようだ。

「ど、どうしよう」

「取り敢えず、会計を済ませて、何処か寛げる所に行こう」

「もしかして、ホテ「違う」で、ですよね」

苦笑しながらも、ホツとしたような表情を浮かべるリイリアに俺の心は砕かれそうだ。

「ちよっ、どーすんのよ」

「全然気付きませんでした」

『お二人がドンドン行ってしまうから気付くのが遅れました』

はっ、どうしよう。

「やれやれ、騒がしいのう」

声の方に振り向くと、タカトお爺さんが立っていた。

「え？あれ？なんで？此処に？」

「ワシも総本山に用があつてな。まあ、個人的な用じゃ。しかし直ぐに済ませたいのだがな」

そういつて、唸る。

「そ、そんな呑気にしてる場合じゃないわよ。私達下手したら一生このまま」

「それはない。結界、といつても常に力を使う。どれだけの術者でも閉じ込めておけるのは精々一週間が限度。まあ、その間に大抵は罾が襲撃で全滅じゃがな」

そういつて、楽しそうに笑うお爺さん。

「あう、笑い事じゃないですよ」

「なんじゃ？この程度の状況で笑えぬとは、魔法使いとやらも、存外肝が小さい。さぞ近衛門は苦勞しているじゃろうな」

「本当やで」

突然の声に驚く。瞬間、巨大なクモが落ちてきた。

「ほお、中々堅い物が出てきたのう」

「爺さんか？一昨日、月詠ぶつとばしたんわ？」

「はっはっはっ、何少しだけお灸を据えただけだ。こうやっての」

その言葉と共にお爺さんはクモの上に乗っていた少年の目の前に移動していた。

「なっ！？」

「まだまだ、甘いの」

お爺さんは少年の頭を掴んで明後日の方に投げ飛ばし、投げた逆側に向かって蹴りを繰り返した。瞬間。

「がはっ！？」

逆側から戻って来た少年の腹部に蹴りが入った。そのまま、足場になっているクモを踏む。それだけで、クモは煙となって、消えていく。

「ぐっ」

「無間方処の結界は術者側が有利とは限らん。主が術者なら、前に出て来てはいかんぞ？」

「ハッ、生憎、俺は術者ちゃうねん」

瞬間、少年の陰から黒い狼が飛びだし、お爺さんに襲いかかる。

「俺は狗神使いや!!!!!!」

爆音と煙が巻き起こる。

「ほほう、なんとも珍しい物を使うの」

。声は後ろから聞こえた。凄、この距離を一瞬で、これが『瞬神』

「ほれ、何をしてるか。この手の結界は何処かに結界維持の封がある筈。それを叩いて来い」

「は、はい」

言われるがままに、僕たちは走りだす。

「ほう、追わんのか？」

「別に、女の後ろに隠れる西洋魔術師に興味はあらへん」

そういつて、とても真っ直ぐな瞳をワシに向ける。眩しいのう。
昔のワシらもあんな瞳をしておったの。近衛門。

「それに、アンタとやった方が楽しいやろ？」

言った直後、少年の足場が爆ぜる。

「ほう、その歳で瞬動を使えるか。大した物じゃの。じゃが」

殴りかかる少年の後ろへ移動する。

「まだまだ、修練が足りんの」

「……………」

少年は何も言わず、黙ったまま何かを考える。

「やっぱそうや『入りも抜きも全く分からない瞬動』まさか、まだ現役やったとは」

「ワシはもう隠居の身じゃよ。こっちに來たのも個人の用事じゃ。それに、今回の和平にはワシも協力しようと思ってな」

「何でや？アンタは言わば、関西呪術協会側の英雄やのに」

「はっはっはっ、若いのに勉強しているの。そうじゃな、長く生きていると、それだけ物ごとを広く見れる。ワシにとっては何時までこんなくだらない事をやっているのか、そう思って仕方ないからの」

「くだらないやと？」

「魔法使いと呪符使い。両者に明確な違いなど何もない。持っている力は同じような物じゃからな。そんな小さい事に何時まで構って

いるんじゃない

「小さい事か。確かに死にかけの老いぼれにはそう見えるかもな。けどな、千草の姉ちゃんも西洋魔術師に親を殺されとんのや!!!」

「ふん、そんな物、この人生でごまんと見ておるわ。それこそ、ワシにとっては今更じゃ。だがのう、敵討をしなれば前に進めないというのであれば、それでもよからう。だが、その方法は確実に人間を外道の道へと歩ませる」

「.....もういいわ。どうやら、爺さんとは話が合いそうにないわ」

「若さ、かの。そちらから会話を切るのなら仕方ない」

言った瞬間、少年が跳ぶ。

「ハアッ! ! ! ! !」

充分威力の乗った蹴りが来るが、難なく避ける。どうやら、怒りで気が乱れているのか、それとも意図して誘っているのか。

「なににせよ。やらねばなるまい」

一瞬で、少年の懐に入り、顎に拳を繰り出す。堅い手応えと共に少年の身体が浮く。

「ぬんっ! ! ! ! !」

少年の両胸に手を当て、気と共に少年を吹き飛ばす。少年は10メートル程、吹き飛んで、土煙を上げる。

「はて、狗神を使うという事は狗族の者か？じゃが、元々狗族は獣人の筈じゃが」

疑問は直ぐに分かった。少年が先程よりも速い瞬動で移動したのだ。その姿を見て、納得する。

「成る程、混じり者か。しかしお主は恵まれているの」

言いながら、繰り出す攻撃を受け流す。

「才能もある。身体も恵まれている。それに、まだ戻られる」

「何言ってるのや？」

「なに、爺の独り言じゃよ。気にするでない」

言葉と共に首に手刀を入れて意識を刈り取る。

「ふう、しかし久々の実戦は堪えるの。やはり腕は訛っている様じゃ」

少年をおぶる。やはり寝顔は歳相応じゃな。

「懐かしいの。子供の頃の天を思い出す」

まあ、あの頃は別の意味で大変じゃったが。そう思っていると、ガラスが砕ける様な音が響いた。どうやら、結界を解いたようだ。

さてワシも行くかの。

Re・No：26「決戦！！シネマ村」

「此処がシネマ村だ。って、聞いてるか？」

「へえ、変わった家だね」

「そうだな。成る程、中はこうなっているのか」

コイツ等は。まあいい、実際、ガイドなんて俺には似合わないし。悔しくないぞ？悔しくないなんてないからな！！！！！！！！

「どうかしました？」

「ん？いや、何でもない。此処は結構見る所も多いから楽しめると思うぞ？」

そういうと、リイリアが首を傾げる。

「あの、アマトさん。その格好は？」

「コレか？そこにある衣装屋で着替えられるんだ。お前達も着替えきたらどうだ？」

「僕は遠慮しておく」

「もう、そんな事言わずに行きましょう？姉さん」

「おい、リイリア。引っ張るな」

リイリアに引つ張られるラサティに苦笑しながら外で待つ。

「着いた」

「此処がシネマ村か」

「中々面白そうな所だな」

「見てみて、此処で衣装変えられるみたいだよ」

マドカの声に振り向くと、和服を着た外国人が出ていく店を発見。
あそこか。

「面白そうだ。行ってみよう」

「「「お」」」

「やれやれ」

マナの呆れた声を聞きながら、皆で衣装屋に入る。

「おお。此処には色々取り揃えているんだな」

「へえ、こんな綺麗な服もあるんだ」

皆思い思いに服を選ぶ。マナ、何で真剣に悩んでいるんだ？

「ノーマは何にする？」

「うゝん」

「ノーマはこれゝ」

サクラコが選んだ着物は山吹色の豪華な着物だった。

「うっひゃゝ。豪華だねゝ」

「いいんじゃない？」

「そうだな。サクラコありがとう」

そういつて、試着室で着替える。やはり、着物は着るのが面倒だ。

「大丈夫、だな」

鏡を見て、問題ないか確認する。

「よし、大丈夫だ」

「どうだろうなゝ」

「ま、マナッ！？」

後ろにマナが現れた。衣装はなんだろうか、『ニコ』と言う奴か。

中々似合っている。

「流石にその髪型では似合わないぞ?」

「そうか?」

「私に任せてみる」

そういつて、私の髪を解き始める。何時もは自分でやるか、気分でアマトに任せるかどっちかだ。何か、とても新鮮な気持ちだ。

「ほら、出来たぞ。これで少しはよくなった筈だ」

「よくなった、という事は今までよくなかったという事か?」

「さあ、どうだろう?」

「うがぁ」

襲いかかるも、頭に手を置かれて手が届かない。くそぉ、色々デカイ奴め。

「ふ、ふん。今日はこの程度にしてやる」

「何もしていないと思うが?」

意地悪くマナが笑う。覚えてる。絶対にお前以上のナイスバディになって見返してやる!!!!

「さて、皆も終わったみたいだから外に出ようか」

そういつて、さつさと外に行く。私も慌てて追いかける。

「アマトさんの格好ってちよつと変ですよね」

「そうか？昔やってた『舞』用の着物なんだが」

「アマト、『マイ』とはなんだ？」

これは口で説明するより、見せた方が早い。俺は袖から扇子を取り出す。

「簡単に言えば、この国に伝わる踊りだな。かなり独特な踊りなんだ」

昔、爺さんの真似をした物を軽く披露する。

「「おお」」

二人の驚く声を聞いて、調子に乗ったのが悪かった。一通り舞い終わると。周りにはカメラを持った外国人のギャラリーに囲まれていた。しかも。

「あ、やっぱり山吹先輩だよ」

「まさか、こんな所にいたとは」

「『アンコール、アンコール』」

「楽しそうだな」

龍宮たちがいた。その柿崎と椎名。こんな所でアンコールなんて言ったら、駄目だ。俺がヤバイ。この『舞』って踊るのにかなり体力使うんだから。

「はう、男の人の『舞』もええどすなあ」

背後から、甘ったるい声が聞こえ、同時に背筋が寒くなる。振り向くと、昨日小太郎を追いかけていた。月詠という少女が立っていた。

「ああ、小太郎はんみたいな少年もええですけど。やっぱり格好いい好青年もええです」

何やら悶え始める。そしてキツカリ三分後。何かを決意したように俺を見て。

「頂きます」

刀を抜いて襲いかかって来た。

「ハアツ?!」

叫びながら、避ける。瞬間、俺がいた場所が碎け散る。ん？ちょ

つと待て、なんでそんな威力のある物を簡単に避けられたんだ？月詠も不思議そうな顔してるし。

「なんやゝ、少しは楽しめそうやゝ」

間延びした声とは違い、その剣速は速い、筈だ。何故かスロー再生で見える。これは何なんだろうか。

「おい、そういうのは浮気じゃないのか？小太郎が悲しむぞ？」

凄まじい剣閃（第三者視点だからね。俺にとっては凄く遅い）を避けながら話しかける。

「大丈夫ですう。ウチの愛は無限に広がる大宇宙より広いんです。小太郎はんも分かってくれます」

「この、節操無しがあつ！！！！！！！」

カウンター気味に月詠の頭を扇子で叩く。スパンツ、といういい音が響く。

「あうつ？！」

月詠が怯んでいる。チャンス。

「ていつ！！！！」

「はうゝ」

月詠の顎に思いっきり叩きつける。すると簡単に倒れてしまった。

俺は畳んだ扇子で額を叩いて一言。

「お後が宜しい様で」

瞬間、何故かラサティの跳び蹴りを貰った。痛い、何故かラサティの蹴りはスローに見えなかった。

「何すんだよ」

立ち上がり、埃を払う。ラサティはフン、と鼻を鳴らしている。

「ああいう手合いは逃げた方が得策だったんだぞ？」

「どうやって、逃げるんだ？この状況で」

そういつて、周りを見る。ようやく減り始めたギャラリーだが、それでも、月詠の剣を避けながら脱出は不可能だ。人垣を飛び越えるなら別だが。

「それに、だ。女の子に背を向けるのは嫌だ」

「お前なあ。そんな事を言ってる状況だったか？」

「意地があんだよ。男の子には。それとこの縄、何時の間に縛ったんだ？解いてくれねえか？なんか、連れて行かれる罪人みたいな感覚なんだが」

そういつが、俺を縛り上げた龍宮とノーマは黙って歩き始める。二人に縄を持たれている俺は否応なく歩き出す。これじゃ、本当に罪人だ。

「あ、あの解きましようか？」

「リイリア。余計な事はしなくていい」

ううゝ、なんで？どして俺がこんな目に？

「なんやゝ、イベントやと思ったら天さんや」

「どうして、縄に？」

桜咲に近衛とその他大勢。なんつつか、揃い踏みだ。初対面の奴らは少なからずいたので簡単に挨拶を済ませるラサティとリイリア。

「というか、なんで縛られてるんですか？」

「俺にも分からん。ちょっとその二人に『舞』を披露していただけなのだが」

「それだけではないだろう」

そういつて、ため息を吐くラサティ。

「確かに、変な子に危ない事されそうになっただけど」

「危ない事？」

「いきなり『頂きます』なんて言って斬りかかって来たんだ」

聞いてきた桜咲に龍宮が小さく答える。

「変態だな」

「酷いです。一つの愛です」

声と共に何時の間にか俺の後ろに件の月詠が立っていた。しかも、何というか顔を赤らめ、呼吸を荒くしながら俺を見ている。

「あう、縛るのも縛られるのもええですけど、こっ縛られてる人を見るとゾクゾクします」

助けてください。そう、目で訴えるとラサティが月詠に蹴りを放つ。が、寸前で避けられる。

「生憎、僕たちはそんな目的でアマトを縛った訳じゃない」

「それに天さんは縛る方が似合っている」

「こら、そこおっ！？誤解を招く言葉は止める」

取り敢えず、龍宮に突っ込む。

「ていうか、縄を解いてくれないか？」

「分かりました。動かないでください」

桜咲。そこで何で刀を抜く。

「せいっ！！！これでいいですね？」

「もっと、優しく解け」

そういつて、立ち上がる。何やら桜咲が険しい表情をしているが何だろうか。

「ん〜、魅力的な人がたくさんいて、目移りしてしまいます〜。どないしましょ〜」

「刹那。頼んだ」

「頼んだよ」

「月詠とやら、相手はこの桜咲が相手してくれるぞ。コイツは結構、順応早いから色々なプレイにも対応可能だ」

「ちよっ！？全部私に丸投げですか！？ていうか、山吹さん、その言い方は止めてください。先に貴方を斬りますよ？」

少し言い過ぎたかな？顔を真っ赤にして怒鳴る桜咲を諫める。

「ふふ、うふふふふふふ」

いきなり不気味な笑い声が聞こえ、桜咲がビクリと反応する。

「どんなプレイでも？どんなプレイでもええんですかあ〜？」

「え？あ、いやその。私にも好みがあつてだな」

「プレイ云々は否定しないんだな」

呆れた龍宮の声に同意する。まあ、たまに龍宮と一緒に桜咲で遊んでいるからな。ここ最近やってないけど。

「まあ、ええです」

声と共に月詠が桜咲に斬りかかる。そこから目にも止まらない速さで動く二人。当然、俺には見えない。さっきのスロー映像もない。さっきはアレだろうか、生命の危機に対して一瞬だけあるっていう人間の不思議現象だろうか？

「なあ、天さん」

何時の間にか龍宮が隣に立っていた。気のせいかな、少し機嫌が悪そうだな。

「その、ラサティと仲がいいみたいだけど」

「ん？まあ、店の手伝いをして貰ってるし、家に泊めてるから仲はよくなるな」

「そっか。それで、その天さんはラサティの事どう思っているんだい？」

「どう、と言われてもな。強いて言うなら、お前や桜咲と同じで『手にかかる友人』かな」

「そっか、そうだよな。うん、悪いね。こんな話して」

何故か、機嫌がよくなった龍宮は苦笑いを浮かべる。

「私もそろそろ桜咲に加勢しないとな」

そういつて、銃を取り出す龍宮。瞬間、嫌な予感がした。

「龍宮!？」

「えっ? うわっ!？」

急いで、龍宮を抱きよせ、離れる。瞬間、俺達がいた場所に轟音が響いた。

「なっ?! 鬼!？」

「と、取り敢えず離してくれないかな？」

「ああ、悪い」

そういつて、離れる。後ろで打撃音が聞こえたので後ろを見ると、ラサティが謎の少女と闘っていた。妙なのは少女の腕がまるで力マキリの鎌みたいな形をしている所だろうか。そう考え、頭を下げる。瞬間、俺の頭があつた位置に太さ10センチ位の針が突き出された。

「危ないね」

実際はそんな呑気な状況じゃないけど、こう言わないと色々駄目になりそうだ。取り敢えず、扇子を取り出す。

「くそっ、なんでこんな所に『フィロ』がいるんだ」

『フィロ』? 何やらラサティは何か知っている様だ。

「ひゃっきやこ」

間延びした声が聞こえたと思ったら、いきなり色んな物が飛んできた。取り敢えず、当たりそうなのを扇子で叩き落とす。

「はあ、こんな事に関わりたくないんだけどな」

ため息を吐きながら、前を向く。どうやら待っていてくれたらしい。

「律儀だねえ」

「別に貴方の手並みを見たかっただけです、それと恨まないでください。これも任務ですので」

そういうと、同時に少女が突っ込んできた。これはひょっとしてヤバいかな？出来れば、同契したいけど。ノーマを横目で見ると。

「フッフッフ、私に逆らおうなんて百年早い。恥を知れーいっ！
！……！」

ノリノリでさっき飛びだした物を迎撃している。こりゃ、期待できないな。

Re・No:26「決戦!!シネマ村」(後書き)

どうも、作者です。えゝ、前回のあとがきとは違ってしまいました。簡単に纏めると「刹那VS月詠」「フィロVSラサティ」「フィロVS天」「鬼VS真名」「百鬼夜行VSノーマ含め、3-A軍団」という感じです。さて、フィロは誰の手先でしょうかね?では次回も御期待下さい。

Re・No:27「総本山」

「ふっ」

「がつ!？」

繰り出される鎌を屈んで避ける。起き上がる反動を利用して、鳩尾に蹴りを放つ。『フィロ』は身体を『く』の字に曲げて浮き上がる。

「ハアッ!!!!!」

落ちて来るタイミングに合わせて、回し蹴りを放つ。そのまま、『フィロ』は近くの家屋に突っ込んだ。

「この程度か」

戦闘狂ではないが、闘い自体久しぶりなので、つい加減を忘れていたようだ。

「っ!？」

嫌な予感がした瞬間、その場を跳び退く。瞬間、先程いた場所に『フィロ』が鎌を突き出していた。

「頑丈だな。そうこなくては」

ふと、アマトの方が気になる。アイツ自身、何か格闘技をやっている様には見えない。精々、他より少しだけ体力や瞬発力がある一

一般人だ。では、その一般人が『フィロ』と闘ったら、どうなるか。答えは火を見るより明らかだ。

「これは急がないといけないな」

「これで五体目！！！！」

鬼の眉間を撃ち抜き、元の世界に還す。先程の奇襲から現れた鬼は十体。どうやら、私一人を狙っているらしい。雑魚ならともかく、一体、一体がかなり強い。

「あんまり時間を食う訳にはいかないな」

何せ、一般人の天さんが闘っている。しかも一瞬見えた針は武器だろうか。よく見てなかったから分からないが。

『余所見はいかんでえっ！！！！』

「煩いっ！！！！！！」

言葉と共に攻撃してきた鬼の眉間を撃ち抜く。何にせよ、裏の事を知っているとはいえ、一般人の天さんを放っておくわけにはいかない。

「さっさと終わらせる」

「ふふ、楽しいですなあ」

「そうか？私は楽しくないが」

「それは残念です」

言葉と共に来た剣閃を受け流し、峰を踏んで固定する。瞬間、右から来た刀を『夕風』で受け、空いた左手に『氣』を練る。

「せいっ！！！」

「っ！？」

拳を繰り出すも、一瞬早く刀を手放して後ろに跳ぶ月詠。

「危ないですなあ。今の貰ったらアバラが数本折れてましたあ」

「余裕だな」

言いながら、落ちている刀を蹴って、私達から遠ざける。

「さて、さっさと終わらせようか」

「ウチはもう少し長くやりたいんですけど」

頬を膨らまして不満を垂れる月詠。残念だが、此方にそれほどの余裕はない。山吹さんが心配だ。あの人は一般人だ。それに相手のあの女。もしかしたら私と『同じ』かも知れない。

「うふふ、もしかしてさっきの人を心配してるんですか？確か、アマトはんって言ってましたっけ？」

「貴様には関係ない事だ」

「まあ、ウチの独り言ですから気にしないでください。それにしても、残念です。あの人も今頃は」

「黙れ……………！！！」

言葉を遮らせて、剣を振るう。

「山吹さんは一般人だ。何故、彼を襲う必要がある？」

「さあ？私は何も聞いてません。でも、今は関係ないですよ」

弾かれる。距離を置いて呼吸を整える。確かに今この戦闘で他人の事を考える余裕はない。月詠はかなりの腕前だ。しかも、対人戦を経験している。加えて私はまだまだ未熟だし、対人戦の経験など修行を覗けば皆無だ。

「ふふ、いい表情です」

不思議だ。先程は月詠の一挙一動が見えず、戸惑っていたが、いざ集中してみるとかなりとは言えないが、動きが分かる。そこまで私は動揺していたのか、そして山吹さんが襲われているというだけで、ここまで取り乱す自分が情けない。

「神鳴流、桜咲刹那。参る！！！！」

「神鳴流、月詠。お相手します」

確かに山吹さんは気になる。だが、今は全力で月詠を倒し、山吹さんを助ける。

「フッ！！！」

「っと」

突き出される針をギリギリで避ける。先程の現象、物がスローに見える現象だが、幾つか分かった事がある。コレの発動条件は少なくとも、俺自身が危機感を覚えないと発動しないようだ。線引きは分からないが、ラサティの蹴りと月詠の斬撃、そしてコイツの攻撃が少なからず違う事は、はっきり分かった。そしてこのスロー再生だが、攻撃をスローにして避けやすくしたり、反撃しやすくするのは大変便利だ。

「ハッ！！！」

「おおっ！？」

針の突きを、身体をズラして避ける。問題があるとすればコレだ。いかに攻撃が遅く見えても、ただ『遅く』見えるだけ。いわば、スロー映像を見ながら闘っているのだ。別に俺の動きが早くなったり、周りの動きが遅くなったりする訳ではない。ので、遅く見えても避けるには結局、俺の身体を頼らなければならない。

「ハアッ！！」

「チイツ！！！！」

俺自身、そこまで身体能力は高い方だ。しかも、身体に無理が掛かる避け方（それ以前に無理が掛からない避け方など知らない）をして、身体に至る所が痛い。そんな状態でこれ以上、闘うのはシンドイ。というより、やりたくない。さつさと、ラサティ達が終わって、こっちに來てくれると願っただけ。

「やっぱり、女の子に頼るのは男として駄目だな」

そうなっでは立つ瀬がない。

「驚きですね。最初は一般人だと思いましたが、ここまでとは」

「そいつは……………どうも」

「ふふ、限界の様ですね。そろそろ諦めてくれませんか？」

言葉と同時に、突撃してくる。

「ぬんっ！！！！！」

攻撃される前に拳を繰り出す。だが、簡単に掴まれてしまう。

「一ついいか？」

「命乞いは、残念ながら聞きませんよ」

針が来る。それを。

「俺が諦めるのを」

空いた手で受け止める。手を何かに貫かれる感触。次いで、貫かれた場所が物凄く熱い。『熱した鉄棒を押し当てられる感覚』と小説などでは表現されるが、正にその通りだ。目の前の少女が驚いた表情をしている。これで動けない。まあ、俺も何もできない。両腕では。

「諦める！！！！！！」

密着状態で、両腕以外の俺が持っている攻撃方法は一つしかない。それが頭突き。思いっきりぶつけてやる。勢いが良かったのか、少女は仰け反って一歩後退する。その時、手から針が取れる。

「くっ！！！！」

どうやら、頭突きで額が切れたらしく、視界が赤い。その赤い視界の中、ゆっくりと近づく針を、身体を翻して避け、避けた動きを

利用して、少女の脇腹に回し蹴りを放つ。

「ガッ!？」

メキ、とかバキ、とかいう音が足に伝わって来たが、無視して蹴り抜く。少女は数メートル横に跳んで、地面に倒れる。動く気配がないのは気絶したからか。

「ふう、終わりかな？」

懐から小さな救急箱を取り出し、傷を治療する。だが、片手でやっているので、上手く出来ない。

「貸してみる」

突然、包帯と手を取られ、乱暴に消毒される。

「おい、もうちょっと優しく」額の方は傷が浅いね」痛い、痛い。傷口を広げるな」

一見、美女二人に甲斐甲斐しく世話を焼かれる光景に見えるが、治療はかなり乱暴なので、全然嬉しくない。

「はい、終わったよ」

「まったく無茶をする」

二人同時に治療が終わった。

「悪いな」

「「まっただ」」

同時に言われるとかなり凹む。

「それにしても、相手が女でも容赦なし、か」

「ちょっと酷いんじゃない？もう少し、優しく済ませるとかさ」

二人の言葉を聞いて、呆れる。

「あのなあ、これでも一杯一杯だったの。それに、俺は男女平等だから当然です」

「まあ、確かに天さんは歳とか性別とか無視して叱るけど」

「シヨウギも全く手加減していない」

二人が妙に納得している。まあ、確かに見た目は年端もいかぬ少女を蹴り飛ばしたのだ。流石に罪悪感はある。まあ、あっちも殺す気で来ていたのだから御相子だ。

「さて、刹那の方も終わったみたいだし。行こうか」

「山吹はくん。って大怪我や。大丈夫？」

近衛がやってきた。呑気な物だ。少し呆れる。

「傷の方はそこまで痛くないんだが、二人の治療が乱暴過ぎてそっちの方が痛い」

「ほう？ 私達の治療が無駄だと？ そう言いたいのかい？」

「へえ、面白いね」

そういつて、傷口をつねるのは止めてくれないだろうか。

「済まん。言い過ぎた」

「ふん、分かればいいんだよ」

「そうそう、このお返しは特製団子50人前で許してあげるよ」

「二人纏めて「一人ずつ」だよな」

ため息を吐く。そして視線を上げる。

「なんや、大変やな」

「本当だよ。爺さんの手伝いに来たと思ったら変な事件に首突っ込んでるし」

「そう言うなら首を突っ込まなければいいだろう？」

何処か拗ねたように言うラサティ。

「乗りがかった船だし。なんか、俺も無関係じゃなさそうなんだね。無視はできないさ」

「とにかく、今は一刻も早く、ここから移動しましょう」

そういつて、桜咲が近衛の手を取って走りだす。仕方ないので、ノーマを抱えて走り出す。

「こうぐ。いい加減、この扱いは止めろー！！！！！！！！」

「あ、皆来ました。つて、ええーっ！？」

桜咲さん達が来たと思ったら、なんだか一杯来ました！！！！！！

「な、なんでこんなに！？」

「え、えつとどう説明したらいいでしょうか」

「別に俺は近衛の実家に爺さんがいるから会いに行くんだ。何でカラサティとリイリアも一緒にな」

「そうなんですか。ていうか、アマトさん。手の怪我！！！！！！」

「ん？これか？大丈夫だよ。痛みも少しだけ和らいでるし」

そういつて、笑うアマトさん。すると、龍宮さんがアマトさんの手にデコピンをした。

「ぐおっ！？こ、こら龍宮。何しやがる」

「まったく、やせ我慢も程々にしておきなよ。したのは応急処置だ
けなんだから、近衛の実家についたら、治療してもらうんだよ」

「分かってるよ」

そういつて、ため息を吐くアマトさん。

「ていうか、駄目ですよ。これから行くのは敵の総本山で」

「敵？なんで近衛の実家が、そんな悪の砦になってるんだ？」

「なんでって。え？このかさんの実家？」

見ると、このかさんが首を傾げている。

「これから行くとこウチの実家やで」

その言葉に僕とアスナさんが大声を上げる。

Re・No:27「総本山」(後書き)

どうも、作者です。やっと、終わりました。シネマ村。さあ、修学旅行編も後少しです。バトルを書くのが楽しみです。さて、天は負傷しましたので、一旦退場です。まあ、一般人ですので(今の所)、ここ等辺が妥当です。次回からはネギパーティ&真名、ラサティ、リイリアの混合チームで進む予定です。御期待下さい。

Re・No:28「襲撃」

「痛い！！！！痛い！！！！痛い！！！！！！」

「大の男が大声で、情けない」

「全くだ」

「麻酔もなしで、傷口縫われてるのに叫ぶな、とか何の拷問だ！！！！！！！！」

その叫びも巫女さんの治療に遮られる。マジで痛い。まあ、スロ―で見えるなら弾けば問題なかったんだけどさ。相手が考えている以上の事をやしないと驚かせられないだろ？

「じつとしていてください。後……………十分で終わりますので」

「長っ！？そんな深い傷何ですか？！っていうか、治療する気あるの？なんか、物凄く嬉しそうな顔してるけど」

おいおい、まさか治療してくれる巫女がドSって何だよ。怖いよ。アレだよ、イ チさんの万華鏡写 眼相手にガン飛ばしながら闘うに等しいよ。しかも、この二人そんな俺見て笑ってるし、マジで俺の周りには変態しかないない。

「巫女さん。今コイツ私達の事、変態と考えていました」

「分かりました。延長五分入りまゝです」

「温いな。それに＋消毒をするべきだろう」

悪夢だ。因みにその後、しっかり治癒してくれました。何故、最初からそれをやらなかった？

「えっと、さっきから聞こえていたアマトさんの悲鳴が聞こえないんですけど」

「治療が終わったんじゃないか？」

そういつて、夕飯に出されたお魚を綺麗に箸で解体しているノーマさん。

「箸の使い方上手いですね」

「それがな、アマトはこういった箸でしか食べれない料理しか作った事がないんだそうだ。たまに味が落ちてないか確認する時にパスとかを作るらしいが、それで私が箸の使い方を知らないと分かったら、箸の使い方を教えてくれたんだ。リイリアは、普通に使えるみたいだな」

「えっと、私も姉さんも教えて貰ったんだ。アマトさんに」

そういつと、何故だかノーマさんが不機嫌になる。

「え、えつとノーマさん？」

「ん？私は怒ってないぞ」

「そ、そうですか？」

「ああ、別にアマトが初めて会った人間に懇切丁寧に箸の使い方を教えたからとか、一週間も掛かって覚えたのに、お前達は一日で覚えた等という理由で私は怒らないぞ？」

そついいながら、魚を何度も刺すのは止めてくれないだろうか。
すると、ため息を吐く。

「済まん。どうも、私は変だな」

「そ、そう？」

「うむ、同属に八つ当たりなど」

同属、その言葉に反応してしまった。私の反応に気付いたのか、ノーマさんが皆さんに見えない様に見せてくれた。自分の核石を。

「同属を分らないと思ったか？」

屈託なく笑う。そしてその笑みを浮かべたまま。

「安心しろ。誰にも言わん。といっても、コイツ等に話しても理解できん。元々コチラ側を知らない人間だしな」

そういつて、魚を食べる。私もホッとして魚を食べる。

「酷いな。僕達を放つてもう、夕食か」

「なら、君だけでも抜け出せばいいじゃないか、ラサティ。天さんは『私』に任せて」

「ふん、僕だってアマトの『家で世話』になっていたんだ。付添くらしいするさ」

「そうか」

「そうさ」

何やら、不敵に笑いながらやって来る姉さんとマナさん。それに遅れて物凄く疲れた表情のアマトさんがやってきた。が、目の前に二人がいるので通れない。

「はあゝ」

すると、アマトさんが何処かに行ってしまった。違う所から入るのだろうか。そう思っていると、いきなりアマトさんの姿が現れた。

「ダイナミックエントリー！！！！！！！！！！」

跳び蹴りと大声のオマケ付きで。

「「なっ！？」」

次の瞬間、宴の場が喧嘩の場になった。

「いきなり跳び蹴りかましてくれるとは、いい度胸だね」

「喧嘩か？喧嘩売っているのか？アマト。よし、倍値で買ってやるからそこを動くなよ」

「煩いわ。ドSコンビ!!!!!!!!!!」確かに傷の治療は感謝しているがな。その後の対応が間違っている。テメエ等の性根。一回砕いてから搦り潰して、素敵に華麗にばら撒いてから直してやるから覚悟しろっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

何というか、悪魔つて本当にいるんですね。アマトさんの背中からコウモリの羽、頭から山羊の角が見え隠れしてます。隣にいるノーマさんは私の影に隠れてガクガク震えてますし。他の皆も妙にハイテンションでそれを囁し立てるし。止めようとした人はアマトさんの睨みで黙っちゃうし。やっぱ、普段から沸点が異常に高い人は怒らせたら駄目だよな。

「あゝまゝとゝ!!!!!!」

間延びした声に皆さんが気付きます。

「ちやゝゝゝゝゝゝゝん!!!!!!」

「ゴハツ!？」

次の瞬間、人間大の何かがアマトさんの脇腹に突き刺さり、そのまま壁にぶつかりました。

「久しぶりやね。元気やった」

ミシミシと音を立てながら抱きつく。凄く綺麗な人。

「お、お母さん。山吹はん、気絶してる」

「へ？あら本当。ありがと、木乃香。会いたかったよ」

ギュー、と抱きつく。綺麗な人。えっと、誰でしょうか？

「ええーっと、なんで俺はまた縄で縛られているんだ？」

「さあ」

「ほーれ、アマト晩飯の魚だ。食いたいだろう？」

「残念だが、夕食は軽い物を後で作って食べる」

そういうと、ノーマがつまらなさそうに唇を尖らせる。

「先ずは確認だ。君と近衛の母親は昔から面識があった」

「まあ、爺さんの付き添いで季節の移り変わりに一回ずつ此処に来てたからな」

「それで、子供の頃の近衛と会っていたのか？」

「たまにね。寂しそうに遊んでいた所に俺が付き合っていた位。桜咲が来てからは遊んでないけど」

「まあ、その話は追々聞くとして」

聞くのかよ。

「なんで、天さんが抱きつかれるんだ？」

そういつて、件の女性である木乃葉^{この}さんに目を向ける。見た目は大人っぽくなった近衛だ。初めて見る人には絶対に子持ちに見えない。しかも、昔からまったく容姿が変わっていないのが驚きだ。

「「ほえ？」」

木乃葉さんと近衛が振り向く。二人は茶を飲みながら談笑していた。此処まで似ていると姉妹とか、双子だと言われても頷いてしまふ。唯一違つとすれば、木乃葉さんは髪を結っている点だけだろう。

「だって、ウチの子供は木乃香だけやったし。天ちゃんもウチに懷いてたし。それに本当は男の子も欲しかったし。ねえ」

「ねえ」

いや、ねえじゃないし。というか、答えになってませんよ。

「まあ、つい懐かしくて。天ちゃんはウチの子供みたいなもんやし。木乃香も天ちゃんがお兄ちゃんやったら嬉しいやろ？」

「そうやね。山吹はん、優しくて暖かいし。ほんまに兄ちゃんみたい。でも、山吹はんと遊んでたの、少ししか覚えてないんよ。それはちよつと、寂しいな」

そういつて、はにかむ。いや、俺はあんまり思い出したいな。馬役とかやってたし。

「そう？ウチは覚えとるよ。なら教えて「木乃葉さん！？」話が逸れてますよ！！！」そやった」

手を叩いて笑顔になる木乃葉さん。もはや、綺麗ではなく可愛いだ。これで子持ちだというのが本当に驚きだ。

「成る程。まあ、簡単に言えば天さんが可愛くてしょうがないから抱きついた、と」

「可愛い？何処がだ？どちらかというと生意気だろう？」

ほほう、いい度胸してるじゃないか。そこでようやく縄が解かれる。

「悪いな、ネギ」

「どういたしまして」

「ネギ先生？幾ら先生でもこんな勝手な事をするのはどうかと」

「えう、でも問答無用で縛るのはどうかと。ってなんで僕を縛ってるんですか？！」

「ん？代わりに縛られるんだろう？ほら、大人しくしろ。さて、どうしてやるつか」

そういつて、黒い笑みで笑いあう二人。まあ、寝る前に解放されるだろう。

「あら？何処行くん？」

「夕飯を食い損ねたから、自分で作ります。厨房借りますね？そういえば、爺さんとおじさんが見当たりませんが」

「なんや、二人で話があるとかで部屋に籠っとった」

頬を膨らまして不満そうな声を上げる木乃葉さん。本当に子持ちなのか？妙に子供っぽいぞ？

「厨房は確か、あっちだな」

「なんで、場所分かるん？」

昔から厨房に忍びこんだ事があるから分かるんだよ。それから少しゆっくり歩いてみると。ラブレスを見付けた。

「どうした？ラブレス」

俺に気付き、何時ものように扉を叩く。この合図はノーマが仕込んだもので、よく俺の部屋に入る口実に使っていた。

「この部屋に入りたいのか？でも、この部屋って確か」

昔、爺さんに付いて来てこの部屋は誰も使ってないと言っていた。というより、ここ等辺の部屋は空き部屋が多い。

「入りたいのか？」

俺の言葉に声を上げるラブレス。仕方ないので少しだけスキマを開ける。ラブレスはそのまま、中に入ってしまう。確かこの部屋は窓があつたから月でもみたいのだろうか。そう考えていると。

「なんや、また来たんか？お前も物好きやなあゝ」

聞き覚えのある声が聞こえた。襖を開ける。部屋には。

「小太郎？」

「天兄ちゃん？」

小太郎が寝間着姿で壁にもたれていた。

『へえゝ、ジンウレイス光属性か。外見的特徴を見ると、ノーマだね』

「ノーマ？」

『二年前に失踪した、ビーネンリッターのお気に入りさ。そうだね、彼女に恩を売る機会でもあるし。生け捕りにしてきてくれるかい？』

「同契者がいた場合は？」

『そうだね。生け捕りが一番だけど、抵抗するようなら殺していよ』

「了解した」

『頼んだよ。それと、その仕事が終わったら直ぐ帰って来てね。なんか、総統が動き出すみたいだから』

「分かった。早めに切り上げる」

『頼んだよ。レグ』

通信を切る。

「連絡は終わったんか？」

「ああ」

立ち上がり、見下ろす。美しい場所だ。こんな俺でもそう思える。

「にしても、よく食うな」

目の前でガツガツと俺が作った飯を食べる小太郎。先程出会って、話をしようとしたら、腹が鳴ったのだ。取り敢えず、厨房を借りて、二人分の飯を作り、食べている。

「ング、ング。プハアツ！！！！ご馳走さん。いやあ、久しぶりに美味しい飯食えたわ、おおきに、天兄ちゃん」

「はは、賄い飯でそこまで満足してくれるのは嬉しいな」

そういつて、食器を一纏めにする。此処にいるという事は客だろうか？それとも、裏の人間なのか。

「なあ、兄ちゃんはコツチ側なんか？」

唐突に聞いて来る。

「どうだろうな。大まかな事情は知ってるけど、身体能力とかは一般人だよ。知識としても人外や魔法使いとか、そういう御伽噺の物があるって話だけだから」

「そっか。なんか、安心したわ」

そういつて、嬉しそうに笑う。ふと、思い出す。

「そういえば、此処に来る前に月詠に会った」

「マジで？大丈夫やった？」

「いきなり斬りかかって来た」

そういうと、小太郎が苦笑する。どうやらよくある事らしい。

「難儀やつたなあ」

「ああ、だから次はそうなりたくないから、お前に相談だ」

「俺に？」

頷き、小太郎に耳打ちする。

「ええ」

「そう、嫌そうな顔するなよ。俺よりお前の方が効果あるのは分か
ってるんだから」

そういつて、笑う。小太郎は暫く考え。

「そうやな。兄ちゃんには昼飯も晩飯も馳走になったし。分かった、
何とかしてみる。やけど、もし駄目だったら怒らんといて」

「怒らねえよ」

そういつて、笑いあう。瞬間、ラブレスが唸り始める。

「どうした？」

普段から大人しいラブレスが此処まで唸るのはおかしい。なにか

あつたんだろうか。

「月詠とか千草姉ちゃんの匂いがする。ちゅうことは」

「襲撃か。タイミングは申し分ないけど、無謀じゃないか？」

「もう、形振り構ってられないみたいやな」

頭を掻く。立ち上がり、部屋を出ようとする。

「一般人の出る幕やないで？」

「分かってるよ。けどな、此処は俺のもう一つの家でもあるんだ」

振り返り、笑う。

「人さまの家に土足で上がり込んだ奴らに一つ説教しなくちゃ」

そういうと、小太郎は一瞬呆けた後、笑い始めた。

「やっぱ、面白い兄ちゃんやな。普通、ビビるで？」

そういつて、小太郎がこっちに来る。

「じゃあない。いっちょ、兄ちゃんの護衛でもやるか」

「んじゃ、報酬は俺の飯で」

「それ、ええな。乗ったわ」

笑いあう。さて、行きますか。

Re・No:29「ジークフォーゲル 鬼神」

「うーん、よく出来てるなあ」

目の前に置かれている石像を叩く。

「兄ちゃん、それ石化した人間やで？」

「マジで！？石化ってステータス異常。現実にあるんだな」

『金の針』は何処だ？そんな事を考えながら、外に出る。

「あ、皆さん。大丈夫でしたか？って君は！？」

「おー、なんや仰山おるなあ」

ネギが驚いている。俺が軽く説明すると簡単に納得した。

「俺としては嬉しい限りやけど、ネギ言ったか？身内の言葉でも普通は疑うもんやで？」

「自分で自分の立場を悪くするなよ。それで状況は？」

「えっと、屋敷の大多数の人たちが石になってしまいました。無事なのは丁度屋敷を離れていたタカトさんだけです」

「正確にはワシ自身、屋敷の者じゃないから屋敷の者は全滅じゃ。まあ、あの程度の石化なら問題はない。問題は木乃香嬢が攫われた事じゃ」

「申し訳ありません。私が不甲斐ないばかりに」

「すみません」

二人して謝る。俺はため息を吐く。

「謝ってる場合か？ネギと爺さん。アスナに桜咲、龍宮は近衛を追って助けて来い」

「天さんはどうするの？」

「ちょっとやらなきゃならない事が出来た。ラサティ、リイリア、小太郎、ノーマは俺と一緒に用事を済ませる」

「分かりました。その、気をつけて下さい」

そういつて、ネギ達が走りだす。それを見送ってから。

「ノーマ、^{リアクト}同契するぞ」

「今からか？」

「ああ」

そういつて、見上げる。そこには見慣れた人影と見慣れない人影が一つずつ。

「同契しとかないと、ヤバそうだ」

「……………そうだな」

ノーマにしては珍しく、答えに間があった。

「リイリア」

「うん」

俺と同時にラサティとリイリアが同契する。薄々感づいていたけど。まさか、本当にリイリアがエディルレイドだったとは。

「先ずは説得からだ。任せたぞ、小太郎」

「お、おう。任せとき」

少し緊張気味に答える小太郎。さて、上手くいってくれど助かるんだけどな。

「もう、追ってきた」

「なんやて？アイツ等、足止めもしてくれへんのか!？」

「いや、人数から見て二手に別れたようだね」

二人の会話が聞こえる。

「このかさんを返して貰います」

「ネギよ。この場合は問答無用で構わんぞ」

でも、いきなり殴りかかるのは、ちょっと。

「それに二人の内、どっちかが石化の能力を持っているなら解除してもらわないと」

「それを了承する奴らか？」

「まあ、普通は突っぱねるね。もしくは石化の解除と交換に逃げる、という手もある。といっても、実際あの手の呪文はそこら辺の治療を専門とする術者なら簡単に解く事が出来る筈だよ」

そうなんですか！？

「とにかく、今はお嬢様を取り戻すのが先決です」

「う、うん。そうだね」

そういつて、構える。するとお姉さんは顎に手を当てて。

「仕方ありまへんな。少しだけお嬢様の力を借りまひよか」

そういつて、何か呪文を唱えると、僕たちの周りに妖怪が現れた。

「え〜と、小太郎はん。よく聞こえなかったのもう一度、仰ってください」

月詠の頬が赤い。そりゃ〜、好きな男が。

「俺はお前と闘いたくない。俺の所に来い！！！！！！」

等と、告白まがいの事言われたら、そうなるわな。

「き」

「き？」

次の瞬間、黄色い悲鳴が『轟いた』。思わず耳を塞ごうとするも羽になっている為、塞ぐ事が出来ない。というか、これはもはや音波兵器だ。なんで、隣の黒尽くめは平然としていられるんだ？

「に、兄ちゃん。言う通りにしたけど失敗か？」

「い、いや多分、成功だ」

そういうと、屋根から飛び降り、華麗に着地。思わず身構えるラサティ。

「やっと、やっとっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ」

つつつつつつつつつつつつつつつつとウチの
気持ちを理解してくれはったんですね。ウチ、ウチ、感無量です
~~~~~  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
」

叫びと同時に小太郎に跳びつく月詠。やっと、とか言っていたが、  
小太郎の話を聞くと、二人は会って一か月も経ってないという。と  
いう事は月詠の一目惚れ。小太郎はよく分からないようだ。まあ、  
惚れてからアタック早くないか?と言った所で。

「恋は先手必勝です!!!!!!!!!!」

とか、言われそうだ。

「さて、形勢逆転だけど。どうする?」

「相手はジークフォーゲルだ。油断するな」

「知ってるのか?」

「.....まあ、な」

なんとも歯切れが悪いな。

「まあ、話したくなつてから話していいぞ」

「聞かないのか?」

まったく。

「先ずはコイツを倒すのが先決。それにもし、お前が知ってる情報で俺達がビビったら駄目だろ？」

「誰がビビるか！！！！！！」

「ハモるな。それと小太郎。月詠に抱きつかれたままだと威厳ないぞ？」

『まったく、実は私も組織の事は聞いた程度にしか分かん。取り敢えず、エディルレイドを捕獲する組織だと考えていい』

「アークエイル、という事か？」

また知らない単語が。

『いや、アークエイルは保護及び管理の組織だが、ジークフォーゲルは捕獲を目的としている』

「どついつ事だ？」

成る程、そういう事か。

「つまり、捕獲したエディルレイドを軍事利用する為の組織か」

『そういう事だ。ジークフォーゲルは全てのメンバーがケタ違いに強い。気をつける』

「了解。にしても、律儀に待ってくれるな。意外といい奴、かな？」

そついうが、相手は無表情。というより、表情があるかどうか



疑問だ。まだ、茶々丸の方が、表情豊かだぞ？そう思っていると、男が降りてきた。そして持っていた太刀を抜く。

「俺はレグジス。ノーマ、そしてその同契者<sup>プレジャー</sup>。貴様等をエディルガーデンに連れ帰る。それが俺の任務、刃向う者は斬り捨てる」

「エディルガーデン？」

また聞き慣れない単語が。いや、そんな事考えている場合じゃないな。コイツは色々とヤバそうだ。

「勝てないかも」

『最初から諦めるな』

「そうだ。お前はフィロに勝ったんだ。自信を持って」

勝てたといってもアレは痛み分けに近いからな。

「来るで、月詠離れてくれんか」

「了解です」

月詠が離れた瞬間、レグジスが動く。幸いにも、スロー再生は出来る。これなら大抵の攻撃は予測できる。そう思い、レグジスの攻撃を視る。

「ど、どどどどうしよう!？」

「まあ、落ち着きなよ先生。今は先生が張ってくれた障壁で敵は何もできないんだから」

そういつて、先生を落ち着かせる。先生といつても、所詮はまだ子供。しかも実戦経験も皆無に等しい。これで、周りには屈強な妖怪がズラリと並んでいるんだ。動揺するな、というのが無理だろう。

「さて、先ずどうするかだが」

「先ずは二手に別れるのがいいんじゃないか？」

「ふむ、定石じゃの。して、誰が残る？」

「えっと、僕が「却下」た、龍宮さん？」

「君の目的は此処にいる鬼の掃討かい？違っただろ？」

「そ、そうでした」

「此処に残るのはワシと龍宮嬢さんでいい。他はネギの箒に乗って、先に行け」

「えっと、コレは杖です。それに定員は二人が限界ですから、ちょっと」

「んじゃ、刹那を乗せていけばいい。確か、バクティオー仮契約した者は転送できるところ？」

「それなら、龍宮の姐さんと刹那の嬢ちゃんもアニキと仮契約すればいいじゃねえか」

「断る」

「お断りします」

「なんで?! つか即答!？」

まったく、何を考えているのだ、このオコジヨは。

「確かに戦略上、仮契約すれば私達の戦力は飛躍的に上がる。だが、その分、先生の負担も大きくなる。それに私も刹那もある程度闘いを知っている。補助はいらない」

まあ、これは建前で子供とキスはしたくない、というのが本音だ。どうせ、キスをするなら。と思考がズレたな。

「速度は落ちるが、刹那を乗せていけ。大丈夫、刹那は『胸が』ない分、私より軽い」

「鬼より先にお前が斬られたらしいな」

怖い、怖い。刹那は咳払いを一つして。

「とにかく、先に行くのは私とネギ先生。後から明日菜さん。此処の鬼を掃討したら、龍宮と天斗さんで、いいですね?」

「はい!!」

「任せて!!!!」

「まあ、時間は掛からんじやろう」

「助けに行くのが面倒だから、さっさと終わらせてこい」

言葉を返す。そして風の障壁が消えていく。

「道はワシが作ろう。ネギは後ろを気にせず、行け」

「邪魔をして来る者は私が斬り捨てます。気にせず、全力で飛んでください」

「分かりました」

風が完全に消える瞬間、天斗さんの両手に、目に見える程の『気』が集まる。

「ハアッ!!!!!!」

両手に集めた『気』は竜巻のように妖怪を飲み込む。

「行きます!!!!!!」

声と共にネギ先生が飛び立つ。竜巻が収まると、妖怪が見え始めた。

「今ので50は吹き飛んだかな？」

「ふむ、目算でざっと300、一人辺り100がノルマか。ちと物足りんの」

「えっと、私ノルマ達成できるか疑問なんだけど」

「大丈夫だ。私も天斗さんもいざという時にはフォローする。存分に闘え」

そついうと、不安そうだった表情が明るくなる。

「さて、皆で鬼退治と洒落込もうか」

生憎、私は御伽噺に出て来る武器では闘わないけどね。

「っ!？」

スローでも、かなりの速度で襲いかかる剣閃を避ける。

「らあっ!!!!!!!!!!」

横から来た小太郎の一撃を空いている片手で受け止め、背後から来る月詠の二刀を自らの刀で弾く。

「フッ！……！」

体勢が崩れた瞬間を狙ったラサティの一撃をバックステップで避ける。

「あう、また避けられました」

「即席でも結構、ええ感じやと思ったんやけどな」

「此処まで、実力が違うと悔しさを通り越して素直に称賛を贈れるよ」

「まっただ」

そういつて、光の羽を飛ばす。それを横に跳んで避け、追撃の羽を弾く。かなりの速度なのにそれに追い付く反射神経がおかしい。本当に人間かどうか怪しいな。

「行くぞ………」

刃が煌めく。殆ど勘でしゃがむ。瞬間、首があつた位置に刀が擦り抜けた。俺は生け捕りじゃなかったっけ？スロー再生は出来る。だが、そのスロー再生を持ってしても、刀身が霞む程の速さで動いているのだ。俺の身体能力じゃ殆ど反応出来ず、勘に頼っている。もし、一步でも対応が遅れたら死ぬ。

「ハアッ！……！」

ラサティが前に出る。その隙に一步引いて、後ろから光の羽を撃

ちだす。ラサティがバックステップをした途端、羽が着弾した。直前までラサティの背後に隠れるように撃ちだしたために相手はいきなり光の羽が現れたと錯覚するだろう。着弾、土煙を上げる。

「これで終わってくれと嬉しいんだけどな」

「世の中、そんな甘い物が」

ラサティが返す。煙が晴れると額から血を流したレグが立っていた。

「うーん、なんだか手足斬り裂いても襲いかかってきそうです」

「やめい。想像するだけで嫌だ」

そういうと、いきなり聞き慣れない電子音が鳴った。なんだ？と思ったら、レグが懐から装置を取り出す。

「俺だ」

『ありやりや？随分やられてるね。そんなに手強い？』

通信機か。話をしているのは子供だろうか。

『ふーん、成る程。レグをそこまでやるなんて大した奴らだね。だけど残念。時間切れだよ。直ぐに戻って来て』

「ノーマはどうする？」

『元々は視察が目的で来たんだ。確かにお土産は欲しいけど、仕方

ないね。最後に一回だけ、攻撃していいよ。それで、死んでも死ななくても、帰って来て。トアも待ってるから』

「了解」

通信を切り、装置を仕舞うレグ。瞬間、悪寒が走る。

「チイツ！！！！！」

勘のままに、同契を解いて、ノーマを投げ飛ばす。そして俺も横に跳んだ。

「づつ！！！！！！！！」

「アマトツ！？」

瞬間、肘から先の感覚が消え、次いで焼けるような痛みが襲いかかった。更に視界が霞む。最後に見えたのは肘から先が無くなっている自分の右腕だった。

「これで、百体。私のノルマは終わったよ」

「中々早い。流石といった所じゃな」



そういつて、悠然と歩いて来る天斗さん。彼のノルマはもう、数分前に終わっている。改めて、彼は英雄だと実感する。実力が違う。戦略が違う。なにより、経験が違う。天さんの話を聞く限り、天さんが生まれる前には呉服屋を営んでいたという。という事は最低でも30年のブランクはあった筈だ。更には老いもある。これで、全盛期の彼だったら、と想像するとゾツとする。

「本当、貴方が敵じゃないのが救いです」

「何を言うかと思えば、ワシは別にお主らの味方でもないぞ？ワシはワシの味方じゃ。まあ、天は違うみたいじゃがな」

そういつて、笑う。自分の味方が。魔法使いに聞かせたら、さぞ怒るだろうな『自分勝手だ』と。だが、それは彼らも同じだろう。世の為、人の為、といったてはいるが、皆が皆ネギ先生のように善人ではない。そも、善人などいるかどうかも怪しい。

「あれ？」

神楽坂の言葉に振り向く。いかな、考えが脱線する。何時もなら天さんが脱線する前に考えを正常に戻してくれるけど。

「呼びだしかな？」

「そうみたい。後、お願いします」

神楽坂が消える。瞬間、ネギ先生が向かった先に光の柱が立った。そういえば、天さんは大丈夫だろうか？

「敵を追う場合、後ろからの奇襲はかなり有効な手段。まさか、素

人の天さんがそんな事わかんとは思えないけど」

あの人、勘だけは鋭いからな。少しだけ不安はあるけど、残ってるのはラサティと小太郎、という天斗さんが捕まえた少年が一緒にいる。

「まあ、安心かな」

さて、私は私の仕事をしなくちゃ、残っているのはかなり実力者の鬼。残りの弾丸で足りるかな？

「さて、やるかの」

と、天斗さんが前に出る。そして左腕を右腕の手首に添える。瞬間、山吹色の光が溢れる。彼の右腕に『気』が集中しすぎているのだ。あれでは手が持たない。と思ったが、どうやら、手を傷つけない様にコントロールしている様だ。

「実戦で使うのは久しぶりの代物だ。さて、昔のように上手く使えるかな？」

そういった瞬間、彼が消えた。いや、速すぎて分からないが走っている。本当に英雄という人種は恐ろしい。

「まさか、天さんもこんな物を使えるのかな？」

そう思い、少しだけ嫌になる。もし、使えるようになり威力調整でも出来たら、毎日の突っ込みがソレになりそうだ。まあ、それ相応にやり返すけど。

「はあ、また思考が逸れた」

そういつて、背後に迫っていた鬼の額を撃ち抜く。一度息を吸い、吐いて気持ちを切り替える。

「終わったら、お腹一杯甘味が食べたい」

天さんに頼んでみるか。あの人なら面倒だ、とか呟きながら作ってくれるだろう。そう思うと、俄然やる気が出た。まったく、現金な物だ。

「間に合いませんでしたね」

「ええ。ですが、お嬢様は取り返します」

「けど、どうやるんだ？相手はあの鬼神とよく分からねえ子供だぜ？」

「僕の呪文の中で一番の物なら鬼神にもダメージはあると思うけど、時間が掛かるね」

でも、それ以外なら何とかなるかな？そう考え、アスナさんを呼び出す。

「刹那さん。アスナさん。これから話す事をしっかり聞いていてください」

かなり分の悪い賭けですけど、やらないと。

「マジでやるの?」

「かなり無茶ですが、今の所それが良案ですね」

「よっしゃ、先ずはアイツをこっちに誘き寄せる訳だけど。どうするんで?」

「こつする!!!!!!」

無詠唱で『魔法の矢』を放つ。やはり、矢は弾かれ消し飛ぶ。

「君はもう少し、利口だと思っていたんだけどね。ネギ・スプリングフィールド」

「刹那さん。お願いします」

「はい!!!!!!」

刹那さんが滑るように駆ける。

「ふむ、だけど、彼女一人で何が出来るんだい?」

「それは、君には関係ないよ」

言つと同時にカモ君が煙幕を張る。

「煙幕を張って奇襲か。中々、手が込んでるね」

「当たり前だよ。僕は君と違って、強くないし、経験もない」

煙幕に隠れながら、先程決めた位置に向かう。彼が僕に気付く。

「だから、こうやって君に対抗するしかない」

詠唱を始める。

「今更、詠唱かい？遅いよ」

腕を伸ばす彼の目の前にアスナさんがハリセンを振りかぶって現れる。

「っ!？」

「やああああああつ!!!!!!!!!!」

そして下から掬いあげるようにフルスイング。ガラスが碎ける様な音と共に彼が舞い上がる。

「ネギ先生!!!!!!!!!!お嬢様は助きました!!!!!!!!!!」

刹那さんの声が聞こえる。準備は全部整った。僕は彼目掛けて。

「雷の投擲!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

雷の槍を放つ。槍は彼を突き刺し、一直線に、鬼神にぶつかる前

に、鬼神の障壁にぶつかる。

「成る程、君が狙っていたのはコレか。だが、残念。威力は充分でも障壁を突き抜ける程の速度は無い様だ」

まるでダメージを受けていない様な姿に驚く。けど、そんな事、今はどうでもいい。今は。

「ッ！？何故、そんなに早く魔法を？……………成る程、遅延呪文か」

そう、威力は充分でも速度がない。ならば、それに速度は充分でも威力が無い魔法を上乗せすればいい。簡単な事。けど、実際やるのは簡単じゃない。でも、やらなければ僕たちは勝てない。

「解放！！！！雷の暴風！！！！！」

雷の竜巻が槍の後部にぶつかる。雷の槍は徐々に障壁を食い破り、ついに障壁を破る。次いで、轟音が辺りを支配した。

「ふむ、あちらにもそろそろ向かった方がいいじゃろう」

響いて来る音に耳を傾けながら、鬼達に振り向く。

「此方も終わりにするか」

「はあ、はあ、はあ、はあ」

荒い息を整えながら、空を仰ぐ。そこには、人間でいう、心臓部分に雷の槍が突き刺さった鬼神の姿があった。

## Re・No:29「ジークフォーゲル 鬼神」(後書き)

どうも、作者です。前回の投稿による感想が書かれてなくて、ちょつと悲しい気分です。まあ、皆さんも色々都合があるのは重々承知ですけど、感想が無いとちょつと悲しくなります。さて、今回のバトル編。エレメンタルジェレイド『蒼』に出てきたジークフォーゲルの超人。レグジス登場です。因みに作者はNARUTO好きだったりします。まあ、ネタが幾つか散りばめられてますから、鋭い人だとすぐ分かりますけど。因みに次回はしっかりとエヴァさんの活躍もありますから、期待しててくださいね。では、次回も御期待下さい。



Re・No:30「最強の魔法使い」

「アマト……！！……おい、アマト」

「ノーマ、落ち着け。アマトは気絶してるだけだ」

そういつて、僕はアマトの右腕に布を巻いて止血する。

「ツクヨミ、見つかったか？」

「はい、そんなに遠くに飛ばされてなくて安心しました」

ツクヨミが持ってきた物、アマトの右腕を地面に置く。

「後は」

「ウチに任せてください」

振り向くと、コノハさんが立っていた。けど、雰囲気は全く違う。

「直ぐに治療します。離れてください」

言われた通り、離れる。コノハさんがアマトの横に立つと、地面が淡く光る。

「アマトは助かるのか？」

消え入りそうな声でノーマが聞く。コノハさんはノーマの頭を撫でて。

「天ちゃんはおうちの家族です。絶対に助けます」

「チツ、子供だと思って舐めていましたわ。さっさと消しますか」

そう思って、スクナに命令を出そうとして気付く。スクナの動きが鈍い。どういう事だ？鬼神はそこらにいる鬼よりも回復力が高い。たかが、上級魔法一発、受けた程度で動けない訳ではない。では、何故か。そう思って、槍が刺さった部分を見る。

「成る程、少しは考えましたな」

槍が刺さっているのは心臓部分。スクナも生物である以上、心臓は確かにある。確かに急所であるそこに攻撃を受ければ、どんな物でも動けなくなる。だが、スクナはその驚異的な回復力で心臓を修復できる。なら、直ぐに、とはいかないが、動ける筈だ。ではなぜ、動きが鈍いのか。

「雷。電気か」

生物は脳から筋肉に電気で信号を送る。そして受け取った電気信号で行動する様に出来ている。それを少年が放った雷の槍がスクナの行動を阻害しているのだ。

「これは、時間が掛かりますな。ですが、あの子たちにはこれで万策尽きた筈。もはや、時間の問題ですな」

「そうだ。時間の問題だよ」

驚き、見上げると、そこにはメイド服に身を包んだ少女と漆黒の少女が佇んでいた。

「今晚は。いい月夜だな」

「だ、誰や……………！？」

フッフッフッ、驚いてる、驚いてる。最近私の事を子供扱いする奴の所為でこういった扱いは新鮮だ。

「私か？通りすがりの吸血鬼だよ」

「同じく、通りすがりの従者です」

ほう、茶々丸もノリが分かって来たな。

「く、こんな時に」

焦った様な声。視線を下げると、その原因が分かる。コレを坊や

がやったのか。私の時もそうだが、ちゃんとした実力の魔法使いが教えれば、坊やは大化けするかも知れないな。それも、父親をも超える様な。まあ、まだ先の話だろう。

「さて、私の知り合いによくもまあ、好き勝手やってくれたみたいだな。覚悟は出来ているんだろう?」

そういうと、女が札を取り出し、式神を呼びだす。確か、前鬼、後鬼という従者の日本版だったか。

「茶々丸。あの着ぐるみは任せた」

「了解です。マスター」

迫る式神をひらりとかわし、術者に近づく。

「くっ」

「ふん、やはり召喚術は光る物を持っているが、実力は並か。これでは楽しめないな」

そういつて、魔力を乗せた手刀を繰り出す。何とか、防御札でガードするが、勢い余って吹き飛んでしまう。

「あぐっ!?!」

運悪く、地面に激突し、気絶してしまう。

「つまらん、茶々丸。この粗大ゴミを処理する。手伝え」

「了解」

即座に茶々丸は背中に装備してあるライフルで粗大ゴミに結界弾を撃ち込む。

「え、エヴァンジェリンさん？」

坊やが息も絶え絶えにやって来る。

「まさか、鬼神相手にここまでやれるとはな、驚いたよ」

「え？」

「次は貴様が驚く番だ。本当の魔法使いがどんな物か教えてやろう」

さて、覚悟はいいかな？

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い 我に従え  
氷の女王 来たれとこしえのやみ えいえんのひょうが！！！！！」

絶対零度の一撃が一瞬で鬼神を氷漬けにする。坊や、驚くのはまだ早いぞ？

「全ての命ある者に等しき死を 其は安らぎ也 “おわるせかい”  
フツ、砕ける」

指を鳴らし、氷漬けになった鬼神を粉々に砕く。

「ふむ、物足りん。もう少し骨がある奴とやりあいたいのだが」

そう思つて視線を巡らすが誰もいない。

「誰もいない」

逃げたかな？そう考えながら坊やたちに近づく。

「す、凄いです。エヴァンジェリンさん。あの大きな鬼神を一瞬で」

「本当に凄いわ！！！見なおしちゃった」

「ハッハッハッハッハッハッ！！！！！そうか、そうか。もっと褒める。讃える。拜めるがいい」

うむ、やはり気分がいい。京都来てよかった。

「み、皆さん。大変です。山吹さんが」

桜咲が慌ててやって来る。アマトがどうかしたのか？

「父ちゃん。肩車して」

「よし」

「お母さん、今日の晩御飯なに？」

「今日は貴女の大好きなハンバーグよ」

此処は公園？目の前には、昔の俺？……………これは夢か。昔の俺は不思議そうな顔で友達を見ていた。この頃の俺は『両親』という存在を知らなかったからな。もの心ついた時には父も母もいなかった。けど、代わりに祖父さんと祖母ちゃんがいたから寂しいとは思わなかった。けど、何故だか友達が父親や母親と帰る所を見ると、無性に不安になってしまうのだ。それを我慢する為にズボンの裾を握りしめていたのを覚えている。

「天ちゃん。帰るわよ」

懐かしい声が聞こえた。祖母ちゃんの声だ。昔の俺は嬉しそうに祖母ちゃんの方に駆けていく。

「ん……………」

そこで、目が覚める。なんだか凄く懐かしい夢を見ていた様な気がしていた。

「あ、それロン」

「ぬあ！？マナー！！さっきからお前しか上がってないけど、もしかして何か仕込んでないか？」

「ハッハッハッハッ、何を言ってるんだい？私は正々堂々やっていくよ？」

「その、白々しい笑顔が気に食わん」

「あ、あの皆様。此処には天さまがいるのでもう少し静かに」

「お前も同罪だ、茶々丸。なに、人が寝てる部屋で、んな音がする物をやるなっ!!!!!!!!!!」

近くにあったハリセンで、皆を叩く。さて、どうしてやろうか。

「何処に行くんだ？」

「ノーマさん」

朝、静かに出ていくセツナを見付け、声を掛けたのだ。

「その、旅に出ようかと」

「皆に挨拶抜きでか？」

「その、急いめますから」

腕を組む。

「確かに、いきなりだな。それにそんな事をすれば、アマトが悲しむ」



そういつと、セツナの身体が強張る。

「アイツの事だ。勝手に出て行ったと知れば、世界中探しまわるぞ？」

そういつと、驚いて振り向く。

「なんで、他人の私にそんなことを？」

「さあな。私にも分かん。だが、アイツがお前の事を家族のように思っているのは確かじゃないか？」

「家族、ですか」

そういつと、いきなりセツナの背中から翼が飛び出す。

「こんな姿を見ても、山吹さんは私を家族と言ってくれるんでしょうか。こんな化け物の私を」

そういつて、自嘲気味の笑顔を見せる。それが凄くムカついた。

「化け物、か。そういつからは昔からそうやって、扱われていたんだな」

セツナは答えない。

「羨ましいな」

「っ！？貴女に何が分かるんですか！！！！！！」

翼を仕舞ったセツナが吠える。心なしか声が震えている。

「ああ、分らん。モノ扱いされ続けた私にとって、まだ生き物として扱われたお前は羨ましい」

「モノ……………」

ため息を吐き、自分の核石を見せる。

「私はエディルレイドという武器に変身する種族だ。しかも、既存の武器などより遥かに強い武器に変身できる。此処まで言えば、人間にとってエディルレイドがどんな存在か、分かるだろう？」

セツナは答えない。しかも、私の事を悲しむような目で見て来る。それがどうしても気に入らない。知らず、私は両手でセツナの襟を掴んで引き寄せていた。

「私はな、もの心付いた時から、人間に売り買いされていた。お前は知らないかも知れないが、エディルレイドの中でも私は希少な存在だ。それにより、私の力を狙う者もいた。私をぞんざいに、それこそ物のように扱う者もいた。昔の私はそれが当たり前だと思ってた。けど、それが違つと分かった私は人間を憎んだ。私自身の手で人間を殺した事すらある。今でも、私は人間が嫌いだ。大嫌いだ！……………」  
けど、そんな私を受け入れてくれた奴がいた」

手を離す。

「山吹さん、ですか？」

「ああ、そうだ。アイツは私をエディルレイドと分かりながら、受け入れた変な奴だ。最初はこういう人種だと思って、利用しようと考えていた。けど、アイツと一緒に住んでいる内にそんな考えを捨てていた。なんでだろうな、私は人間が嫌いなのに、今でもそうなの、どうしてもアマトを嫌いになれない。クラスの奴等だって同じだ。嫌いな人間なのに、一緒にいると凄く幸せな気分になれる。多分、私は好きになっているんだと思う。アマトやクラスの皆を」

「でも、私にはお嬢様を守る資格なんて」

そういつて、顔を伏せる。

「自惚れるなよ？誰かを守る資格なんて誰も持っていないんだ。貴様のそれは唯怖くて逃げたい言い訳だ。そもそも、資格なんてのは与えられる物や受け継がれる物じゃない。自分で掴み取る物だ。お前はそれでいいのか？簡単に楽な道を選んで。お前の決意はそんな物だったのか？お前にとってコノ力はそんな簡単に投げだせる事だったのか？」

「そんな事は……………」

反論しようとして、言葉を止める。

「そ、それにだな。お前がいなくなると寂しくなる。それに、コノ力やアマトが悲しむ」

「せつちゃん、大変や」

等と全然危機感が感じられない声を出しながらコノ力がセツナに

突撃した。

「どうかしたのか？」

後からやってきたアスナに聞いてみる。

「それが、ホテルに飛ばした私達の式神が暴走してるらしいの」

「という訳で僕たちも早く帰って何とかしないと」

そういつて、走り出す面々。苦笑し、それを眺めながら。

「なあ、セツナ。多分、コイツ等は私やお前の素姓を知っても態度は変わらない。そう思わないか？」

そういつと、嬉しそうに笑い。

「そうですね」

さて、帰るか。

「おお、此処におったか」

タカト爺さんがやって来た。

「ノーマ、といったかの。お主らに聞かせたい事がある。一度宿に戻ってから店まで来てくれぬか？」

「？ああ、分かった」

「ちょっと、ノーマ。早く来なさいよ」

「分かった。今行く。じゃあ、後で」

そういつて、走る。

## Re・No:30「最強の魔法使い」（後書き）

どうも、作者です。今回は鬼神撃破。そして刹那説得までです。

刹那をノーマが説得はやってみたいなと思っていました。方や化け物扱いされた少女と方や道具扱いされた少女の会話。同じように全く違う二人の会話を書いてみました。そしてやはり、シリアスだけなのは詰まらないので、ギャグも入れました。次回は修学旅行編も最後。山吹一族の真相です。やっと、天の模様を解説できる。次回は少し、短めだと思います。御期待下さい。そして作者に感想をください。あまりに無反応だと、皆さんが満足してるのかまったく分かりません。ですから一言でもいいので作者に感想をください or z

## Re・No:31「先祖様の話」

「なにっ！？アマトの実家は『山吹屋』というのは本当なのか？」

「そ、そうですけど。どうしたんですか、エヴァンジェリンさん」

エヴァンジェリンさんは悔しそうに地団駄を踏んでいる。これが、鬼神を倒した吸血鬼なんでしょうか？

「マスターは『山吹屋』の着物がとても気に入られているのです」

「そうだ。だからアイツがそうだと最初から思っていれば、色々と出来たのに」

「何をですか？」

聞くと、何故だか憐れむような目で指さし。

「決まっているだろう！！！！アマトを通して着物をタダで仕入れる為だ」

ドーンッ！！！！と聞こえそうな迫力でエヴァンジェリンさんが言いました。

「それ、いいな」

「よくないですよ。龍宮さんもエヴァンジェリンさんもアマトさんに迷惑です」

「ふん、アマトの迷惑など知るものか、私が満足できれば、それでいいんだ」

そういつて、高笑いするエヴァンジェリンさん。すると、スパーンッ！！！！と誰かがエヴァンジェリンさんの頭をハリセンで叩いた。

「だ、誰だっ！！！！！！」

涙目で振り返ったエヴァンジェリンさん。そこにはハリセンを持った茶々丸さんが立っていました。

「成る程『ハリセン』とは不思議な物ですね。マスターといえど、簡単に攻撃できるとは」

「ち、茶々丸！！！！お前、主人に逆らっていいとでも「なんでやね〜ん」おごっ！？ち、茶々丸！？もう少し弱く「なんでやね〜ん」はうっ！？ウガーツ！！！！！！！！！！」

エヴァンジェリンさんが怒って飛びかかろうとしましたが、茶々丸さんがハリセンで迎撃しました。何処となく茶々丸さんが楽しそうですね。ふと振り返ると、このかさんが何やら、難しそうな顔でノートを読んでいた。

「何を読んでいるんですか？」

「……………フムフム……………ナルホドナ……………」

「昨日、コノハに貰ったそうだ。内容は初歩の治療術らしい」



本を読むのに没頭しているこのかさんの代わりに、このかさんの手を引いているノーマさんが答えてくれました。へえ、って。

「いいんですか！？確か、詠春さんはこのかさんに魔法を教えるのはあまり気乗りしてなかったような」

「流石に今回の事件でこれでは駄目だと感じたんでしょう。それで木乃葉さまと話しあって、治療術と結界術など、後衛専門の陰陽術を覚える事にしたんです。本当は直に教えた方がいいんですけど、本山は色々とドタバタしていて、人手が足りない様なんです。ですから今だけ、書物でお勉強、という訳です」

「ん？どないしたん？」

「え、いえ。何でもないです。勉強の邪魔してすみません」

「気にせんでええよ」

そういつと、またノートを見始める。僕も集中するとああなるのかな。

「お前らー！！！！！！早く来ー！！！！い」

エヴァンジェリンさんに呼ばれ、慌てて向かう。

「す、すみません」

「まったく、私を待たせおって。茶々丸」

「はい」

スパーンツという音と共に頭を叩かれた。エヴァンジェリンさんが。

「私じゃなく、坊やだ。坊や!!!!!!!!!!」

「失礼しました。ですが、リアクションはマスターの方が面白いので結果オーライです」

変わったな。これもハリセンの影響なんだろうか。

「お代わりっ!!!!!!!!!!」

「うちも、頂きたいです」

「はい、はい」

差し出されたお碗を受け取り、炊けた米を盛って（特盛り）二人に渡す。小太郎と月詠はまた食事を再開する。はあ、大目に炊いているとよかった。

「なんで、うちまでこんな所で食事を？あ、うちもお代わり」

「というか、なんで今回の主犯が家で昼飯食ってるんだ？」

お椀に米を盛りながら、呑気に茶を啜っている爺さんに聞く。

「それは追々話す。千草嬢も快く引き受けてくれたしの」

「ウチも流石にやり過ぎだと思いましたし。ご飯も美味しいから引き受けます」

俺の飯が判断材料かよ!?

「お代わり」

「お前ら、もう少しゆっくり食べっ!!!!!!!!!!」

俺が食えんだろっ。

「兄ちゃんの飯が美味すぎるんや」

「そうです。ついつい、箸が進んでしまっんです」

くそぉ、そんな事言われたら、キツく注意できないだろうが。

「ほら、飯は逃げないからもっとゆっくり食べる。消化に悪い」

「それと、もう少し遠慮したらどうなんだ？」

「姉さん、ご飯五杯目だよね？」

「いや、これはその、そうだ。美味しいご飯を作るアマトが悪いんだっ!!!!!!!!!!」

「フフッ、二人とも程ほどにね」

「  
「  
はあ  
い  
」  
」

ああ、なんかいいな。この空気。何時までも続いて欲しいな。

「アマト」。私が来てやったぞ！！！！！！！持て成せ！！！！！！！」

分かつていたよ。絶対邪魔しに来るつて。でもさ、もう少し遅く来てくれないかな。

「お？なにやら、美味しそうな香りが」

ああ、凄い事になりそうな予感がヒシヒシと。そして皆が居間に集まった瞬間、その予感が的中した。

「んぐ、成る程。コイツ等の方針を決めるより、本山の方を先に何とかしたい。で、厄介払いか」

「まあ、そんな所だ」

ふうん、本山も大変なんだ。へえ、この煮付けは中々だな。

「なあなあ、この煮付けってどうやって作るん？」

「あ、私も教えて欲しいです」

「よければ、私にも」

「ん？これか？これはだな」

天さん。なんで私を見るんだい？

「いや、料理する女性が三人しかいないのがな」

「女性が料理するというのは前時代すぎる。今の世の中、レトルトがあるから料理する意味もない」

「ふん」

何やら、千草さんがニヤけている。

「なあ、天。たまには女の子の手料理を食べてみたいと思はへん？」

「思うけど、此処で料理が出来るのはリイリアと近衛と茶々丸しかないし。別に今食べなくてもいいかな」

「ふん、なんや一部除いて皆料理は食べる専門か」

「一々勘に触る奴だ。茶々丸、やれ」

「はい」

スパーンツ。エヴァンジェリンがまた叩かれる。

「私じゃない、アイツだ。あのメガネの女だ」

「そうでしたか。ですが、私にとってこのハリセンを使う場合はマスターのみにしろ、と言われているので」

「誰にだ？」

「天さんです」

「アゝマゝト？ 貴様、何人の従者に刷り込みしてるんだ？ って、笑うなあー！！！！！！！！」

腹を抱えて笑っている天さんに跳びかかるも首根っこを掴まれ、宙ぶらりん状態にされる。

「だあゝ、離せこのゝ」

「あれが、本当に『闇の福音』なんですかえ？」

「なんだか、威厳がないな」

それから皆でお昼を食べ終わった後。徐に天斗さんが話し始める。

「さて、そろそろ皆が気になっている事を話すとするが」

そついつて、私達を見る。

「此処にいる者たちは『裏』をある程度知っている者たちか？」

「あ、はい。その、僕のせいなんですけど、皆さん知っています」

申し訳なさそうな顔で喋るネギ先生。その横で苦笑している朝倉と早乙女はちゃんと自覚しているんだろうか。まだ、申し訳なさそうな顔をしている綾瀬や宮崎の方が好感を持てる。え？近衛？本に集中しているぞ。

「ふむ、反省もしておる様じゃし、よかろう。先ずは此度の事件解決。京都の住民を代表して礼を言わせてくれ」

そういつて、頭を下げる。まさか、英雄が頭を下げるなんて、かなりレアだな。それに『山吹屋』は京都の老舗で、顔役といつても過言ではないからな。

「そ、そんな。顔を上げてくださいよ」

「いいじゃないか。お礼を言われてるんだ。素直に受け取るのも礼儀だよ」

ネギが渋々と頷く。

「さて、次にこの子らの処遇じゃが。先ず、犬上小太郎。彼は早い段階で捕まえ、処遇はもう決まっておる」

「まさか牢屋に入れるとか」

早乙女が冗談交じりで喋る。天斗さんは笑って。

「よく分かったの。そうじゃ、小太郎は向こう、三週間ほど能力を仮封印して、牢に入ってもらおう。まあ、牢といっても映画に出て来る古びた物ではなく、綺麗な座敷牢じゃから、安心せい」

「そんな！？小太郎君は僕たちの為に手伝ってくれたんですよ！？」

「ちょっとそれは酷いんじゃないんですか？」

そういうと、天斗さんが困った笑みを浮かべる。

「そう言われてものゝ。この決定はかなり甘い物じゃよ？ワシからも小太郎の罪を軽くするように頼んでこうなった訳じゃし。それにこれは関西呪術協会の総意じゃ。裏を知っているとはいえ、元一般人。しかも、『魔法使い』側の人間が何を言った所で誰も相手にせんわい」

「でも、和睦はしたんですよ？」

「やっぱり、子供は甘ちゃんですな。そんな人の意思が文一枚で変わるんなら、苦労しまへんで。組織の長である詠春さんが決めた事やから、皆表面上は従ってるけど、心の内はウチと同じような考えを持った奴もおる筈やで？」

「そんな」

「皆が皆、竹を割ったような、キツパリとした性格なら、紛争なんて無くなるだろう。哀しいけど、これが現実だ」

「……………」



「次に月詠嬢だが。彼女は雇われの身、しかも神鳴流の剣士、という事で小太郎よりも罪は軽いのだが、何故だか小太郎と同様の罪にしてくれと言われている」

「って、ちよつと待って下さい。何故、月詠さんの罪が軽いんです？」

「それは、彼女が神鳴流だからです。神鳴流は京都で古くから、妖怪の討伐やお祓いを請け負っている仕事です。その為、神鳴流である月詠はあまり罪に問われないんです。しかも、月詠はかなりの腕前。牢に閉じ込めるより、外に出して仕事を受けさせた方が神鳴流にとってはプラスなんです」

「だとしても、納得できません」

「納得しなくてもいいだろう。所詮、人間なんて身内には甘いものだ」

「でも……あれ？なんで月詠さんは小太郎君と同罪になりたんですか？もしかして罪の意識に気付いて？」

何故だか期待の眼差しを月詠に向ける。月詠は、はにかんで。

「だつてえー、小太郎はんと三週間も会えないなんて耐えられません。そやったら、まだ一緒に罪になって、隣か同じ牢に入った方がいいです。ちよつと腕は鈍くなっていますが、別に構いませんし」

頬を染めながら話す月詠。皆が呆れる。いや、小太郎君とネギ先生はよく分かってないようだ。まだまだ子供のようだ。

「それで最後に千草嬢だが。これはかなり異例だな。お主らも納得しないだろうが、心して聞いてくれ」

そういつて、一口お茶を飲む。

「千草嬢は木乃香嬢に陰陽術を教えて貰う事になった」

「っ！？それは

」

「但し、そこでおかしな真似をすれば、刹那嬢、お主が斬り捨てて構わん。それにの、戦闘専門のお主らの事じゃ、誰も大規模な治癒呪文や結界呪文など使えんじやろう？まして、陰陽術となれば、話が変わって来る。それに本山は今回のゴタゴタで人を動かせん。そこで、今回の主犯である千草嬢に責任を取ってもらい、木乃香嬢の教育係になってもらう事になった」

「確かに、私達の中で陰陽術は私しか使えませんが、回復の術も使えません。ですけど反対です。またお嬢様が狙われたら」

「それなら、もう説得済みじゃよ。のう、千草嬢？」

そういつと、千草さんが頭を掻いて。

「最初は不本意やと思ったし、コイツ等頭大丈夫かと疑ったんやけど『アレ』見せられたら、魔法使いに復讐なんて馬鹿らしいと思っただけや。それに今更やけど、ウチのエゴでお嬢様を利用した事のお詫びもありますし」

「そう、ですよ。復讐は何も解決しません、よね？」

なんだか、齒切り悪いな。どうしたんだろう。

「まあ、そういう事や。これから宜しゅう。氣に入らんかったら、斬り捨てても構いまへんえ？ウチは文句言えませんから」

そういつて、笑う。刹那は顔を背ける。刹那、まるで子供だな。

「何か質問はあるかの？無いのなら、次の話をするぞ？」

「あの、次の話って？他にあるんですか？」

「ちょっとした昔話じゃよ」

そういつて、天斗さんは笑う。

「さて、これから話すのは我が山吹のご先祖様の話じゃ。天、木乃香嬢は心して聞くように」

「何でウチまで？」

俺は呆れる。

「お前、俺と血縁なの、忘れてないか？」

そういうと、思い出したのか手を叩く。それに爺さんが苦笑する。

「さて、時は平安まで遡る。先祖は京の都でそこそこ評判のある服屋だったそうじゃ。そんな先祖の前にある日、奇妙な女性が現れたそうじゃ」

「奇妙な女性？」

「うむ、その女性の髪と瞳は太陽の様な輝きを持っていたという。大層美人だそうで、先祖は一目惚れをしたわけじゃ、そしてそれから先祖は彼女に何度も恋文、こいふみ今で言うラブレターを送っていたという」

後ろにいる女子が騒ぐ。

「恋文を送り続けた結果、呆れられたのか、それとも別の理由なのか、返事の文が届いたのじゃ、それに喜んだ先祖は早速、文に指定された丘に向かったんじゃ」

『それで？それで？』

流石に女子だな。この手の話にはかなり食いつく。

「先祖は急ぎ過ぎて日が昇る直前に丘に来てしまったんじゃ。自分の行動に呆れながら丘に行くと、驚く事に女性が丘にいたのじゃよ。聞く所によると、女性は太陽が昇る所を見るのが好きなのだそうだ」

『へえ〜』

男、蚊帳の外。

「それから、男と女性は一日中語り合ったという」

「ええつと、その話がどう繋がるんですか？」

ネギが聞くと、女子たちが一斉にため息を吐く。

「分からないかな。つまり、山吹さんのご先祖様はその女の人とくっ付いたのさ！……！」

「その通り、ただ結婚して、男はある事に気付いたんだ」

『ある事？』

身を乗り出す女子たち。よくあれで、倒れないな。

「女性の右手の甲に石があつたのじゃ。大層美しい黒き石がの」

その言葉にリィリアとノーマが反応する。石？もしかして核石か？だとすると。

「そして驚く事は他にもある。生まれた子供の右手の甲に太陽の紋様が浮かんでいたのだ」

思わず、右手の甲に手を当てる。

「その子供は、不思議な事に戦に出ると常に常勝。つまり負けた事がないという。そればかりか、初めての攻撃を見切り、二度目の攻撃は通用しないという。しかも、習った事もない敵の技をあっさり

自分の物にしたという」

おいおい、何処のチートだ、そいつ？頼むから嘘であってくれよ。さつきから小太郎が好戦的な視線で見えて来るんだけど。まあ、お茶菓子をあげて、誤魔化しているけど。

「それにしても、お約束過ぎない？」

「そうだよね。『何処にでもいそうな人が実は凄い人の子孫』なんて、ネタが古すぎるよね」

笑いながら、喋る早乙女。悪いが、この場に最低三人はその設定の人間がいるぞ。

「一ついいか？その先祖が出会った女性の名前は？」

「ん？確か『ヴェウスーン』だったか？」

「もしかして『ヴェルスーン』か？」

「おお、そうじゃ『ヴェルスーン』じゃ。よく分かったの」

「いや、唯の勘だ」

何やら、ノーマの表情が硬い。

「しかし、世代が重なる毎に血が薄まり、今ではその能力も弱くなっている筈じゃ」

確かに、攻撃がスローになるだけで、他には何もない。それにこ

の能力は意識すれば、簡単に発動が可能で、デメリットがない。といっても、俺の身体能力が並より少しだけ上だから、上手く使えない。つまり『宝の持ち腐れ』である。

「さて、昔話のついでに天に渡す物がある。付いてきなさい」

「ん？ああ」

そういつて、立ち上がり、部屋を出る瞬間、振り向く。そこには全員が立ちあがって驚いた顔をしている。

「俺と爺さんだけだからな？」

そういつて、付いていく。爺さんの書斎に入り、向かい合うように座る。

「さて、ワシに何か隠しておるじゃろ？」

流石は爺さん。何でもお見通しか。

「何から話そうか」

先ずはノーマからかな。そう思つて、俺は爺さんに今までの事を話し始める。

まさか、アマトの祖先にエディルレイド、しかも七煌宝樹である『ヴェルスーン』だったとは。驚きを通り越して、もはや呆れた。もう、これ以上驚かないだろう。七煌宝樹が麻帆良に來ない限り。

「ねえ、ノーマ」

「ん？どうしたリイリア」

「もしかして、アマトさんのご先祖って」

「エディルレイドで間違いないだろうな」

「そつか。なんだか不思議だね。一番身近な人の話なのに全然驚いてない」

そういえば、そうだ。私はアマトがエディルレイドとの混血と聞かされた時、驚くよりも納得してしまったのだ。何でだ？

「どうかしたの？」

「いや、何でもない」

アマトといると感じられる妙な安心感。これは同属と一緒にだから安心していただろうか？自分の事なのに全然分らない。



「成る程。お前も苦労しているな」

「でも、楽しく過ごしてるよ」

そういつて、笑う。爺さんも笑って、後ろの棚から一冊の古びた本を取り出す。

「ほれ」

「何コレ？指南書？」

開いてみると、何やら小難しい単語が並んでいる。

「それは『気』の使い方を記してある本だ。念のためにな」

そういつて、煙管を取り出す。一度息を吸い、紫煙を吐きだす。

「出来れば、お前には裏に關わって欲しくはなかった。だが、やはり世界は思い通りに動かんの」

「何でもかんでも思い通りに動いたら面白くないだろ？それに俺は後悔してない。これだけはハッキリしてる」

そういつと、爺さんも笑う。

「それなら、いい」

そういつて、笑いあう。そして二人で居間に戻ると。

「ええっと、お茶菓子は何処かな？」

「おお！？こんな所に羊羹が茶々丸。早速、茶を淹れろ」

「はあゝ、分かりました」

「待て、茶々丸。今のため息はなんだ？」

「はあゝ、いえ何でもありません」

何というか、人の家で何してるんだ、コイツ等。

「む？おい、アマト。猫のように持ち上げるな。ん？何処に連れていく？」

「取り敢えず、座つてろ」

皆の所に座らせると、茶々丸と一緒にお茶を淹れる。

「勝手に台所を借りて申し訳ありません」

「気にするな。騒がしいけど」

後ろを見る。何というか、昨日まで争っていたとは思えないほど。皆が笑いあっている。

「楽しいから結果オーライだ」

「そうですか」

茶々丸は無表情。けど、何処か嬉しそうな表情をしている。

「所で天さん」

「ん？」

「天さんに貰ったこのハリセンという『武器』中々使えます」

笑顔でそういう茶々丸に苦笑する。それ、武器じゃないんだけどな。

Re・No:31「ご先祖様の話」(後書き)

どうも、作者です。ええーっと、天の先祖はエディルレイドで七煌宝樹。え？王道過ぎる？仕方ないじゃないか。これが作者の限界なんだから。そして能力。写輪眼+ヴェルースンの能力、な感じですね。うっは、自分で考えたけどチートだ。これは酷いwww相手何もできないじゃん。因みに主人公ですが、どんなに強くなっても単体では麻帆良祭時の古と同格か、それ以下です。だって、能力がチート気味なのに、これ以上強くしちゃ、前書き、というより設定ド無視しますし。まあ、ハーレム無しもなんか消えかけてますけどwww大丈夫です。ハーレムは回避させます!!!!!!.....多分。では次回もお楽しみに

Re・No:32「我が家の新しき同居人」

「ただいま」

「お邪魔します」

「リイリアはん。今日から此処に住むんやから、『ただいま』でええんよ？」

「そうだぞ、リイリア。遠慮はしなくていいんだから」

「先ず、お前らが遠慮しろ」

ため息を吐きながら、居間のソファーにノーマを寝かせる。すやすやと幸せそうに寝ているノーマの横にラプレスが寄り添う。

「よく寝ていますね」

「はしゃいでたからな。疲れたんだろう」

そういつて、肩を解す。

「アマトさんも疲れています？」

「俺は何時も疲れているよ」「お邪魔するよ」「アイツ等の所為でな」

やって来たのは何時ものメンバー、に加えてネギと明日菜、近衛、宮崎、朝倉、綾瀬、早乙女、エヴァに茶々丸だった。

「なあ、お前ら。俺は疲れているんだけど」

「私達だって疲れている」

本気で怒っていいだろうか？

「まあまあ、ウチ等も料理手伝うから」

「私も手伝います」

「わ、私も」

嬉しいな。他の奴らもこれぐらいだったらなあ。

「しゃあないな。ウチも手伝うわ。これから世話になる家やし」

因みに、天ヶ崎さんとラサティ、リイリアは今日から家の同居人となった。天ヶ崎さんは近衛の稽古を付けるのに家の立地が最適だと言う（何でも地脈が云々言っていたが、疲れていたので聞き流していた）。ラサティとリイリアは麻帆良を次の観光地に決めて、そこに住んでいる俺の家に住みたいと言った。まあ、まだ空き部屋はかなりあるから問題ないが、というか本当に家は空き部屋が広い。一人で住むには不便で仕方がない。まあ、大掃除の時は雑煮などを報酬に3-Aの何人か呼んでやっているから問題無しだが。

「今日は疲れたから簡単な物にするか」

「皆も疲れとるから、食べやすい物がええんとちゃうん？」

「蕎麦を発見しました」

「勝手に漁るな。まあ、それでいいか」

そういつて、俺は鍋に水を溜め、火を点ける。

「茶々丸、麵つゆ作ってくれ。出汁はその引き戸に入っているから」

「了解です。取り敢えず30人分作ります」

一瞬、作り過ぎだ。と言いかけたが、食べる奴らが規格外すぎる奴らばかりだから、問題ないだろう。

「こんなに作ったら残るやろ？」

「まあ、多く作って損はないさ」

居間から聞こえる催促の声を無視しながら蕎麦を作り終え、持つていく。

「おお、蕎麦か。いいね」

「美味しそうです」

「ん、夕飯か？」

「お前ら、お椀位運ぶの手伝え」

全員に行き届いてから手を合わせ、皆が一斉に。

『頂きます』

そして食卓は『円満』というには程遠い『戦場』となった。

「貰ったあつ！……！」

「甘いわっ！……！」

「こ、この麺つゆ美味しいですね」

「無理しなくていいぞネギ。ていうかだな、お前らもう少し仲良く食えっ！……！出入り禁止にするぞ！……！」

俺の言葉も聞こえてない様で、食事という名の戦闘は続いた。

「ふう〜、ご馳走様。お風呂借りるよ〜」

「帰れよ。ていうか、お前ら門限はどうした？」

「えっと、事前に申請を出しておいたので問題ないです」

「それでいいのか？教師？」

「あう〜、止めてください〜」

拳で頭を挟んでグリグリしてやる。因みに龍宮は入浴の準備（パジャマまで用意してやる。というか、他の奴らまで）、茶々丸とリリアは夕飯の片づけ。天ヶ崎さんと近衛はなにやら専門的な勉強。ラサティは庭で鍛錬。神楽坂と桜咲も一緒になってやっている。朝倉と早乙女、宮崎、綾瀬は珍しいのか、それを見学。そして我が



佂姫たちは。

「ネエエエエエエエク!!!!!!!!!!!!まだだ!!!!!!!!!!まだ終わ  
つてない!!!!!!!!!!!!」

『』

キッドoooooooooooo

「ええい、しつこい奴め!!!!」

「ちつちと撃ち落としてやれ」

仲良くゲームをやっている。よくも、まあ一人用のゲームでそこ  
まで熱くなれるな。

「そうだ、天さん。今更だけどさ。私の事は名前で呼んでくれないか？」

「なんで？」

「なんとなく、名前の方が親しみとかが沸くから、という事にしてくれ」

また唐突に決める奴だな。ため息を吐く。

「真名。逆上せるなよ？これでいいか？」

「う、うん。なんか、天さんに名前で呼ばれるのは新鮮だな」

頬を赤く染めて、そつぽを向く真名。

「んじゃ、ウチも名前で呼んで」

「どうせなら、全員名前で呼んだ方がええんとちゃうん？」

そう言われ、確かに。と納得する。

「それもそうだな」

これから名前で呼ぶとするか。

「短い、優越感だった」

なにやら、影を落としながら風呂場に向かう真名。

「そうだ。エヴァンジェリンさん」

「なんだ、坊や？」

何やら嬉しそうな顔をしている。それほど、ゲームが楽しかったのだろ。確か続編も出ていたし、買っておくか。

「僕に、魔法を教えてください」

「……………一応貴様と私はまだ敵なんだぞ？貴様の父サウザンドマスターには恨みもある。大体私は弟子など取らんし、闘い方などタカミチにでも習えばいいだろう」

「タカミチは海外に行ったりして、学園にいないから頼めません。それに、僕が知る中で一番強い魔法使いはエヴァンジェリンしか知りません。それとも、エヴァンジェリンさんは弟子を取らないと言

っていましたが、もしかして教えられる自身がないんですか？」

お、挑発してくるか。予想通りエヴァも少し不機嫌な顔を作る。

「いい度胸だ。それに教えられる自身がないだと？甘く見るなよ？  
これでも、タカミチに闘い方を叩きこんだのは私だ」

普段のエヴァを見ていると想像できんな。

「なら、尚更お願いします！！！」

「……………本気の様だな」

そういつて、腕を組んで少しの間考える。

「いいだろう。弟子を取る件、考えてやらん事もない」

「本当ですか！？」

「但し、条件がある。私が指名した者に一撃を入れられたなら、考  
えてやる」

エヴァが指名ね。茶々丸辺りかな。

「だ、誰ですか？」

「相手してやれ、アマト」

「へいへい、っておい！！！！！！」

すかさず、エヴァにデコピンを入れる。

「なんで俺なんだ？つか、障壁解け。そのニヤけた顔に拳骨入れてやるから」

「これはお前の為でもあるんだぞ？先の闘いでお前も自身の力不足を感じたろう？」

痛い所を突きやがって。

「分かったよ」

そういつて、庭に出る。ネギも吊られて出て来る。

「それで？ネギだけ攻撃するのか？」

「反撃してもいいぞ」

「えっと、本当にいいんですか？」

「魔法は厄介だけど、唯の攻撃なら問題ないだろ。さっさと来い」

そういつと、怒ったのかネギが駆ける。面倒だ、そう思いながらもネギの動きを視る。

「ああ、惜しい!!」

「また避けられた。これで何回目だっけ？」

「これで34回目です」

「が、頑張つて、ネギ先生!!」

「ちゃんとやりなさいよ。ネギ!!!!」

皆が好き勝手に言っているが、ネギ先生はアレでも必死だけどね。  
あ、足掛けられた。

「あう」

「大丈夫か、ネギ。バテてきてないか？」

「まだ、大丈夫です」

そういつて、また攻撃するが、避けられる。

「ふむ、天斗さんの話だと。天さんにも能力がある筈だけど。どう  
いった能力かな」

「確か、モノがゆっくり見える。つて言っていました」

リイリアがおずおずと答える。成る程、それなら先ずネギ先生に  
勝ち目がないな。

「ほい、残念」

そういつてカウンター気味にデコピンを当てる。

「うう」

「今回は抜き打ちテストの様なもんだ。本試験は今度の日曜でどうだ？」

「え？」

「勝手に決めるな。まあ、坊やが試験に受かるのはまず無理だろう。聞いての通りだ。本試験は今度の日曜、場所は世界樹前の広場。時刻は午前0時だ。遅れたら承知せんぞ」

「は、はい」

嬉しそうに笑う。何か秘策でもあるのかな？

「さて、私は風呂でも入るかな」

「それじゃ、私も入ろうかな。一人一人入ってたら時間無くなるし」

「そやったら、皆で入ろう」

「そうですね。天さんの風呂は大きいから。ラサティもどうだい？」

「いや、私はもう少し汗を流してからにするよ」

そういつて、鍛錬を再開する。真面目な人だ。そう思いながら風

呂場に向かう。

「うん」

「どうかしたんですか？」

茶々丸が話しかけて来る。取り敢えず実験してみるか。

「茶々丸。コレを俺に向かって投げってくれるか？」

「テニスボール、ですか？」

「まあ、軽い実験だ」

そういつて、壁を背にして茶々丸と向かい合う。

「では、行きます」

そういつて、投げられたボールはスローで向かってきた。それを顔だけ逸らして避ける。

「ふむ、本当にスローに見える様だな。便利な能力だ」

「まあ、問題はこれのあ、とっ！？」

後頭部に痛みが走る。見てみると足元に先程投げられたテニスボールが落ちていた。どうやら、壁にバウンドして戻って来たようだ。

「やっぱり、スローに見えるのは目で見える範囲だけだな」

「という事は背後や死角からの攻撃はゆっくりと見えないのか？」

「そうなる」

さて、こうなると対策が必要になって来る。

「さて、どうするか。爺さんに貰った指南書は『気』の簡単な使用しか書いてなかったからな」

これは自分で頑張るしかないだろう。

「取り敢えず、アマト。暇なら私の鍛錬に付き合え」

「なんで、俺？」

「二人いないと出来ないからだ」

「男と女の共同作業か？」

「冗談半分で言うと、顔を真っ赤にしたラサティの蹴りが飛んでくる。」

「危ないな。もしかして凶星だったか？」



「死ねっ！！！！！！」

それからラサティがバテルまで攻撃を避ける。まあ、ゆっくり揺れる胸が眼福だったと書いておこう。さて、明日からマジで対策考えないと不味いな。

Re・No:32「我が家の新しき同居人」(後書き)

どうも、作者です。今回は修学旅行から帰り、天の家で食事。即座にネギが弟子入り、という感じです。因みに弟子入り試験の相手は天です。これは天を強くさせたいから決めました。そして天の家に同居人が三人増えました。暫くはこんな感じに賑やかな感じで行きたいです。ヘルマン戦もスルーしたいですけど、ネギの成長が見れる瞬間ですから、カットは出来ませんね。後、古に弟子入りはさせます。中国拳法を使うネギは格好いいので。では、次回をお楽しみに

朝である。確か今日は日曜で学校は休みだ。という事は昨日来た奴等はそのまま、家で二泊目をする確率が高い。まあ、ネギ辺りは流石に試験相手と一緒にはいないだろう。薄っすらと目を開く。まだ空は青白い。日が昇り始めている証拠だ。そろそろ朝食を作らないと不味いなと思い、ふと、視界の端に肌色の何かがあった。またノーマか真名だろうと思って視線をそっちにシフトする。

「っ!!!!!!!!!!!!!!?」

咄嗟に声を上げなかったのは奇跡だろう。頭の中では物凄い勢いで俺が置かれた状況を分析している。此処は？俺の部屋。うん、間違いない。なんで隣に千草さんが寝ているんだ？分からない。何故全裸？さあ？

取り敢えず、千草さんを起こさない様にゆっくりと起き上がる。

うん、布団が揺れてかすかに見えるアレとかがもう、ね。思春期の俺には耐えられませんよ。気合いで耐えましたけど。というか、大人の色香という単語を聞くが、本当にあるとは、色々な意味でヤバかった。もし、家に千草さんと二人で住んでいて、あの状況だったら凄惨な事になりそうだ。……………考えない事にしよう。そう思っ  
て部屋を出る。

「はあ、なんで朝っぱらから神経使わなきゃならんのだ？」

そう思っ  
て、居間の扉が  
あいている事に気付いた。はて？昨日キ  
チンと戸締りは  
していた様な。閉  
め忘れたかな？  
そう思っ  
て扉を開  
け、中に入ると。

「.....」

目の前に男の桃源郷（地獄とも言つ）が立っていた。身体から湯気が立ち昇っているのは、シャワーでも浴びたのだろう。大方、朝早くに起きて、汗でも仲良く流していたのだろうか。

「お、おはよう」

次の瞬間、真名とラサティの悲鳴、乾いた音が二回響いた。驚いた事にこれが原因で目が覚めた人間がいなかった。皆疲れていたのだろう。

「なあ、天はん。なんでほっぺが赤いん？」

「寝ている時に付いた」

「なんや、てつきり叩かれたと思ってたけどそれなら安心や。」

「「御馳走様」」

「なんで二人の言葉に天はん、ビクビクしてるんやろ？」

「天さん。朝ごはんが終わったら、庭でトレーニングでもしないかい？」

「面白そうだな。僕も便乗するか」

そういつて、朝食を食べ終わってない天はんを引きづって行く二人。

「ドナドナドナ」

龍宮はん、なんでそない嬉しそうなんやろ。それにしても、この味噌汁美味しいな。今度作り方教えて貰おう。

「うおうつ!?!」

「そうそう、そうやって避けないと、危ないよ」

言葉と共にゴム弾が飛んでくる。一発ならまだしも、何発も撃つて来るのは絶対に当てる為だろう。まあ、それだけなら別にいいが。

「っと」

「チツ」

ラサティ、そのリアルな舌打ちはやめてくれないだろうか?それに今の蹴り、避けなかったら首がイッてたよ?というか、昨日の話

を聞いていたのか、それとも別の理由か、さつきから死角からの攻撃しかしてこないんだけど。まあ、まるでバットを振っている様な音を聞いて避けているから、問題ない。

「そこおっ！！！」

「いつ！？」

胸、丁度肺の部分に当たり、溜まっていた空気が漏れる。

「フンッ！！！」

動けなかった俺に容赦なく、ラサティの蹴りが腹に入る。取り敢えず薄れていく意識の中で見えたスカートの中はグッジョブだった。

「容赦がないな。まあ、あれぐらいやってもらわんと困るが」

「大丈夫でしょうか？」

「こういう時はウチの治療術や。昨日の成果を見せるで」

「お嬢様、張り切っていますね」

「アマトにとっては地獄だな。って、ノーマ。勝手に始めるな。私

もやりたいんだから」

そういつて、マスターはノーマさんとゲームを始めました。今日は最大四人プレーが出来るゲームで、確かキャッチコピーは『運命を解き放つRPG』です。

「あ、起きた。良かった、治療術はちゃんと出来てるみたいや」

木乃香さんの言葉を聞いて驚愕と絶望の混じった表情を見せる天さま。ちよつと可哀そうです。

「はあ」

ため息を吐いて、胸の前で手を合わせた天さま。すると、ほんの微弱ですが天さまの両手に『気』が溜まっています。この短期間で『気』を扱えるのは驚きですが、やはり元一般人。素人です。そしてゆっくりと手を離すと『気』が霧散してしまいました。やはり制御が上手くできていません。

「神様にでも、お祈りしていたのかい？」

「朝の事は記憶から消してやる」

「その、あれは不可抗力というか。その御免」

三人の間で何かあったんでしょうか？その後、十五回程気絶し、昼食になりました。今日の昼食は炒飯です。

「なんだ。文句あるのか？手抜きとか言うなよ？単に身体の節々が痛くて上手く料理に集中できなかっただけだから」

そういつと、当事者のお二人も申し訳なさそうに顔を曇らせます。その後は皆さんで座学です。といっても、マスターとノーマさんは引き続きゲームをしています。他の人も思い思い忙しく動いています。

「じゃあ、僕はこれで」

「あ、待ちなさいよ。ネギ」

ネギ先生が急ぐように家を出ていき、明日菜さんが追いかけます。自己鍛錬でしょうか？

「なあ、千草さん。少し聞きたい事があるんだけど」

そういつて、天さまが天ヶ崎さんに質問します。

「うーん『探知結界』を張りながら戦闘か。簡単やけど、それって自分の周りのみに展開しながらやる？」

「ああ、やっぱり死角からの攻撃を勘だけで避けるのは無理があるからさ。最低でも防ぐか避けられるギリギリのラインまで張って、そこに攻撃が来たら、即座に視線を合わせられる様な感じを作りたいんだ」



「まあ、それだけなら単に改良すればええんやけど。それだけやないやろ?」

「ああ、結界を張りながら『気』で攻撃したいんだ」

そういつと、千草さんが腕を組む。

「結界を張りながら攻撃か。それなら札を使えば、ええんやけど。固定型しかないからな」

「固定型?」

聞くと、千草さんが指を立てる。

「札を使った結界は起点となる場所から半径何メートル以内、といった具合に展開されるんや。この場合、普通の結界なら問題ない。けど結界が狭く、更に使用者が動くなら話は別や。そんな事すれば、何時の間にか自分が結界から離れてまうやろ?」

「確かに」

そういつて考える。取り敢えず、今の俺に足りない物は火力と探知の能力。『気』が使えるれば両方とも解決すると思っていたが、やはり世の中そんな甘くない。さてどうするか。

さっきから二時間位経っただろうか。その間、天さんは腕を組んで唸っている。確かに天さんの能力は驚異的だ。特に銃弾などの長距離の攻撃も視界にさえ入れば回避可能だからな。ただ、背後等の攻撃は驚くほどに弱い。まあ、動物並みの勘がそれを補っているも、限界はある。現状に満足せず、前に突き進む。それはいい事だ。

「はあ」

ため息を吐くと、立ち上がる。

「何処に行くのかい？」

「気分転換に外の空気吸ってくる」

そういつて、外に向かう。一人で悩むのも必要だよな。

「所で刹那。君は何をやっているんだい？」

「にゃんにゃにゃん　へ？あ、いやこれはその」

何やら、楽しそうにラブレスとじゃれていただけ。

「知っているかい？猫にとって鳥は捕食対象だよ？」

「いや、流石に私を食べようとは思ってないだろう。うわっ！？」

答える刹那の頭にラブレスが飛び着く。それを見て。

「確かに食料として見てないようだ。うん、遊び相手として見ている」

そういうと、刹那は嬉しそうに笑って。またにやんにやん、言い始めた。何というか、私も含めて天さんに関わった人は悉く変わったな。

「はあ、気分転換に外出たとはいえ、やる事が何もないとは」

大通りを歩きながら、ため息を吐く。すると、なにやら、広場の方が騒がしい。屈強な男が多くいるという事は。

「毎日毎日、御苦労な事だな」

そういった直後、男たちが打撃を受け、倒れる。そうして見えたのは小麦色の肌とクリーム色の髪を持った少女、古が立っていた。

「相変わらず、無茶苦茶な子だ」

そういつて、近くに倒れている豪徳寺の頭を軽く蹴る。

「ん？おう、天。どうしたんだ？」

「丁度、通りかかってな。お前も懲りないな。んなの、毎日やる

より一週間位空けて仕掛けりやいいのに、そうすれば自分の腕も磨けて一石二鳥だろ?」

「それもそうなんだけどよ。どうも、古ちゃんを見ると喧嘩売っちゃうんだ」

そういつて、立ち上がる。どうやらそんなにダメージはないらしい。

「なんにせよ、もう少し実力上げないと、また負けるぜ?」

「わあってるよ。おし、逆立ちで麻帆良三百週だあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

言うや否や、逆立ちで疾走(?)し始める。まったく、熱血は程々にしとけよ。ふと、古の方を見ると、ネギと話していた。

「さて、夕飯の買い物でもするかな」

うだうだ考えてもいい考えは浮かばないもんだ。此処は一つ、別の事を考えてみよう。そう考え、スーパーに向かう。丁度セールの日で色々と安い。

「さて、今日は何を作るかな」

取り敢えず量だな。鍋にするか。そう思つて、籠に材料を入れる。あつという間に籠が一杯になった。

「誰か連れて来るべきだったかな?」

そう思いながら、会計を済ませ家に向かって歩く。

「ん？」

ふと、ショーウィンドウにミシンが置いてあった。なんでも、糸が絡んだりしない優秀なミシンだとか。

「ん？糸？」

糸か。もしかして使えるかも？

「ぬんっ！！！」

帰って来るなり、天さんは庭に出て、瞑想している。まあ、単に手を合わせて集中しているだけだが。天さんの両手に『気』が集まっているのが分かる。そしてゆっくりと両手を離す。プッ、と糸が切れる様な音がした瞬間、集まっていた『気』が霧散した。

「もうちよい、かな？」

そういつて、もう一度同じ事をする。どうでもいいけど夕飯は作らないのかい？結局、上手く出来なかったのか肩で息を吐きながら台所に向かう天さん。料理はまったく手を抜いてなく、とても美味しかった。

何となく形は出来始めている。問題はちゃんと持続できるかどうかだ。ようやく、両腕を元に戻しても切れなくなった。それはいいんだが、これからが大変だ。

「まずは展開だよな」

腕を振る。俺が考えたのは『気』の糸だ。これなら編み合わせて様々な形にして攻撃したり、結界に応用できる。難点は強度だ。結界に用いる以上、敵に見えたら意味がない。だから『気』の量を最低限に抑える事を目標にしているのだが、簡単に切れてしまう。攻撃に使う時は逆に最大限に編み込まないといけないのだが、こっちは簡単に出来て逆に拍子抜けした。

「まあ、別に攻撃はオマケみたいな物だからな」

問題は糸を使った結界だ。これが出来れば、最低でも死角からの攻撃に対処しやすい。糸が攻撃する場所を教えてくれるし、糸を絡ませて攻撃を遅らせる事も出来るからな。

「とにかく、次の日曜までにコレを完成に近づけさせないと」

賢いネギはそろそろ気付く頃だからな。結果、その日は『気』の使い過ぎで倒れ、皆に心配された。あまり無茶しない方がいいな。

**Re・No:33「新技開発」(後書き)**

どうも、作者です。今回は新技作成。原作より少し早くネギが古に弟子入り。練習時間もバツチリです。『気』の系は『NARUTO』のチャクラ系を想像すると分かりやすいかも。次回は本試験。お楽しみに

## Re・No:34「本試験」

朝食を作りながら、今日が約束の日だという事に気付いた。

「少し形に出来ただけだな」

まだ、制御が不安定なのだ。いや『展開』『探知』『攻撃の阻害』は出来るようになった。難しいのはそれに『攻撃』を加える事。単に糸を編み上げて形にするだけなのに、これが意外と難しい。何故なら、最低の状態から最大まで一気に『気』を引き上げるのだ。糸が保たない。

「何とかするには徐々に慣らさせるしか、ないんだけどな」

それでは時間が掛かってしまい、反撃を許してしまう。そんな事を考えながら、ため息を吐くと、ある物が目に入った。

「あつ」

閃いた。そして俺だけの欠点と利点を思い出す。

「そうだ、コレみたいにすればもしかしたら」

急いで朝食を作り上げ、庭に出て『気』を集中する。この一週間で『気』を練る時間をかなり短縮できた。出来た糸に『気』を流す。

「よしっ！」

珍しく、ガッツポーズをしてしまう。成功だ。気分がいいまま、



同居人を起こしに行った。因みになんで千草さんが全裸で寝ているのを尋ねてみたら、脱がないと寝れない体質らしい。ありえん。

「今日は機嫌が良うおすな。どないしたん？」

「やっと修行の成果が出せたからかな」

そういつて、身体を軽く伸ばしている。まったく、現在時刻は昼の三時。約束の時間は十二時やる？九時間前からアップ始めるなんて。やっぱり男の子ですな。

「やっぱり強硬手段で無理矢理」

「どうかしたんですか？」

「え？ああ、何でもないですわ。お嬢様が遅いなって思っただけ」

リイリアはんが頷く。危なかった。そういえば、この家には三人も同居人がいるんだった。まあ、防音の結界なんて、簡単ですからそれは問題ありまへんが。問題はノーマはんが部屋に入って来る可能性ですな。今はリイリアはんと相部屋で寝ているみたいですが、何時また天はんの寢床に侵入するか分かりまへん。やはり此処は人払いの結界も並行しなくちゃいけまへんな。それにしても、この一

週間毎日裸で寢床に侵入しているのによく我慢出来ますな。もしかして枯れてるんやろか？でも、普段ウチを見る目が年頃の男の子やから枯れてるわけではない。

「という事は押しが足りないだけやろな」

やっぱり無理矢理やな。あれほどの美青年を無理矢理、考えただけでゾクゾクしますわ。

「千草さんも、団子食べます？」

「え？ああ、頂きます」

どうやら、考えに没頭していたらしい。時計を見たら針が五時を指していた。今日は来ないんやろか。そういえば、あの男の子と同居してるんやっただけ。それにしても、あの子も成長したらいい感じの子になりそうやな。まあ、幾ら年下好きのウチでも手を出していい年齢といけない年齢は区別付いてるし問題なしや。天はんはウチのストライクゾーンにど真ん中やけど。

昼間から凄く視線、敵意ではないのだが、悪寒がする視線を感じる。誰だろうか？リイリアは、ありえんな。リイリアがそんな視線をする姿が想像できん。ラサティもない。アイツの場合、悪寒じゃなくてマジの視線をぶつける時があるからな。それにアイツの視線

はなんとというか得物を狙う狩人の様な視線だからな。ノーマは主に退屈をぶつけて来るような視線だから問題外。消去法で行くと千草さんなんだが、どうなんだろう。もしかして俺を襲おうとしている？まさかな、あれほどの美人なんだから男の一人や二人いるだろう。俺を狙う理由なんて。そう思って、嫌な考えが浮かぶ。あれ？俺とくっ付くとメリットありまくりじゃね？実家は老舗の呉服屋。裏では過去だが英雄の孫。それに、前回の主犯であり、あまり俺に対して接点がないのに関わらず、俺に近づいてきたのも解せない。

「まさか、な」

止まらない冷や汗はなんだろう。すると、携帯のアラームが鳴った。約束の時間だ。顔を叩いて意識を切り替える。この事は後で千草さんに聞いてみるか。凄く怖いけど。

「しかし、いいのですか。マスター」

「何がだ？」

「天さまが開花した能力『物の動きがスローに見える』コレを使うと、先生が天さまに一撃を当てる確率は」

「茶々丸。その先はお前が言わなくてもネギが一番分かってる。まあ、アイツも馬鹿じゃない。それなりに対策は練って来ているさ。それに所詮は数字だ。人間なんてそんなの簡単に越えられるからな」

「その通りだ。それにアマトの能力は利点が大きいが欠点もまた多い。そこを突くのが戦術であり基本だ。坊やは優しい、というより正々堂々といった感じが強いからな。先ずはそこを矯正してやらなくては」

その言葉につい、笑ってしまふ。エヴァがムツとして。

「何が可笑しい？」

「いや、その言い方だとネギが試験に受かっているみたいだからな」

そういうと、エヴァの顔が真っ赤になる。

「お待ちせしました！！！！ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました」

「よく、来たな坊や。というかな。ギャラリー多くないか？」

多いな。ていうか何で運動部四人がいるんだ？まあ、彼女たちも半吸血鬼になっていたから関係なくはないけど。

「まあ、いいんじゃないか？アイツ等に魔法バレても強制的に眠らせて、朝起きたら不思議現象は夢でした。にすれば」

「確かにそうだが」

何処か不満そうである。それにこっちもウチの同居人と野次馬がいるから御相子だろう。

「あれ？なんで龍宮さんがいるの？」

「私も見学だよ」

ちゃっかり特等席（広場が見渡せる場所）にいるし。さて、そろそろ始めるか。おっと、そうだ。

「エヴァ、結構派手になるから、防音結界張っておいてくれ」

「何？」

手を合わせる。さて、ネギもそうだが、俺もそこそこ強くなって  
る筈だからな。確かめさせてもらっぞ？

「大丈夫？ネギ君」

「はい、練習の成果、出し切ってみせます」

「大丈夫よ。この前のあんたより成長してるんだから、山吹先輩なんて楽勝よ」

頷く、瞬間。視界の端から何か飛んできた。

ドンッ、という音と共に坊やのいた場所にコンクリートの塊が落ちた。

「なっ!?!」

急いで下を見ると顎に手を当てているアマトがいた。

「アマト、お前!?!」

「慌てんな、アイツちゃんと避けてるよ」

そういつて、笑う。見てみると確かに坊やはちゃんと避けていた。

「いきなりなにすんのよ!?!?!?!」

「なにつて、試験」

首を傾げて『何を聞いてるんだ?』という風に聞いて来る。それを見て頭に血が上った。

「なら、ちゃんと開始の合図を「何を勘違いしているんだ?」え?」

「俺は試験の時間を指定した。つまりその時間に試験が開始する。」

これは普通の試験でも同じことだろう?」

「え? あ、うん。そうね」

「それに、だ。試験といつても、ネギが受けるのはスポーツではなく、純粹な、生物を殺す為の技術をエヴァに習う為に来たんだ。そして今やっているのが、その修行の試験。なんで開始の合図をしなくちゃいけない?」

「それは人として当然の礼儀でしょ! ?」

そついうと、納得したのか先輩が頷く。

「ふむ、礼儀か。確かにその通りだ。けど、もし戦場で敵と出会ったら『お願いします』って言って、闘うのか?」

「そ、それは……………そうだけど。それに、ネギはエヴァちゃんに習うのは魔法だけで「アホだろ、お前」なっ! ?」

「エヴァがそんな性格に見えるか? というかだな。その魔法とやらを教えて貰っても簡単な運用方法を教えて貰わなかったら意味がないだろう?」

「でも「やめときなよ、神楽坂」龍宮さん?」

見上げると、龍宮さんと目が合った。

「天さんが言っている事は戦闘を行う人間にとっては当然だ。君には悪いが、この状況で悪いのは天さんの言葉の意味をちゃんと理解できなかった君たちだよ」

「そんな」

「なんだったら、お前も参加するか？本来魔法使いは従者と一緒に闘うんだろ？ルールは変更しないけどな」

「いえ、このままをお願いします」

「ネギッ！？」

何言ってるのコイツ。

「アスナさん。大丈夫です。僕は負けませんか」

ネギの言葉を遮って、先輩がネギを殴り飛ばした。

「ったく、何ぼぐつと突っ立ってんだよ？自分が置かれた状況分かってるか？」

そういうと、敵意を含んだ視線が五つ。意外と少ないな。温厚な木乃香は心配そうにネギを見ているといった感じの顔だ。瞬間、糸が攻撃を感知した。糸を操り、攻撃してくる腕の動きを阻害する。

「っ！？」



「どうした？頑張れ」

そういつて、攻撃を避け。振り抜かれた腕を持って投げ飛ばす。  
次いで糸を伸ばす。

「オオッ!？」

先程知り合ったチャチャゼロに糸を括りつけ持ってくる。

「ナンダ？オレモ参戦力？」

「つつても、飛び道具扱いだよ」

そういつて、腕を振るう。瞬間、飛ぶようにチャチャゼロが疾走する。

「くっ」

それをギリギリで避けるネギ。

「さて、ちょっと試してみるか」

腕を動かし、横に回転を加える。

「オオッ?!」

「命名：『チャチャゼロ・ドリル』」

「ネーミングセンス、ネエナ」

悪いか？

「うわっ！？」

「逃がすか！……！」

「オレハ天ヲツクゼ！……！」

叫んだチャチャゼロがネギの目の前に落ちる。かなりの速度で落ちたが、まあ『気』の糸を絡ませているから問題ない。

「さて、どうする？」

「くっ！……！」

ネギの身体が光る。確か『戦いの歌』だっけ？エヴァが言ったのを思い出す。まあ、それでもなんとかなるかな？

「やあっ！……！」

「おおっ！？凄い、凄い！……！」

一瞬で目の前に現れ、攻撃する瞬間に背後に回って蹴りを繰り出してきた。ソレを糸で阻害して裏拳をこめかみに叩きこむ。

「あぐ、うああっ！……！」

「よっ」

よろめきながら更に攻撃してくるのを避け、カウンターで顎に掌底を叩きこむ。

「ぐっ」

何とか立ち上がろうとするが、脳を揺さぶられているのだから思うように動けない。

「ふん、まあそんな所だろう」

といって、勝手にエヴァがネギを不合格にしようとする。

「ネギ、エヴァはああ言っているが、この試験の不合格はお前の意識が無くなるまでだ。どうする？」

「決まっています」

そういつて、起き上がり攻撃してくる。それを受け止める。ネギの顔を見る。

「続行です!!!」

真っ直ぐな目だ。俺は笑って。

「了解。気絶するなよ?」

「お、おい坊や。もういいだろ？いくら防御に魔法を集中しても限界はある。お前のヤル気は分かったから」

「こら、エヴァ。そういうのはコイツが立てなくなっただ。止めるかネギ？」

「や、やめま……………せん」

そういつて、ネギが拳を突き出すけど、防がれる。あれから一時間以上経つ。もう、我慢できない。

「私、止めて来る……………！」

カードを取り出してネギの所に行く。

「だめ、アスナ……………！止めないで……………！」

まきちゃんが私達を止める。

「で、でもアイツ、あんなボロボロになって、あそこまで頑張る事じゃないよ」

「わかってるけど。ここで止める方がネギ君にはひどいと思うの。だって、ネギ君。どんなことでもがんばるって言ってたもん」

まきちゃんがそういつ。でも。

「でも、アイツのあれは子供の我が儘じゃん。唯の意地っ張りだよ。

止めてあげなきゃ」

「違うよ。彼は本気だ。僕には分かる」

ラサティさんがネギを見ながら、会話に入ってきて来る。

「彼は本気で強く、前に進みたがっている。彼にはそうさせる目的があるんだと思う。それに誰だって本気で打ち込んでいる事を途中で止められたら腹が立つだろう？それを危ないから、心配だからといって止めさせられたらどう思う？幾ら当人を思った事でも、当人にとっては迷惑なだけだよ」

ラサティさんは何処か遠い目をして語る。そんな雰囲気には私は二の句が継げない。

「ハアッ」

声に振り向くと、体勢が崩れた先輩に拳を繰り出すネギがいた。当たる、そう思った瞬間。

「っと」

防がれる。でも。

「ゲッ!?!」

ネギの右足が跳ね上がり、先輩の脇腹に入る。

「い、一撃、入れました」

そういつと、二人が倒れた。

「ネギッ！！！！！！」

「ネギ、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

そういつて、笑うネギ。俺も笑って頭を撫でてやる。ネギは更に嬉しそうに笑う。

「身体痛むか？」

「はい、でも何ででしょうか。それよりも試験に受かった方が嬉しくてそんなに気にしません」

俺は後ろで口を半開きにして固まっているエヴァを見る。

「一撃入れたし、これで合格だな？」

「ふん、分かったよ。合格だ、坊や。傷はちゃんと治しておけ、半端な状態で修行しても結果は出んからな。それとカンフーは続けておけ。坊やにはお似合いだよ」

そういつて、茶々丸とチャチャゼロを連れて去っていくエヴァ。  
俺も立ち上がり、身体を伸ばす。

「お疲れ天さん」

「おお」

真名達がやってくる。結局エヴァの奴運動部に魔法掛けなかったな。まあ、最初のコンクリだって頑張れば投げられる大きさだったから問題なかったか？

「そういえば、糸の問題は解決したようだね。なんだっけ、一気に最大まで『気』を練るのが大変だって言ってたけど」

「ああ、あれな。台所にヒントがあつたんだ」

俺の言葉に真名が驚く。その表情が面白く笑ってしまう。

「ヒントは今日の夕飯だ」

「夕飯？何処にそんなヒントがあるんだい？」

首を捻る真名。

「マカロニだよ。糸を作る時、最初から空洞を作っておくんだ。んで、その中に『気』を通す。そうすれば最大、とまではいかなくても強度がかなり上がる。んで、余分な『気』は新しい糸に使えば問題ない。俺の欠点は『気』が少ない事。それを最大限に利用する為に俺の利点である糸の本数を増やす事にしたんだ」

そういうと、納得したのか真名が頷く。

「それにしても、天さんは面白いアイディアばかり思いつくね。普通『気』の糸なんて思いつかないよ？」

「そうかな？軽く頭を捻れば考えられそうだけど」

頭堅いんだな。

「んじゃ、帰るか。眠いし」

「そうだね」

こら、真名。お前はネギ達と同じ方向だろうが。また泊る気だな。



## Re・No:34「本試験」(後書き)

どうも、作者です。ネギ合格。そしてまた強くなる天。自分の持っている物を最大限に利用する。それが凡人クオリティー。次回は図書館島飛ばして、修行風景です。天VSドラゴンなんて書きませんよ？途中まで書いてましたけどwww次回も御期待下さい

Re・No：35「修行 乙女の恋」

「てえーいつ!!!!!!!!!!」

振りかぶったハリセンが数十メートルの蒼い大蛇を叩く。すると、大蛇が弾ける。

「やた」

「甘い」

声と共に大蛇の残骸は小さな蛇になり、明日菜に襲いかかる。

「ええっ!?!」

「任せてください。神鳴流奥義 百烈桜華斬!!!!!!!!!!」

明日菜の前に刹那が入り、円を描くように剣を振って、蛇たちを一掃する。

「流石にやる。なら、これでどうよ」

声と共に明日菜の周りに針が全方位、同時に迫る。

「斬空閃!!!! 明日菜さん。行ってください」

「了解」

針が全て打ち消される。すると、目の前から人の上半身が突撃し

てきた。それは大斧を構えた短髪の青年に見えた。

「あの世行きだ！！！！！」

左の拳で明日菜の身体を浮かし、斧を振りかぶる。

「くっ！！！！！」

「神空割碎人！！！！！」

ギリギリでガードするも、着地した地面が陥没する。

「続けて喰らえっ！！！！！！！」

「イツ?!」

「明日菜さん。下がって」

刹那が札を取り出して障壁を張る。その数六枚。

「震天 裂空 斬光 旋風 滅碎 神罰」

一言ずつ、攻撃を加え、障壁が全て碎かれる。そして上半身は攻撃の反動で浮かんだ斧を取り……………損ね。場が静まる。

「攻撃イイツ！！！！！！！」

「ダサァ」

後ろからエヴァの声がする。上半身の男は刹那の頭に拳をぶつけ

る。ポカンツという音が響く。

「えっと」

物凄く、困った顔をする刹那。すると、上半身が消える。俺は息を吐いて。

「ちょっと休憩だ」

場所は街から離れた丘で。俺達は修行をしている。最初は身体を軽く動かす程度の筈だったんだけど、明日菜の。

「最初は先輩か。刹那さんもいるし、軽い軽い」

本人に悪気がないのは分かっている。けどまあ、俺も男だ。そうやって、下に見られると。プチツとなるんですよ。で、始まった瞬間に糸で編んだ大蛇を作りだして早速、後悔させてやろうと思ったんだが、これが中々やる。つい、調子に乗ってスタンドもどきまですってしまった。因みに大蛇もスタンドもどきも、最近考えて作りだしたのだ。流石に大蛇は目立つので夜に作ったけど。

「それにしても、思い付きであそこまで作れるとはな。感服したよ」

「そんなに凄い事なのか？」

珍しく、エヴァからお褒めの言葉を貰う。聞くところによると『気』とは元々、自分や自分の得物を強化するのに特化した物らしい。陰陽術はそれをちょっと応用したものだという。そして俺の系は使っているのは『気』だが、方向性が全く違うというのだ。

「お前がさつき使った大蛇がいい例だ。あんな物、使う人間は誰もいない。勿論、扱いにくい、とうのもあるが、それ以前にそこまで考える者がいないからだ。『これはこういうモノ』という事が最初から決まっているからな。お前みたいにまったくのゼロから考えるのとは訳が違う」

「成る程な」

頷く。多分、何人かは俺が使う系に似たような物に気付いた者もいただろう。ただ、そいつ等はそれを必要としなかった。こんなに応用が効くのに、勿体ない。

「そういえば、ノーマはどうした？」

「ん？今日はチア部の活動があるんだと」

面倒だ、と呟きながらも楽しそうに笑っていた。

「そうか。次は坊やも入れた三対一だ」

「え、少しやりすぎなんじゃ」

ネギがオズオズと抗議するも。

「戯けっ！！！！師匠である私が命令しているんだ。弟子は黙って従え。それと刹那はいいとして神楽坂、アマト、坊やは圧倒的に実戦経験が足りん。強くなりたければ、経験を積む事だ。そうすれば、数段上の相手でも相手に出来る」

理に適った事だ。ただ、俺と明日菜、刹那はお前の弟子じゃない

んだけど。

「んじゃ、もう少し面白い方法で闘ってみるか」

そういつて、糸を出す。

「エヴァ、ちゃちゃっと離れろ」

笑って。

「初めて使うからな、周りの心配する余裕ない」

勢いよく、腕を振るう。

「そこ、ちゃんと動け!!!」

「こらこら、チアなんだから応援しなよ。罵声飛ばしたら皆やる気なくすよ?」

「でも、言われた人。キャッホー、言いながら動いてるよ」

「結果オーライだね」

チア部としてこれでいいんだろうか? まあ、今は。

「精一杯応援するよ!!!!!!」

「「「オッ!!!!!!」」」

「ええっと、どうしましょう?」

「ていうか、反則じゃない?あの糸」

「いえ、明日菜さんの『魔法無効化能力』も充分反則ですよ。とにかく、今は先生が張ってくれた。この障壁がありますから大丈夫です。今のうちに対策を考えましょう」

「そうですね。カモ君?」

言っと、僕の肩で震えていたカモ君が正気に戻る。

「へ?あ、ああ対策ツスネ。取り敢えずはアマトの旦那が扱う『気』の糸について、情報を纏めるツスヨ」

「ええっと、何か攻撃しようとする、邪魔されるんだよね?」

「正確に言っと、糸を絡ませて動きを遅らせるんです。そしてその糸自体が『探知結界』の役割を持っているので、直ぐに攻撃が見切

られます」

「たんちけっかい？」

アスナさんが首を捻る。

「ええっと、簡単に言うそうですね。結界の中に入った物の大まかな位置が分かる結界です。アマトさんの能力は相手を視界に入れないと発動しないので、あの糸は相手の動きを阻害して、攻撃を確実に避けられるようにしているんです」

「成る程」

「次に攻撃ですね。主に糸で動きを阻害させ、カウンターで顎や頭。脳を狙って攻撃してます。確実に脳震盪狙ってますね」

「他にも、なんか蒼い蛇だったり人だったり出してたけど」

「あれは、糸を編み込んで作った物でしょうね。あれほど高密度に固めたら明日菜さんでも簡単には消せないと思います。それに消せたとしても、大部分は残ります。そしてさっきの戦闘の様に小型の蛇で襲って来ますし」

「それにさっきみたいな事も出来るんでしょう？正直言って勝てる気がしないんだけど」

そういつて、項垂れるアスナさん。

「でも、天さんも長くは闘えませんよ。私達と違って、天さんは『気が少ないですから』」



「そうなの？」

「ええ、この前愚痴ってました」

そういつと、風が止み始める。

「とにかく、先ずは持久戦です。ですが、逃げてるだけでは天さんも体力を回復させます。ですから、出来るだけ攻撃しながらいきましょう」

「そうですね」

「やってやろうじゃないの！！！」

風が完全に消える。そこには不敵な笑みを浮かべているアマトさんがいた。

「相談は終わったか？」

「はい」

「行きます」

「覚悟してよね？」

僕達が答えると、アマトさんが指を動かします。するとアマトさんの右腕辺りに蒼が集まり、槍を形作りました。

「そんじゃ、行くぞ」

指の動きだけで蒼の槍が飛んできました。

「くっ」

皆が跳んで避ける。槍は地面を砕くと細かい破片となって襲いかかって来ました。

「このっ！！！！！！」

「斬空閃！！！！！」

「魔法の射手 連弾・光の9矢」  
サギタ・マギセリエス  
ルーキス

破片を幾つか落として、回避する。

「んじゃ、こんなんどうだ？」

いきなり刹那さんが斬りかかって来た。

「せ、刹那さん！？」

「避けてください、ネギ先生」

どういうことだろう？そう思っていると、アスナさんが割って入る。

「どういつこと、刹那さん？」

「勝手に身体が動くんです」

薄っすらと刹那さんの身体に蒼い糸が見えた。アマトさんの方を見ると指を動かしていた。

「やあっ！！！」

無詠唱の魔法の矢を一本放つ。それを直前で避けると、刹那さんの動きが鈍った。やっぱり。

「アスナさん。刹那さんをお願いします。僕はアマトさんをやります」

「ええっ！？ちよっ、ネギ！？」

走って、近づく。

流石に気付かれるか。やっぱり、ネギは頭の回転が速いな。

「なら、コイツはどうかな？」

糸を編み上げる。その間にネギが近づく。ギリギリだな。

「やあっ！！！」

「甘い」

編み上げた糸の塊は形となって姿を現す。ネギが驚いて止まる。俺は刹那に飛ばした糸を切つて、姿を現した片方を手に取る。

「どうした？まさか、こんな物を作れるとは思ってなかったか？はっ！……人間の想像力舐めんなよ？」

トンツ、と一振りの太刀を肩に掛ける。元々『氣』で出来ているので重量なんて無いに等しい。

「行くぜ？糸だからって甘く見てると、怪我だけじゃ済まねえぞ？」

片手で太刀を振るも、ギリギリで避けられる。空いた手で糸を操作し、ネギの後ろから襲わせる。

「ネギ！！！！！」

そこに明日菜がネギを抱えて通り過ぎる。寸でのところで避けられる。

「流石に三人もいると面倒だな」

そういつて、作り上げた『竜』を二人に向かわせる。今回作ったのは某狩人ゲームで出て来る『飛竜』<sup>フライング</sup>と呼ばれる物で、その中でも『空の王者』と呼ばれる物だ。きっちり再現するのには苦労した。けど、威力は折り紙つきだ。なんせ、大きさも設定と同じだからな。体当たりだけで相当なもんだ。

「さあ、やるか」

言つて『飛竜』を突撃させる。その後、太刀を構えて走り出す。

「そういえばさ。美砂つて確か彼氏と別れたんだよね？」

マドカがお昼（アマトお手製）のおにぎりを頬張りながら喋る。

「うん、そうだよ」

「なんで別れたの？」

聞くと、ミサは指に付いたご飯を舐め取りながら。

「んゝ。最初は面白そうだなゝ、って思つて。でも、付き合いだしたらアイツ。ヤルことしか考えてなくてさ」

「「ヤルこと？」」

声を合わせてサクラコと一緒に聞く。ミサは困つたように笑つて。

「二人にはまだ早いかなゝ」

なんだ、それは。私は頬を膨らましてお昼を食べる。

「成る程。それで別れた訳だ」

「それもあるけど、後はやっぱり山吹先輩かな。やっぱ、彼氏にするなら山吹先輩でしょう？」

「まあ、それはそうだけど。って、アンタもしかして先輩狙ってるの？」

「え？円も狙ってるんじゃないの？」

ミサが聞くと、マド力が顔を赤くする。

「えっ！？いや、私はその、ほら先輩には他にふさわしい人がいるから」

「例えば？」

「例えば、千鶴さんとか」

チヅル、あの何時も笑顔で何考えているか分からない奴か。確かにアマトと世間話してても違和感がない。しかも、私達と同一年とは思えないほど身体が、その、大きいからな。アマトといてもなんら違和感がない。

「まあ、確かに千鶴さんはお似合いだね。でも、駄目だよ。仮定してその結果で落ち込むのは。もしかしたら二人とも相性が合わないかもしれないじゃない」

「そりゃそうだけど」

何故だかマド力が唸る。

「まあ、私はそんなの関係なく当たって砕けるの姿勢で告白してみるけどね」

「え？」

マド力が呆ける。それを見てミサが笑う。

「冗談よ。確かに先輩は好きだけど、恋愛感情じゃなくて、純粹に憧れ。もう、円は正直だからからかい甲斐があるな」

「もう！！！！驚かさないでよ。はあゝ、変に緊張したじゃない」

そういつて、水筒から御茶を汲んで飲む。

「で？円はどうなの？先輩の事好きなの？」

ミサがそういつと、ブホッ、という音と共にマド力が吹き出す。サクラコと一緒に素早く弁当を守る。

「な、な、な、な。だから私は別に、その……………」

もともと口籠るマド力にミサはニヤニヤと笑みを浮かべる。私は興味が無くなり、サクラコが連れてきたビツケとクッキ、ラブレスにサクラコと一緒に弁当を楽しむことにした。

Re・No:35「修行 乙女の恋」(後書き)

どうも、作者です。さあ、やっと形に出来ました天の戦闘方法。主に糸を自分の周りに張り、攻撃を探知、阻害させ、カウンター狙い。相手と距離があつたり、カウンターでも倒せそうにないと踏むと、NARUTOのサソリさんが持っている『三代目風影』の砂鉄を固め、相手に飛ばすように、糸を編んで相手に攻撃したり、好きな形に編んでスタンドもどきなど色々ネタな物を作ります。しかも、強さは折り紙つき。といつても、どれだけ編み込んでもタカミチの『豪殺居合拳』で相殺されますけど。よって、ラカンには勝てません。ていうか、ラカンに勝てたら駄目か。そしてオマケといつては何ですが、最近出番が減って申し訳ないチア三人とノーマ。彼氏と別れた理由と気になるあの人。さあ、円の恋の行方は？次回も御期待下さい



Re・No:36「デート ノーマのお悩み相談室」

「へ？釘宮が？」

「そう、今日公開される映画のチケットが余ったとかで、お前を誘いたいそうだ」

朝、ノーマが朝食を食べている時にそう切り出した。

「俺以外にもいるだろ？クラスの奴とか」

「皆、用事があるそうだ。唯一用事がない双子も内容を聞いたら、断ったそうだ」

あの元気一杯の双子がねえ。

「どんな映画だ？」

そういうと、ノーマが映画のパンフレットを渡す。今話題のホラー映画だ。こりゃ、確かに子供には見せられん。

「んゝ、そうだな。俺もこれには興味あったし。待ち合わせは？」

「渋谷の駅前に11時だそうだ」

現在時刻は10時前、色々と身支度して出掛ければ丁度いいだろう。

「んじゃ、そういう訳で昼飯は皆で作っておけよ？」

そういつて、自分の部屋に向かう。

「じゃあ、私はマドカの所に行つて来る」

そういつと、ノーマがラブレスを連れて家を出ていく。さて、何を着ていくかな？

「これは、結構重大やな？」

「何がです？」

もゝ、リイリアはんは鈍感ですなゝ。

「決まってるやろ？男と女、二人で映画なんて今どきベタなデートやないの」

そういつと、食後のお茶を啜っていたラサティはんが咳き込む。  
分かりやすいなゝ。

「な、デート？アマトがか？！」

「勿論、天はんはそんな事思つてまへんえ。精々、後輩の付き添いみたいにしか考えてへんやろ。せやけど、相手の釘宮はんやったっ

け？彼女は絶対にデートのつもりやと思うで？」

まあ、もしかしたら釘宮はんの友達が気を利かせたかもしれないけど。

「だ、だからどうだって言うんだ。僕には関係ない」

「ふん」

そういつて、携帯を取り出し。このネタに食い付きそうな人にメールを送る。すると、天はんが降りてきた。

「んじゃ、行ってくるから。後、宜しく」

そういつて、外に出る天はん。

「アマトさんってやっぱり格好いいですね」

「そやね、あの容姿なら言い寄って来る子もいるやろっね」

そういつと、メールの返信が来た。

「お、なんや、結局全員気になるんか。ほな、そうと決まれば、行きますか」

「行ってくて何処に？」

まったく、これだから武道一筋の輩は察しが悪い。

「決まってます。お二人の尾行どす」

「はあ、美砂も勝手なんだから」

まあ、それに乗せられた私も私なんだけど。

「うう、早く来すぎた」

現在時刻は10時30分。待ち合わせまで後三十分。近くのカフェで時間潰そうかな？といっても、なんで申し合わせたように満席なの？

「うう、どうしよう」

「何が？」

「うひゃあっ!？」

驚き、変な声を上げる。振り返ると先輩が立っていた。

「え？先輩？」

「おう、驚かせたか？」

「い、いえ、大丈夫です。でも、約束の時間まで、まだありますよ」

ね？」

「ん？１１時丁度だけど？」

「へ？」

言われ、駅の時計を見ると１１時だった。

「え？なんで？だって、時計は」

腕時計を見てみると、時刻は１０時３０分だった。

「ん？」

よく見てみると、秒針が動いてない。どうやら、壊れていたようだ。

「はあ」

「どうした？」

「いえ、その時計が壊れていて」

「なら、映画終わったら買いに行くか？」

「えっ！？」

驚いて先輩を見る。

「いいんですか？あの、予定とかは」

「無いよ。元々暇だったし。家の事は居候に任せたから。今日は完全フリーだ」

そういつて、ニツと笑う先輩。

「じゃあ、お願いします」

私も笑って返す。

「んじゃ、行くか。ああ、そうだ。ヘアピン、似合ってるぞ」

「えっ？」

言われ、ヘアピンに触る。ちょっとしたイメチェンで付けたのだけど、先輩は気付かないな、と思っていたのだが、まさかいきなり言われるとは、それも似合ってるなんて。

「おい、釘宮？」

「あ、はい。今行きます」

呼ばれ、先輩の方に行く。根拠はないけど今日はいい日になりそう。

「ガラム4からガラム1へ。目標は移動を開始した」

『了解、ガラム4。そしてガラム隊各自へ。これから目標を尾行しつつ、件の映画館に侵入する。各自財布の準備は万全か？』

『ガラム2、問題ありません』

『ガラム3、同じく問題ないで』

「ガラム4、問題ない」

『ガラム5及び6、7、8、問題ありません』

『では、尾行を続行せよ』

携帯型高性能無線（提供、ハカセと超）のスイッチを切る。因みに今回、この作戦（？）に参加したのは千草さん（ガラム1）刹那（ガラム2）木乃香（ガラム3）私こと龍宮（ガラム4）茶々丸（ガラム5）ラサティ（ガラム6）リイリア（ガラム7）柿崎（ガラム8）だ。さて、悪いけど尾行させて貰うよ。

「えっと、学生二枚」

「はい、  
円になります」

お金を払う。店員さん。その「分かっていますよ」的な笑みは止めてください。凄く恥ずかしいです。というより、さっきから視線が集まっている。理由は、多分先輩だと思う。先輩は結構イケメンだと思っし、ファンクラブも出来ているから（始めたのは私達三人だけど今じゃ、会員三ケタ行っていたような気がする）周りの注目を集める。それだけでも恥ずかしいのに「カップルかな？」とか、言われると恥ずかしすぎる。

「釘宮、大丈夫か？顔赤いぞ」

「え？あ、いや、だ、大丈夫です」

「本当か？熱でもあるんじゃないのか？」

そういつて、私の額に先輩の額が当たる。

「~~~~~~~~!!!!!!」

「ふむ、そんなに熱はないみたいだな」

なんで、そんな簡単に来るんですか？必死の疑問も届かず、先輩が店員に誘導されて奥に行きます。

「あ、待って下さい」

慌てて追いかける。



「こちら、ガルム5。皆さん、目標が映画館に入りました」

『こちらでも確認した。それにしても、目標の鈍感さは最早、天然記念物だな』

『まあまあ、恋愛感情持たない人間相手は普通こうだって。まあ、女の子相手にアレは普通しないけど』

『我々も入るぞ』

「了解です」

通信を切る。釘宮さん、顔が真っ赤でしたね。少し可哀そうです。でも、何故だか羨ましいです。何故でしょうか？

「そつえば、釘宮って怖いのが平気なんだな」

「ええ、結構好きです。先輩も好きなんですな」

「意外か？」

「ちょっと。先輩って結構、感動モノ見ているイメージですから」

「どんなイメージだよ」

そういつて、笑いあう。なんだか、好い雰囲気。本当にデートみたい。すると、ブザーが鳴って暗くなる。そろそろ映画が始まるようだ。

「楽しみですな」

「そうだな」

そういつて、笑いあう。

「アスナと喧嘩？」

「はい」

なんだ、相談に乗って欲しい、と頼まれたので聞いてみたら、そんな事か。一気に興味が無くなった。だが、引き受けた以上、やらなければいけないだろう。

「で？なんで喧嘩したんだ？」

「それは」

そういつて、ネギがポツポツと先日話を話し始める。

『GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

「キヤアッ！！！！！！」

「うわっ」

釘宮があまりの恐さにしがみつく。俺はあまりのリアルさに軽く引く。反面、よく此処まで演出を出す映画に感心する。よく言われるが、俺は映画を楽しんで見るも、映画自体を楽しんではない。映画を見て、その撮影方法や撮影技術等、評論家などが上げる様な所に関心を寄せるのだ。

「あ、すいません」

「気にすんな。俺でよければしがみ付いてもいいから」

そういつて、笑う。まあ、よく見えてないと思うが。

「はい、分かりました」

そういうと、しっかりとしがみ付いて来る。それに苦笑しながら、映画を見る。

GYAAAAA  
!!!!

「キヤアツ!!!!!!」

「リリア、怖いなら外に出てもいいぞ?」

「そうそう、無理しない方がいいよ。外には早くも耐えられなかつた近衛とそれに付き添つた茶々丸がいるし」

そういつて、ポップコーンを食べるマナさん。

「そうですね。じゃ、私は先に出ています」

そういつて、足早に外へ向かう。うう、夢に出てきたらどうしよう。

「成る程な。うん、ネギが悪い」

「えうつ、ですよ。でも、なんで怒ったんでしょう？」

こいつ、本気でそんな事を言っているのか？まあ、見た感じ本気で言っているようだ。

「関係ない、か」

「え？」

「お前がアスナに言った言葉だ。確かにお前からすれば巻き込んでしまつて気が引ける、という事で言っているようだが、アスナはもう引き下がれない場所まで来ているんだから無理だろう」

「そんな！？」

「考えてもみる。お前達は京都で派手に動いたろ？和解したとは言え、まだ両者の関係は険悪だ。もし、刺客を送ってきたら誰が最初に襲われると思う？一番に狙われるのはコノカだとしても、コノカには護衛がいる。なら、先ずはコノカの友人関係を狙ってくる筈だ」

ネギが少し考え、そして青褪める。

「気が付いたろう？事態はお前が考えている以上に不味い状況だ。もし、お前がアスナを危険だから、元々無関係だから、という理由

で一人にでもさせたら真っ先に狙われるぞ？まあ、アスナ自身はそんな事考えてないがな。もっと単純な理由だ」

「え？」

本当にコイツは、人間関係でのコミュニケーション能力が低いな。私でもアスナにそんなこと言わんぞ？

「お前、もしあの試験の時アスナに『アンタは子供なんだから、危険な事なくていいの。そういうのは大人に任せておきなさい』と言われたら、どう思う？」

「そんなの、決まっています。……………あつ」

どうやら、気付いたようだ。

「そういう事だ。それと謝るなら今じゃなくて後にしろ。今の時間、アスナが何しているか分からんからな。この前みたいに全裸で呼び寄せるみたいな事するなよ？」

「は、はい」

そういつて、ネギは笑ってお礼を言い、家を出た。

「はあ、暇だからといって相談になんて乗るんじゃないかった」

ソファーに寝転がる。すると、ラプレスが私を覗きこむ。

「お前はいいな。悩みなんか無さそうで」

「それでもにゃいよ？」

「……………へ？」

周りを見渡す。私とラブレスしかない。

「なんだ、気のせいかな」

「失礼にや、喋っているのは私だにや」

驚き、ラブレスを凝視する。

「こうやって、話すのは初めてにゃね」

「そう言っている割には、口が動いてないぞ？」

「そ、それは、ノーマにゃんの頭に直接呼びかけているからにや」

成る程。

「そうか、ラブレスは喋れたのか。凄いな、アマトにも伝えなければ」

そういつて、居間を出ると壁に隠れているサクラコと出くわした。そういえば、さっきの声もサクラコに似ていた様な。

「……………」

「……………腹話術。にゃんちゃって」

凄い、困った空気になった。

「面白かったな」

「ちょっと、リアル過ぎて、気持ち悪いです」

そういつて、口に手を当てた釘宮は確かに気持ちが悪そうだ。

「近くに公園があるからそこで休むか？」

「はい」

よろける釘宮を支えながら、近くの公園にあったベンチに座らせる。

「なんか、飲むか？」

「じゃあ、スポーツドリンク」

言われ、近くの自販機に買いに行く。

「これでいいか」

自分の分も買って、釘宮の所に戻る。



「ほい」

「ありがとうございます」

そういつて、ゴクゴクと喉を鳴らしながら、スポーツドリンクを飲む。

「ふう、ありがとうございます。なんか、すいません。誘ったの私なのに、こんな手間掛けさせちゃって」

「気にしない、気にしない。こんなの、手間の内に入らないって」

そういつて、笑う。釘宮も笑って返す。

「まだ、気持ち悪いか？」

「いえ、大分良くなりました」

「そっか。んじゃ、行くか」

そういつて、立ち上がる。

「えっと、何処に行くんですか？」

釘宮は忘れている様だ。

「何処って、時計買いに行くんだろ？」

「あっ」

思い出したのか、急いで立ち上がる。だが、勢いが好過ぎたのか、釘宮がよろける。慌てて支えてやる。

「あ……………!？」

予想より、釘宮は軽かった。

「ほほ？」

そういったのと、同時に蓋を開けていない缶のジュースを握りつぶす。中身が手を汚すが、お構いなし。

「ガラム4からガラム1へ、ターゲットの射殺許可を願いたい。どうぞ」

『却下や』

「チツ!……!」

『ガラム1から各自へ、あの状況を自分に置き換えて想像してみる。そうすれば……………』

何やら、無線の先で生唾を飲む音が聞こえた様なしたが、取り敢

えず言われた通り、想像してみる。

「あっ」

「大丈夫か？真名」

「うん、ちょっと目眩がしただけ。大丈夫だよ」

そういつて、私が笑う。

「あんまり無理するな」

そういつて、私の手をしっかり握る。ただ、その視線は明後日に向いている。頬が少し赤いのは照れているのだろうか。

「倒れでもしたら、運ぶのが面倒だろう」

「うん、分かった」

少し嬉しくなった私は、そのまま、天さんの右腕に寄りかかる。

ああ、うん。凄くいい。

「ガルム4からガルム1へ。今、とても幸せな想像が出来た。ので、今からその想像を具現してくる」

『しまった、逆効果かつ!?』

『やらせん。ガルド4』

『よし、ガルド2ガルド4を止めるんや』

『分かっています。想像を具現するのは私だ』

『いいえ、私です。他の方は退いて下さい』

『そも、いかんでえ』

ほう、いいだろう。ならば。

「誰が天さんに相応しいか勝負だ」

『『望む所!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』』

『なんだ、この状況?』

『さあ?』

『まあ、先輩に好意を寄せている子が身近に結構いたみたいだね』

『嫌に食いつきがいいと思ったら、こういう事かいな。アホやな』

外野が何か言っているが、気にするものか。

## Re・No:36「デート ノーマのお悩み相談室」(後書き)

どうも、作者です。今回はネギが明日菜と喧嘩して南の島に行くまでの繋ぎです。だけど、何故だかノリノリで書いてしまいました。因みに作者はホラー系は苦手です。子供の頃に『エクソシスト』という映画を見て、それ以来ホラー系は駄目になりました。パニックホラーは大丈夫なだけだね。そして尾行組のガルム1とかは某戦闘機ゲームから取りました。知っている人はいるかな?では、次回は南の島編。ですが、行くのはノーマだけで、天は居残り組です。ていうか、どう頑張っても部外者の天を南の島に招待なんて無理です。という訳で次回は天と居残り組(長瀬、長谷川、相坂、ハカセ、超、茶々丸、エヴァ、龍宮、五月、ザジ、リイリア、ラサティ、千草です)のお話です。ですが、どれと絡ませようか悩んでいます。もし、要望があるなら感想に下さい。では、次回もお楽しみに

## Re・No:37「週末の過ごし方」

「それじゃ、行つて来る」

「ああ、楽しんで来い」

ノーマを見送る。なんでも、雪広が南の島にネギを連れていく、  
というのでそれに便乗するらしい。そういう事で、昨日は何故だか、  
水着選びを手伝わされた。しかも、なんでか、同伴者が多い多い。  
一緒に付いていく木乃香や刹那は分かるが、なんで真名まで？ラサ  
ティはリイリアに無理矢理って感じだったが。ていうか、皆を先導  
しているのが千草さんとは。まあ、仲がいいという事でいいだろう。  
だが、何故俺まで女性専門の店まで付いていかなきゃならんのだ？  
外で適当に時間を潰す、とか言ったら必死になって。

「……男性の意見を聞きたい」……

とか、言いだした。荷物持ちだけじゃないんだ。しかも、上機嫌  
の女子に昼飯と甘味を奢らされ財布がかなり軽くなってしまった。

「まあ、役得か」

普段は見る事も出来ない女性の下……………もとい水着姿を  
見れたのだから、良しとしよう。

「で？なんで水着まで買ったお前らは付いていかないんだ？」

「僕は無理矢理だったし。それにノーマの知り合いに接点なんてな  
いだろ？」

「私も同じです」

「うちもそうや」

「昨日は気分で付いて行っただけだから。それにまだ海って季節じゃないから」

居間で俺が作ったパンケーキを食べながら、居候<sup>s</sup>が口々に言う。確かにそうだ。コイツ等はノーマに付いて行く口実が無いのだ。久しぶりに静かな週末が楽しめると思っていたのだが。此处では静かどころか、煩くて敵わん。

「ん？静かな場所？」

待てよ？何か忘れてないか？

「……………おおっ」

思い出し、手を叩く。そうだ、静かな所ならあそこに行けばいいじゃないか。

「どうかしたのかい？」

「ん？ああ、ちょっと出掛けようと思ってさ」

そういつて、立ち上がる。

「まあ、いいけど。夕飯までには帰るよね？」

「あ、日曜の夜まで帰らないから」

そういつて、部屋に行つて外着に着替える。そして家を出る。その時、何故だか真名が頂垂れていたが、どうしたんだろつか？

「天さんのご飯を二日も食べられない」

「なんか、マナが頂垂れているが、そんなにショックか？誰か代わりに作るだけだろ？」

「真名はんは天さんの料理に依存しているみたいやからな。まあ、誰か作ればええやろ」

「二人とも自分が作る、とは言わないんですね」

私が苦笑しながら言うと、二人が顔を背ける。チグサさんは料理出来る筈なんだけどな。姉さんは、何時も私が作ってるから、全然作った事ないんだよね。

「週末を利用して出掛ける、かあ。何処に行くんやろ？」

お茶を飲みながらそう呟くチグサさん。すると、マナさんがゆらりと立ち上がる。



「そうだ。何処に行くんだ？天さんは私に料理を作る以上の優先事項があるということか？」

えっと、何だかマナさんが怖いです。確かに変ですよ。料理を作っているアマトさんは凄く楽しそうなのに。

「アマトさんもたまには一人になりたい、とか？此処最近、無理してるみたいだし」

そういうと、皆が頷く。うん、確かに最近アマトさんは忙しく動いている。だからたまには一人で過ごしたいんだろう。

「でも、もしかしたら『女』かも」

チグサさんがそういうと、マナさんから殺気が溢れました。なん  
で？

「まあ、ウチの推測やからな」

そういつて、カラカラ笑う。でも、マナさんの殺気が止まりませ  
ん。

「此処に来るのも久しぶりだな」

図書館島の入り口で呟く。週末の所為か、人がいない。さて、何を讀もうかな？

「うっは、汚ね」

一般生徒が使う場所は整理しているが、少し下に行けば、本が乱雑している有様。

「うん、二日も暇だからな」

此処だけでも整理するか。

「うし、やるか」

即、決断。早速近くに落ちている本を近くの棚に収める。すると。

「だれか」

なにやら、唸り声が聞こえる。周りを見ると本が山になっている場所を見付けた。

「だれか」

近づいてみると、唸り声はそこから聞こえた。取り敢えず、本を退かして掘りだす。

「ええっと、長谷川だっけ？」

「ど、どうも」

十分位、本と格闘して出てきたのは3・Aの確か、長谷川という少女だった。たまに電気街で会うだけで、接点がない。因みに電気街に行くのはゲームを買う為だ。

「なんで、長谷川が図書館島、それも本に埋もれてるんだ？」

引っ張り上げる。長谷川は服に付いた埃なんかをはたいて。

「いや、本を返しに来て。返した所まではいいんですけど、帰る時になんか、罨が作動したらしくて」

「んで、此处で埋もれてたのね。どれくらい？」

「十分位」

案外、短いな。

「これが一日単位だったら面白かったのに」

「先輩、それ洒落になってないです」

そうだね。

「そうだ。助けたお礼に整理手伝ってくれる？」

「お断りします。帰ってやることがあるので」

「それって『ちうのホームページ』を更新する為？」

聞くと、凄い勢いで胸倉を掴まれる。

「な、ななななな、なんでソレを？」

「ありゃ？本当に長谷川がやってたの？冗談で言ってみたのに」

そういつと、長谷川が膝を付く。

「終わった。全部……………」

何やら、物凄い陰鬱なオーラが長谷川から発せられる。うん？選択肢間違えたかな？

「証拠隠滅？そうだ、近くにはこんなに凶器が転がっているじゃないか」

あれ？なんか、不吉な単語が聞こえたんだけど、気のせいだよな？

「明日の新聞は『図書館島で変死体発見』で決まりだな」

そういつて、立ち上がった長谷川の両腕には重くて分厚くて、やたら堅そうな本が一冊ずつ。

「長谷川、この事は誰かに話したりしないから、その本を降ろせ。それと目に光が入ってないから、目を覚ませ」

「ダレニモハナサナイ？」

何か、口調がガラリと変わっていて凄く怖い。

「あ、ああ。誰にも話さない」

「目を……合わせろっ！！！！」

叫んだ瞬間、目の前に本が迫る。ああ、此処で『氣』とか使えたら便利なんだけどな。取り敢えず、糸でバレないように軌道修正はしておいた。

「フウ、フウ、フウ。ん？」

荒い息を整え、我に還る。そして視線の先には額からドクドクと血を流している山吹先輩。私の手には帰り血が付いた分厚くて、堅そうな本。

「ええつと？」

これは非常に不味い状況なのでは？取り敢えず、倒れている先輩を突いてみる。ビクビクと痙攣はしているが、呼吸は通常通りだ。

「よかった」

はあ、安心して近くの本（床が見当たらないので）に腰を下ろす。

「もし、死んでたら死体処理しなくちゃいけなかった」

「意外と薄情だな」

先輩が目を覚ました。だが、額からはドクドクと血を流している  
ので立ち上がりうとはしないけど。

「そりゃ、そうでしょう？私と先輩って接点があんまり無いから」

「確かにそうだな。だけど、からかっただけで撲殺されかけるのは、  
ちよつとな」

そう言われると、辛い。私もあの時はテンパってたからなあ。

「まあ、役得だからいいか」

「もしかして先輩ってM？」

「失礼な。俺はどちらかというところだ。そういう役得じゃないよ」

そういつて、顎に手を当てて、唸る。はて？じゃあ、何が役得な  
んだろうか？他になにかあるか？と考えてふと、先輩の視線が気にな  
った。先輩は横になって私を見ている。私の座り方は体育座りの  
足を外に広げたようにして座っている。そして先輩のしている先を  
予想して。

「意外と大人し目の下着なんだな」

それを聞いた瞬間、スカートを抑え、本を振りかぶる。

「あ、ちよつ、まっ！？」

それから記憶よ、消えろ。と、念じながら念入りに本でボコつた。途中から水が入った袋を叩く様ながら、濡れた肉やなんかを叩く感触に変わり、音も『ドカツ、バキッ』ではなく『グチャッ、ベチャッ』という音に変わっていたけど、全然気にしない。

死ぬかと思った。やられる寸前に糸で分からない様に防御して、致命傷は避けたけど、まだ痛む。流石に悪いと思ったのか、少し乱暴に（だが、修学旅行で受けた二人の治療より、かなり優しかった）治療してくれた。そして何故かあった救急箱の絆創膏を貼り終わると、長谷川がため息を吐く。

「先輩って変態なんですね」

「何の捻りもなく、ストレートで言われると結構、傷つくね。ていうか、俺は変態じゃない。異性に興味津々なだけだ」

「てことは、ノーチエとか龍宮さん、刹那さんとかにも？」

あいつら？まさか。

「アイツ等は最早、妹みたいな感じだからそれはない」

たまゝに、ドキッと来る時があるけど、それだけだ。

「はあく、気の毒だな。アイツ等」

「なんで？」

素直に聞くと、何やら可哀そうな物を見る目で見られた。俺が何をした？

「先輩、鈍感って言われた事あります？」

「しょっちゅう」

そう言つと、長谷川が一際大きなため息を吐く。

「腹減つたな」

「いきなりですね」

よし、なんか飯食いに行くか。

「え？ちよつ、なんで私まで？」

「何となく。いいじゃん、先輩と後輩の交流を深めるためって事で。ぶつちやけ、一人で飯食うの寂しいし」

「本音出てますよ。ていうか、先輩。私財布持ってないんですけど」

「仕方ない。奢ってやるよ」

こっちは多く持ってきてるからな。



「いらつしゃゝい。って、長谷川さん力。珍しいネ」

「私は遠慮するって言ったのに」

何故か、長谷川さんがカウンターで頂垂れている。何かあったのか？あ、五月が持ってきたスープで元気出たみたいネ。

「それにしても、一番珍しいのは山吹先輩ネ。確か、先輩は自炊派だった筈だが、こういう風の吹き回し力？」

「まあ、たまには『超包子』の飯を食いたいと思ったんだ。それに最近、料理が和食に偏って来たからな、此処は一つ、中華でも作ってみようかと思ったんだ。此処に来たのは中華の研究だよ」

「ほほう？という事はこの『超包子』の味を盗む為力？」

そういうと、先輩はニヤリと不敵に笑う。うん、中々『悪の力リスマ』って感じネ。

「勘違いするなよ？味を盗むなんてしないさ。俺なりに工夫させて貰っただけだ。例えば、この炒飯だが」

そういつて、一口炒飯を食べる。

「これだけでも、充分美味しい。だが、此処に」

そこから始まったのは先輩の主夫としての知恵と魅力溢れる独創力から生まれた新たな調理の話だ。この話は私や五月は勿論、長谷川さんまで虜にした。今まで先輩の事は『自炊が出来て、後輩に人気がある人物』という認識だったが、改めさせられた。この人は中々凄い物を持っている。

居間にいるマナさんがずっと不機嫌です。姉さんはそういうのに慣れている所為か、平気みたいです。千草さんは、そんなマナさんをニヤニヤ笑いながら見ているだけです。はあ、早く帰って来てくれないかな。

「ただいま」

私の願いが届いたのか、アマトさんが帰って来た。

「お帰りなさい。あれ？明日まで帰らないんじゃない？」

「そのつもりだったんだけど。止めた。流石にあの状態の真名はリイリアにはちょっとキツイから」

はい、物凄くキツイです。

「夕飯は……………まだみたいだな」

そういつて、買ってきた材料を調理し始める。マナさんは全然氣付いてない。

「へえ、今日は中華かあ。楽しみやなあ」

「うん、美味そうな匂いだ」

二人が嬉しそうに頷く。私も同じ気持ちだ。

「出来たぞ。ほら、真名もなんで不機嫌になってるか、知らんがコレ食って機嫌直せ」

「天はんは鈍感やな」

その言葉にアマトさんは少し拗ねたような顔を見せた。その後、機嫌がよくなったマナさんにホッとしたのは言うまでもないだろう。

Re・No:37「週末の過ごし方」(後書き)

どうも、作者です。結局、3-Aの何人かと絡ませてみました。  
そして次回からヘルマン戦。そして麻帆良祭編。お楽しみに

Re・No：38 「意外な遭遇」

「くっ?!」

大蛇が迫る。それを杖に乗って回避する。

「おっと、逃がさん!!!」

声と共に上空から数メートルある大鷲が襲いかかって来る。それを間一髪で避け、振り向く。

「白き雷!!!!」

放たれた雷が蒼い獣を爆散させる。まき上がった煙を目くらましにして突っ込む。煙を突っ切り、拳を放つ。が、そこには誰もいなかった。

「上っ!?!」

「正解だが、少し遅い!!!」

声と共に上空から光の羽が降り注ぐ。驚いた事にそれぞれの羽が変則的な軌道で向かってきた。でも、最終的に来る場所は分かっている。邪魔なので杖を放り投げ、足に魔力を溜め、一気に後ろに跳び退く。これで当たらない、そう思った瞬間、驚く事が起きた。

「えっ?!」

光の羽が僕の動きに合わせるように追いかけて来たのだ。直ぐに

呪文を唱える。

フランス　バリキ士風アールス  
「風花・風障壁！……！！！」

障壁で全ての羽を吹き飛ばす。よし、これで反撃が出来る。

「つて、うわあっ！？」

いきなり目の前から蒼いライオンが襲いかかって来た。突然の事に対応できず、噛みつかれる。でも、痛くない。

「はあい、俺の勝ち」

そういつて、上からアマトさんが降りてきた。そしてアマトさんの声と共に？みついていたライオンが消える。

「まったく、五戦五敗とは情けない」

「あううゝ。済みませんマスター」

そうなのだ。アマトさんと一緒に修行を始めてからというもの、ずっと負けているのだ。

「まあ、あの羽を防ぎきったのは頑張った方じゃないか？」

アマトさんが微笑みながら言う。

『アホ、アレは私が手加減して撃ったのだ。本気で撃ったら、あんな障壁程度、簡単に貫ける』

そういつて、アマトさんの両手から生えている羽から、光を纏いながらノーマさんが現れる。修行を始めてから聞いたのだが、ノーマさんは知識でしか知らなかった『エディルレイド』だと言うのだ。驚きながらそういつと、ノーマさんが嬉しそうに胸を張っていたのを覚えている。

「確かに、あの状況判断の速さは驚嘆に値する。だが、私の弟子を名乗りたいなら、追撃の獣を倒し、尚且つアマトに勝って貰わんな」

ううゝ、厳しいなゝ。でも、強くなれるから文句はありません。

「そういえば、さっきの羽ってどうやったんですか？」

「ああ、アレか？アレはな」

そういつて、アマトさんは右の人差し指を動かす。すると、僕の左腕が上がった。

「え？」

「更にホレ」

「うわっ！？」

今度は右腕が動き、背中では左腕と交差する。かなり痛い。

「痛いですゝ」

「ああ、済まん。簡単な事だ。お前の身体に付いている糸の上に羽

を乗せて飛ばしたんだ。これなら、絶対に逃げられないし、漫画みたいな羽同士をぶつけて相殺もできない」

「でも、何時の間に？僕、アマトさんに必要以上に近づいてませんよ？」

「坊やが煙の中に入った時だろう？器用な奴だな」

「勘じゃないぞ？獣が破壊されたと同時にソレに使っていた糸をクモの巣状に張ったんだ。そうすれば、絶対とはいかないが糸が絡まる。後はさっきの通りだ」

はあ、凄いなあ。僕にも出来るかな。糸じゃなくて『雷の結界』を応用して、空中に展開したり、それなら相手は空中で動けなくなるからどうする事も出来ない。でも、維持する魔力が半端じゃないからどうしようか。

「さて、今度の脳内会議は何分かかるかな？」

「何分でもいい。私は寝るからな。流石に五度も同契リアクトしたから疲れた」

そういつて、ノーマは茶々丸に誘導され、寝室に向かう。あれじゃ、仲のいい姉妹に見えるな。



「さて、坊やが考えている間にお前の問題点を上げるか」

そういつて、天の方を見る。

「ん？ああ、そうだな。俺が思っている問題点と客観的に見た問題点に分かるし」

よく分かっているじゃないか。

「なら、先ずはお前が思っている問題点を上げる。それに私が見付けた問題点を加えてやる」

そういつと、早速自分の問題点を列挙し始める。

「先ずは、俺自身の『気』が少ない事。なんか、お前の話だと『気』は『魔力』と同じで増えたりしないんだよな？」

「ああ、自ら生み出す物には限界があるからな。ただ、そういつのは潜在的な物で、無意識に使わない様になっている」

「要するに、リミッターか」

「そうだ。坊やの場合はリミッターが掛かっていて、あれ程の『魔力』を持っている。私は元々人間だが、吸血鬼であり真祖だからな、『魔力』もケタ違いにある。まあ、この話は別にしてだ。他にもあるぞ。お前、一氣に使える獣。幾つだ？」

「それ、問題点か？まあ、いいや。そうだな、大型、さっきの大鷲や大蛇、前に見せた飛竜なんかは二体が限界。逆にさっきのライオ

ン位の大きさは十体だな」

「ふむ、指一本で獣一匹か。それもそれで凄いが、やはりもう少し数が欲しいな」

それから坊やが復活するまで、オコジヨも交えて坊やの問題点なども話しあった。

「ただいま」

まだ眠っているノーマをおぶって家に帰る。

「あ、お帰り〜」

「買い物かい？ 帰りが遅かったけど」

「ああ、少し悩んでな。すぐ、作るから待ってる」

そういつて、ノーマをソファーに寝かせて台所に向かう。

「眠い……………」

幾らアツチで睡眠を取っても、眠気はある。しかも、起きぬけに飯作りは辛い。まあ、手は抜かんが。

「手伝う」

「ああ、悪い」

珍しい。ラサティが手伝ってくれた。けど、包丁を握る手が凄く危なっかしい。それじゃ、スパッと行くぞ。

「痛っ!？」

やっぱり、浅くだが指を切っている。確か、絆創膏は後ろの棚だったか？

「つたく、ジツとしてるよ？」

「あ、ああ」

血が出ている指を抑える。なんでそれだけで頬を赤くするのか分からん。取り敢えず、絆創膏を取り出し、消毒してから張ってやる。

「ほい、ていうか包丁の持ち方間違ってるぞ？教えてやろうか？手とり足とり」

「い、いらん!!--!--!--!」

そんな強く否定されると哀しいんだが。それから塩と間違えて砂糖を入れようとしたラサティに驚いたりしながら、食事を作った。

「ノーマ、起きて」

「ん、私の肉まんは？」

ベタな夢だな。

エヴァちゃんと修行してから、ネギの様子がおかしい。放課後から二、三時間の間だけなのにあんなにやつれるのはどういうことだろうか？カモに聞いてもはぐらかされるし。

「じゃ、じゃあ今日はここまでに」

そういつて、フラフラと（黒板に何回かぶつかりながら）教室を出ていく。やっぱりおかしい。

「たった二、三時間の練習であんなになっちゃうなんて絶対おかしいわよ。何やってるかつきとめてやる」

「成る程、エヴァンジェリンさんの修行ですか」

「わ？」

「それであんなにヤツれてんだ」

「私との朝錬でもフラフラで気になってたアルよね」

「何よ、アンタ達も気になったの？」

それと、いきなり現れないでよ。驚くじゃない。それから刹那さんとこのか、そして騒ぎを聞きつけた龍宮さんも加わって、ネギと（玄関で合流した）エヴァちゃんを尾行する事になった。

「まさか、こんな物があるとはな」

「はあ、凄いですね」

「俺も最初来た時は驚いたよ。この『別荘』にさ」

そういつて、俺は感心しているラサティとリイリアに振り向く。

「んじゃ、やるか。ノーマ」

「ああ、初めての同契者プレジャーとの闘いだ。気を抜くなよ？」

「リイリア。やるぞ」

「うん」

俺達は同時に同契して、構える。

「嫌な雨どすなあ」

先程から降り始めた雨は何時の間にか雷まで光っている。

「なあくんか、嫌な予感がしますわ」

そういつて、お昼の番組を流し見る。此処最近面白い番組がない。すると、呼び鈴が鳴った。

「はあーい」

答えながら家主でもないのに応対していいのかと思うが仕方ない。

「どちらさんですか？つて、あれ？」

「お久しぶりです。ちい姉さん」

そこにいたのは全身を雨でずぶ濡れになっている。

「月詠はん」

「はい、お久しぶりです。クシュンツー！」

月詠は可愛らしく、くしゃみをする。仕方あらへんな。

「取り敢えず話はお風呂入って暖まってからやな」

そういつて、月詠を引っ張る。なんか、今日は色々起こりそうやな。

## Re・No:38「意外な遭遇」(後書き)

どうも、フィロです。今回はヘルマン編。触り程度です。因みに最初の最大十体宣言は『NARUTO』の指の数を意識したのとか、高音の影人形が十数体出せた筈だから、その差別化です。流石に此处最近、主人公がどんどん強くなっているので何処かで区切りをつけさせないと最強物になってしまいそうでヤバイです。そんなこんなで、今回の更新をお楽しみに。因みに次回は千草さん大活躍です。



「な……どどど、どこのよ！！！！！！此処は……！！！！！！」

エヴァちゃん達を追いかけて、地下の変な場所まで来たのは覚えている。そこで何時の間にか皆が消え、気が付いたらなんか物凄く広い場所に出た。しかも暑い。

「あ、アスナも来た」

「皆二何処？」

「私達も分かんない。でも、アッチに広い場所があるから行ってみようよ」

朝倉がそう言った瞬間、広い場所に突然、巨大な蒼い一角の獣が現れた。

↖  
^  
?  
↙

皆の声が重なる。数十メートルの獣は顔を軽く振ると空に向かって。

ギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

吠えた。その地鳴りの様な声が空気をビリビリと震わす。

「ええつと、行く？」

一応聞いてみたが、皆が首をブンブン振る。

「いえ、行きましょう」

刹那さんがそういった。

「あ、いや、流石に刹那さんでもアレは」

「はい、多分私が相手でもアレは苦戦します。けど、アレが私の想像通りならこっちに危害は加えない筈です」

そういつて、歩き始める刹那さん。それに続く龍宮さん。

「あ、せっちゃん待って」

それを追いかけるこのか。

「此処にいても埒があかないわ。さっさと行きましょう」

「そうだね」

それから広場に向かった。すると、先程の獣は何かに向かって突撃していた。

「うわあ、大きい」

「あれ？何処かで見覚えがある姿」

すると、いきなり蒼い獣が弾けた。

「うひゃ!？」

すると、その弾けた場所から人が飛んできた。人はそのまま広場に倒れる。

「えっ!？なに？」

「少し、驚いたが扱っているお前はかなり無防備だぞ？少しは改善したらどうだ？」

女の人、確か先輩の家に居候しているラサティさんだ。

「何しているんだい？天さん」

「ん？真名、それにお前らも、なんで此处に来てんだ？」

さつき飛んできた人。天さんが立ち上がる。

「まあいいや。少し離れている。危ないから」

そういうと、先輩の周りに狼が現れた。その狼はラサティさんに殺到する。

「ふん、デカくて駄目なら数でか？甘い!!!」

全方位から突撃してくる狼を拳で、蹴りで弾き飛ばす。

「お前も分かっているだろう。それは僕には通用しないと」



「で？なんで脱走したんや？」

替えの服（仕方ないからノーマはんの服を拝借。ついでに下着も）に着させ、濡れた頭を拭きながら聞く。月詠はんは嬉しそうに笑みを浮かべながら。

「いやあ、ウチも何が何だかさっぱりなんです。座敷牢の中でマイブームの小説を読んでいたら、いきなり小太郎はんが牢蹴破って『逃げるで！！！！』なんて言いましてな」

「それでコツチまで来たんか？」

「はい。愛の逃避行です」

相変わらずの調子で呆れる。それと同時に気付く。

「ちょい待ち、小太郎はんはどしたん？」

そういつと、月詠が唸る。

「そうなんですよ。本当なら小太郎はんと一緒にこっちに来て、近くのホテルで部屋用意して、小太郎はん（自主規制）な事や（自主規制）な事をしようと思ったのに、あの軟体生物共」

「月詠はん。未成年はそんなことしちゃあかんで？まあ、それ以前に未成年の子供二人がホテルなんて無理やけど」

ウチの言葉に愕然とする月詠。知らんかったんか。

「で？小太郎はんは何処におるん？」

「さあ？」

「さあ、つて。まあ、小太郎はんはウチで探すから月詠はんは暖かくして寝てなさい」

「ええ」

口を尖らせて不満げな声を上げる。

「さっきまで雨に打たれてたんやから、風邪でもひいたら大変やろ？」

「風邪ひいたら、小太郎はんは看病して貰います」

「アホ。小太郎はんがそない器用な真似出来る訳ないやろ？絶対に  
お粥が猫まんまになるわ」

「あれ？お粥って猫まんまやないの？」

「当たり前や」

そういつて、コツンと頭を小突く。それに幾ら武器を選ばない神鳴流の者でも。

「素手で上位の悪魔相手は無茶ですえ？」

「ありゃ？バレてます？何時からです？」

「最初から。アンタを洗っている時に魔力の残滓が付いててな。そこから推測や。そういう事やから、月詠はんは此处で大人しく待  
つとき」

そう言つて、家を出る。はあ、雨は嫌いなんやけどな。

「まったく、危うく死ぬ所だったぞ？」

「へえ」『殺す気で行くからお前もそのつもりで来い』とか言つて、  
本気で殺気飛ばしながら攻撃してきた奴は誰かな？」

「ぐっ」

楽しそうに笑いながら天さんは悔しそうな顔をしていうラサティ  
に傷の手当てをしている。最初は嫌がつていたラサティだったけど。  
今は身体を糸で拘束させられて無理矢理手当てをされている。とい  
うよりも、あの糸。私が見た時より汎用性が高くなっているのか？

「面白くなさそうだね」。龍宮さん

「朝倉、三秒以内にその口を閉じないと穴だらけにするぞ?」

「朝倉さん。今の龍宮に声を掛けるのはゴ　ゴの背後に立つより、危険ですから離れてください」

こら、刹那。私はそこまで危険じゃないぞ?それ以前に私は不機嫌じゃない。天さんの技術の向上に少し驚いているだけだ。

「はい、終了」

「終わったんなら、拘束を解いてくれないか?」

「おお、悪い悪い」

そういつて、天さんが手を振ると、糸が消える。

「とでも言うと思ったかあっ!?!日頃サンドバックにされている恨みを晴らしてやるわあ」

「うわあっ!?!降ろせ!?!今すぐ降ろせ!?!」

糸は消えただけで、ラサティの身体を縛ったままだった。そしてその糸はラサティを逆さに吊るす。

「うーん、やっぱこの程度じゃ面白くないよな」

そういつて、糸を完全に消す。まあ、当然と言つべきかラサティはそのまま、地面に落ちるわけだが、その時「キャンッ!?!」という可愛らしい声が聞こえた様な気がした。



「んじゃ、ラサティが怒る前に夕飯を作っておくから、お前らも早く帰れよ」

そういつて、全力で出口に向かう天さん。少し変わった？

「ふむ、女の子の部屋に居座るなんて、月詠はんが聞いたらどうなるんやろな」

まあ、小太郎はんを世話した人間やから、殺さん筈やけど、腕の一本や二本取る位しそやな。ていうか、冗談抜きでしそで怖いわ。

「まあ、とにかく先ずは、小太郎はん奪取やな」

言つて、ポチッとインターホンを鳴らす。数秒後、ドアが開かれる。

「どなたでしょうか？」

「すんまへんな」

事前に取りだしたお札で顔を出した子に張る。

「はえ？」

言葉と共にお札を張られた子が倒れる。少し強い催眠の呪を掛けたので、そう簡単には起きない様にしてある。そしてチェーンを中に侵入させた子ザルに解かせた後、お札を渡して中の子達に張っておく。

「どうしたんや!？」

奥で小太郎はんの声が聞こえた。奥に向かう。

「千草姉ちゃん!？」

「お久しぶり。そしてこのアホ!!!」

声と共に小太郎はんの耳を引っ張る。

「痛い!？ちよつ、やめい、姉ちゃん。それにアホってなんやいきなり!!!」

「三週間大人しゅうしてれば!!!!!!無事にでられたものを勝手に脱走して!!!!!!それに月詠はんまで付き合わせて!!!!!!しかも悪魔まで呼び寄せて!!!!!!それをアホと呼ばんで何と呼ぶんじゃアホッ!!!!!!」

「あう」

耳元で叫んだ所為か、目を回している小太郎はん。ため息を吐いて。

「まあ、来てしまったんはしょうがないか。さっさと逃げる。訳にはいかんようやな」

「どないしたんや？」

小太郎はんは気付かんか。まあ、此処まで魔力消されたら気付かんわな。用心に探知結界張つといてよかったわ。先ずはこの部屋に防護と消音結界、次にお嬢さんたちを一か所に纏めて一番強固な結界を張つて。

「なあ、何しとんのや？」

「ちよつと黙つとき。そういえば、なんで悪魔なんか狙われとるん？」

聞くと、小太郎はんが腕を組んで唸っている。

「それが俺にも分からんのや。なんかこう、頭に靄が掛かったみたいでな」

成る程、なんか変な術でも掛けられたかな？まあ、完全に忘れてる訳じゃないから何か切っ掛けがあれば思い出すやろ。

「事情はどうあれ、小太郎はんが狙われとるのは変わりない、か」

小太郎はんの額にお札を張る。

「なんやこれ？」

「対象を悪魔とか妖怪には見えなくする物や。尤も対象者が音を出

したり、動いたりすると効力が無くなるけど」

「まるで『耳無しほうち』やな」

「ちょっと違うけど、まあええか。絶対に動いたらあかんぞ？」

そういつて、印を切つて術を発動する。

「後、ついでに保険を掛けて、と」

小太郎はんの周りに目には見えない結界を張る。

「？」

「それは気配や『気』を周りに出させない捕縛結界や。幾ら動かない、音を出さないと云つても挑発されて動いたらあかんやろ？」

そういつと、小太郎はんが拗ねる。多分「俺はそこまで子供やない」やろつか。そんな子供の様な態度に笑つてしまふ。おつと、そろそろ来る頃かな？

「おや？部屋には誰もいないと思つていたらお嬢さん一人かね？」

入つて来たのは黒いコートに黒い帽子を被つた老人。

「日の本では家に入る際、土足は厳禁やぞ？まあ、此処はウチの部屋じゃないから今回は大目に見るけど、次からは気を付けた方がええぞ？」

「おや？これは失礼。助言通り次からは気を付けるよ。では、君が

この部屋の主ではないとしたら、本当の主は何処かね？」

「ちょっと眠っております。そして安全な場所に移動させました。さて、幾つか質問ええですか？」

「いいとも、女性の頼みだ。私に答えられる範囲なら応えよう」

上機嫌に答える老人。

「まず一つ。悪魔であるアンタがこの麻帆良に来た理由は？」

「残念ながらそれは答えかねるな」

少し期待はしたけど、無理みたいやな。

「んじゃ、次。なんで小太郎はんを狙うんや？」

「コタロウ？ああ、あの狼男の少年だね。ヴェアヴォルフなに、私の仕事を完遂するのに邪魔な物を彼が持っているからだよ」

成る程、それで小太郎はんを狙ったんか。

「彼が持っている物を渡してくれば、此処は大人しく引き下がろう。勿論、彼にも貴女にも危害は加えない。どうかね？」

「魅力的な提案やな」

ウチがそういうと、悪魔はニコリと笑う。懐から札を取り出す。そして印を切つて式神を召喚する。

「でも、ウチの提案の方がもつとええわ」

「そうかね？差し支えなければ教えてくれないかね？」

「ええよ。それはな」

言葉と共に式神の内『猿鬼』の足元が弾ける。瞬間、老人の身体が『く』の字に曲がり、浮き上がる。

「ぐむっ！？」

「あんさんを倒す。それだけで解決や」

続いて『熊鬼』のいた床が弾けると同時に老人が床に激突する。

「これは、どういう事かね？一介の術者の力にしては些か強すぎるみたいだが」

そういつて、直ぐに『猿鬼』と『熊鬼』に対応してくる。

「まだまだ」

「ぬっ！？」

先に出しておいた子ザルを足にタックルさせ、バランスを崩す。そこに強力な一撃を加え『熊鬼』が羽交い絞めにする。

「ふふ、これでどうする気かね？私は何も吐きはせんぞ？」

「別に尋問がしたいとちやいます。単に動いて貰いたくないんです」

そういつて悪魔を羽交い絞めしていない『猿鬼』に札を飛ばす。飛んだ札は途中で物凄く痛そうな金属バットに変わる。所々に退魔の札やら呪殺の札やら張り付けてある。

「えつと、お嬢さん？これで何を？」

「あら、知らんの？これはな、今どきの若者がやっている『リンチ』っていう遊びの内だな。その中でも特に楽しい事が起きる物や」

「いや、お嬢さん。私が聞きたいのはなんで退魔の札が付いている物を触つて君の式神が無事なのかどうかであつてだね。それと『リンチ』は遊びじゃなオブウツ！？」

「煩いな」。

「舌嚙んだら危ないやろ」。少し黙つとき。まあ、あれはウチが独自に開発した札だな。ウチの式神『だけ』効かない様に作つたんや」

簡単に言っているけど、かなり難易度が高い物やから、これしか作れなかったけどな。そういえば、さつきから小太郎はんがガタガタ震えているけど、寒いんやろうか。ようし、此処はお姉さんが後で抱っこして温めて、つて止めた方がええな。流星に月詠はんが何するか想像できる。

「な、成る程。面白い事をするね」

「さあて、先ずは内臓一発、フルスイングと行こうか！！！！」

「いや、だからそれはアブハアツ?!」

ズガンッ、と凄まじい音を立てながらバットが老人の腹に深く入る。

「ありゃ？これで還されない、という事はかなり上位の悪魔やな」

呟いた瞬間、腹に衝撃が入り、そのまま後ろの壁に激突した。

「ガハッ！？」

視界の端で小太郎はんが叫ぼうとしている。駄目や叫んだらバレルやろ？言いたい事が分かったのか、小太郎はんが悔しそうに歯噛みする。壁にもたれながら老人を見る。丁度、式神が倒された所だ。

「流石に驚いたが、やはりこの程度。さて、そろそろ彼の居場所を教えてくれないかね？」

言葉と共に近づいて来る老人。もう少し。

「おっと、映画ではこういう時に罠が仕掛けられている物だ。危ない、危ない」

そういつて、事前に仕掛けて置いた罠の場所に一ミリの狂いなく勢いよく足を降ろす。ガラスが砕ける様な音が辺りに響いた。

「はん、最初っから分かってたんやろ？下手な嘔吐くのやめいや」

「ハハハ、それは済まない。さて、私の問いは答えてくれるかね？」

痛む腹、口の中に鉄の味が広がっている所から判断して内臓が少



なからず損傷している筈。けど、そこまで痛んでいる訳じゃないから、致命傷じゃない。流石に相手も加減が分かっている。まあ、それでも教えへんけどな。ウチは舌を出して。

「誰が教えるか、アホ」

「……………ならば、仕方ない。私も悪魔だ。元々交渉は不得意でね。此処は悪魔らしいやり方で、行かせて貰おう」

言葉と共にボキツ、と鈍い音が聞こえた。そこに目を向けると、あり得ない方向に曲がった腕が見える。

「……………?！」

「ほう、かなりの激痛が走っているのに叫ばないとは気丈なお嬢さんだ。しかし見ている此方は痛々しくて見ていられない」

そういうと、途端に腕の痛みが消えた。そしてもう一度腕を折られる。

「くうっ?!」

「さて、見ているのだろう?コタロウくん。君が大人しく出て来るなら彼女には手は出さない。どうするかね?」

「答え……………たら、あかんよ」

「私はこの部屋にいる彼に聞いているのだ。君は黙っていてくれな  
いか」

今度は腕を治さずに折れた腕を踏まれる。その際、折れた腕の骨が砕けた。

「あ、ぐっ!？」

「ふむ、どうやら彼は我慢強いようだ。仕方ないね」

そういつて、痛めた内臓の場所を蹴られる。

「ガッ、ハッ!？」

込み上げて来る血を吐きだす。吐血量はそこまで多くない。やっぱり直ぐに死なない、否、死ねない様に苦痛を与える様だ。

「誰も……いない部屋に……誰と喋っているんや?……さっきので頭打ったんか？」

老人は無言で骨が砕けた右腕を踏む。

「あぐっ!？」

「どうやら、彼はスプラッタショーが好きなようだ。悪く思わないでくれたまえ」

腕だけをかき爪に変化させる老人。ウチは呑気にあれにやられたら痛いんやろうな、なんて考えている。どうやら、痛みが強すぎて頭が混乱しているらしい。

「お嬢さん、最後に言い残すことはあつ!？」

老人が殴り飛ばされる。まあ、なんとなく分かっていたけど。

「ウチが言った事、覚えてます？」

「覚えてる。けど、今回は見逃してえな」

何時もの笑顔が何処か無理している。きっと腹ん中は煮えくりかえつとるんやろな。

「今回だけやで？」

「おおきに！！！！！！」

そういつて、跳び出す小太郎を見ながら、意識が薄れる。不味いな、誰か応援呼ばな。隠れていた子ザルを外に避難させる。これで大丈夫やろ。そう考え、視界が暗くなった。

「むむ、此処にもあらへん」

「こおら」

「うひゃっ！？誰や？泥棒さんですか？」

「泥棒はお前だろうが。なに人の冷蔵庫漁っている？」

家に帰ると、何やら小型の生き物が冷蔵庫に飛び乗って中身を漁っている。というレアだがあまり見たくない光景を目にしてしまった。取り敢えず、襟を掴んで持ち上げると、それはこの前、会った月詠という少女だった。その後、取り敢えず居間で作り置きしておいた団子を食べさせながら、事情を聞くも。

「ええと、なんでコッチに来たんですっけ？」

等と、団子を加えながら頭を捻っている。すると、バンツという音と共に小太郎とネギが入って来た。

「大變や（です）！！！！！！！！」

「小太郎はん！？そや、思い出しましたわ！！！！！」

取り敢えず、騒いでいるコイツ等は無視して小太郎が背負つてきた千草さんをソファーに寝かせる。この際、土足で上がつて来たのは大目に見よう。

「なあ、姉ちゃんは大丈夫か？」

心配そうに聞いて来る。

「さてな。俺はそんなに医療に強くないんだ。素人の俺達がどうこう出来る問題じゃない。病院に行きたいが、事情は説明できないんだろ？」

聞くと、二人が俯く。俺はため息を吐いて。奥の棚からある物を取り出す。

「なんや、それ？」

「あ、確かそれって」

ネギが気付いた。

「前に祖父さんから貰ってな。どんな大怪我でも直ぐに治る秘薬だつてさ」

これを飲ませれば、治るだろう。祖父さんは嘔吐かない人間だし。しかしコレ。

「丸薬なんだよな。取り敢えず、千草さんはコレで問題ない。で？お前らは何時まで此处にいるつもりだ？」

聞くと、何か思い出したのか直ぐに家を出ていく。

「あ、待って下さいよ」

月詠が慌てて追いかける。そして外で何かが転ぶ音と「あぶつ！？」という声が聞こえた。

「さて、俺は俺に出来る事をするか」

前に使ったけど、この丸薬、死ぬほど不味いんだよな。

「うーん、やっぱ気絶している人に頑張って飲んで貰うにはこうするしかないよな」

うん、救助の為ならノーカン、ノーカン。気楽に考え、丸薬を自分の口に放り込む。次に千草さんの口の中に口移しで飲ませる。次いで、喉に引っ掛からない様に水も口移しで飲ませる。

「ふ」

一通り終わり、口を拭う。しかし、救助の為とはいえ、初めてのキスが千草さんとは。どちらにしても、誰も見てないから問題なし。その後、冷やさない様に千草さんの身体を拭いた後、着物を着替えさせ、床を拭いてから。家を出る。どんな奴か知らないが家族に手を出した報いは受けて貰う。

Re・No:39「秘密の修行場 爵位を持つ悪魔」(後書き)

どうも、フィロです。今回はヘルマン登場。しかし、自己紹介してないので単に老人扱い。そして最初から全力の千草さん。できたら、彼女が主役の話も作りたいな、と思う今日この頃。今回はヘルマン戦。ちょっと変則ですが小太郎(原作通り、狗神使用不可)&ネギ&月詠(刀無し)&天VSヘルマンです。少し劣勢気味に書くのかな、と思っています。だって、相手は爵位級ですし。原作のあの弱さは流石にな。因みに作者はヘルマンが『闇の魔法』を覚えてネギにリベンジしてくると淡い期待を膨らましています。まあ、そうしないとパワーバランスが(原作の展開見ているとパワーバランス云々は最早塵と化していますけど)取れないので。では次回をお楽しみに

## Re・No：40「雷雨の決戦」

「ん？何処だ此処は？」

「あ、ノーマ気が付いた」

確か、雨に濡れたから寮の大浴場にラサティやリイリアも誘って皆で入ったんだよな。けど、なんで外に出ているんだ。しかも服を着てないし。

「むー、このままでは風邪をひいてしまうではないか」

「なんか、マイペースな人質だな」

声の方に向くと、チッコイのが三つ立っていた。妙に半透明で水っぽい。

「なんだお前ら？」

「アタシ等はスライムだよ」

「なっ！？」

私が驚くと三匹は嬉しそうに笑う。コイツ等がスライムだと？

「ふ、ふざけるなー！！！！！！！！！！」

「へ？」



「なんで怒られてるの？あたし達」

「分からない」

く、コイツ等がスライムだと？私は認めんぞ。

「スライムはな〜。もっと形状が不完全じゃないと駄目なんだ。しかも、貴様等見た限り唯のスライムだろう？私達を人質にしたいなら、群れからはぐれて、銀色の身体にブクブクと泡を立ててから来い！！！！！！！！！！」

「何言つてんだ？アイツ」

「さあ〜」

「ノーマ。抑えて、抑えて。気持ちは分からへんけど、変に暴れたらアカンて」

「む〜」

コノカに宥められる。そうして何故だかセツナ、マナ、ラサティだけが別々の場所に移されているのを確認した。それに。

「なんでアスナが縛られているんだ？物好きな奴もいるものだな」

「ちょっとそれどういう意味！？」

アスナが反論してくる。耳のいい奴だ。

「決まっているだろう？同じ縛るなら、もっとスタイルのいい、マ

ナカラサティの方がいいだろう?」

「ふむ、確かに盲点だったね。助言感謝するよ、お嬢さん」

声の方には黒い服に身を包んだ老人が立っていた。

「誰だお前?」

「私かね? 私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。伯爵といっても没落貴族でね。今はしがない雇われの身だよ」

伯爵? なんだそれは? 考えていると、空から何かが降って来る。

「うむ! いいね」

言葉と共にヘルマンに数十本を超える光の矢が降り注いだ。が、直前で何かに打ち消される。

「あつ!?!」

一瞬、視界の端でアスナの胸に着いたペンダントが光ったように見えた。

「おや? 来るのはネギ君とコタロウ君だけかと思ったら、ゲストまでご登場かね?」

「ゲストってウチ等でしょうかね?」

「まあ、そうだろうな」

やって来たのはネギと確かコタロウ、ツキヨミと呼ばれていた者アマトだった。アマトはこっちを見た後。

「先ずは人質救出だな。あのおっさんはお前らに任せる。後、月詠」

「はい？鉄パイプ？」

「近くの資材場からパクってきた。無いよりかマシだろう？」

言ってからアマトが私達の方に向かってきた。

「そう簡単に！！！！！！」

「行かせませんよ」

「お覚悟」

前のめりに倒れ、攻撃を避けながら、糸で獣を作りだす。

「先ずは三下が相手かな？」

「行つてろ、途中参加！！！！」

「三下は酷すぎません？」

「まあ、否定できませんけど」

それぞれが獣に応戦する。

「さてさて、俺は喧嘩弱いからよ。正々堂々なんて言葉知らないぜ？」

「あん？なんだありや」

「よく分からないですけど」

「先手必勝」

獣を吹き飛ばし、向かってくる。うし、準備万端。さっきよりも巨大な獣を作りだす。

「掛かって来いやあっ！！！！！！！！！！」

ウチの家族に手え出したらどうなるか、その柔らかい体に教えてやる。

「流石に三対一は少し厳しいね」

「ハッ、そう言ってる割にや、動きが速過ぎるで？」

「キツイ言うならもう少し表情に出して下さい。面白くないです」

「ええっと、皆を解放してください！！！！！」

月詠さんの攻撃で体勢を崩した所に僕と小太郎君の一撃を加える。

「ふむ、成る程。素晴らしい才能だ」

そういつて、距離を取る。反撃の隙は与えない。

「斬空せーん！！！！！」

「空牙！！！！！」

「白き雷！！！！！！！」

タイミングバツチりに放った攻撃は、またかき消された。

「またっ！？」

「どういつ事や？」

「なんや、種がありそうですな」

「おっと、そんな事を考えている余裕があるのかね？」

そういつて、拳を放ってくる。急いでその場を離れる。

「安心したまえ、ここ等辺一帯には結界を張つてある。多少、本気を出したくらいでは気付かれん。存分に力を使いたまえ」

取り敢えず、魔法は、消えるわけが分かるまで使用は控えよう。そう思つて構える。お爺さんが構える。

「私も本気で行かせてもらおう」

瞬間、僕達がいた場所に物凄い衝撃が来た。

「うおっ!？」

小太郎君が吹き飛ばされる。それを確認した瞬間、お腹に衝撃が来た。

「闘いの最中に余所見をするとは。余裕だね」

次いで背中に衝撃が来て、地面に叩きつけられる。

「ぐっ!？」

「斬空せゝん!!!」

月詠さんが攻撃したけど無駄だった。

「無駄だよ、お嬢さん。今の私に放出系の攻撃は効かない」

「む」

何とか立ち上がる。その時、横手から爆発音が聞こえた。

「チイツ!？」

「ほらほら、さっきの威勢はどうした？」

「あんまり粘るのは身体に悪いですよ？」

「無理しない方がいい」

「お気遣いどうも!!!!!!」

そこには額から血を流しているアマトさんがいた。アマトさんは後ろの皆さんを気遣いながら闘っているみたいだ。

「くっ!!!!!!」

フラつく身体を気合いでねじ伏せ、立ち上がる。何故かは知らないがあの老人には放出系の魔法が使えない。

「闘いの歌!!!!!!」

身体に魔力を流して、身体能力を上げる。放出系が効かない訳が分かるまで、これでやるしかない。

「ハアッ!!!!!!」

「むっ？」

小太郎君に気を取られていた老人に拳を繰り出す。

「奇襲にしては上出来だ。だが、私には通じなハバアツ!？」

「余所見はアカンでえ?月詠!!!!!!!!!!」

「ハイな。斬岩けゝん!!!!!!」

僕の攻撃を受け止めた隙を付いて小太郎君と月詠さんが攻撃する。

「ふふふ、今は効いたよ。しかしながら、思っにネギ君。君はこの二人の様に本気で闘ってはいないのでは?」

「何を言っているんですか!?!僕は本気で戦っています!!!!!!!!!!」

「そうかね?」

ゆっくりと近づいて来る。

「やれやれ……………サウザウンドマスターの息子が中々使えると聞いて楽しみにしていたのだがね。彼とは正反対。君は闘いに向かない性格の様だね」

僕が闘いに向いてない?

「君は……………何の為に闘かうのかね?」

「何の為?」

そんな事決まっている。皆を危険から遠ざける為に。



「ふふ、今君が考えている事を当ててみようか？ そうだね、大方彼女達を危険から守る為。 違うかね？」

何も言えない。すると、老人は呆れたように。

「まったく、少しは利口かと思っただが、やはり子供だね。 根本的な事に気付いてない」

根本的な……… 事？

「敵である私が言うべき言葉ではないが、君は気付いてない様だからこの際はつきり言おう。 彼女達が危険な事に巻き込まれるのはネギ君。 君の所為なんだよ？」

「ど、どういう事ですか？」

言葉が震える。 本当は聞きたくない。 でも、聞かずにはいられない。

「はあ。 まさか、敵である私に聞いて来るとはな。 最早、愚かを通り越して憐れみすら感じるよ。 まあいい。 ネギ君。 全ては君の所為だ。 それは何故か？ 簡単な事だ。 君が彼女たちと関わり、そして自分の正体である『魔法使い』を知られ、尚且つ彼女達の好奇心に火を付けてしまった事だ。 彼女達にとっては君の為、と考えている物があるかもしれない。 だが、少なからず君に……… 否、『魔法使い』の君に興味を持った者がいる。 心当たりはある筈だろう？」

俯く。 そうだ、夕映さんや朝倉さんもそんな事を言っていた。 僕が『魔法使い』という事を安易にバラしてしまったから。

「ようやく、気付いたようだね。しかし、起こってしまった事は仕方ない。これは君『達』の問題だ。しかし、私が聞いているのは『君』だ。もう一度問おう。ネギ・スプリングフィールド。君は何の為に力を付ける？仲間の為？くだらない、実にくだらない。言い訳に他人を利用するのは人間の悪い癖だよ？ネギ君。闘う理由は常に自分だけのものだよ。そうでなくてはいけない。『怒り』『憎しみ』『復讐心』等は特にいい。誰もが全霊で闘える。あるいはもう少し健全に言って『強くなる喜び』でもいいね。小太郎君や月詠君の様にね。もっとも彼女は闘いに『快楽』を求めている様に見えるがそれでも好ましいものだ。そうでなくては、闘いは面白くならない」

「僕は！……！闘う事を面白く感じた事は」

「無い、というのかね？それはありえない。本当の闘いでなくてもいい。修行の時に、一瞬前より自分は強くなっている。そう思った時に喜びは無かったと？そう言うのかね？」

「それは………」

「いや………それとも。君が闘うのは………あの雪の夜の記憶から逃げる為かね？」

一瞬、思考が止まった。なんでその事を？

「ふふ、動揺しているね？ではもう一押し」

そういつて、顔を帽子で隠す。

『コレなどはいかがかね？』

その顔を見た。見てしまった。

『はっはっは、喜んでもらえたかな？いい力才だよ。ネギ君。その表情だ』

「あ、あなたは……………」

その……………姿は。

『そうだ。君の仇だ。ネギ君。そういえば自己紹介がまだだったね。私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。あの日、召喚された者達の中でも極僅かに召喚された爵位級の上位悪魔の一人だよ』

そういつて老人、ヘルマンさんは人間の姿に戻る。

「君のおじさんやその仲間を石にして村を壊滅させたのも私だ。あの老魔法使いには全くしてやられたがね」

ヘルマンさんが僕の仇……………？

「どうかね？自分の為に闘いたくなつたのではないかね？」

「ネギ、しっかりせい……………！」

「ネギ君？」

二人の声が聞こえた様な気がした。

「あ？おっさん？」

「いきなり殴り飛ばされましたよ？」

「ちょっと驚き」

「ネギ？」

血の所為で右側の視界が赤いが、あの爺さんを吹き飛ばしているのは間違いなくネギだ。まさか、こんな奥の手があるなんて。

「いや、違う……………のか？」

さっきの会話は聞こえないが、何か言われたのだろうか。ネギが無意識に自分の潜在能力。エヴァに聞いたリミッターを外したとしたら。

「考えている場合じゃないな。何とかしないと」

「おおっと、加勢なんてさせねえぞ？」

「貴方の相手は私達です」

「ヘルマンさんの邪魔はさせません」

コッチに向かってくる三体のスライム。取り敢えず、コイツ等と俺は相性が悪い。なら、封印しかないんだが放出系が効かないときた。ま、原因は推測できたけど。

「俺を狙う前に人質の方を見たらどうだ？」

瞬間、後ろからブチッと何かを切る音が聞こえる。そして俺の推測が正しいか確認する為に、三体に気弾を撃ち出す。

「うおっ！？」

「うひゃっ！？」

「っ！？」

三体が吹き飛ぶ。さっきの様に消されたりはしない。どうやら推測は当たっていたらしい。

「んじゃ、動くなよ？」

巨大な蛇を作りだし、三体を拘束する。

「こら、離せ」

「少し待ってろ。そしたら離してやるから」

「ふえ？ちよっとストップ！！！！その瓶はもしや」

懐から取り出したのはさっき、ネギから貰った瓶を取り出す。

「ええつと確か封魔の瓶！……！！！！！」  
ラゲーナ・シグナートリア

瓶が三体を吸いこむ。

「またかよ」

「いや………ん」

「まあ、悪役ですからこうなりますよね」

瓶に吸い込まれると、勝手に蓋が閉じる。ええつと『魔封波』？

「まあ、いいや。取り敢えずコッチはクリアだ」

後ろで何かが弾ける音が聞こえた。どうやらあの水の牢みたいなものもさっきの三体が操っていたらしい。

「後はネギだけだが」

コッチからもフォローはした方がいいな。

「ふははは……！！！！いいね！素晴らしい！！！！これだよ、これが見たかったのだよ。それでこそサウザウンドマスターの息子だ！！！！！！！！」

三人で闘っても苦戦してたおっさんを圧倒してる。

「けど」

けどな、ネギ。それじゃアカン。その闘い方じゃアカン！！！！走りだす。近くのポールや建物を足場にしてネギに近づく。瞬間、おっさんの姿が代わり、口から光が溢れる。虚空瞬動で。

「間に合え！！！！！！！！」

ギリで間に合う。が、おっさんの攻撃が当たる。そう思った瞬間。

「ぬおっ！？」

横手から蒼い獣の大群がおっさんを襲う。なんや知らんが今の内

「く」

下手に虚空瞬動なんか使ったから着地に失敗してもうた。ちよつち頭が痛い。

「ぼ、僕……今」

どうやら正気に戻ったようだ。これで一安心。

「な訳あるかあ！！！！！！！！！！」

「へい、い！？」

思いつきりネギの頭を殴る。

「こ、ここここ小太郎君!？」

「アホ!!!!! 幾ら力があつてもあんな闇雲に突っ込んでつたら返り討ち喰らうんは当たり前や!!!! 確かにお前の底力はわかったわ。わかったけどな、今の闘いは最低や!!!! 周り見えてへんし、結局決め手も入れへん!!!! あんな力押し、俺でも勝てるわ!!!! ! ったく、頭よさそうな顔しとる癖に!!!! 仇か知らんけど簡単にキレよつて!!!!!!」

落ちているネギの杖を渡す。

「ほら」

血を拭って笑う。

「共同戦線ゆーたやろ。二人であのおっさんブッ倒すで」

「ウチも忘れんとして下さーい」

頬を膨らました月詠が抗議してくる。

「お、おう。済まん」

完全に忘れてたわ。

「いい仲間が出来たようだね。だがどうするかね? 君達三人で私に勝てるかな? それにまだ私に魔法が効かない訳も分かってないんだ



ろっ?」

「訳つてのはこのペンダントの事か?」

おっさんの後ろ、天兄ちゃんが笑いながら手にあるペンダントを弄っている。

「なんと!?!」

「遅い」

声と共に地面からデッカイ蛇がおっさんを締め上げる。

「流石に俺でも、これが限界だ。さっさと決めろ!!!!!!!!!!」

「サンキュ、兄ちゃん!!!!!!」

瞬動で一気に近づく。『気』を腕に集める。

「碎け散れや!!!!!!!!!!!!!!」

おっさんを蛇ごと上空に上げる。

「月詠!!!!!!!!!!!!ネギ!!!!!!!!!!!!!!」

「うん!!!!!!!!!!」

「ハイな~~~~!!!!!!」

月詠がおっさんの上に一瞬で移動している。やっば、月詠は俺よ

り強いな。」

「ネギ君。合わせて。」

「はい！……！！……ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ  
虚空の雷 薙ぎ払え！……！！……！！……雷の斧！……！！……」

ネギが繰り出した雷はおっさんに当たる………前  
におっさんの上にいた月詠に当たる。否、月詠が持っている鉄パイ  
プだ。

「神鳴流奥義！……！！……極大・雷鳴剣＋雷の斧！……！！……！！……」

鉄パイプを振り下ろした瞬間、視界が真っ白になり、同時に落雷  
の轟音が鼓膜を叩く。アカン、おっさんの前に俺が逝きそうや。

「はぁ、疲れる夜だった」

「ん……………天さん？」

俺は無言で起きた真名に上着を掛けてやる。雨に濡れてしまった  
が、裸でいるよりかマシだ。

「寝るなら何か着てろ。風邪ひいても俺は看病しないからな？」

「ありがとう」

ネギの方もなんか、込み入った話をしている様だ。

「ねえ、天さん」

「ん？」

手持無沙汰になって、横になっている真名の頭を撫でる。真名は恥ずかしいそうに顔を赤らめているが、何故か嬉しそうな表情を作っている。

「助けてくれてありがとう」

「気にすんな。当然の事をしただけだ」

家族……だからな。俺にとっては刹那や真名は。

「うん。分かった。天さんが私や皆の裸を見たのは当然なんだね？」

「お前な。人がイイ感じに終わらせようとしているのに。それは無いだろう？」

そういつて、笑う。

「さて、随分外にいたみたいで身体が冷えてしまった。悪いけどお風呂借りてもいい？」

「そういうと思ってた。まあ、今日はなんかあそこにいる全員。家

に泊めるみたいな事になってるから構わん。但し、俺の寢床に侵入するなよ?」

「善処する」

そこはキツパリと従えよ。苦笑する。それから仕方なく、目を覚まさなかったラサティをおぶって、家に帰る。その際、真名からの視線が痛かった。その後は案の定、というか予想通り、月詠と小太郎は家に住む事になった。まあ、小太郎は今日、世話になった人がいるからそっちに挨拶してからになるようだ。まあ、どちらにせよ明日になってからだ。

「小太郎、ソファーはそっちだ。千草さんテーブルは台所に」

「ほいほい」

「まったく、病み上がりになんか事させるなんて。普通の神経しとらん」

俺が使った秘薬のお陰で、怪我は完治してますけどね。何をしていいのかというと、泊る人数が多いので仕方なく、居間で全員、川の子で寝る事になったのだ。

「ほら、お前ら寝る前の間食は身体に悪いし、増えるぞ?」

「あう、確かにそれは辛いわ」

「じゃあ、明日に食べるか」

なんか、皆のテンションが高い。さて、寝るか。

「そういえば、そろそろ中間だね」

寝る前に真名がそういった。そういえばすっかり忘れてたな。まあ、なんとかなるだろう。

## Re・No:40「雷雨の決戦」(後書き)

どうも、フィロです。やっと終わったヘルマン編。疲れました。でも、楽しかった。やっぱりヘルマンはいいキャラだな。再登場しないかな(しても瞬殺されそうだけど)次回はギャグ回を少し、学祭まで一気にワープ!!!!なんてしませんよ?少しだけです。間を置きます。ていうか、学祭編が長いのもう少し煮詰めてみたいのです。ですから、もう少しだけお待ちください。

ヘルマン戦。スライム達の個性がちゃんと出せていたか心配です。これで大丈夫だろうか?後、『雷の斧』+『極大・雷鳴剣』ですが、気と魔力って反発するんじゃない?という意見の方々は全て『月詠パワー』(本人は恋する乙女パワー)』で何とか納得してください。合体技はどうしてもやってみたかったです!!!!では長くなりましたが次回も御期待下さい

Re・No：41「カモの仮契約大作戦」

「うゝん」

オィツス、此処最近、影が薄くなってきたなゝ、とか考えているカモだぜ。え？なにを悩んでいるのかって？それはな。この前の悪魔の襲来の件だよ。あの時は何とか切り抜けられたけど、流石に仮契約<sup>テイオー</sup>しているのが、のどか嬢ちゃんと、アスナの姐さんだけじゃ、心元足りねえなゝ。せめて、木乃香嬢ちゃんと仮契約してくれば、戦略が広がるんだけどなゝ。

「よし、此処はアニキの戦力を伸ばすんじゃなくて、アニキ以外の戦力を伸ばしてみるか」

とすると、候補はやっぱり、アマトの旦那と小太郎だよなゝ。まあ、月詠の嬢ちゃんも捨てがたいけど従者が大変だよなゝ。

「まあ、いいか。取り敢えず、善は急げだぜ！！！！！！！！」

俺は全速力でエヴァンジェリンの別荘に向かった。今の時間なら、皆別荘にいる筈だ。

「お、らあっ！！！！！！！！」

「ハアッ！……！！！！！！！！」

小太郎の蹴りとネギの拳を糸で編んだ壁を使って防ぐ。間髪入れず糸を操り、壁を棘に変え、二人に襲わせる。

「おおっ！？」

「わっ！？」

小太郎は驚きながら楽々と、ネギは危なげに全部避ける。

「流石にこれじゃ、捕えられないか」

「へへ、にしても面白いな」『気』の糸か。俺にや、ちょっと無理っぽいな」

お前には『狗神』があるだろ。

「んじゃ、『点』で駄目なら『面』で行くか」

糸を操り、壁を上空に持ち上げる。

「バラける！……！！！！！！」

糸の壁を瞬時に無数の棘にバラし、二人に向かって降り注ぐ。

「ネギ！……！！！！！！！！」

「うん、フランス　パリ士ス・アエリアーリス風花・風障壁！……！！！！！！！！」



ネギの展開した障壁が降ってきた棘を弾く。

「ほい、第二陣！！！！！」

ソレのデメリットは知っているので一瞬だけ間を開けてから、残っていた棘を落とす。

「なんの！！！！！」

『狗神』と『気』を練った拳を駆使して、自分達に向かってくる棘だけ、相殺する。

「流石にこれだけじゃ、無理か」

「へっ、最初は驚いたけど、なんや拍子抜けやな」

「ふん、成る程」

んじゃ、これはどうかな？地面に刺さっている棘を蛇に変え、二人を拘束する。

「うおっ！？」

「えっ！？」

糸を編み込んでライオンを作りだす。

「突撃」

ライオンを二人に突撃する。二人は面白いように吹っ飛んだ。

「そこまで。全く、情けない」

エヴァがため息を吐きながら吐き捨てる。

「まあ、イイ線行ってたんじゃないか？俺についての情報も少ししか持ってなかったんだし」

「だから、少しは対策を立てていると思ったら、この様だ。私なら、お前の糸を凍らせて、動かなくするくらい出来る」

まあ、確かにそんな事されたら、糸を薄くする事すら出来ないな。

「でも、アイツ等にそれを要求するのはな」

「甘いぞ、アマト。確かにお前の言う事にも一理ある。『普通』の立派な魔法使い（マギステル・マギ）なら問題ない。先程の能力で充分過ぎる。だがな、坊やが目指しているのは『普通』ではない。坊やの父親。『英雄』のナギ・スプリングフィールドだ。これ位、圧勝しないでどうする？」

「英雄ね」

父親みたいな英雄を目指す。どうかで聞いた話だな。

「それにだ。以前の事件かどうかは分からんが、最近ネギが持っている『強くなる』とする意志』が弱くなっている様な気がする」

「そうか？まあ、確かに此处最近、元気がないが」

「そんな時はやっぱ、潤いが必要だと思うぜ」

「潤いね。って、こらカモンベール。人の肩に無断で乗るな」

俺の肩に何時の間にかカモンベールが乗っていた。

「いや、旦那。オレツチはアルベール・カモミールツス。そんな何処ぞのチーズの名前じゃないツス」

「煩いぞ、空気。それになんだ潤い、というのは？」

カモンベール改め、カモミールが影を背負って「空気、エア、エアオコジヨ、風景」等と呟いている。

「潤いね。多分、明日菜とかに何かやらそうと思ってんだろ？」

「へ？ああ、それもあるんスけど。今回は小太郎とアマトの旦那に話があるんスよ」

「俺と小太郎に？」

カモは俺から下りて、煙草を取り出し、器用に火を付ける。

「なあ、二人とも。仮契約バクティオーしないかい？」

仮契約？カモの言葉に後ろからなんか気配が動いた様な気がしたんだが、まあいいか。

「戦力強化だよ。仮契約すれば、従者も主も強くなれる。どうだい

？」

「エヴァ、仮契約のデメリットは？」

「ん？そうだな。従者が多ければそれに対しての魔力供給が少なくなる。というのと、お前だけのデメリットを上げるとすれば、魔力供給を受けると、お前の糸が使えなくなる。という事だ。仮に主となっても供給するだけで、お前の『気』が減って、下手すると闘えない可能性がある」

「けど、そこも主の方が『気』の使い手なら問題ないぜ？例えば、刹那の嬢ちゃんとかラサティの姐御とかな」

でも、俺には必要ね〜な。

「別に供給となくとも、やりようはあるんだけどな」

「それってどういう事ツス力？」

首を傾げるカモの頭に触れ、指を動かす。

「うおっ！？身体が勝手に！？」

指を動かし、カモを走らせる。糸を使えば、人の身体を動かす事も出来る。これがあるから別に仮契約なんて必要ないからな。敵だろ？が味方だろ？が自分で動かせば、コンビネーションなんて簡単に取れるからな。

「ちよっ、旦那。そろそろ自由に！！！！！！」

取り敢えず、カモを動かして悪戯でもしてみるか、全部カモの所為になるし。という訳で近くにいたラサティに突撃。

「ん？」

カモに気付いた途端、カモに向かって蹴りを繰り出す。容赦ないな。

「甘い」

遠くでもラサティの蹴りは遅く見える。カモを操作してラサティの足に着地。そのまま、服の内側に。

「なっ！？こら、出る！？」

「いや、オレツチのグヘヘ、所為じゃグヘヘ。無いっすよ。ムホホホホホ」

なにやら、カモが喜んでいる。

「あつ、くつ、そこはっ！？」

「ムホホホ！……！フヒヒヒヒ！……！フヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤアアアッ！……！……！」

「そこか！……！！……！！」

真名がカモのいた位置を正確に銃で撃ち抜く。ゴム弾なのか、ラサティの服の間からカモが弾丸に押されて飛び出してきた。

「ゲフウツ!？」

かなりの致命傷を受けている。カモはゆっくりと立ち上がり拳(?)を天に振り上げ。

「我が生涯に一片の悔い無し!!!!!!!!!!!!!!」

「死ね!!!!!!!!!!!!!!」

ラサティの蹴りがカモを捕える。綺麗な放物線を描いてプールに落ちる。取り敢えず拍手を送る。

「ふう、酷い目にあっただぜ」

そして何事も無かったかのようにカモが戻って来る。

「まあ、仮契約の事は大体分かった。それで? 契約するには何か条件があるんだろ？」

聞くと、カモはチョーク(どっから出した?)で地面に魔方陣を描く。

「先ず、この陣の上に契約する人間が乗る事だな。後は二人が」

「二人が？」

カモは唇を尖らせて。

「あつつい、キスをすれば契約完了だ」

「ほほう、面白そうだな。どうだ、ラサティ？」

「やらん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

真つ赤な顔で怒鳴られた。冗談だったんだが。

「まあ、確かに旦那は魔法使いより『気』の使い手の方が相性的にいいからな。刹那の嬢ちゃんはどうだい？」

「わ、私は……その」

「カモ、刹那は先客がいる」

「へ？そうなんスカ？」

俺は頷き。

「木乃香だ」

「ち、違います!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

刹那が真つ赤になって否定する。

「ええっ！？お前って木乃香LOVEじゃないの?!」

俺の言葉に真名、千草さん、ラサティ、エヴァが驚く。それを見た刹那が更に真つ赤になって。

「違います。私だって男の人を好きになります!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「へえ、誰？」

「え？」

「いや、誰を好きになるんだ？」

聞くと、刹那が固まる。

「ええつとあ、今は言葉の『あや』です！……！……！とにか  
く、私は同性愛者ではありません」

「だからといって、女の子同士のキス」同性愛者って訳じゃないよ  
な？」

ニヤリと笑う。刹那の赤い顔がスッと元の色に戻る。

「謀りましたね？」

「気のせいだよ。だから刀を抜くな！……！……！構えるな！……！  
！……！」

振り下ろされた刀を両手の間で編んだ糸の塊で受け止める。

「小癩な！……！……！」

まったく、ちょっとからかっただけでコレとは。

「仮契約ねえ。従者なら確かアーティファクトとか貰えるんだよな  
？」



刹那を糸でグルグル巻きにした後、カモに聞く。

「そうだぜ。尤も、どんなアーティファクトかは契約してみないと分からないけどな」

「なあなあ、カモはん」

「お？なんだい、月詠の嬢ちゃん」

月詠が頬を染めながらカモと話し始める。

「そう言う事ならお安い御用だ。でも、本当にいいのか？別に月詠嬢ちゃんなら主でも」

「ウチは尽くされるより、尽くすタイプなんです」

楽しそうに喋っている。カモは一つ頷くと、先程書いた魔方陣になにか書き加える。

「あ、あのう。そろそろ糸を解いてくれませんか？」

「ああ、悪い」

刹那を解放してやる。

「小太郎はーん！！！！！！！！」

月詠が小太郎を呼ぶ。何故だか、魔方陣の上に正座しているのだが、突っ込まない方がいいかな？

「なんや？」

「ちよつと、ウチの頼み事聞いてくれへん？」

「別にええけど。なんや？」

「と、取り敢えず。ウチの前に座ってくれへん？さあ、さあ……！！！！！！」

バンバン、と地面にひびが入るほど叩く。魔方阵は大丈夫なのか？小太郎はそんな月詠の気迫に気圧され、言われた通り月詠の前に胡坐を掻く。

「で？なんや？」

「目を瞑って、暫く動かしてくださいね？」

「まあ、ええけど」

言われた通り、目を瞑る小太郎。月詠はゆつくりと小太郎に近づき。

「むぐつ！？」

唇を奪った。瞬間、魔方阵が輝く。

「よっしゃ、成功だ！！！！！！！！！！」

光が収まると魔方阵の上に一枚のカードが落ちていた。形状から



「ちょっと待て、もしかして仮契約はあそこまでしなくてはいいのかなのか?!」

「だ、大丈夫よラサティさん。そんな事なくても契約できるから顔を真っ赤にするラサティに同じく顔を真っ赤にしている明日菜がフォローする。」

「でえ? 誰が次やるんだいい? 準備は出来てるぜえ?」

嫌な笑顔で魔方陣を叩いている力モが喋りだす。

「その、天さん。天さんがさっきラサティと契約するって言つのは」

「冗談だよ。流石に本気でやろうとは思ってない」

真名にそう返すと、何やら凄く安心された。何故?

「なんだよ。結局、一組だけかよ。ケツ!!」

何やら力モが不機嫌になった。

「まあいいか。月詠嬢ちゃん。カードのコピーだ」

そういつて、カードを月詠に渡す。カードを渡された月詠は幸せそうに笑って、未だ放心状態の小太郎を見て。

「これでウチは小太郎はんの『愛の奴隷』です。そしてコレは二人の『愛の結晶』くふふふふふふふふふふふふ」

皆が少しずつ月詠から離れる。ノーマなんか涙目で俺にしがみ付いて来る。怖いのか不気味なのか駄目だもんな。

「と、取り敢えず、どんなアーティファクトなのか見せてくれよ。『来たれ（アダット）』って言えば、アーティファクトは出るから」

カモも、引き気味だ。

「了解です」『来たれ』……」

言葉と共にカードから光が溢れる。光が消えると、月詠の手にはカードではなく細身の長剣が握られていた。それも、唯の長剣ではなく、剣としてはかなり薄い。後ろの風景が薄く見えるほどだ。特徴は他にもあり、剣の周りに黒い煙の様なものが纏わりついている。否、煙にしては濃すぎる。『闇』と表現した方が的確だろう。

「おお、剣か。にしても、薄すぎねえか？」

「ん」

月詠が軽く剣を振る。瞬間、線のような物が視えた。咄嗟に壁を作りだし、糸を使って皆を転ばせる。

「わっ!？」

「ちょ、いきなり何するんだい？天さ……ん」

真名の声が切れる。それもその筈、俺が展開した壁が綺麗に斬れていたのだ。

「もしかして、そのアーティファクトの能力って」

「ん、簡単に言えば、振るだけで切れ味が鋭い『斬空閃』撃ち放題って所ですかね。まあ、なんか力のコントロールは出来るみたいですから、同士討ちは無いみたいですけど」

それでも、危ないよ。

「他に能力は？」

「ん。これは能力何ですかね？」

そういつて、剣を空に向ける。

「刹那<sup>せつな</sup>に疾<sup>はや</sup>し 矢風<sup>やかぜ</sup>のさまに そこり開き むくつけしきすまいに  
て すすどけなく過<sup>す</sup>ぐさん」

月詠がゆつくりと言葉を吐きだす。これは。

「待て、何故お前がアイツの『謳』を謳える!？」

ノーマが驚く。月詠はそのまま海に向かって剣を振る。

「剣<sup>こ</sup>!!!!!!」

衝撃波が海を割る。しかもその断面が薄い。数ミリかそれ以下か。それが水平線の彼方まで続いているのだ。こんなのを人に放ったら、堪った物ではない。

「はあゝ、最高ですゝ!!!」

悦に入るのは勝手だが、人が大量にいる所や、味方の後ろからは撃たないで欲しい。

「それにしても、あの剣」

「どうかしたのか？」

「ああ、いや何でもない」

そういつて、誤魔化し。「なんでイドウイの剣を？」等と呟いている。まあ、俺が聞いても意味がなさそうだな。

「じゃあ、天はん。お相手お願いしますね？」

「え？」

いきなり肩を叩かれる。確かに、皆の中では俺が一番色んな状況に対応できるけど、唯の一振りで壁を切断する奴とどう闘えと？周りを見るが、全員目を逸らす。何故か力モは先程の魔方阵を叩いている。まあ、無視しよう。

「死なない程度に頼むぞ？」

「善処しますゝ」

結果だけ言うと、なんとか生き残った。体中、切り傷が出来たが、致命傷や大怪我は奇跡的に負う事は無かった。まあ、月詠が手加減してくれたおかげかもしれない。余談だが、今回の仮契約が切っ掛

けで小太郎が一週間ほど月詠に近寄らなくなった。



## Re・No：41「カモの仮契約大作戦」（後書き）

どうも、フィロです。今回は月詠と小太郎の仮契約。最初は単に触れるだけのキスにしようかな、と思ってましたけど月詠の相手が小太郎なんだからこれだけで終わらないだろう、と思い、こんな感じになりました。はい、作中に書いたとおり、月詠のアーティファクトはグラディラス（キセル加えて爪が長い細目の人）のパートナー、イドウイの同契後の姿です。別に伏線を張っているのではなく、単に好きだったからこれに決めました。能力は原作の異常に切れ味の鋭い、飛ぶ斬撃。そして調です。次回から原作に入りますのでお楽しみに

## Re・No：42「文化祭準備！！！！」

「では！！！！！！今年、我々のクラスでやる文化祭の出し物を決める。候補はこの三つ！！！！！！多数決で決めるぞ？いいな！！！！！！！！」

無駄にテンションが高い豪徳寺が黒板を叩く。黒板には『ゾクツ？！男だらけの冥土喫茶』『アイツのハートを撃て！！！！！！』『スタイリッシュ射的』『SAN値直葬！！クトウル体験』等と混沌とした出し物が書いてある。正直どれもやりたくない。幸いなのはこのどれか一つしかやらないという事。不幸なのはクラス全員の雰囲気壮絶な物。それもそうだ。この麻帆良学園。出会いがありそうで少ないのだ。だから文化祭で面白い出し物をやり、気になるあの子と距離を縮めよう。という魂胆だ。

「こうらあつ！！！！！！！！天！！！！！！！！真面目にやれえっ！！！！！！！！」

煩いな。俺はため息を吐いて。教卓に向かう。クラスの纏め役は辛い。

「え、お前らが出会いを求めて頑張ろうと必死になっているのは痛いほど分かる」

山下と高音さんが友人以上恋人未満位に仲が良くなって、その事を自慢げに話すので、血の涙を流していたやつもいたからな。

「だからこそ、今年の文化祭はなんとしても、客を入れて出会いを増やす。その為にはお前達の協力が無ければ意味がない。分かるな

L

皆が頷く。

「今は時間が無い為、多数決は無理だ。放課後に決めるので各自どの出し物がいいか、決めて置くように」

「おい、アマト。弁当を忘れてるぞ？」

ラサティが教室に入ってきた。クラス全員がラサティに視線を向け、そして俺に向ける。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアトオオオオオオ  
オオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

『!!!!!!!!!!』

「誰だ。この美人は！？」

「しかも、お弁当を届ける様なストロベリーな関係になっているとは!？」

「羨ましいぞ畜生！！！！山吹は俺達の味方だと思ったのに！！！！！！」

「お姉さん。どうかお名前をおうっ!？」

「何を抜け駆けしておるか。此処は全員で」

バツと全員がラサティに振り返り。

「パンツ見せてください……！」

土下座した。お前ら少しぐらい欲望隠せよ。

[illegible]

!!!!!!

案の定、ラサティの一撃でクラス全員が沈んだ。自業自得だ。

「メイド？」

「そう、メイドカフェ……！取り敢えずノーマはコレを着てね」

そういつて、渡された服を広げる。結構、可愛い服だな。

「エヴァー。ほら、お前の分も貰って来たぞ」

「いらん！……私は着ないからな！……って、茶々丸。離せ！！！！！！！！脱がすな！！！！！！」

チャチャマル。ナイスだ！！今の内にエヴァに服を着せる。一人でやるのは大変だったがなんとか出来た。

「くそ」

「おお、中々可愛いじゃないか!!!」

「お二人とも、そのまま動かないで下さい。今保存しますので」

「コリアツ!!!!!!!!!!茶々丸!!!!!!!!!!どさくさに紛れて何をやっているか!!!!!!!!!!そんなお前はこうしてやる!!!!!!!!!!」

「ああ、駄目ですマスター。そんなに巻かれては」

エヴァが遊んでいる。そんなに嫌なのだろうか？結構似合っているのだが。

「うわあっ！？皆さんどうしたんですか？ていうか、マスターまで！？」

「見るなあつ……！！！！！！！！！！」

顔を真っ赤にしたエヴァが叫ぶ。そんな時。

いいな

声が聞こえる。周りを見るも、誰もいない。

「どうしたの？ ノーマ」

「いや、何でもない」

気のせいかな？

「お前のクラスは何時もああなのか？」

昼休み。弁当を突きながらラサティが尋ねる。俺の弁当なんだが。

「ウチのクラス、というよりこの時期の男子生徒はあんな感じた」

「ふうん」

そういつて、箸を伸ばしてくるが、弁当を遠ざける。軽く睨んできた。だからコレは俺のだ。

「所で、今日はなんだか騒がしいが何かあるのか？」

「ん？学園祭が近いからその準備だ」

「なんだ、たかが祭りであんな騒ぎなのか」

呆れたようにラサティがため息を吐く。鞆から朝買った、メロンパンをラサティに渡す。

「まあ、学園祭を女の子と周りたいたいののは男の願望だからな」

「お前もか？」

不意に聞かれる。俺はお茶を一口飲んで。

「そうだな。なんだ、ラサティと一緒に周ってくれるのか？」

聞くと、ラサティは少し頬を赤くして。

「いや……………その……………なんだ。私も初めてだからな。ガイドがあつた方がいいし。この街にもまだ慣れてないから」

そういつて、パンを食べる。ま、確かにそれもそうか。

「俺でよければ、案内してやろうか？」

そういつと、ラサティが驚く。

「いいのか？」

「なんだ？俺じゃ不満か？」

「大いに不満だ」

即答しやがつて。結構凹むんだぞ？

「だが、お前で妥協してやる」

そういつて、立ち上がる。

「いいか、絶対に忘れるなよ？忘れたら承知しないからな」

そういつて、歩いて行ってしまう。念を押さなくてもいいのでは？

「まあいいか」

弁当を食べ終わる。さて、午後の授業も頑張るか。その日の放課後。多数決の結果。俺達の出し物は『S A N値直葬！！クトゥルー体験』になった。具体的に何をやるのかというと、お化け屋敷のお化けがクトゥルー神話に出て来る者達でやろう。という物だ。大丈夫かな？その後、家に帰って夕食の支度をしていると、ノーマがラブレスを抱えながらやってきた。

「出来るまでまだ掛かるぞ？」

「いや、夕食ではなくてな」

じゃあ、なんだろう？そう思ってノーマを見ると、何故だか恥ずかしそうにモジモジしている。腕の中に大人しくしているラブレスもノーマを見上げている。

「どうした？」

「いや、何でもない」

そういつて、居間に向かってしまった。何だっただろうか？

「っと、嘔いてる、嘔いてる！？」

慌てて、鍋の火を小さくする。まったく、大勢で来るならそう伝えておけての。

「天はぐん。野菜切り終えたで」



「ああ、サンキュな。円に木乃香」

「い、いえ……！夕飯ご馳走になりますからこれ位はやらないと」

「そやで」

ああ、こういう自然に手伝ってくれるの、凄く嬉しい。

「運ぶの手伝ってくれ」

声を掛けて動くのは明日菜とネギ、小太郎位だ。お前ら、少しは手伝おうとしようよ。まあ、流石に夕映とかのどかに手伝わせるなんてしないけど。

「おお、やっと来たか」

嬉しそうに箸を割る真名。早いよ。

「んじゃ、食べますか」

『いただきま〜す……！……！……！』

さて食つか。と思って箸を伸ばそうとしたが。

「貰ったっ……！……！……！……！」

「甘いで……！……！……！……！」

「隙有り……！……！……！……！……！……！」

「馬鹿め！！それは残像だ！！！！！！」

「質量のある残像だと！？化け物か？！」

「なんとおおおおおおお！！！！！！！！！！」

僅か数秒の出来事だった。まさか、その間に鍋の中身が無くなるとは。やはり人数が多い分、もつと数を多くした方がいいな。そう思いながら鍋に代わりの具を入れる。

「天はんは食べへんの？」

木乃香。お前は俺があ戦争に勝てると思ってるのか？というか、刹那。お前、木乃香の分を取る余裕があるなら俺の分も取ってくれ。

「あ、あの先輩。食べますか？その口付けちゃいましたけど」

おずおずと円が差し出してくれる。

「サンキユ。でも、少しだけでいいよ。俺は後で残った汁にうどん入れるから」

そういつて、肉を二切れ貰う。

「あ、天さん。私のもいるかい？」

「いや、これで充分だ。気持ちだけ受け取っておく」

そういつて、鍋の蓋を開ける。瞬間、またもや鍋に箸が豪雨の様に突き刺さる。もう少し静かに食えんのか、コイツ等。

「そういえば、お前らのクラスはどんな出し物にするんだ？」

「確か『メイド喫茶』という物になったぞ？」

聞いた瞬間、飲んでいた茶を吹き出す。小太郎に直撃した。

「ああ、悪い小太郎。ていうか、よく許可出したな。ネギ」

「えっと、まだ決まってませんよ？」

「そ、そうですよ！！！！私も流石に反対ですし」

「あれれ〜？円も私達と一緒にネギ先生に絡んでたよね〜？」

「えう！？それは」

美砂がジュース片手にさういうと、顔を赤くする円。

「うむ！！！！中々面白かったぞ！！！！衣装も可愛いし。そうそう、衣装と言えばマナがミニスカの巫女服に着替えたとか、セツナが猫耳スクール水着にぐむっ！？」

「ノーマ〜。余計な事は言わなくていいんだよ？刹那の事は別にいいけど」

「ノーマさん。龍宮の事はいいとして私の事は触れないで下さい」

ノーマの口を真名と刹那が塞ぎながら喋る。

「因みにその時の二人の写真があるけど見る？」

そういつて、デジカメを取り出した和美。いや、流石にそれ為此の場、この状況で出すのは不味いぞ？そう言おうとした瞬間、デジカメが真つ二つになり、粉々に砕かれ床に落ちる。恐る恐る視線を三人の方に向けると、刀を鞘に収めている刹那とデリンジャーをこちらに向けている真名がいた。しかもイイ感じに微笑んでいる

「そうというのは不味いんじゃないかな」朝倉

「そうですよ」。冗談はやめて下さいよ。驚いて手元が狂ったら危なかったですよ」

二人の言葉に和美がガクガクと震え、涙目で此方を見る。あのタイミングでカメラを出したお前が悪い。

「えっと、アマトさんのクラスは何を出すんですか？」

「お化け屋敷の様な物。いや、強いて言うなら神様屋敷？」

旧支配者は神じゃないか。でも旧支配者屋敷なんて語呂が悪い。

「なんですか、それ？」

「まあ、お化け屋敷の上級版と思えばいいかな」

そついうと、ネギが納得する。

「あちゃゝ、これじゃ私達と被っちゃうかもね。最終候補にお化け屋敷拳がつているし」

「別に被ってもいいだろう？合同の出し物にすれば結構大きな物が出来るし、予算が軽く二倍になるんだから普通出来ない物も出来るし、何よりウチのクラスの奴等が喜んで手伝うぞ」

「成る程。その手があるか。でも、流石に共同は無理じゃない？」

そこは木乃香に頑張つて貰おう。

「ウチが頼もうか？お爺ちゃん、大抵の我が俣聞いてくれるし」

「売り上げもちゃんと山分けすれば、文句はないだろう？勿論、そっちが6でコッチが4」

そういうと、和美が唸る。

「やっぱ、私一人じゃ決めるの無理だね。よし、明日HRで話してみようよ。それで問題なかったら連絡するから」

「勝手に決めないで下さいよ」

ネギが抗議する。

「んじゃ、ネギは何かいい案あるか？」

「それは……………無いです」

項垂れるネギをノーマが慰める。それから軽く明日のHRに合同

で出し物をしていいか、クラスの奴に聞く事になった。もし問題が無かったら木乃香が学園長にお願いを申し立てに行く手筈になった。

「んじゃ、もう遅いから」

「

「お風呂借りるね」

ですよね。もう、慣れてしまったのでため息も出ない。

Re・No:42「文化祭準備!!!!」(後書き)

どうも、フィロです。今回は文化祭の出し物決め。何故合同にしたのかというと、合同にした方が『さよ事件』をもっと派手に、楽しくやりたかったからです。因みに少しだけですけど今回もさよが出て来ます。今回は『さよ事件』。3-Aだけでなく、武道家四人組(男Ver)に加え、ラサティ、リイリア、千草、月詠、小太郎等々、一杯出しますのでお楽しみに。では、次回の更新をお楽しみに

## Re・No：43「ゴーストバスターズ!!!」

「と、いう訳で3 - Aのお化け屋敷と合同で出し物にするという案が出た。お前達……は文句ないよな？」

『勿論!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

「クラスの奴等は満場一致だけど。これって大丈夫だよな？」

そういつて、窓枠に腰を下ろして俺達を見ているガン先に聞く。  
ガン先は呆れたようにため息を吐いて。

「その……なんだ。他クラスに迷惑が掛からない程度にするんだぞ？」

『了解!!!!!!!!!!!!!!』

その言葉と共に携帯にメールが入った。差出人は和美だ。

『コッチは大歓迎だつてさ。やっぱり人手が足りないみたい』

それを見てから俺の方も問題なしとメールを返す。

「それじゃ、俺はこれから学園長の所に問題がないか確認してくるから。学園長からお許しが出たら連絡する。連絡が来たら全員3 - Aに来る事、寄り道すんなよ？」

そういつて、クラスを出る。急いだ方がいいかな？



「遅いな。天はん」

「そうですね」

僕とこのかさん、ノーマさんは学園長室の前でアマトさんを待っている。

「はっ！？もしかして反対されたのかも！？」

ど、どうしよう。確か日本には『バンチョー』っていう男子高校生の親玉がいたような。アマトさんはその『バンチョー』に苛められているんじゃない。

「ちょっと、見てきます」

「いや、流石にネギ君が此処離れたらあかんやろ。何時また新田先生が通るか分からんし」

そう言われればそうだ。さっきもHR中に抜け出した事を深く聞かれて大変だったんだ。

「そうですね。きっと来ますよね。大丈夫、アマトさんは負けません！！！！！！」

そうです。アマトさんは僕と小太郎君に勝った人なんですから。普通の一般人から少し越えた位の『バンチョー』に負ける筈がありません。アマトさんが負けるとしたら、かの黒魔導士『ゴルベザ』位です。

「なあ、コノカ。ネギの奴どうしたんだ？」

「昨日、遅くまでゲームしとったから、テンション上がつとるんよ」

「悪い、遅くなった。って、なに拳握って力入れてるんだ？」

アマトさんがやってきた。涼しい顔をしているけど、きつと凄い戦いを繰り広げた筈です！！！！

「トリップしている馬鹿は放っておけ。さつさと済まさんとHRが終わるぞ？」

「そうだったな。ほら、ネギ。行くぞ」

「え？あ、待って下さいよ」

そういつて、学園長室に入る。

物凄く、あっさりと学園長からお許しが出た。ので、早速クラス

に連絡を入れる。

「あの、なんか地響き、というか叫び声が聞こえるんですけど」

ふむ、アイツ等。移動するのは昼休みだというのを忘れていたな。

「まあ、高畑さん辺りに蹴散らされるから問題ないだろう」

そういつて、俺は授業があるので教室に戻る。案の定、教室には大半の生徒がいなかった。いたのは冷静な大豪院と山下、一時間目の担当である瀬流彦さんが茫然と教室を眺めていた。

「あの、山吹君。これは一体」

「ああ、後十分くらいで全員戻って来ますから、授業やりましょう」

そういつて、自分の席について教科書を広げる。最初は戸惑っていた瀬流彦さんだったが、直ぐに悟ったのか授業を始める。そして宣言通り、十分経つと皆が戻ってきた。それぞれ服が破けていたり、顔に痣が出来ている。

「ええっと、取り敢えず何か訳がありそうだけど、聞かない事にするよ。後、今回だけ全員遅刻にしないからね」

瀬流彦さん。それは甘やかしすぎだつて。すると教室が沸く。

「流石、瀬流彦先生！！！！他の教師達がやらない事を平然とやってのける！！！！！！！！！！」

「そこに痺れる！！！！憧れるウ！！！！！！！！」

「キヤー！！！！セルヒコサーン！！！！！！！！」

「抱いてくれエエエッ！！！！！！！！！！」

「むしろ抱く！！！！！！！！！！」

「やらないか？」

何やら後半、聞きたくない単語が聞こえたが無視しよう。そんなこんなで授業が続けられる。こんなテンションの中、平然と授業が出来るアンタは教師の鑑だよ。瀬流彦さん。

「見よ！！！！！！この俺の日曜大工で磨き上げられた技術をオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「何の！！！！！！この俺の見るだけでSAN値がゴリゴリ削られる絵こそが至高也！！！！！！！！！！」

「テ・ケ・リリ」

「流石、上級生。スケールが違っわね。よし、私達も負けてらんないわ！！！！！！私に続けえ！！！！！！」

□  
お  
お  
ゝ  
！  
！  
！  
！  
□

「お前達、共同作業の意味を理解しているのか？」

ため息を吐く。

「悪いな。なんか、余計に煩くなっちゃった」

「いえ、これもネギ先生たつての願い。この雪広あやか。クラスの皆さんに文句など言わせません」

いいのか、それ？取り敢えず、サボってクラスの女子とお近づきになろうとしている男子に金槌を投合してから自分の作業に取り掛かる。

「何作ってるんですか」

「  
衣装」

「**といつても、そこまで豪華ではないが。後ろの方でゲインゲインと音がする機械は何に使うんだ？**」

「又ウウウオオオオオオオオオオツ!!!!!!」

「テエエエエエリヤアアアアアアアッ！！！！！！！！」

声の方を見ると。大豪院が物凄いスピードで入口らしき物を作り、次に中村がペンキで色付けをする。どうやら女子組、男子組、混合

組にコースを作る様だ。

「お前達、それ今作つたら何処に置くんだ」

「安心しろ。これは組み立て式にするつもりだ！！！！！！」

「故に場所は取らない。フツ、我等入口組に死角等無い！！！！！！！！」

叫びと共に歓声が沸く。

「よし、これで『ジューブニグラス』の土台は完成したぞ……………  
 いあ……………いあ……………」

「それ、なんの言葉ネ？」

「アレですか？アレはですね」

何やら不穏な会話が聞こえそうなので無視しよう。

「そろそろ休み時間が終わるから男は切り上げるぞ」

俺達と一緒に来ていたガン先が声を掛ける。俺達は返事を返すと、未完成な物を邪魔にならない場所に置いて教室を出ていく。

「んじゃ、放課後にまた」

「先輩達、凄い気合い入ってたよね」

「うんうん。それだけこの合同企画を成功させようと思ってたんだろうね」

「いや、それだけじゃないような気がする」

マド力達が、作業しているアマトの友達を見ながらそう呟く。確かにアイツ等作業しながら此方を見たりしている。何度かナツミやチヅルに声を掛けていた奴がいたが、何処からともなく飛んできたトンカチに倒れて行った。その度にアコが頑張っている。

「ぬおっ！？もうこんな時間！？早いな」

ユーナの声に時計を見ると、八時を過ぎていた。全然気付かなかった。

「ん？アマトは何処だ？」

「天さんならさっき夕飯作りに帰ったよ」

マナに言われて、そういえばそんな事言っていた様な気がする。

『ノーマさーん』

「ん？誰か私を呼んだか？」

「別にいい」

おかしいな。

此処です

「ただ、出所は後ろか？ ゆっくり振り向くと。」

「やっと、気付いてくれました」

[illegible]

「おい、ノーマ？早く起きないと遅刻するぞ？」

朝。俺のベッドで寝ているノーマを揺さぶる。

「~~~~~」

何故だか、ノーマは布団を被ってガタガタと震えている。俺はた



め息を吐いて。一気に布団を矧ぐ。

「ほら、早く起きて着替えろ。じゃないと遅刻するぞ」

そういつて、ふとノーマに気付く。ノーマの顔は青褪め、ガクガクと震えている。

「うあ~~~~~~~~ん!!!!!!」

そういつて、布団から俺に向かって突撃してきた。何とか踏ん張る。

「どうしたんだ? いきなり」

「お…………お化けが」

そういつて、泣きそうな顔をするノーマ。取り敢えず、埒が明かないのでそのまま居間まで移動して頑張って朝食を食べさせ、着替えさせ。家を出る。その時、思いつき拒否されたが。その後、一緒に登校していたネギ達にノーマを預けた後、自分のクラスに行き、ノーマが言っていた『お化け』の正体が分かった。

「成る程、コレか」

掲示板に張り出された『3・Aに霊再び』という新聞。写真にはマジ泣きしているノーマが写っていた。

「おう、天。昨日は残念だったな。こんな衝撃的な物見れなくて」

「別に見たくないよ」

まあ、コレを知っていれば、無理にノーマに登校させようと考えはしなかったけど。

「んで、どうするよ。コレ？」

そういつて、写真を指先で叩く中村。周りを見ると期待する様な目で見られる。はあゝ、纏め役は辛い。

「分かった。お前達の好きなようにやれ。俺も手伝うから」

その言葉に皆が歓声を上げた。

「ううゝ、アマトが酷いんだ。エヴァゝ、聞いてるか？」

「ああ、もう何十回も聞いているよ。まったく幽霊程度で情けない。これでも私は幽霊とかそういう類に属する吸血鬼何だがな」

「まったくもって、威厳がありませんけど」

「煩いぞ。茶々丸！！！！ていうか、貴様最近、主人である私に刃向い過ぎだ」

そういつと、茶々丸がお辞儀する。

「お褒めに預かり、歓喜の極みです」

「ウガアアアッ！！！！！！！！！！褒めてないわ！！！！！！！！」

コイツ、一度ハカセに総メンテしてもらった方がいいんじゃないか？

「私の話を聞け！！！！！！！！」

「分かった！！！！私からアマトに注意してやるから離せ」

息も絶え絶えにノーマを離す。すると茶々丸がジッとコッチを見ているのに気付いた。

「なんだ？」

「いえ、涙目のノーマ様を前にして息が荒いマスターは……………その……………凄く官能的ですね。刹那さん辺りに見せれば大興奮間違いなしです」

「なんじゃそりやアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「ていうか、私は興奮なんてしません！！！！！！！！」

離れた所から刹那さんが反論しました。どうやら地獄耳の様です。

「そうだ。刹那が興奮する物といたら、木乃香の縦笛だったり、口を付けたストローだったり、後は脱ぎ捨てられた下着とか？」

「そこまで変態じゃありません」

「そこまで？という事はそれ以下ならあったと？」

「まあ、コイツは愛しのお嬢様をストーカーしてたからな」

そういつて、刹那をからかう。すると、授業が終わった。

『うう~~~~~』

私って写真写り悪いから誤解されたかな。

『ノーマさんには悪い事したな』

思いつきり泣かれちゃったし。でも、あんなノーマさんも可愛い  
かも。ふと、クラスの方で皆さんが騒いでいるのに気付く。

「よし、これで準備オーケーだね」

「やっちゃうよ。この超一味特製『除霊GUN・EX』で」

なんでしょう。じょれい？

『ああ、除霊か』

除霊？誰を？私しか幽霊いませんよね？

[illegible]

「なあ、天兄ちゃん。なんで俺らまで来ないとアカンのや？」

小太郎が不満を述べる。

「いや、興味があるとか言って付いて来たのお前だろう？」

「まあ、そうやけど」

面倒そんな顔の小太郎の横には月詠がべったりとくっ付いている。月詠は小太郎と一緒にいられるなら、特に不満はないようだ。

「で？自分から付いてきた小太郎と月詠はいいとして、なんでお前らがいるの？」

「ウチはこついの専門やから色々と役に立てると思いますえ？」

「単に学校というのを見たいからだ」

「姉さんに無理矢理です」

苦笑する。まあ、人手は多い方がいいか。

「んじゃ、班分けして手分けして探すぞ！！！！集まれ！！！」

何故かくじ引きする事になった。そしてクジの結果。俺は超、明石、四葉、大河内の五人で校内を回る事になった。

「よし、何処からでも来なさい！！！！」

「あんまりはしゃぐなよ？見回りの先生に見つかったら大変なんだから」

そういうが、まったく聞いてない。大河内が申し訳なさそうにしているだけだ。すると。

「突然だけど山吹先輩は『魔法使い』を信じる方か？」

突然、超が聞いてきた。あまりに突然だったから一瞬、何を言われたか理解が追いつかなかった。

「私はいると思うよ！！！！」

「裕奈。超は先輩に質問してるんだよ？」

「いや、別に先輩だけというわけではないネ。皆も応えて貰って構わないヨ」

そういつて、笑う。その笑顔を見て、唯の好奇心かと思った。

「その『魔法使い』の定義が何なのか分からないから何とも言えん。それに見方を変えれば、俺や超、四葉も『魔法使い』になるぞ？」

笑って、言い返す。それに超と四葉が苦笑する。残り二人が首を傾げる。

「例えば、超。お前だって昔の人間から見れば『魔法使い』だ」

「ふふ、『高度に発達した科学は魔法と区別が付かない』だった力？確かにそう捉えるなら私やハカセも『魔法使い』になってしまうネ」

「じゃあ、先輩と五月ちゃんが『魔法使い』っていうのは？」

『料理、ですね？』

不思議な喋り方の四葉が俺の代わりに答える。頷いて。

「考えてもみる。それ単体では食べられない物を工夫や発想を駆使して、万人に喜んでもらえる物を作る。これは一つの『魔法』だろう？こういう定義なら俺は『科学者』や『料理人』は『魔法使い』、『料理』や『発明』は『魔法』と捉えている。まあ、カボチャを馬車にするような『魔法』を使える『魔法使い』に関してはいるかもしれないし、いないかもしれない。とだけ答えておくよ」

そういつて、笑う。大河内と明石は俺を見て驚いた顔をしている。四葉は笑顔。超は嬉しそうな、楽しそうな笑顔を浮かべて。

「やっぱり、先輩は面白い人ネ」

そういつて笑った。すると後ろの方から野太い悲鳴が上がった。

「え？何！？」

「ふむ、幽霊でも見つかったかな？」

そういつたのと同時に悲鳴が上がった方から光が見え隠れした。どうやら本当にいたらしい。

「ようし、行くよ。アキラ！！！！」

「ううゝ、嫌だなゝ」

そういいながら二人が先に行く。

「さて、俺達も移動するか。で、超そろそろ離れてくれないか？歩きづらいんだが」

驚いたのか、それとも別の理由か。超が俺の腕にしがみ付いていた。俺の言葉に我を取り戻すと急いで離れる。若干、頬を赤く染めてるのは恥ずかしさからだろうか。

「あ、アハハハハ。さ、ささつと行って悪霊退治ネ！！！！」

そういつと、進み始める。だが、五メートル程進んだ後、振り向いて。

「は、早く来るネ」



どうやら一緒に行った方がいらしい。若干、声が震えていたのは気のせいだろうか。

「上から来るぞお！！！！気を付けろおツ！！！！！！」

「康介！！！！！！階段の方に行ったぞ！！！！！！！！」

「何だあ！？この階段わぁっ！？」

なんか、非常に混沌としているな。こんなんで除霊出来るんだろ  
うか？

「ちえりお！！！！！！ちえりお！！！！！！！！！！ちえりお！！！！！！！！！！！！！！」

「ノーマ、ノーマ。そこはチェストだ」

まあ、ちえりおでも間違っではないか。

「なんか、凄い事になってるな。越前！！！！このアイテムを取るんだ！！！！！！」

やってきた天さんが何か投げる。越前と呼ばれた男がそれを取ると。

「ワナップ!!!!!!!!!!」

と意味不明な叫び声を上げる。まあ、放っておこう。それよりも

「超。何故天さんの手を握っているんだ？」

それから越前という先輩が「せっかくだから俺はこの赤の扉を選ぶぜ」等と赤くもなんともない扉（取っ手の部分が赤いからそこで判断したのだろうか）を開けて、中から飛んできた机にぶつかったり、ノーマが「ちえりお!!!」等と叫びながら除霊GUNを乱射するなど、色々大変だった。なんとかネギ先生が幽霊を成仏させて一見落着いた。

「今日は物凄く疲れた」

「そうだな。越前もかなり張り切ってたみたいだし」

天さんの家に帰りながらそんな会話を続ける。

「そういえば、越前っていう先輩。あのまま放置しちゃったけど大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ」

そういつて天さんが笑う。

「なんで？」

「あいつの通り名は『コンバット越前』どんな不利な状況でも無事

に生還できる特殊スキルの持ち主だ。って自分で言ってたからな」

『自称かい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

その場に居合わせた皆が叫ぶ。次の日、皆と一緒に作業している越前さんを見付けた。本当だったとは。

Re・No：43「ゴーストバスターズ!!!」（後書き）

どうもフィロです。あれ？最初はここまで混沌とした物じゃなかったのに何時の間にデス様が降臨したんだろう？まあいいか。今回はさよ事件と超の問いかけです。私に關してみれば科学者だろうと料理人だろうと魔法使いです。後は芸術家ですかね。真っ白なキャンバス。又はそれ単体では意味を為さない部品、又は多種多様な野菜。そんな中から人を驚かせたり、魅了したり、喜ばれたりする物を作れる人達は本当に魔法使いかもしれない、と昔から感じています。さて、次回はようやっとうご登場『年齢詐欺薬』お楽しみに

Re・No：44「身体は大人！！！！中身は子供！！！！年齢詐欺薬！！！！」

「その、今日は案内ありがとう」

夜も近いというのに祭りはまだ続いている。その景色を眼下に収めながら僕は目の前の男に礼を告げる。

「気にすんなよ。こっちも暇だし。これくらいは当然だ。それに」

男は一旦、言葉を切る。そういう風に言葉を区切られると気になっってしまう。恐らく男は狙ってやっているんだろう。

「それに、なんだ？」

聞くと、男は気恥ずかしそうに頬を掻く。そこで少し違和感を覚える。仕草は見慣れている。だが、コイツはこんなに大人びていたか？もう少し幼さを残した顔だったような。それに髪も結うほど長くない筈。

「それに……お前と学祭周るのは楽しみだったからな」

そういつて、笑う。呆れる。

「楽しみ、か。まるで子供だぞ？」

まあ、私より二つも年下なのだから僕から見れば子供か。

「まったく、鈍い奴だ」

奴が呟く。

「誰が鈍いんだ？」

思わず詰め寄る。何時もなら笑って嫌味の一つを言うのだが、今回だけは違った。コイツは逆に僕に近づいて。

「お前だ。まあ、俺も鈍い方だが。アレだ。好きな奴と学祭周るのが楽しみだったんだ」

今、コイツはなんて言ったんだ？好きな奴？僕が？奴の言葉を理解すると、顔が熱くなる。

「じ…………冗談は止める！！いや、お前は僕をからかっているな！！！そうなんだな！！？」

絶対に顔は真っ赤だ。奴、アマトはゆっくり私に近づき。逃げられない様に身体と後頭部に手を回され。

「こんな状況、場所でからかうかよ」

そういつて、私と同年代か、少し年上の顔をしたアマトが近づく。近づいて。

「っ！？」

目が覚めた。窓から日の光が降り注ぎ、雀の声が聞こえる。

「なんて夢だ」

くそ！……！まだドキドキしている。顔も熱い。僕の生涯でトツプの最悪な目覚めだ。

「よりにもよってアマトが僕とき……キ……キスだなんて」

言ってから後悔する。顔が更に赤くなり、夢で見た光景を思い出したのだ。

「顔を洗おう」

思いつきり冷たい水なら尚良い。幸いまだアマトが起きるまで時間がある。

「善は急げだな」

そういつて、布団を蹴飛ばし居間に降りる。

「本当に真つ赤だ」

洗面所の鏡で確認すると本当に赤い。それにまだ夢の光景が頭にこべり付いている。水を溜めて、中に氷をブチ撒け、充分に冷えた冷水を被る。

「うひゃっ！？」

予想以上に冷たくて変な声を上げてしまった。思わず、周りを見る。誰もいない。ほっと一息ついてから顔を洗う。慣れて来ると案外心地いいものだ。

「ふ」

タオルで顔を拭き、元の肌色に戻っている顔を見て安堵する。そしてふと、鏡に映る自分を見る。

顔は整っている方だと思う。リイリアも綺麗だと言っているから少なくとも醜いとは思われないだろう。身体つきはいい方だ。ただ、胸が大きくて動く時に邪魔だ。だが、ツクヨミは羨ましがっていたが。単に肩がこるだけなのに。そういえば、チグサがもう少し笑え、などと言っていた。だが、僕自身、あまり意識して笑った事が無い。

「笑顔……………か」

鏡に映る仏頂面。ゆっくりと笑ってみる。

「ぎこちない」

ため息を吐いて、もう一度やってみる。作り笑いだなこれは。そうやって鏡の前で笑顔の練習をする。

「お？これはいいかも」

まだ、ぎこちないがさつきより格段に良い笑顔だ。今度月詠辺りにコツを聞いてみるか。アイツ、何時も笑顔だし。そこでふと鏡に自分以外の人間が映っているのに気付く。

「り……………リイリア？」

「どうしたの？姉さん。鏡の前で笑顔むぐつ！？」

急いでリイリアの口を塞ぐ。



「いいか？コレは僕とリイリアだけの秘密だ。いいな？」

リイリアが頷く。ちよつと涙目だった。悪い事したかな。

「でも、珍しいね。どうしたの？」

「いや、別に。単にやってみただけだ」

「へえ」

リイリアはそうやって笑みを作る。

「なんだよ？」

「いや、姉さんも変わったな」って。アマトさんと出会っただけで、ずっと武道一筋だったじゃない？その姉さんが女の子らしい事するようになったんだ」

嬉しそうに話す。リイリアが何処かムカつく。僕はリイリアの頭を掴んで。

「悪いか？僕でも……その……女の子だから。これくらい当然だろう？」

「うん、そうだね。それと謝るから離して」

言われ、手を離す。痛むのか少しリイリアが唸りながら僕を睨む。

「おゝす。今日は早いな二人とも」

アマトが起きてきた。一瞬、脳裏に夢のアマトが浮かんだが、直ぐに消す。

「おはようございます」

「おはよう。どうしたラサティ。どうか、具合でも悪いのか？」

心配そうにアマトが近づく。それだけで夢の光景が頭から出て行ってくれない。

「だ、ただ大丈夫だ。ちょっと寝起きだから、そう見えるだけだ」

慌てて誤魔化す。だが、そのせいで顔が熱くなった。

「の割には顔が赤過ぎやしないか？熱でもあるんじゃないのか？」

そういつて、アマトの右手が僕の額に触れる。思っていたよりずっと暖かい手だった。なんとというか、太陽の様な。

「いきなり何をするか！！！」

「親切でやっているのに殴るこたあないだろ？」

反射的に拳を突き出す。軽くやった為、アマトも避ける必要はないのか僕の拳を受ける。アマトは不満げな表情を浮かべながら台所に向かった。その後ろ姿を見て少しだけ罪悪感が芽生える。

「姉さん？」

リイリアが声を掛ける。

「分かったよ」

渋々と台所に向かう。

「手伝う」

「んじゃ、味噌汁余所ってくれ」

言われた通り、作業をこなす。

「いや、昼休み返上で学祭準備なんて私達も殊勝だねえ」

ユーナがそういうがそうでもしないと間に合わないのが事実だ。その事を強調するかのように私達の後ろでは男達が暑苦しい叫びを上げながら作業をしている。衣装関係は肉体労働が出来ない男と私達の専門で彼等は看板などを作っている。

「ねー！！コレ見た！？コレ麻帆良スポーツ！！」

そういつて、マキエが持ってきた新聞には『ホントに効果あり？！世界樹伝説』と書いてあった。

「え？コレホントかな？」

世界樹伝説ねえ。何々？『学祭最終日！！世界樹の下で……告白＆CHU？すればあなたも彼氏or彼女即GET』興味ない。

「あ……でもね。麻帆高に行った私の二つ年上の先輩の話なんだけどね。去年の学祭で絶対無理って言われてた競争率メチャ高の超美系部長にダメ元でアタックしたら……何と！！即OKもらえたって？」

「マジ！？」

その言葉に作業していた男共も一斉に騒ぎだす。

「へえ、意外と効果あるんだ。どう思う？円？」

「な、なんで私に聞くのよ！？」

「だってえ、アンタ。先輩の事」

「わあ！！！！！！その先は言うな！！！！！！！！！！」

なにやらマドカが騒いでいる。すると教室にアマトがやってきた。

「お、す、オニギリだけだけど食うか？って何やってんだお前ら？」

そういつて、近くの机に大きな皿を置く。皿の上にはこれでもか、という程にオニギリが乗っていた。

「先輩？これどれくらい作りました？」

「ん、数えるのが面倒になるくらい」

「因みに所要時間は？」

「四限目が始まると同時に仮病使って調理室陣取っていたから軽く一時間位かな。いやあ、持ってきた米全部使い切っちゃった」

そういつて、カラカラと笑うアマト。啞然としているマドカ。

「それより食べなくていいのか？無くなるぞ？」

「へ？って、何時の間に！？ていうか無くなるの速っ！？」

すでに皿に乗っているオニギリの半数が消えている。因みに私はキープ済みだ。うん、やはり鮭が一番だな！！！！

「んで、なにで騒いでんだ？」

自分用に作っていたのか、オニギリを食べ始める。私は問題の新聞を見せる。

「はあ。世界樹伝説ね」

興味ないのか、新聞を一瞥するとオニギリを食べ始める。

「ノーマは今好きな人いーひんの？」

何時の間にかコノカが隣にいた。

「別にコレといった奴はいない」

というか、いても人間では釣り合わないからな特に寿命が。すると、頭を撫でられた。見上げるとアマトが笑って。

「さて、腹ごしらえも済んだし。仕事の続きだ」

「そうだな」

何となく、沈んでいた気持ちが軽くなった気がした。私は心の中で小さく礼を言って、アマトと一緒に作業に戻る。

「ええっ！？ネギとデートしろって！？」

何時もの様に家に集まった奴等が騒いでいる。カモが突然言い出した事に明日菜が絶叫する。そしてカモが煙草に火を付けようとするも、寸前で止める。何故ならカモの後ろには煙草の臭いが嫌いなラブレスがカモを睨んでいるからだ。以前、カモが煙草を吸っている最中にラブレスが襲った事があり、以来家では禁煙している。

「予行演習だっつゝの。よこーえんしゅー。戦も色恋も要は慣れよ、慣れ。場数も踏めば緊張もなくなつてタカミチを学祭に誘うくらい、どーってことなくなるって寸法よ。何のかんの言って、姐さんデートした事ないんだろ？」

「う…………悪かったわね」

「でも、ええ考えかもな」

木乃香が同意する。

「でも、無理ないか？年が五つも離れてるんだし」

「そうよ。こんなガキと一緒に歩いたって予行演習になんないわよ  
！！！！」

だからといって他に男もない。ってお前ら、なんで俺を見る？

「ふふふ。こんな事もあるうかと。ってな」

そういつて、カモは袋から何かを探しだす。そういえば、それ着  
払いで俺が金を払ったな。後で請求するか。

「赤いあめ玉・青いあめ玉年齢詐欺薬」

何やら思いつきり胡散臭い物を取りだした。

「その名の通り、外見年齢を調整できる魔法薬だ。マジックポーション 最も、実際に  
肉体が変化する訳じゃねえ。一種の幻術だな」

付属の説明書には青で子供、赤で大人になれるらしい。

「天はぐん。口開けて」

「ん？」

口を開けた瞬間、何かが口の中に入った。驚いて飲み込むと一気に視線が低くなった。

「ああ〜ん。可愛ええ〜」

木乃香に抱きしめられる。って、さっき飲んだの詐欺薬か！？しかも、子供版。

「ふう〜ん、大体十歳位かな？」

「面白いな〜。小太郎はんは赤の方を試してみましよう」

「俺はいらん！！むぐっ！？」

小太郎が少年から青年の身体に代わる。へえ〜、面白いな。俺は木乃香から脱出して赤のあめ玉を口の中に入れる。視線が戻る。

「おお〜。中タイケメンやな〜」

「ああ〜ん。もう少し小さい天はん。楽しみたかったのに〜」

「ええつと、あんまり無駄遣いしないでくれね〜か？結構高いんだよコレ」

その後、皆で悪乗りしてあめ玉を食べ、気付いたら瓶の半分を消費していた。そして次の日。

「なあ、なんでお前が大人になっているんだ？」



「さあ？けど、大人の私も綺麗だろ？ふふん、惚れてもいいのだぞ？」

そういつて、胸を張る。同い年くらいになったノーマ。身長は一回りほど大きくなり、凹凸もはつきりしている。

「で？視界が高くなった感想は？」

「人がゴミの様だ！！！！！！」

何故かテンションが高い。まあ、何時もの事が。すると、ノーマがふと胸を何度か叩く。

「私としてはラサティ位の胸を期待していたのだが、まあ、これで我慢してやるか」

そういつて、近くのクレープ屋に向かう。その後ろ姿を見てため息を吐く。此処だけは変わらないんだな。

「あれ？先輩」

声に振り向くと美砂、桜子、和泉とその後ろに隠れている円が立っていた。

「どうしたんですか？こんな所で」

「ん？ちよつとな。それよりもお前らこそどうしたんだ？ライブでもやるのか？」

「あ、分かった？そうです。実は学祭中にライブやる事になった

んです。ほら、円

そういつて、美砂が円を連れて来る。

「あ、後でいいじゃん。今、練習があるんだし……!」

「ダメ。そういつて、先延ばしにして結局渡せなきゃ意味ないじゃない。今渡しなさい。ほら、ファイト」

美砂がそういつて円を押す。

「えつと、あの……先輩。よかつたらライブに来てください！！！！！」

そういつて、チケットを俺に押し付け、全力でその場を離れる。

「ああ。行っちゃった。あ、ノーマにこれ渡しといてください。  
んじゃ、私達は練習があるんで」

そういつて、三人が円を追つて走る。さて、貰つたからには行くしかないな。

「ん？どうしたんだアマト」

クレープを食べながらノーマがやって来る。俺は美砂に渡されたチケットをノーマに渡す。

「円達が学祭中にライブをやるから来てくれってさ」

「ふうん、まあ暇なら見るか」

そういつて、クレープに意識を戻す。そういえば、ネギ達はつま  
く行ったんだらうか？

**R e - N o : 4 4 「 身体は大人！！！！中身は子供！！！！年齢詐欺薬！！！！」**

どうも、フィロです。今回でやっと出た年齢詐欺薬。けど実際使ったのはネギとノーマのみ。なんか物足りないと思いつつも、ネタが浮かばないので仕方なくこんな感じに。期待してた方々申し訳ありません。次回は前夜祭。お楽しみに

Re・No：45「突然の訪問」

「ただいま」

お化け屋敷が何とか間に合う形になり、家に戻って来る。居間に入ると。

「おお、お帰り」

祖父さんが茶を飲んでいた。

「どうしたの？」

「なに、少し用があつてな。こちらに来たのだよ」

にこやかにそういうと、茶を飲む。少し驚いたが、俺も祖父さんの向かいに座る。どうやら一人で将棋を指していたらしい。他の皆は……多分、前夜祭に行っているのだろう。

「どうだ？久しぶりに一局打たないか？」

「いいね」

笑って頷く。駒を並べ直す。騒がしい喧噪の中、小さなパチツ、という音が響く。

「どうだ、修行の方は？」

「ぼちぼち、つてところかな。珍しい事も出来るようになったし」

「珍しい事？」

頷き、糸を作りだす。

「ほう『気』の糸か。器用じゃな」

感心するように頷くと駒を進め、俺の『歩』を取る。

「でも、攻撃がイマイチでさ。決め手に欠けるんだ」

言って、祖父さんの『桂馬』を取る。

「決め手のお」

祖父さんが少し考える。そして駒を動かす。

「お前を将棋の駒に例えるなら『桂馬』じゃの」

「いきなり、どうしたんだ？」

突然の言葉に思わず聞き返す。

「力は弱いが駒を飛び越す、意外な動きをする。型に嵌まらぬ。まあ、柔軟な思考ということだ」

言われ、確かに。と納得してしまう。

「その糸の利点と欠点をちゃんと理解しておれば自ずと正解が見つかるさ」

「そんなもんかね」

「そんなものだ。王手」

「あつ?!」

会話に集中しすぎて、盤上を確認していなかった。すると、祖父さんが立ち上がる。

「もう行くのか？茶菓子でも出そうか？」

「いや、遠慮する。夕飯には戻るから残しておいてくれ」

「了解」

祖父さんが頷き。家を出ていく。そこで気付く。

「後片付けは勿論俺か」

ため息を吐きながら片づけを始める。

「此処に来るのは何年ぶりの」

そういつて、目の前のモノに声を掛ける。ソレは墓。天に召され  
た者が眠る場所だ。

「済まん。お前の好きな団子は持つてきてやれなんだ。代わりに  
孫が作った団子で許してくれ」

言つて、手を合わせる。

「その孫だな。暫く見ない内に随分とイイ顔つきになった。まあ、  
未だ戦場を知らぬ雛鳥だな」

言つて、思う。このまま、戦場を知らずに生きて欲しい、と。

「しかし、叶わぬだろうな。何といつてもワシの孫なのだから」

苦笑する。だが、戦場に立ったとしても直ぐにやられるだろう。  
アイツは変な所で優しいのだから。

「まあ、戦場に立たせない事がワシに出来る事じゃな」

笑つ。まあ、自分から戦場に出ようとは考えんだろうが。しかし。

「墓参りに来るような老いばれに何か御用かな、お嬢さん？」

振り向かず、問いかける。すると、後ろの気配が僅かに動く。ど  
うやら動揺したようだ。数秒した後、気配が動く。それに合わせて  
後ろを振り向く。歳の頃は十代半ば。後四、五年もすれば中々の美  
人になりそうだ。

「どうやって、気付いた力？気配は完全に消した筈だが？」



「気配を消し過ぎじゃよ。よく考えてもみよ。周りにはこんなにも気配があるのに一か所だけポツカリと気配が無かったら。不自然じやろっ?」

まあ、それに気付くのは極一部の人間か。人外の者だけだな。

「ふふ、想像以上ネ。とっくに現役を退いていると思っていたガ」

「こんな老いぼれでも重い腰を上げてみるもんじゃよ。何しろ、現役では見た事もない『気』の応用法を持つ者に会ったからな」

「差し支えなければ教えて欲しいナ」

笑みを浮かべてはいるものの、少女の目は笑っていない。

「それで? 何用かな?」

「単刀直入に言うネ。私の計画に協力して欲しい」

「計画?」

聞くと、少女は目を細めて。

「この世界に『魔法』と『魔法使い』が存在する事を知らしめる」

そう言った。

「天斗さんが帰って来てるんですか!？」

刹那が叫ぶ。同時に持っていた湯呑みをテーブルに叩きつけ、中身が少々零れる。

「す………すみません」

慌ててふき取る。やっぱりコイツ等に話したのは間違いだったか。だが、後で分かるのだから今話しても構わないか。

「それにしても、妙にテンション高くないか? まあ、月詠と小太郎は何となく分かるが」

小太郎は祖父さんに捕まった筈だ。つまり祖父さんに負けている。コイツの性格だとリベンジ、もしくは修行を頼みたいのだろう。月詠は単に強い人間と殺しあいたい、という物騒な考えだろう。となると、刹那は。

「まさか、英雄に憧れる少女とは」

「いいじゃないですか。幼少時の私にとって天斗さんと学園長は『正義の味方』の様な物なんですよ?!」

叫ばれても困る。因みに会話に参加しているのは俺と刹那、小太郎、月詠で他は前夜祭（まだ夜でもないのに）に参加している、俺は疲れているという理由で辞退している。

「悪いけど、刹那の姉ちゃん。天斗爺ちゃんとは俺の方が先約やで」

子供の様に（実際子供だが）笑って小太郎が喋る。

「今度は小細工なしで真っ向から戦う。先に約束したからな」

「むう」

何を悔しがっているのは知らないが、時間はあると思うのだが。

「さて、今日の夕飯は少なめでもいいか」

前夜祭に向かった奴等は『超包子』のご飯でも食べて帰って来るだろう。

「精の付く物で頼むで」

「もう、嫌やわ、小太郎はんつたら」

小太郎の言葉を勘違いした月詠が頬を染めている。

「ほう、それはまた大それたことじゃな」

驚き半分、呆れ半分で答える。

「どう力？報酬はちゃんと用意するヨ」

「残念ながら、実家の経営は相変わらず好調でな。金は必要とせん」

そういつて、笑う。笑いながら考える。さて、何故世界に『魔法』を知らしめる必要があるのか？メリットは双方共にある『魔法使い』側だが今現在、紛争地域等で活動している『立派な魔法使い』達が公に仕事が出来る。だが『魔法使い』側のメリットはこれだけ。国際間のメリットはまあ、考えるまでもなく軍隊の強化。『魔法使い』一人いるだけで戦車数台分の予算が浮く。それを利用して新たな兵器を開発する事も出来るし、新しい『魔法使い』の補充も出来る。ではこの子は戦争の拡大と世界の混乱を望んでいるのか？答えは否だ。短い会話だが、彼女は『悪』でも『外道』や『畜生』の類ではない。いくなれば『悪』になりきろうとする『善』だろう。何かしらの目的を成し遂げる為にはこうするしかない、という決断をしているのだろう。しかし。

「分からんのう。世界を混乱させてまで『魔法』を公開したいのか？」

「確かに、世界は数年程混乱するだろう。けど、それは踏まえているし。その後の事もちゃんと考えている」

「ふむ、決意は固い様じゃな」

少女は顔から笑みを消している。

「成る程、お主は更なる戦火の拡大を望んでおるのか」

言つと、少女の表情が険しくなる。

「今のを聞いて、その結論に至ったのは分らない。が、私はそんな事を望んでいないシ。させるつもりもないヨ」

「どうかな？お前さんが思っている以上に人間とは卑しく、醜く、残酷な生き物だ。自身の利益或いは保身の為だったら他の数百人を利用するのが普通じゃからな」

どうやら、このお嬢さんは人の醜い部分は見ている様だが、全てを見ている訳ではないようだ。

「仮に『魔法』を世界に知らしめ、世界が混乱し、お嬢さんが止めたでしょう。そしてその先に何が見える？」

「……………平和が見えるヨ」

数瞬の間を置いて、答える。

「呆れるのう。『その程度』の事を為して平和が手に入るならとつくの昔に平和など実現している。どんな時代であれ、人間は戦いを、他人と競い合う事を捨てる事は出来ん。それは当然であり、人として普通だ。何故なら、それは人の魂の奥底にある。一つの『起源』だからだ。動物にはそれぞれ役割がある様に。人にも役割がある」

「それが争い、力？」

「然り。人間は何処までも強欲な生き物だ。そして人間は『現状に満足できない』生き物だ。これ以上の物を見たい、集めたい、

味わいたい。そういった感情がお嬢さんにもあるのだろうか？」

お嬢さんの顔が更に険しくなる。まあ、彼女にそんな思いが無ければこんな事をしようと思わなかっただろう。

「まあ、アレじゃな。小娘相手に言葉で勝っても楽しくはないからの。故に」

ゆつくりと構えを取る。

「今度は此方で勝負をせんか？お主の覚悟がどれほどの物か試してみたいのでな」

そういつて、笑う。

最初に思いついたのは『規格外』という言葉。それは勿論、彼の能力、戦歴だ。だが、それでも奥の手を使えば苦戦はするも打倒出来ると思っていた。

「では、行くぞ？」

そういつと、彼の姿が消える。瞬間、脇腹に衝撃が来る。

「カハッ?!」

そのまま、五メートル程、地面と平行に飛んで地面に転がる。痛みで身体が動かない。

「なんじゃ、これでも、力は抜いた筈なんじゃが」

反応が追いつかない。強化戦闘服を着て、全神経を集中していたのに。

「グッ！！！！」

痛みをこらえて立ち上がる。

「ハアッ！！！！！！」

全力で最高の速度で彼に肉薄し、一撃を放つ。

「遅いのお」

そこには誰もいなかった。衝撃と共に地面に叩きつけられる。

「クッ！？」

「ふむ、今のはいいい一撃だった。『負けられない』という思いがしかと感じられた」

本人は正直に褒めているだろうが、手も足も出せずにいる私にとっては屈辱以外の何物でもない。

「さて、そろそろ御暇させてもらおうかの」

そういつて、歩き出す。

「私を捕まえないの力？」

「それは近衛の糞爺の仕事じゃ。言っただじゃろっ？ワシは単に墓参りにしに来たと。それにな」

顔だけ振り向き、笑う。

「あまり騒ぐと死者が起きてしまうからな」

再び、歩き出す。

「ハハッ」

勝てない、実力も何もかも。そう感じ、意識を手放した。

「む？」

「ん？」

同時に気付く。目の前にいたのは自分と同じように右手に水の入った桶、左手に一輪の花と線香を持っている。



「何故、とは聞くなよ？妹の墓参りに兄が来て何か不都合があるのか？」

「ふん、五十年も放っておいて吐く言葉ではないの」

無言で睨むも同時にため息を吐く。昔からコイツとはそりが合わない。

「よそづ。ワシらが喧嘩する時は決まって日向がいない所の筈だ」

「その通りだ」

そういつて、近衛門が横を通り過ぎる。

「その線香と花だが」

後ろの近衛門が止まる。

「安心しろ、片方空けてある」

「ふん、礼は言わん。それとどういつつもりだ？」

近衛門が聞いてくる。

「お前が『まほら武道会』に出場するとは。血迷ったか？」

「ふん、お前もワシの性格くらい知っているだろう？」

聞くと、気配が僅かに動く。呆れて苦笑したらしい。

「そうだったな。だが、あまり若い者を苛めるなよ?」

「心配するな。冷や水程度ですませる」

そういつて、歩き出す。そういえば、伝えるのを忘れていたな。

「因みに盆が終わるまで此处にいるつもりだから」

「んなつ?!」

驚愕の叫びを上げる近衛門につい笑みが浮かぶ。さて、どうやら今年は色々と楽しくなりそうだ。

「長く生きてみるものだな」

Re・No:45「突然の訪問」（後書き）

どうも、フィロです。今回は爺さん方がメインのお話。そして為す術もなく倒される超。まあ、超が反応出来ない速度の攻撃繰り出せる爺さんならタイムマシン持ち出されても勝てる様な気がするけど。因みにこの作品では近衛門も同じくらい強いです。そしてまほら武道会に天ではなく天斗出場。考えてみたら天の能力って支援を目的とした中・遠距離型だから近接向きじゃないんですよね。しかも、あんなに使ったら『魔法』の存在もバレですし。え？高音さん？あの人はアレがデフォだからいいんです。それでは次回の更新をお楽しみに

## Re・No：46「麻帆良祭開始」

『只今より、第78回 麻帆良祭を開始します！！』

そのアナウンスと共に一般客が入り始める。

「さて、今日は一日フリーだから。色々と案内出来るが、まず何処に行く？」

そういつて、隣にいるラサティに聞く。ラサティは先程の飛行パフォーマンスに驚いていた。

「ん？どうかしたか？」

「……………まあいいか。んじゃ、適当にぶらつくぞ？」

「ああ。そうだ、リイリアはどうしているんだ？」

「リイリアはノーマと一緒に周るってさ」

俺の言葉にラサティが頷く。さて、行きますか。

「はぁ~~~~、凄え〜な〜」

「クー、あんまり上ばかり見てると転ぶよ?」

「大丈夫だってえっ!?」

笑って言うと同時にクーが転ぶ。

「やっぱり。空き缶が落ちていたから注意しようと思っていたんだけど」

「そういうのは直ぐにお願いします」

顎を擦りながらクーが立ち上がる。

「んゝ、色んな店があって、目移りするなゝ」

「あれ?『うさみみ空賊団』の団員を探すんじゃないかったの?」

確か、こつちの世界に来たのはそういった理由の筈。まあ、私自身もこつちに興味があつたけど。すると、クーが後頭部を掻きながら。

「あ……………当たり前だろ?も……………勿論団員候補は探すよ?けど、今はこのお祭りを楽しもうぜ?」

そういつて、私の手を取る。クーは何時もの笑顔を浮かべて。

「行こうぜ。レン」

「うん」

「凄いですね。麻帆良学園都市。話には聞いていましたけど、中々いい街ですね先輩。先輩？」

[illegible]

先輩が物凄く上機嫌に笑っている。

「どうしたんですか？物凄く上機嫌ですけど」

すると、先輩は待っていました、と言わんばかりに笑みを深くして。

「分かります？実はですね。実家の母から連絡があつたんです」

「連絡ってどんな？」

何かあったんだろうか？

「なんと、かの『太陽の王国』。フアジャールに我が姉メルフォンドがお店を構える事が出来たんです!!!!!!!!!!!!!!」

太陽の王国といえば、かなりの大国だ。そんな所に店を構えるなんて凄い事だ。

「良かったじゃないですか！！！！」

「あれ？でも二、三日前に本部からの定期連絡でファジャールの事何か言ってた？」

「え？あつ？！」

そういえば、あの時先輩は先に寝ていて聞いてなかったんだ。どうしよう。

「どうしたんですか？本部で何か？」

「ううん、本部じゃなくてシスカの言っていたファジャールが三週間前にエディルガーデンに占領されたって話し」

瞬間、場の空気が凍った。そして数秒後。先輩が頂垂れる。

「う……………う……………」

泣いている。確かにお姉さんがいる場所は安全とはいい難くなっている。

「だ……………大丈夫ですよ先輩。先輩のお姉さんはきっと生きて

」

「どうしてくれるんですかあああああ！！！！！！！！折角、家族の生活が良くなったと思ったのにこの仕打ち。エディルガーデン許すまじイイイイイイ！！！！！！店を壊した罪は利子五割増しで返したるわアアアアアアアア！！！！！！」

「えええええつ?!お姉さんの心配じゃないんですか!？」

「黙らっしゃい!!!!!!あの女の事です。万が一に作っておいたタンズ型シエルターにでも入って難を逃れているんですから。あの女は私以上に執念深く、私以上にお金に執着しているんですよ!？」

先輩以上。止めよう、どうやっても悪魔の姿しか思い浮かばない。

「まあ、今この場で怒鳴っても仕方ないでしょ?とにかく、今はこの問題を置いときましょう」

流石、キア。上手く先輩を宥めてくれた。

「今はこの美味しそうな匂いの正体を見付けるのが先決よ!!!!!!!ほらロー、シス力行くわよ!!!!!!!!」

いきなりキアが僕と先輩の手を取って走りだす。ああ、何処に行っても僕はこの二人に引っ張り回されるんだな~~~~。

「「幸せ~~~~~~~~」」

私とリィリアが同時に呟く。うん、やはりクレープは最高だ。



「幸せだ。麻帆良祭万歳だな」

「ふふ、そうだね」

それにしても人が多い。

「此処に来て、大分慣れた筈なんだが。鬱陶しいな」

「仕方ないよ。お祭りなんだもん。我慢しなきゃ」

確かにそうだが。歩きづらくて仕方がない。

「そう思わないか？ラブレス」

聞くと、腕の中にいたラブレスが首を捻る。

「もう、ラブレスは抱えられているから分からないよね？」

そういつて、リイリアがラブレスを撫でる。

「そうだ。折角だからノーマも手伝ったお化け屋敷に行こうよ」

「やだ」

即答した。なんで私がアイツ等の所に行かなければいけないのだ。私はクレープ巡りを楽しみたいのだ。

「ノーマが行ったらマド力達が喜ぶよ？」

「確かにそうだが、遠慮する」

そういつて、そつぽを向く。

「怖いの手？」

ゆつくりと振り向く。

「誰が怖がりだアアア！！！！！！」

「だって、この前の騒ぎでも涙目だったから」

うつ、そこを突かれると反論できない。

「とにかく、私は怖がりではない。単に面倒なだけだ」

「怖がりじゃないの？」

「当たり前だ」

そう言つと、リイリアが笑つて私の腕を引く。

「そつか。じゃあ、お化け屋敷行つても大丈夫だよな？」

「へ？」

訳も分からず、そのまま引きずられる。

「なあ、さっきから気になっているんだが」

「ん？」

「此処、カップルが多くないか？」

ラサティの問いに周りを見る。成る程、確かに周りには老若男女問わず、カップルがイチャイチャしている。

「まあ、此処はそのスポットだから仕方ないだろう」

「何故そこに僕を案内したのは不可解だが。この際、それは置いておこう。僕達浮いてないか？」

ラサティが呆れたように聞いてくる。

「そうか？周りから見れば俺らもカップルだぞ？」

「なっ?!」

ラサティの顔が真っ赤になる。まるでトマトだと思い。笑う。

「くっ!?!からかっているな？そうなんだな!?!」

「さて、どうだろうな？」

笑って、ラサティから距離を置く。すると、俺がいた位置に拳が

振り下ろされた。

「危ない、危ない」

「こら、逃げるな！！！」

「つたく、冗談なのに何でムキになるんだか」

しかし、沸点が低すぎないか？

「もう少しお淑やかになれば満点なんだが」

「大きなお世話だ！！」

そのまま、向かってくる。取り敢えず宥めるか。

「俺が悪かったから、危なっかしい拳を引っ込めろ。周りが見てるから」

そついうと、ラサティが固まる。

「チツ、命拾いしたな」

面倒だし、機嫌が悪くなりそうだから突っ込まんぞ？

「んじゃ、甘味処でも周るか」

「お前の奢りだからな」

まあ、そうだよな。その後、不思議な事に行く場所、行く場所の

甘味が全て売り切れていた。何でも褐色の美女が満面の笑みで平らげて行ったらしい。その時、連れの少年と青年が物凄く謝っていたとかどうか。

「甘味……………」

「分かった、分かった。帰ったらタップリ食わせてやるから、その拳を下ろせ」

俺の言葉に渋々と拳を下ろす。そういえば、なんで俺達は龍宮の神社に来てるんだ？

「しかも、なんか変なのやってるし」

何々。『まほら武道会』アレか？『天一武道会』を真似てるのか？

「それじゃ、行ってくる」

「ん？出るのか」

ラサティが頷く。まあ、出るなら出るで構わないが。

「怪我するなよ？」

「なっ！？お前、それを僕に言うのか？」

「もしもって事があるだろ？それとちゃんと手加減しろよ？」

一般人が相手なら大丈夫だろうが此処麻帆良では哀しいかな皆さ

ん、身体能力が一般人以上なんだよね。

「安心しろ。骨折程度で済ませる」

「それが駄目なんだが」

苦笑する。

「あれ？アマトさん」

振り向くとリイリアとノーマがいた。

「姉さんと来たんですか？」

「ああ、さっき別れた所だ」

「なあ、アマト。これから何が始まるんだ？」

物凄くキラキラした瞳で見つめるノーマ。取り敢えずノーマの頭を撫でながら。

「楽しい事だ。んじゃ、俺達は観客席に行くぞ」

「うむ！！」

「姉さん、大丈夫かな」

三人で観客席に向かう。人混みに苦戦しながら前の方に着いた。

「おゝ、結構参加者がいるんだな」

ていうか、真名に古、長瀬の様な奴等はいいいとして、ネギや小太郎も出てるんだな。

「姉さんがいます」

「おゝ、気合入ってるな」

他に面白いのはエヴァと高畑さんが同じブロックか。他に龍宮と古、長瀬と小太郎か。

「おい、アマト。アレ見る。アレ」

「ん？つて爺さん！？」

なんで爺さんが武道会に出てるんだ？

「おや？天が来ている様だな」

まあ、別に構わんか。

「天斗さゝん」

振り向くと、絶対に戦いに向いていないフリフリが付いた衣装（

まあ、ワシも和服で出ているから人の事は言えないが）の月詠が立っていた。

「ほう、お嬢ちゃんも参加したのか？」

「はい」。小太郎はんが出るならウチも出ない訳にもいきませんし」

そういつて、頬を染める月詠。ふむ、この子も相変わらずの様じゃな。すると、少し月詠の顔が曇る。

「でも、少し残念です。こない、斬り甲斐がありそうな人が仰山おるのに、刃物禁止なんて、生殺しもいい所です」

そういつて、両手に戻っている長短の木刀をブンブン振る。外見は可愛らしい仕草なのだが、言動が危なっかしい。

「まあ、程々に楽しめば好かろう。それに」

言葉を切る。

「それに？」

「これを一つの修行と見てはどうか？」

「修行………ですか？」

頷く。

「気に入った者を斬るのは簡単じゃろう？しかし、それでは後々の



楽しみが無くなってしまっぞ?」

「後の楽しみ……ですか?」

「例えば、今はそこまで気にならない相手でも修行を詰めば、興味をそその様な相手になるかもしれん。これはそれを見定める眼力と相手を壊さない様に手加減する力加減、そして忍耐力を付ける良い修行だと思うが?」

そういつと、月詠は腕を組んで唸る。そして笑顔を浮かべると。

「確かにそうですね。そう考えるとこの大会も中々楽しくなります」

言葉と共に開始の合図が鳴る。

「ではでは、先ずは雑魚狩りです」

言葉と共に月詠の姿が消える。すると、後ろで選手の悲鳴が聞こえる。どうやら、本当にワシ以外をやるつもりの様だ。

「まあ、楽でいいかの」

「行くぜ!!!!!!必殺・竜 旋風」

「遅い!!!!!!」

何やら、目の前の男が独楽の様に回ろうとしたが、ガラ空きの脇腹に蹴りを入れる。やはり身体が訛っている。二年も修行を怠ったのは不味かったな。

「少しは鍛えておくべきだったな」

言葉と共に向かってくる奴を一蹴する。

「まあ、これが終わったらアマトと組み手をやるか」

アイツ相手なら本気出しても問題ないからな。

「っ?!」

「どうしたんですか?アマトさん」

「いや、なんか寒気がして」

気のせいだよな?そう思いながらも周りを見ると、気になる人影を見付けた。

「ん？」

黒い洋服に身を包み、何処か浮世離れた女性。ゼニスブルーの長髪を奇妙な布で結っているのが印象的だ。その隣には同じ年くらいの青年が立っていた。キャメルブラウンの短髪に笑顔を浮かべる活発そうな男だ。

「どうかしたのか？」

「いや、あの二人が気になってな。ほら、あそここのたこ焼き食ってる二人」

「あれ？あれって」

リイリアが不思議そうに二人に近づく。俺とノーマは目を合わせ、リイリアに付いて行く。

「結構、美味しいなコレ」

「うん」

それにしても、この大会を見てると昔を思い出すな。

「そつえば、リイリア達元気かな？」

「？」

レンが首を傾げる。

「いや、場所は違うけどさ。リイリアとラサティに会ったのもこんな大会だったじゃん。ほら、路銀を稼ぐのと俺の特訓に大会に出たろ？」

聞くと、レンがやっと思い出したのか、頷く。

「やっぱりレンだ」

声に振り向くと、そこにいたのは。

「レンー！！！！！！！！！！」

笑顔を浮かべ、レンにダイブするリイリアだった。レンが驚きながら抱きかかえる。

「リイリア？なんで此处に？」

「久しぶり」

俺が聞いても、リイリアはレン抱きつくのに夢中で答えてくれない。

「ほう、リイリアの知り合いに『七煌宝樹』がいたとは驚きだ」

その言葉に振り向く。そこには一人の少女が立っていた。

「俺達の事を知っているのか？」

「まあな。お前達の捕縛に駆り出されなかったが、お前達の情報はある程度把握している」

レンの捕縛！？もしかコイツはエディルガーデンの刺客！？そう思った瞬間。

「ギャンツ?!」

ゴツン、とその子の頭に拳骨が落ちた。あの速度と角度。ありや、御頭の拳骨並みに痛いだろうな。そういえば、御頭達は元気かな？アレから連絡とか取ってないな。

「~~~~~~~~っ!?アマト!!!!!!人が久しぶりに悪役モードになっているのにソレはないだろう!?!」

「煩い。なんか知らんが感動の再会を邪魔するのは駄目だ」

まるで妹の悪い事を叱る兄の様に少女を叱るのは俺と同年くらいの青年だ。

「ノーマが変な事をして悪いな。コイツは見た目通りの子供だから許してやってくれ」

「誰が子供か!!!!!!私は立派なレディだ~~~~~!!!!!!」

後ろのノーマという子が叫ぶ。ああ、子供だ。

『皆様お疲れ様です。本選出場者16名が決定しました。本選は明朝8時より、龍宮神社特別会場にて』

アナウンスが響く。どうやら、予選が終わったようだ。ん？此処にリイリアがいるんなら。

「ラサティもいるのか？」

「姉さんならアソコだよ」

そういつて、リイリアが指さした方向には確かにラサティがいた。

「リイリア。そろそろその二人を紹介してくれないか？」

「あ、うん」

リイリアがレンから離れる。それにしても、ノーマという子はエディルガーデンの一員なのか？だとしたら、このアマトつて奴もエディルガーデンの人間。

「だ〜か〜ら〜。この猫の様な持ち方は止めろ〜！！！！！」

「相手に警戒させる様な事言つた罰だ。甘んじて受ける」

無いな。うん、根拠はないけど、この二人がエディルガーデンの人間とは思えない。そんな事を思っていると、少女の腕に抱かれていた猫が楽しそうに鳴く。

『では、大会委員会の厳正な抽選の結果決定した。トーナメント表を發表します。こちらです!!!!!!』

そういうと、司会者の後ろにトーナメント表が現れる。

第一試合 月詠VS犬上 小太郎

第二試合 佐倉 愛衣VSクウネル・サンダース

第三試合 長瀬 楓VS古菲

第四試合 龍宮 真名VSラサティ・ティグレス

第五試合 田中VS高音・D・グッドマン

第六試合 タカミチ・T・高畑VSネギ・スプリングフィールド

第七試合 神楽坂 明日菜VS山吹 天斗

第八試合 桜咲 刹那VSエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

「ほう、これはまた面白い組み合わせじゃな」

何やら後ろでは色々な悲鳴が聞こえる。さて、どうなるかな？



## Re・No:46「麻帆良祭開始」(後書き)

どうも、フィロです。今回は武道大会の予選と今作の主人公と原作主人公の出会いです。クーは原作最後よりも強く設定してあります。今だ未熟だけどレンの力をちゃんと使いこなしている感じです。そして対戦表の発表。これは単にこの組み合わせを見たかっただけです。まあ、変更してない場所もありますけど。では次回を御期待下さい。

Re・No：47「再会と修行と力試し」

「いやゝ、やっぱり天さんの料理は美味しいねゝ」

「本当アル！！特にこの炒飯の絶妙な味付けがなんとも」

「いやいや、この焼き魚も中々の物でゴザル」

「まあ、何時もより大目に作っているし。何人かは中夜祭でいなくなるど踏んでいたよ。けどさ、なんでお前らが家で飯食っているんだ？」

そして何で自然に居座れる？すると、俺の問いに二人は。

「いやゝ、実は真名に誘われてつい来てしまったでゴザル」

「右に同じアル」

「そうか。真名のせいか。それは仕方ないな」

そういつて、俺は真名の前に置いてあるおかずを取り上げる。

「ああっ？！私の春巻き！！！！」

「連れて来るなら事前に連絡しろ。コレは連絡を怠った罰だ」

「むゝゝゝゝ」

そんな事をしていると、呼び鈴が鳴った。

「誰だ。こんな時間に？」

一瞬、迷ったが。皿をテーブルに置いて玄関に向かう。

「はい。どなたですか？」

扉を開けると、そこには三人の男女が立っていた。

「夜分に申し訳ありません。私達はアークエイルという者です」

アークエイル。確か、エディルレイドの保護を目的とした組織だったな。

「何か御用ですか？」

「そんなに警戒なさらなくていいですよ。ちょっと聞きたい事があるだけですから」

「聞きたい事？」

「アマト。どうした？」

ノーマがやってきた。

「あれ、君は？」

「っ！？」

ノーマが驚いている。相手もノーマの事を知っているようだ。

「それで、聞きたい事って？」

「え？ええ、貴方の家にエディルレイドがいますよね？」

「ああ、二人いるよ」

「おい、アマト！！！！」

腰の辺りを殴られる。

「私達の事を簡単にバラすな！！！！唯でさえ、私は希少属性のエディルレイドだし。レンは『七煌宝樹』だぞ！？もつと注意しろ！！！！！！」

「今の話は本当ですか？！此处にレンさんがいるんですか！？」

小さい子が異常に食い付く。ノーマ、注意しろと言ったのに。自分からバラスとは。

「どうしたんだ？ってシスカ？！」

クーが顔だけコツチを見て、驚いた声を出す。そしてその声に三人が驚く。

「はあ」

また、面倒な事になったな。

「成る程。クーとレン、ラサティとリイリアはそっちの三人と知り合っただったのか」

「はい。ラサティさん達とは途中で別れたんですけど、クーさん達は二年前に消息を絶ってからずっと探していたんです」

あの後、家に土足で上がったシスカさんにアマトさんが久しぶりに怒って、床に正座させて状況説明です。正座に慣れてないシスカさんはそろそろ足が限界みたいです。

「まあ、事情は分かった。んで、次の疑問だが」

「んにゃ?! だからこの扱いは止めろ!!!」

何時もの様に猫の様に扱われるノーマ。

「その二人とノーマはどういう関係？」

「ええつと」

ローウェンさんが頬を掻く。言おうか、迷っているみたい。すると、隣にいるキーアさんがため息を吐いて。

「その子はエディルガーデンの一員。それで二年前、私達と戦ったのよ」

そうだった。

「本当。のようだな」

「……………」

アマトさんが確認するけど。ノーマさんは黙ったまま。アマトさんはそんなノーマさんを黙って見ている。

「まあ、その時の事を知りたいとは思ってないが、成る程。アンタ等とノーマは元敵同士か」

「その子がエディルガーデンと手を切ってないなら今も敵だけだね」

「キアッ！！！」

ローウェンさんが諫めるけど、キアさんは気にしてない。

「それで？三人はレンとクーを探していたみたいだが」

「はい。二人の生存が確認出来たので満足です」

シスカさんが笑う。すると。

「あゝ。拙者達にはサツパリ分らないのでゴザルが」

「説明が欲しいアル！！！」

カエデさんとクーフェイさんが声を上げる。すると、アマトさん

が驚いた顔を作り。

「まだ居たのか？」

「ぬおっ?! ナチュラルに忘れられていたでゴザルっ?!」

「酷いアル。それでも存在感濃い方アル!!!!!!」

クーフエイさん。多分、それは関係ないです。

「お前らには後で適当にネギ辺りが説明するから待ってろ」

「適当でゴザルか?!」

「酷いアル!!!! 差別アル!!!!」

「聞こえんな」

二人のブーイングに耳を塞いで無視するアマトさん。

「まあまあ、二人とも。説明位ならウチがしたるから我慢してや。天はんもそれでええやろ？」

チグサさんはそういうと、二人と一緒に居間を出て行きました。

「まあ、過去の事をどうこう言っつもりはないけど。もう少し仲良く出来ないか？」

「僕もそう思うんですけど」

アマトさんとローウェンさんがそう言うも、二人は。

「私この子嫌いだし」

「私もコイツが嫌いだ」

等と子供の様な事を言う。そういつと、アマトさんがため息を吐く。

「そうか。なら食後のデザートに作ったクレープはリイリアに食べてもらおうしよう」

そういつと、ノーマの表情が変わる。

「うあっ?!ズルいぞアマト!!!!!!」

そうして、アマトさんに掴みかかるノーマを驚いた表情で見つめるキーアさんとローウェンさん。

「どうかしたんですか?」

「えっと、僕達と会った時は物凄く淡泊な子だったからギャップが」

「そうなんですか?私と会った時はこんな感じでしたよ」

そういつと、キーアさんが何か考え込む。

「ねえ、アマトだっけ?」

「ん?」



キーアさんが真剣な表情で聞いてくる。

「ノーマ、ううん。エディルレイドの事、道具って考えている？」

聞くと、アマトさんが嫌そうに表情を変える。

「俺はエディルレイドの事を人だと思ってる。だって、俺達と違う能力が備わっているだけで。他は変わらないからな」

そういつて、ノーマの頭を撫でる。けどノーマは何時もみたいに『子供扱いするな』と言って暴れない。

「だって、そうだろ？エディルレイドだって俺達と同じように泣いたり、笑ったり、怒ったり出来るんだから。だから俺はエディルレイドの事を道具だとは思わない」

静かだけど強い口調。それを聞くと、キーアさんは笑って。

「ふうん、そつか。ねえ、ノーマ」

「なんだ？」

腕を組んで聞き返すけど。まだ、撫でられているから少し面白い。

「良い同契者プレジャーじゃない。大切にしなよ？」

「ふん、言われなくても分かっている」

そういつて、そつぽを向く。二人とも口調は変わらないけど、何

処が暖かい感じがする会話。

「それで？アンタ等はこれからどうする？麻帆良祭でも見ていくのか？」

「いやあゝ、当初はその予定だったんですけど。実は所持金の殆どをキーンアに食い潰されまして」

「だってえゝ、此処のご飯美味しかったんだもん」

そういつて、快活に笑うキーンアさん。凄く想像しやすいな。涙目で財布の中身を見ているシスカさんとその横で店員に頭を下げているローウェンさんを尻目に運ばれてくる料理を次々と平らげているキーンアさん。

「それで……！アマトさん。折り入って頼みがあります……！！！！！！！！！！」

「何となく想像が付くけど、言ってみる？」

物凄く疲れた顔で聞くアマトさん。

「私達をこの家に住まわせて下さい……！！！！！！！！」

まあ、さっき所持金が無いとか言っていましたもんね。

「条件があるけどいいか？」

「条件………ですか？」

アマトさんが頷く。そしてその条件とは。

「まさか、条件が僕とキーアとの戦いなんてね」

『聞いた時は驚いたけど。まあ、いいんじゃない？朝食食べたアマトの料理は結構美味しかったし』

「そこが判断基準なんだ。けどまあ、泊めてもらって悪いけど。手加減はしないよ？」

「手加減したら訓練にならないだろ？」

『ふっふっふ。先の戦いで負けた屈辱。今返してやるわあゝ！！！！！！』

「勝手に私の別荘を使うとか言い始めたのはこれが原因か」

エヴァが眠そうな顔をしている。まあ、朝早く起こされれば仕方ないか。

「まあ、違うタイプのエディルレイドとの戦闘が見れるなら、悪くはないか。坊やたちも見ていろ！！！！勉強になるぞ」

そういえば、此処にはクー、レン、シスカ、ラサティ、リイリア、

木乃香、明日菜、小太郎、刹那、ネギ、月詠がいたな。まあ、こいつ等なら問題ないだろ。

「行くよ」

「応っ！！」

返事と共に地面を滑るように駆ける。

「フッ！……！」

「ハアッ！……！」

ノーマの翼とキアの刃が激突する。その反動を利用して空に舞い上がる。

「力は互角………じゃないな。なら翻弄してキツイ一撃だな」

『ああ、アイツ等に私達の力を見せてやる』

とはいっても、キアの同契状態<sup>リアクト</sup>の形状から察するに近距離型。此方は空にいられるアドバンテージがあるも、さてどう来るか。

「ま、動きながら考えていくか」

声と共に翼から羽を飛ばす。

「そんな直線的な攻撃じゃ効かないよ！……！」

両手の刃とそこから伸びている鎖鎌が羽を全て落とす。

「流石に戦い慣れているな」

『ああ、悔しいが。戦闘経験では私達以上だ』

なら策で戦うしかないか。まあ、何時も通りだな。

「ハアッ！！！！！」

ローウェンが腕を振り、鎖鎌を飛ばしてくる。予想外だが、ローウェンは近く中距離タイプの様だ。

『撃ち落とすか？』

「いや、避ける」

言葉と共に右に、左に動いて攻撃を避ける。そして避けるだけでなく、羽を撃ち出す。

「くっ！？」

羽を迎撃する為に鎖鎌を戻すローウェン。その間に接近する。

「近づかせないよっ！！！」

鎖鎌が飛んでくる。羽は既に撃ち落とされている。流石にやるけど。

「こっちじゃないぜ？それはアッチだ」

指を動かし、鎖鎌に付けておいた糸を操作して、近くの支柱にぶつける。

『ちよつとローウェン！！！！！！！何やってんの！！！！』

「ええっ！？今のは僕じゃないよ！！！！！！」

口論しながらも俺の攻撃を捌いていく。その間に両腕に付けた糸を操作してガードを上げさせる。

「えっ！？」

「フッ！！！！」

ドンッ、という音と共にローウェンの腹部を攻撃する。

「グッ！？」

ローウェンが吹き飛ぶ。

『吾<sup>あ</sup>を軋<sup>きし</sup>ますな 知らしめすとだり 千千<sup>ちぢ</sup>に物こそ狂おしけれ』

これは詞！？見ると、吹き飛びながら謳っているローウェンがいた。

「チッ！？」

逃げようと踏み出した瞬間。横から飛んできた鎖鎌が目映る。

「ヤバッ！？」

何とか全身を縛られずに済んだ。

「治す最手 吾にこけ入たり 玉の緒よ絶えねば絶えぬ」

『 ちよろずか け 千万華に化して ましす 汝に澄まん 』

一步遅い上に、コッチは片手。

ヴァイス リット  
未羅の斬!!!!!!!!!!!!

ルカ・カタルシス  
光芒淨穢！！！！！！！！！！

なら狙う場所は一つ。

轟音と共に二人が戦っていた場所が砂塵に包まれる。

「……なんかよく分かんなかったんだけど」

「なんや、明日菜姉ちゃん分かんかったんか？」

小太郎君がため息を吐く。

「なによ……いきなりローウェンとかいう人の鎖が変な所に行

ったり、何時の間にか天さんが鎖に捕まっていたりで最後は大爆発。途中からよく分かんなかったのよ！！！悪かったわね！！！！」

「いや、誰も悪いとは言ってませんよ。まずは落ち着いて下さい」

なんとかアスナさんを落ち着かせる。

「じゃあ、簡単に説明しますね？」

アスナさんが頷く。

「先ず最初に二人が激突しましたよね？多分、その時アマトさんはローウェンさんの身体に自分の糸を絡ませたんです。その後、上空に舞い上がって羽を撃ちだした。ここまではいいですね？」

「質問！！！！」

アスナさんが手を上げる。

「糸を付けたんなら、なんで直ぐに縛りあげなかったの？」

「それは多分、ローウェンさんを分析したかったんだと思います」

「分析？」

首を傾げるアスナさん。

「ただ、縛り上げるんは簡単ですけど。そうやって、縛られて油断させ、キツキツイー撃を当てられたら逆転されてまうやる？」



ツクヨミさんが微笑みながら答える。

「うーん、確かにそうね」

「だからアマトさんは相手の出方を見る為に空中に上がって、ローウェンさんとその周りを視界に入れていたんです。どんな攻撃を仕掛けて来るか。またどんな攻撃でも対処できるように」

「成る程」

「そして大体、相手を分析し終えて攻めに転じたんです。ただ、何もなしに突っ込むと鎖に迎撃されるかもしれません。ですから先に羽を撃ちだして。それを迎撃させている間にアマトさんが近づきます。それに気付いていたローウェンさんは鎖で迎撃しますが、既に鎖には糸が付いていて、それを操作して鎖の攻撃を避けたんです。そしてアマトさんは攻撃の応酬をしながらローウェンさんの腕に糸を絡めてガードを上げさせ、一撃をぶつけました。けど、その瞬間にアマトさんに気付かれない様に移動させていた鎖でアマトさんを拘束したんです」

そして二人の攻撃。若干、アマトさんが遅かったように見えたのでもしかしたら。と思っていると砂塵が消え、人影が見え始める。

「ふうー、ギリギリだったな」

『中々スリルがあつたが、二度目は御免だぞ?』

驚いた。それが素直な感想だ。あの状況、アマト君はどうやったってダメージを受ける筈だ。なのにダメージを最小限に抑えている。

「右腕がやられたな」

『大丈夫か?』

「心配すんな肩が外れただけで問題ないさ」

見ると、確かにアマト君の右手がダラリと垂れている。

「どうやって、避けたか聞いてもいいかい?」

「ん?大体予想付いてるだろ?」

意地の悪い笑みを浮かべて聞いてくる。

「ノーマちゃんの詞を利用しての緊急回避。かな?」

「正解。両腕を使えない、更に鎖に捕まってちゃんとした姿勢で撃てないせいで。こんな状態になったけど。なんとか気絶は免れたよ」

あの一瞬で相殺できないと悟り、直ぐに自分の攻撃を回避に使う。状況判断が凄いいし、頭の回転も速い。それはいいんだけど、さつきから先輩の視線が怖い。確かにアマト君とノーマちゃんは結構息が合っている。仲間になってくれるならアークエイルにとって大きなプラスだ。

『アマト。そろそろ同契出来なくなる』

「了解。一発位当てるか」

そういつて、彼が腕を振り、羽を飛ばす。

「だから、直線的な攻撃は当たらないよ!!!」

横に飛んで避ける。だが、羽はまるで意思を持つかのように僕達に向かつてくる。

『誘導！？あの子こんな事出来るの?!』

「取り敢えず、迎撃を!!!」

声と共に鎖鎌が動く。鎖鎌が羽を迎撃する。

「余所見はいけないな」

「っ?!」

横からの声に振り向くと、アマト君が左手を振りかぶっていた。  
あの距離をこんな短時間で!?

「ハアッ!!!!!!」

「グウツ!?!」

衝撃を受け、吹き飛ぶ。

「ふう、ギリギリだな」

そういつて、同契を解く。横に立ったノーマは不機嫌の様だ。

「まったく、実戦経験が皆無に近いのに、ここまでやれたんだから及第点だろう？」

「むう」

ノーマが唸る。その後、不機嫌なノーマを説得し、ローウェンと一緒に木乃香の治療を受けた後。ネギと小太郎、刹那と明日菜、クーとラサティの組手を眺める。因みに古と長瀬は千草さんが暗示を掛け、魔法関係の事は夢だと思わせたらしい。本人曰く二人とも、単純であっさり引っ掛かって驚いたらしい。

「そういえば、第一試合は小太郎と月詠だったな」

「はい。今から楽しみです」

にこやかな笑顔で答える月詠。多分、この子の性格から手加減なんて全くしないだろう。

「小太郎。少しいいか？」

「なんや？」

後頭部に両手を当てながらやってくる。

「今日の試合。月詠が相手だけど手加減するのか？」

「当たり前やん。女は殴らん主義や」

「じゃあ、蹴るのか？」

「ウチを足蹴にする小太郎はん。ああん？想像するだけで興奮します？」

取り敢えず横でなにやら、トリップしている月詠は放っておく。

「蹴るのもなしや。俺は女に暴力は振るわん」

強い意志で答える小太郎。まあ、個人主義の問題だから口出しはしないが。

「よく言ったわね。小太郎君！！！！ネギも見習いなさい！！！！」

「こらそこ、純情なネギに変な事吹き込まない」

やんわりと宥める。

「ううん、でもお前の考えだと相手を侮辱する事になるぞ？」

「なんでよ？女の子に優しくするのは当然でしょ？」

何言ってるんだコイツ的な視線で言われる。ああ、こつ言つ事も教えないといけないのか。

「じゃあ、質問だ。小太郎、例えばお前が祖父さんに勝負を申し込むとする」

「うんうん」

素直に頷く小太郎。こついうのは子供っぽいな。

「けど、祖父さんは『お前は子供だから本気を出す訳にはいかない』って言つて戦おうとしない。そうなたらお前はどんな気持ちだ？」

「ふざけんな。って叫ぶわ」

少し想像したのだろう。語気が強い。

「明日菜。お前も祖父さんと正々堂々と戦う時に『女の子だから戦えない』って言われたらどうする？」

「そりゃ、怒るわよ。でも、今の話がなんか関係あるの？」

「大アリだアホ。つまりは小太郎と明日菜が感じた事を対戦相手に感じさせるんだぞ？」

そこまで言つと、二人がようやく気付いた様だ。

「それにだ。幾ら女性が相手だからといってお前より弱いとは限らないだろう？」

「むう」

「そんな相手に出会った時、お前は全力を出し切れずに負けるんだぞ？悔しいと思わないか？」

腕を組んで唸る小太郎。

「まあ、お前に個人主義を変えろとは言わない。けど、もう少し範囲を緩くしたらどうだ？」

「緩くする？」

「自分より弱い奴には手加減する。けど、自分と同等、もしくは強い奴には全力で戦う。後の事なんて気にするな。それに怪我させても大丈夫だ。戦場に立つ人間は怪我を負う事を承知で立つからな」

「確かに。言われてみりゃ、そうやな」

そういつて、笑う。

「それに月詠相手やったら全力でやらんとアカンし」

「いやん。激しいのはウチ苦手なんです？スルなら優しく焦らしながら。お願いします？」

うつとりしながら答える月詠。もう放置でいいか。

「なあ、兄ちゃん。俺たまに月詠の事が分からなくなるんやけど」

「気にするな。俺はしょっちゅうだ」

苦笑する。まあ、これで二人が全力を出せる試合になれるだろう。折角の戦いなんだし、全力出せずにリタイヤなんて嫌すぎるだろう。

「さて、そろそろ時間かな？」

「そやな。んじゃ、外に出よか」

その後、寝ているノーマを起こして皆で外に出る。シスカ、ローウェン、キアは別のイベントに参加しているらしく、一旦別れる事になった。確か『大食い選手権』だったか？まあ、問題ないだろう。

「あれ？天斗爺ちゃんは？」

「先に神社に言ってる筈。向こうで合流する事になってるから問題ないだろう」

さて、第一試合はどうなるかな？



Re・No:47「再会と修行と力試し」（後書き）

どうも、遅くなってすいません。フィロです。今回はローウェン達と合流&力試し。ローウェン&キーマ対天&ノーマ戦。最近、バトルを書いてなかったから劣化してるかも。次回は『麻帆良武道会』小太郎対月詠です。丸々一話を試合につき込んでみようかな、と思っています。お楽しみに

Re・No：48「狗神と神鳴流そして謎の戦士クウネル・サンダース」

『只今よりまほら武道会第一回戦に入らせて頂きます』

アナウンスの声と共に舞台に月詠と小太郎が上がる。月詠はとても激しい運動に向いてない様な白のゴスロリに身を包み。太刀と小太刀の木刀を携えている。対して小太郎は月詠とは対照的に黒の動きやすい服に素手だ。一見、月詠が有利かと思われるも、どうなるか分からん。

「まあ、そんな事はどうでもいい。二人が楽しめればいいし。しかし意外だな。お前がこんな物に興味があるなんて」

そういつて、横を見る。そこには長谷川が仏頂面で立っていた。

「チケットを捨てるのも勿体ないですしね。それに暇でしたし」

「暇潰しなら他に幾らでもあるだろうに」

それにチケットだってクラスの奴に譲ればよかったのに。素直じゃないな。

「なんですか。そのム力つく笑顔」

「別に」

するとアナウンスが流れる。どうやら、始まるようだ。

「ああん？小太郎はんと戦えるなんて初めてですわ」

「そついや、月詠と戦うんは初めてやったな。手加減はせえへんで？」

『それでは第一試合Fight!!!!!!』

アナウンスが流れると同時に瞬動で近づく。とはいえ、やっぱり女を傷つけるのは気が引けるわ。

「っ!？」

「フツ!!!!」

右腕を振り上げる。瞬間、速過ぎる動きに遅れて風が下から噴きあがり、月詠を上空に吹き飛ばす。

「ひゃあっ!？」

悲鳴と共に月詠は空中で二回回転し、地面と向き合う形で静止する。

「やっぱり小太郎はんは優しいです」

瞬間、月詠が消える。虚空瞬動!？気付いた瞬間、目の前に月詠

が現れる。

「優しすぎてウチ。惚れ直してしまいます」

月詠が舞うように回転する。瞬間、身体に衝撃が走る。

「グッ！！！」

なんとか後ろに跳んで威力は落とした。

「あら？直撃やと思っとったけど」

不思議そうな顔をする月詠。

「ハン！！！！あまり俺を舐めるなや！！！！」

叫びと共に近づき、掌底を放つ。

「ほっ！！」

「ハッ！！！！」

掌底を弾いた月詠に蹴りを放つ。

「わっ！？」

驚きながら、上体を逸らして避ける月詠。更に掌底を弾いたのは逆の木刀が真横から迫っている。

「こんなもん。避けるまでも無いわ！！！！」

迫つて来る木刀を下から弾く。そして右手に『**狗神**』を収束させる。

「狗音爆碎拳！！！！！！！！」

月詠の腹に突きを放つ。轟音と共に月詠は場外に吹き飛び、水飛沫を上げる。

「……あっ！！やり過ぎた」

アチャ。月詠の奴大丈夫か？場外の方に目を向ける。

「うう。痣が出来てしまいます」

腹を擦っている月詠発見。外傷無し。頭は元からやから何時も通りやな。

「次はウチの番です」

「これは凄い！！！！一見、か弱い乙女の月詠選手と予選で驚きの戦果を挙げた小太郎選手。先程、小太郎選手渾身の一撃を受け吹き飛んだ月詠選手の反撃です。先程の一撃を物ともしない動きに小太郎選手は防戦一方だああああ！！！！！！！！！！」

「なっ、な……………なんだこりゃあ~~~~~!!!!!!……あ  
りえないだろ。なんだコレ!!!!!!!!!!!!!!」

「そう言われてもな。現実を受け止める、としか言えんぞ?」

長谷川の絶叫に苦笑しながら答える。アナウンスの解説通り。舞台では月詠の猛攻に小太郎は防戦しか出来ない。

「まあ、ちゃんと避けてるみたいだから、問題ないか」

決定打は弾いたり、避けたりしているので問題はなさそうだ。まあ、防戦には変わりないけど。

「というかだな。長谷川。お前もう少し楽しめ。中々日常生活では見れない光景だぞ? 物理法則捻じ曲げる試合なんて」

笑いながら言う。お? 小太郎が動いたな。

やっぱ、月詠は強い。

「ま、そっちの方が燃えるんやけどな!!!!!!!!!!」

上段から振り下ろされる木刀に対して前に踏み込む。

「む？」

「ハッ！！！」

木刀が肩にぶつかるが、威力は無い。後ろに引こうとする月詠の服を掴み、引き寄せる。

「ラアッ！！！！」

バランスの崩れた月詠に掌底を叩きこむ。

「カフッ！？」

「オラアッ！！！！！！」

更に月詠の腹に蹴りを入れて、吹き飛ばす。

「狗神！！！！」

追い打ちの『狗神』が空中の月詠を捕える。

「ざんく〜せん」

前に月詠の斬撃が『狗神』を吹き飛ばす。

「うおっ！？」

更に複数の斬撃が襲いかかる。ソレをギリギリで避ける。

「ざんがんけ〜ん」

真上から声が聞こえ、瞬動で離れる。さっきまで居た場所が弾ける。

「今のはちよつとヤバかったわ」

冷や汗を拭う。

「ふふふふふふふふ〜〜〜」

月詠が笑いながら立っている。ヤバいわ。なんや見るだけで怖気が。

「ああん？ やつぱり小太郎はんと戦うんは最高です〜！！！！」

フルフルと身体を震わせる月詠。

『さあ、かなりハイレベルな戦いになって来ましたが、そろそろ制限時間の十五分を越えてしまします』

そろそろ時間やな。瞬動で近づく。

「行くで！！！！月詠！！！！」

月詠が踏み込む。瞬間、分身でかく乱する。

「む？」

月詠が一瞬躊躇するも、右足を軸に回転する。



「百烈桜華斬！！！！！」

円を描く剣閃が分身を一掃する。そして月詠は真上に俺を見て。

「これで終わりです」

そういつて笑う。確かに。

「これで終わりや」

残念。本物の俺は目の前や。

「ふへっ？」

「犬上流・狼牙双掌打！！！！！」

間抜け面の月詠に思いつきりぶちかます。

「あゝれ」

ドップラー効果を出しながら場外に吹き飛ぶ月詠。そして試合終了の合図が響く。

「ギリギリやな」

そういつて、笑い拳を突き上げる。

『勝者！……！犬上小太郎選手！……！！』

アナウンスの声と共に観客が沸く。

「ほう、小太郎が勝ったか。いやはや、あの少年も中々強くなったな」

やはり筋がいい。コレは他の試合も楽しみだ。

『では、第二回戦。佐倉愛衣選手、クウネル・サンダース選手入場してください』

「おや？私の番ですか」

さて、この男はどんな試合を見せてくれるかの？

「お嬢さん。呼ばれておるよ？」

「ひゃ…………ひゃい！？」

そういつて、慌ててクウネルという者の後を追う。

目の前の佐倉さんがアーティファクトを出す。箒とは面白いアーティファクトですね。ですが、やはり表情が硬い。少し緊張気味、といった所ですか。

「佐倉さん、もう少しリラックスした方がいいですよ？心配せずとも、女性に全力は出しませんから」

そういつて、右手を掲げる。

「私はハンデとして右手のみしか使いません」

『では、第二回戦Fight!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

始まり合図と共に、佐倉さんが『魔法の矢』を三発放つ。

「その歳で無詠唱ですか。中々の腕前ですね。しかし」

右手の手刀で後ろにいる佐倉さんの首を叩き、昏倒させる。

「私にはまだ届きませんよ」

「え？なに？今の見えなかったんだけど」

「恐らく瞬動ですね。しかし速い」

刹那嬢さんが言うようにクウネルという男が使ったのは間違いなく瞬動。しかし、あそこまで自然に、かつ速く動けるとは。

「実践慣れしておるの」

この大会に参加している者は全て人間離れしている物ばかり。さてさてどんな結末になるやら。

Re・No:48「**狗神と神鳴流**そして謎の戦士クウネル・サンダース」(後書

どうも、フィロです。今回は月詠対小太郎とオマケ程度の佐倉対クウネルです。もう少し佐倉を粘らせた方が良かったかな？微妙な所です。次回は古対楓とラサティ対真名です。お楽しみに

Re・No:49「楓の実力 古の秘策」

そろそろ第三試合が始まりそうだ。

「おゝ、いたいた」

声に振り向くとクーとレンがやってきた。

「なんだ。デートはもういいのか？」

聞くと、クーが照れる。レンも少し頬を染める。

「いや、ほら。昨日で色々見たからさ、後は最終日にしようかなって。後、これからラサティの試合だろ？流石に見逃すのも面白くないからさ」

そういつて、笑う。

「ラサティの試合はまだ先だぞ？」

「うえっ?!マジ!？」

クーのリアクションに笑ってしまう。

「あ、いました。おゝい!!!!!!」

声の方を見ると、ローウェンと満足顔なキア。喜びの笑みを浮かべているシス力がいた。というか、シス力。その笑みは気持ち悪いぞ。変にふやけてるし。

「嫌に速いな。初戦敗退……………にしてはシスカが凄いけど」

「実はですね。キーアがぶっちぎりの優勝なんです！！！！！！そしてほら、見てくださいよ。優勝賞金の500万円。小切手なのが残念ですけど。GETです！！！！！！！！」

ハイテンションなシスは置いて。俺達はローウェンに話しかける。

「にしても、速過ぎないか？確か大食い大会は武道大会と開催時間同じだろ？」

聞くと、ローウェンは苦笑する。

「それが、初戦でキーアがお代わりし過ぎて対戦相手の分どころか大会の備蓄分、全部食べてしまつて、続行が不可能になつたんです」

「成る程。ソレを見た対戦相手が次々と棄権して」

「不戦勝で優勝って事か？」

「はい。そうなんです。しかも、キーアなんて」

そういつて、皆でキーアを見ると、近くの屋台でたこ焼きを大量に買っていた。

「まだ足りないのか？ていうか備蓄分て何人分あったんだ？」

聞くと、ローウェンは指を折って何か数え。

「多分、五十人前だと思います。キーマはそれを食べた後『前菜にしては満足出来たわ』って言っていましたし」

シスカ、ローウェン以外絶句。いや、待て。どうやって五十人前があんな細い体に入るんだ？確かにノーマとリリアは甘いもの幾ら食っても太ったりしないけど。キーマは文字通り『桁』が違う。そしてそんなキーマと同契しているローウェン。俺は自然にローウェンの肩に手を置いて。

「苦勞……………してるんだな」

「分かりますか？」

無言で頷く。昨日と今日の朝だけしかキーマを知らないが、性格とかそういう物はノーマに近いだろうな。そしてキーマ専属の飯炊きであるローウェンの苦勞は同じように飯炊きである俺には嫌という程分かってしまう。

『お待たせしました！！！！本日の大一番！！！！前年度「ウルテイマホラ」チャンピオン！！！！古菲選手！！！！対するは細目、ござる口調、更に予選で見せた奇妙な技のお陰で観客の中から「コイツ忍者じゃね？」とか言われている長瀬楓選手！！！！！！』

アナウンスの声に試合会場を見れば、古と楓が向かい合って立っている。

「おお……。なんか凄そうだな。えっと、小さい方がクーフエイって奴か？」



「そつだ。にしても、あの瓢箪。何に使うんだ？」

それに尻尾の様なあの長い布も。まあ、試合を見てれば分かるか。

「そついえば、こうして真っ向から勝負。というのは初めてでゴザルな」

「そついえば、そうアル。楓分かつてるかもしれないアルが」

古の言葉に笑みを浮かべ、構える。

「無論、手加減はせず。全力で戦うでゴザル」

古相手では分身だけで勝つのは不可能で御座ろつからな。

『それでは第三回戦Fight!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

開始の合図と共に一足で古の目の前に移動する。

「っ!？」

「シッ!!!」

掌底を放つもギリギリでかわされる。流石にこれで倒すのは無理

か。

「ハッ！！！！！」

古が拳を放ってくる。それを後ろに跳んで避け、回し蹴りを放つ。ソレを屈んで避けた古はそのまま、前に進み。拳を放ってくる。空中では身動きが取れない。と踏んでいる様だが。

「甘いでゴザル」

虚空瞬動で古の後ろを取る。

「全力で来い。と言った筈でゴザル」

そのまま、古の背中に気を込めた掌底を放つ。古は前のめりに吹き飛び。二メートル程で受け身を取る。

「そろそろ本気で来るでゴザル。それとも、今のが本気でゴザルか？」

挑発すると。古は好戦的な笑みを浮かべて。

「やっぱり本気でやらないと駄目アルネ」

そういうと、古の姿がブレる。瞬間、腹に衝撃が走る。

「くっ！？」

なんとか、後ろに跳んで衝撃を逃す。しかし、今ので体勢が崩れた。

「ハイッ！！！！」

下から掬いあげる様な蹴りを受け流す。同時に避けた方向から拳が来る。

「チィッ！！！！」

ギリギリで受け止める。だが、妙だ。軽い。

「フンッ！！！！」

「ガッ！？」

ズンッ、と腹に衝撃が走る。見ると、先程受けた逆の拳が腹にめり込んでいる。先程の拳は囷か。

「くっ！！！」

追撃の蹴りを足場にして、後ろに下がる。どうやら古を過小評価していたようだ。

「しからば！！！！！」

分身を四体作りだし。四方から攻める。これはどう避ける？

「しからば!!!!!!」

言葉と共に楓が四人になった。おお!?これが噂の『分身』か!? つと驚いている場合ではないアル。増えた楓が一瞬で周りを囲み、拳を、突きを、手刀を、蹴りを繰り出してくる。

「むむ!?!」

全てを視界にとらえる事は出来ないまでも、何処から来るのか。その気配さえ分かれば避けるのは至極簡単。まず、一番速く来る。右の蹴りを受け流し、正面の拳とぶつける。次に後ろの突きを屈んで避け、左の手刀を潰す。

「ハアツ!!!!!!ハイツ!!!!!!」

そのまま『震脚』で四人同時に体勢を崩し、掌底、拳、蹴り、肘で『分身』を吹き飛ばす。後は本体のみ。

「中々やるでゴザルな!!!!!!」

吹き飛ばした分身の中を蛇の様な動きで現れる楓を見付ける。

「まだまだ、修行の身アル!!!!!!」

そう、まだまだ強くなければ。『世界最強』なんていう言葉が欲しい訳ではないが。自分がどれだけ強くなれるか。それを知りたい。楓と戦えば、その一端が見えるかもしれない。そう思い、楓の拳を避け、その腕を引いて肘を放つ。

「グッ!？」

効いた。そう思った瞬間。楓の胸から拳が飛び出す。

「っ!？」

思わず、身を引いてしまう。それがいけなかった。顔面の一撃を避けたものの。脇腹に衝撃が入る。

「ガッ!？ハ…アッ!？」

吹き飛び、地面に叩きつけられる。脇腹の一撃で肺の空気を全部出してしまった。不味い。

「ふう、まさか分身全てやられるとは。予想外でゴザル」

悠々と歩いてくる楓。しかし不思議だ。気配は確かに五つ。それ以外の気配は一定の距離を置いてあったのに。そう考えていると。楓は笑って。

「拙者、忍故。気配を消すのは得意中の得意なのでゴザル」

そういつて、慌てて小声で「忍というのは内緒でゴザル」と付け足した。改めて対戦相手の力量を思い知る。だが、だからといって闘志が衰えたかと聞かれれば、否だ。逆に楽しくなってきた。楓に自分が何処まで通じるか。ただそれだけ。そうそれだけだ。自分が戦う理由はそれだけでいい。

「む？手加減はした覚えはないでゴザルが。もう立てるとは」

無論やせ我慢で立っている。しかし、このまま寝ていては判定負け、という耐えられない敗北を得る事になる。それにまだまだ戦いたい相手は沢山いる。

「一回戦敗退は御免アル」

幸か不幸か。先程の会話で少しは呼吸が整っている。これでどこまでやれるか。そこでふと、自分の服に付いている布に気付く。

「そうだったアル」

まだ私にはコレが残ってたアル。

ヨロヨロと古が立ち上がる。なにやら、右手に布を持っている。何かするつもりか。

「だが!!!!」

反撃の隙も立て直す隙も与えん。地面を滑るように駆けながら、分身を作りだし。攻める。

「っ!?!」

古が此方を見る。そして右手を振ると前面に配置していた分身が消える。なんだ!?

「フッ!!!!!」

右手を素早く振ると次々と分身が消える。これは速過ぎて分かりづらいが。

「布槍術でゴザルか!?!」

かなり難度の高い技法と聞く。それをあそこまで器用に使いこなすとは。

「フフ、これで分身は怖くないアル」

「見事。しかし分身はそんな大道芸で破られる程浅くはない!!!!!」

分身を四つ作りだす。そして同時に駆ける。

「むっ!?!」

布を操り、横から薙ぎ払って来る。それを布に近い分身が『掴む』

「なっ!?!」

分身は分身でもコレは『気』を十分に練り込んだ実体に限りなく近い分身。これぐらいは朝飯前でゴザル。

「まだまだ!!!!!!!」

もう一方の手で二枚目の布を操る。片手で操るその腕力は称賛に値するが。

「動きが両手より遅いでゴザル」

もう一方の布も掴む。数は減ったが、三体で充分。そしてそこで気付く。古の表情が笑みに変わっているのを。

「ハッ！！！」

両手を布から外し、根元を素早く千切る。そして素早く分身を倒し、拙者の攻撃を受け流して拳を放ってくる。それを片手で防ぐ。

「今のは焦ったアル」

「嘘が下手でゴザルな。さっきから笑顔しか浮かべてないでゴザルよ？」

今も笑みを浮かべている古に此方も笑みを浮かべる。

「しかし、拙者の事に気を取られ過ぎて周りを見ていないでゴザルよ」

言葉と共に布を持った二体の分身が古を拘束する。

「しまっ！？」

「これで幕引きにゴザル！！！！！！」



充分に威力が乗った拳を放つ。手応えは充分。

「っ!？」

そこで気付く布に巻かれているのは拙者の分身!？これは空蝉。

「やってみる物アルネ」

後ろから声と共に衝撃が走る。何とか受け身を取る。見ると笑みを浮かべた古が拳を放った体勢で立っていた。

今のはかなりヤバかったアル。偶然、楓の分身の手を取っていないかったら。本当に幕引きだった。それにしても『布槍術』を使っても倒せないとなると。後は。

「まさか、一回戦からコレを使う事になるとは思わなかったアル」

瓢箪を手に取り、中身を一気に煽る。

古が瓢箪の中身を飲むと、項垂れる。隙だらけの姿に戸惑う。すると。

「ヒック」

そう聞こえると、古が顔を上げる。

「かかってこい」

顔を上げた古はかなりおかしかった。頬はほんのりと赤く。眼は焦点が合っていない。もしか、あの瓢箪の中身は。

「酒でゴザルか？」

「来ないなら、こっちから行くろ」

ついでに呂律も回っていない。そんな事を考えていると。古の姿が消え、目の前に現れる。

「っ!？」

凄まじい速さの拳を避け、続く蹴りを受け流す。無理な体勢の攻撃で古のバランスが崩れている。

「ちょいなー!!!!!!」

攻撃に転じた瞬間、顎に衝撃を受ける。

「くっ!？」

何とか受け身を取る。見ると、裏拳を振り上げた体勢で停止している。

「ういゝ。どうらゝ」

そのまま、器用に片足で立つと瓢箪の中身を飲む。これはもしや飲めば飲む程強くなると言われている。

「酔拳。でゴザルか」

言葉と共に恐ろしい速さで古が近づき、突きを放つ。

「くっ!？」

「おりゃゝ」

力のない声とは裏腹に攻撃のスピードは速い。これは流石に受けに回っては勝ち目がない。

「フッ!!!!!」

繰り出される拳にカウンターで突きを胸に放つ。だが、突きが届く瞬間、狙っていた胸が消える。

「ぐっ!？」

横に衝撃が走る。どうやら、身体を翻して突きを避け、カウンタ―で裏拳を放ったらしい。

「まさか、こんな隠し玉を持っていたとは」

素直に感服する。すると、アナウンスの朝倉の声が聞こえる。

『さあ、凄い戦いですが。そろそろ制限時間が近づいて来ています』

さて、時間もない。どうするか。幸い、今の古は考えて動いている訳ではなく感じて動いているようだ。

「ならば、手数で勝負！！！！」

分身の最大人数を使って物量戦でゴザル。

「むむ？楓が増えら〜」

何が可笑しいのか、楽しそうに笑っている。どうやら、古は笑い上戸らしい。しかし、笑いながらも分身を消している。

「たぁりやあ〜」

数十体の分身が消える。あれだけ出して足止め程度にしかならないとは。しかし、隙は出来た。

「ふにゃ？」

「今度こそ幕引きでゴザ……………る？」

思わず拳を止める。古が直前で仰向けに倒れたのだ。

「スウー、スウー」

「へ？」

古が気持ちよさそうに寝息を立てている。えっと、これはどうすれば？

『え、ええっと。古菲選手。試合続行不可能！……！……！という事で勝者！……長瀬楓選手！……！……！』

「ん？ううん」

目を覚ますと。そこは知らない天井。んん？変な電波が。

「此処は？」

「医務室でゴザル」

どうやら、ベッドで寝かされているらしい。隣には楓の他に真名やラサティ、ネギ坊主に小太郎がいた。

「試合は？どうなったアルか？」

「酒に酔い過ぎて、古が倒れて拙者の勝ちでゴザル」

不満そうに楓が呟く。そういえば、少し頭が痛い。これが二日酔い。という奴アルか。

「負けてしまったアルか」

肩を落とす。ちゃんと負けたならまだしも。酔い潰れて負けるとは恥ずかしい。

「で、でも古老子とっても格好良かったです」

「うう。素直にそう言われても喜べないアル」

ネギ坊主よ。もう少し敗者の気持ちという物を学んで欲しいアル。

「まあ、中国拳法か。中々奥が深い物だな」

ラサティが頷きながら呟く。

「ラサティは苦戦するかな？」

真名の挑戦的な言葉にラサティは鼻を鳴らして。

「さてな。けど、やるからには勝つよ。まあ、後の事はいいとして。そろそろ僕達の試合だね」

「そうだね。まあ、勝つのは私だが」

「その余裕何処まで持つかな？」

勝手に盛り上がるのはいいけど。出来れば外でやって欲しいアル。

すると、第五試合のアナウンスが流れる。

「さて、呼ばれている様だから行くとするか」

そうラサティが言うと、真名も頷き。二人が医務室を出る。それに楓とネギ坊主、小太郎が続く。

「……………私は……………負けたアルか」

一人になった医務室で小さく呟く。ふと、視界が霞む。慌てて拭く。

「むむ。敗北とは予想以上に悔しい物アルね」

次は負けない。そう決意する。

**Re・No:49「楓の実力 古の秘策」(後書き)**

どうも、フィロです。何とか年内に上げられた。そしてラサティ対真名は次回です。楓対古が思った以上に多過ぎたので一話に出来なかったのがこんな感じにしました。期待していた方すみません。次回は年明け。速めに上げたいと思うのでご期待下さい。では皆さん良いお年を。



Re・No:50「吼号穿VS羅漢銭」

「お、ラサティの試合だな」

「マジ!？」

俺の言葉にクーが反応する。すると、アナウンスが流れ、ラサティと真名が会場に現れる。

「おお、二人とも気合入ってるな」

「多分、さっきのメールが効いてるんだろ？」

ノーマが俺を見ながら喋る。

「なんだよ、メールって」

「多分、『頑張れ』とか『負けるな』とかの応援メールとか？」

シスカの言葉に首を振る。

「単に今晚の夕食は買った方のリクエスト。って送っただけ」

そういうと、他の皆が呆れる。まあ、夕飯程度であそこまで闘志剥きだしはあり得ないからな。他に理由があるのかな？

「個人的には」

向かい合ったまま、喋る。

「さっきのメールはあまり興味が無い」

「奇遇だな。僕もだ」

ラサティが答える。

「私は単にラサティ。君の本気を見てみたい」

「本気……ね」

『第四回戦!!!! Fight!!!!!!』

「高く付くよ?」

「分かっているさ」

言葉と共にラサティを攻撃する。瞬間、ラサティは弾かれたように上半身を後ろに仰け反らせる。その際、軽い金属音が聞こえる。その音を聞いて何をされたか、予想が付いた。

「まさか、そんな受け方をするなんてね。女性としてどうかと思うよ」

「生憎」

ゆっくりと仰け反った上半身を起こす。予想が当たった。先程行った攻撃（五百円玉を指で弾き飛ばした）を口で受け止めたのだ。それを慣れた仕草で床に吐きだし。獰猛に笑う。

「お淑やか。とはかけ離れた暮らしをしていたんでね。あまり期待しないでくれ」

寒気がする。これが普段、天さんにかかわれているラサティかと疑うくらい。

「それを聞いて安心した」

言葉と共に硬貨を飛ばす。ラサティは接近戦主体のインファイト。近づかせなければ問題はない。

マナの戦闘スタイルは前にセツナから聞いたから遠距離タイプというのは分かっている。今回の大会ではどんな戦い方をするのかと思っていたらまさか、硬貨を武器に使うとは。

「ユニーク、というか馬鹿げている、というか」

まあ、その硬貨が目にも止まらぬ速度で飛んでくるのだから笑え

ない。まあ、それでも僕には無駄だが。

「ふん、嫌な経験だが。役に立つ物だな」

多種多様な武器を扱う者達が集う場所だったからな。似たような武器を使う奴も見た事あるし、戦った事もある。

「そして弱点も分かっている!!」

片手に『闘気』を集める。

「ハアッ! ! ! ! ! !」

ドンッ、という音と共に目の前に来ていたコインが弾け飛ぶ。そしてそれによって出来た空間を駆け、マナに近づく。長引かせるつもりはない!!

「一気に決めさせて貰う! ! ! ! !」

一気にマナに近づく。どんな戦法をしようとも、僕のやる事は一つだけだ。

「おっと、近づかせるわけにはいかないよ」

言葉と共にコインが飛んでくるが、関係ない。『闘気』を膝に溜めて低く跳ぶ。

「吼号穿・麟! ! ! ! !」

「ぐっ! ?」

体をくの字にしたマナがゆっくりと仰向けに倒れ込む。

『龍宮選手ダウウウン!!!!これは起き上がるのか!?!』

アナウンサーがカウントを取り始める。

「立たないのか?」

「冗談。続けても千日手になりそうだから棄権するんだ。それに色々やる事もあるしね?」

「やる事?」

聞いて、何かあったか。と考える。すると、マナがクスクスと笑って。

「個人的な用さ」

「成る程」

そういうと、同時に僕の勝利を告げるアナウンスが会場に響いた。

「おお、ラサティが勝ったか」

「それにしても、相変わらず突撃あるのみだな。まるで猪だ」

「アイツもアイツで考えながら戦っているんだろ？さっきの突進も相手の意表をついたしな」

さて、確か次は高音さんと田中って奴か。まあ、消化試合になりそうだな。

『し、勝者！！！高音選手！！！！！』

思った通り、高音さんが勝ったが。

「まさか、かの有名な『48の殺人技』の一つである『キン肉バスター』を見れるとは」

田中がロボットだというのも驚きだったし、ロケットパンチやレーザー。果ては全身を一つのドリルに変形して突進しようとは。ソレに対してアッパーカットで迎え撃ち、変形を無理矢理解除して空中に持ち上げて『キン肉バスター』を叩きこんだ高音さんは凄いな。

「本当は『正義超人』なんじゃないのか？」

「はあゝ、あの姉ちゃんやるなゝ」

呑気に小太郎君が笑っている。

「ううゝ、緊張してきた」

僕の出番。次だね？最後になったりしないのかな？。

「おやおや、武者震いとは中々気骨があるようじゃの」

からかうような声に振り向くとタカトさんが笑っていた。

「ち、違いますよ。単に緊張してるだけで。それに」

「それに？」

「それに。タカミチに僕が敵うのかなゝ、なんて」

「ほう、何故かな？君は今日までに最善の努力をしてきた筈じゃろ？」

「そうです。そうですけど、やっぱりタカミチにはまだ敵わないなゝ。って思っんです」

「確かにネギ君と高畑君には未だ絶対的な差がある。しかし、考え

てもみなさい。今まで君は自分より実力が上の者たちと戦ってきたのではないか？」

言われて、思い出す。そうだ。エヴァンジェリンさんも小太郎君もあのフェイトって男の子もそれにヘルマンさんも僕より強い人だった。

「そうですよね。考えてみれば僕は僕より弱い人と戦った事がないですね」

「そう。強者と戦い、勝つ事で得られる物が多い。それを全て活かせば。勝てないまでも、善戦は出来るぞ」

「そ、そうですよね？」

タカトさんが頷く。何故だか凄く自信が付いた。

「うむ。元気になった様じゃの。それにホレ。意中の子にイイ所を見せなければ男が廃るぞ？」

「うえっ！？ば、僕はそんなんじゃないですよ！！！！！」

「ハッハッハッハ！！！！真っ正直な子じゃな。本当に」

『これより第6回戦を始めます。選手は試合会場に向かってください』

「さあ、お前さんの出番だ。思いっきり行って来い」

「は、はい！！！！」



背中を押されて会場に向かう。そうだ。思いっきり戦おう。結果なんて気にしてたら駄目だ。そう思って会場に行くと。タカミチが既に立っていた。

「どうやら、天斗さんのお陰で緊張は解けてる様だね」

タカミチと向かい合い。深呼吸。

「タカミチ。全力で行くからね！！！！」

そういつて、構える。するとタカミチは一瞬驚いた様な表情をすると、フツと笑つて。

「分った。じゃあ、僕も本気で行くよ」

両手をポケットに入れる。瞬間、タカミチから圧力のような何かが溢れ出る。気圧されそうになるけど。踏ん張る。やれるだけやる。それだけ。

第6試合Fight!!!!!!!!!!!!!!

合図と共に駆ける。

## Re・No:50「吼号穿VS羅漢銭」(後書き)

どうも、明けましてフィロです。遅くなってすみません。今回はラサティ対真名戦と高音対田中戦です。キン肉バスターはノリです。単にソレを田中に喰らわす高音の図がとても簡単に出来たのでコレにしました。次回は高畑対ネギ戦です。御期待下さい。

## Re・No:51「ネギの力 タカミチの力」

『風楯』<sup>テフヤシオ</sup>を張って、瞬動で駆ける。瞬間、何かが連続で『風楯』にぶつかり、高い破裂音が響く。何をされたか分からないけど懐に入れた。

「フツ!!」

タカミチがポケットから手を出して、拳を放ってくる。その腕に自分の左腕を合わせ、最小限の動きで拳の軌道をずらす。

「っ!？」

「ハアッ!!」

そしてずらした左腕を戻さず、そのまま回転。遠心力が乗った肘をガラ空きの脇腹に叩きこむ。手応えは充分。けど、これで終わらせない。

「ハアアッ!!」

肘を跳ね上げて顎を狙う。と見せかけ、ガードを上げた所為で空いた腹部に正拳を放つ。それをタカミチは後ろに跳んで衝撃を逃がす。ソレに付いて行き、身動きの出来ない状態に拳と蹴りの連打を浴びせる。

「っ!？」

一瞬、寒気を感じ、後ろに下がる。何時の間にかタカミチの腕は

ポケットに入っていた。何時の間に入れていたのだろうか？

「やっぱり、一筋縄じゃ、いかないね」

「いやいや、僕も少し焦ったよ。本当に強くなった」

嬉しそうに答えるタカミチ。気付いているかどうか分からないが、タカミチの言葉には少なからず余裕が見える。それが、ちょっと悔しい。

「まずまずの出だしだな」

「中々やるのう。良い師匠を持ったようじゃな」

「ハッ！……当然だ。この私が教えているんだ。あれぐらいやって貰わなくては困る」

言葉こそ辛辣だが。表情には嬉しさと安堵が浮かんでいる。やはり、吸血鬼といえども、元は人の子か。すると、表情を変えるエヴァ。

「まあ、これでも持って五分だろうかな」

「ほう？何故か聞いていいかの」

ワシが聞くと。待っていました、と言わんばかりに笑みを浮かべる。

「タカミチは本気で戦っていない。まあ、あのお人好しならアレを出して戦うかも知れんが。所詮、お遊びだ」

「ふむ、まあ分からなくもないの。この戦い色々と制限が掛かっておるしな。しかし、あの子は創意工夫がかなり得意なのではないか？」

「確かにそうだな。だが、それでも」

不敵にエヴァが笑う。

「タカミチにはまだまだ届かんさ。まあ、それは見てのお楽しみ。という奴さ」

小さく息を吸い、吐くと同時に地面を駆ける。それに合わせてタカミチが動く。

「フッ！」

「ハッ！！」

タカミチの拳に自分の拳を当て、瞬時に腕を曲げて肘を胸板に当てる。意外な攻撃にタカミチが一瞬驚き、動きが止まる。此処だ。  
『魔法の射手 集束・雷の三矢』！！！！

「ハアアツ！！！！！」

『魔法の矢』を右腕に集束して放つ。『雷華崩拳』上手く決まってくれたみたいだ。タカミチは勢いよく場外まで吹き飛んだ。

「よし！！！」

確かな手応えに嬉しくなる。けど、これでタカミチを倒せたとは思っていない。念のために色々と準備しておこう。

「驚いた」

呟く言葉は本心だ。確かに少なからず侮っていたのは確かだが。油断も慢心も無かった。だが、まさかここまで力を付けるとは。自然と口元に笑みが浮かぶ。

「でも、まだ甘いかな」

当然かもしれないけど。本当なら吹き飛ばした後もすかさず、追

撃に来た方が良かったかもね。

「さて、僕も本気をだそうかな」

それよりも、場外から出なくちゃ。こんな楽しい戦いを場外負けにしたくない。

タカミチが場外から一つ飛びで戻ってきた。

「正直、ここまで強くなるなんて予想外だったよ」

嬉しそうに笑うタカミチ。すると、両腕を広げる。

「君の力は充分見せて貰った。次は僕の番だ」

両腕に光が集まる。

「右腕に『気』………左腕に『魔力』………」

両腕をゆっくりと合わせる。瞬間、タカミチから爆発的に力が溢れる。

「一撃目はサービスだ。避けるんだ」

最大級の寒気がした瞬間、理屈じゃなく本能で後ろに下がる。瞬間、先程立っていた場所が轟音と共に陥没する。

「ほう、『咸卦法』か」

「ああ、呪文詠唱が出来ないアイツが文字通り、血の滲む様な修行で会得した物だ。やはり使うとは思っていたが。これで坊やの勝つ確率はゼロになったな」

つまらなさそうに喋るエヴァ。だが、何処かその表情は少しだけ何かに期待している様な感じだった。

「さて、戦いというのは最後までどうなるか分からんからな。今は何も言わず、見守ってやるとしよう」

「フンッ」

「くっ!?!」



マシンガンの様にタカミチの攻撃が飛んでくる。威力は考えるだけ無駄と思えるほどに無茶苦茶だ。けど、アマトさんの糸みたいいきなり軌道が変わるわけじゃない。なら、やりようはある。

ネギ君の表情が変わった。何か仕掛けて来る。

「悪いけど、ソレを見逃す程、優しくはないよ」

『居合い拳』を放つ。だが、ネギ君に当たる瞬間、ネギ君が腰から投げた数個の試験官に当たり、『爆発』する。

「これは『眠りの霧』っ!？」

急いで離れる。驚いた。無詠唱魔法の威力を補う為に魔法薬を使うなんて。しかも『眠りの霧』なら迂闊に近づけない。

「けど、それじゃ唯の時間稼ぎにしかないよ?」

何時でも迎撃出来るように構える。瞬間、目の前の霧からネギ君が飛びだしてくる。しかも、数十人規模で。

『!.....これは何だあ!.....!!ネギ選手がいきなり増えた!.....!!』

アナウンスの声を聞きながら全てのネギ君を撃ち落とす。すると、ネギ君達はそれぞれ札や煙となって消える。成る程、札と風の精霊を使った囀か。という事は本物のネギ君は。

「後ろか」

振りかえると案の定、驚いた表情で拳を振り上げているネギ君がいた。

「僕の勝ちだ」

言葉と共に『居合い拳』をネギ君にぶつける。ネギ君はそのまま、床に倒れると『煙』になる。

「なっ!？」

「こつちだよ」

言葉に振り向くと、口から一筋血を垂らしたネギ君が笑っていた。まさか、囀の中に本物のネギ君がいたとは。

「これが僕の」

ガラ空きになったタカミチの背中目掛けて拳を振るう。

「全力全開だっ!!!!!!!!!!!!!!」

残りの魔力を総動員して右手に込め『桜花崩拳』を放つ。

「ハアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

「ぐっ!?!」

タカミチが床に叩きつけられる。

『き、決まったアアア!!!!!!!!!!!!!!ネギ選手の逆転だアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!』

アナウンスの声が響き、会場から声援が上がる。

「ぐっ」

タカミチが仰向けになる。

「大丈夫、タカミチ?」

「ああ。これでも丈夫な方だね。それにしても、一本取られたな」

そういつて、笑う。僕も笑って。

「次はもつと実力を付けてから戦おう」

「ふふ、その頃にはもう僕なんか追い抜かれてるかもね」

タカミチの言葉と同時に僕の勝利を告げるアナウンスが流れた。

**R e - N o : 5 1 「ネギの力 タカミチの力」 (後書き)**

どうもフィロです。今回はタカミチ戦です。次回は天斗祖父さんと明日菜との戦いです。御期待下さい。

## Re・No:52「真名の別仕事と天斗の力」

「ありがとう龍宮サン。龍宮サンのお陰で結構、盛り上がったネ」

「いや、私は特に大したことはしていないさ。会場が盛り上がったのは古と楓のお陰だ」

試合が終わった後、会場から離れ、校内のパソコン室で超の言葉に答える。超は徐に引き出しから、封筒を取り出し、私に向ける。中身は勿論。

「今回の報酬ネ。『超飯店』の割引券。三万円分ヨツ!!!!」

封筒を持ってない方の手でサムズアップ。更に満点の笑顔で言われ、思わずこける。

「…………驚いたな。超もこんな冗談を言うとは」

そういつて、封筒を手で制す。すると、残念そうに超は封筒を引きだしに戻す。

「珍しいネ。龍宮サンが報酬を受け取らないとは」

「こういう汚い仕事はこれっきりにしようと思ってね。なにせ」

外を見て、笑い。

「何処かのお節介なお人好しに嫌われそうだから」

多分、そんな事はないと思うけど。

「さて、当分仕事がないなら私は御暇させてもらうつよ?」

「およ?気になる試合でもあるの力?」

超の言葉に頷き。

「これから始まる試合は直に見ないと勿体ないからね」

そういつて、私は部屋を出る。さて、間に合うかな?

「さて、どうやら舞台修理やらなんやらで試合が遅れるようじゃ。ネギの見舞いでも行くかの?」

隣に言葉を投げかけると、先程までそこに佇んでいた人影は消えており、周りを見るとその人影は救護室に向けて早足で向かっていた。

「素直に心配すればよかろうに」

そういつて、歩き出す。救護室は意外と近くにあり、簡単に見つかった。中に入ろうとすると。

「アホかーッ！！！！！！」

「へぷうつ！？」

という素っ頓狂な声が聞こえた。それを聞いて、笑みを浮かべながら、中に入る。

「何が『勝った』だ。勝たせてもらったようなものだということにも気付かんのか愚か者が！！！！！！！！」

そういつて、エヴァンジェリンはネギや周りの者を論破しながらネギを踏みつける。少しだけ、それを眺めた後、頃合いを見て仲裁に入る。

「その辺りにしてやらんか？それ以上やってはいらぬ怪我也負うじやろう？」

「ぬぐっ！！！！！！」

その一言にエヴァンジェリンは鼻を鳴らして、そっぽを向く。

「あ、タカトさん！！！！」

「おゝ、じっちゃん！！！！」

「むむむ、やはりタダものじゃないアル！！！！！！」

最後の言葉は無視してから、ネギに近づき、頭に手を置く。

「いやはや、素質はあると思っていたが、思った以上の様じゃな。



先の試合。見事だったぞ?」

「え? はい、ありがとうございます! ! ! ! !」

嬉しそうに笑うネギ。

「それとな、エヴァンジェリンはまあ言っとるが、試合中はお主の事を心配しておったんじゃない?」

「おい、こら天斗! ! ! 勝手にそんな作り話をするんじゃない! ! ! ! !」

真っ赤になって怒鳴るエヴァンジェリン。成る程、天がからかいなくなるのも無理はないのう。

「そうかの? タカミチが咸卦法を使った時に焦った様な声は聞き違いじゃったかな?」

「そ、そうだ。お前の聞き違いだ」

「試合が終わった後、我先にここに来ようとしたのは誰だったかな?」

「ぐっ! ! ! ! ふんっ! ! ! !」

拗ねたのか、救護室をさっさと出て行ってしまった。それを茫然と見ている三人。ソレを見送りながら、煙管を取り出し『氣』で熱する。

「ん? はあゝ、じっちゃん器用やなゝ」

小太郎が気付いたのか感心したように呟く。それを笑って。

「なに、簡単な応用じゃよ。『気』は『魔法』と違ってイメージ次第で形や性質を変えられるからの。まあ、ちゃんとイメージせんと使えんのが欠点と言えば欠点じゃがな」

「ふ〜ん、イメージねえ〜」

腕を組んで真剣に考えている小太郎を微笑ましく思っていると、救護室に大量の人間が雪崩れ込む。

「おやおや」

苦笑すると同時に煙管の火を消し、懷に仕舞う。

「ネギ君、大丈夫〜？」

「凄かったよ〜！！！！！！」

「アンタ達、此処は選手以外立ち入り禁止よ！？」

「固い事言わない、アスナ」

そういつて、やってきた少女達はネギに集まる。さて、どうやらワシはお邪魔虫の用かな？

『間もなく、舞台の修理が終わります。選手は会場へお越しください。尚、神楽坂選手は更衣室へお願いします』

「更衣室？」

ふむ、何故、明日菜嬢が更衣室へ行くのかはさておき、ワシの順番か。

「では、先に行っておるぞ？」

そういつて、救護室を後にする。さて、どれ程の力か。楽しみだ。

「そっか、私天さんのお爺さんと戦うんだっけ」

今更ながら、自分の戦う相手を考える。でも、そんな強くない様に思える。

「うーん、縁側で猫と一緒に日向ぼっこしている姿の方が戦っている姿より想像しやすいな」

「確かに、雰囲気的にはそうですね。けど、相手は英雄とまで言われた人ですから気は抜かない様に」

刹那さんが苦笑しながら返す。

「そっね。ようし、頑張るぞ！……！」

頬を軽く叩いて湯を入れる。それにしても、この下着派手すぎないだろうか？

「次はアマトの爺さんか」

「あの祖父さんが戦う姿つてのは思い浮かばねえんだよね。怒る時も静かに怒る人だったし」

そういつて、アマトが会場に立っている爺さんを見る。すると、視界の端にアスナとそのアスナの頭を撫でているローブの人影が見えた。何をしているんだ？

「ん？明日菜の奴が来たか」

「おお！？あの服いいな～！！！！！！！！」

私はアスナが着ている服を見ながら叫ぶ。中々可愛い服じゃないか。

「やつほ、皆集まってるねえ」

声の方を見ると、ハルナ、ノドカ、ユエがやってきた。どうやら、此処で観戦するようだ。

「もう、何だったのよ」

愚痴りながら、会場に上がる。いきなり見知らぬ人に頭を撫でられたのだ。驚かない方がおかしい。

「でも、何だったんだろう？」

一瞬、あの時沸き上がった懐かしい感覚。この感覚、前にも何処かで。

「それ以上、進むと落ちるぞ？」

その言葉を聞き、我に帰る。

「わわっ!？」

何時の間にか、私は場外の一步手前まで移動していた。同時にバランスを崩しそうになり、会場から笑い声が聞こえる。

「うう」

顔が熱くなるのを自覚しながら先程までの自分に怒る。

「どうやら、緊張しているようじゃな？」

「少しだけ」

短くそういつて、ハリセンを構える。

『良いですか？自分を無にするのですよアスナさん』

すると、頭の中に声が響く。この声はさっきの人。

『左手に世界を右手に自分を。世界とあなたは一つです。自分自身を唯の窓だと』

「ストップッ！！！！いきなり頭ん中に話しかけないでよ。集中できないじゃない。それに言ってる事わけ分かんない！！！！！」

私の言葉に語りかけてくる人物は少し考える様に間を置き。

『まあ、ボーッとしてろってコトですね』

「え？それなら得意だけど」

それに何の意味があるのだろうか？

『さあ、前回の試合と打って変わり、今回の戦いは何と可愛らしいメイド姿の神楽坂選手対和服で落ち着いた雰囲気山吹天斗選手だ！！！！！！！！！！』

朝倉の言葉と同時に会場が沸く。もう服の事は気にしない。

『さて、山吹。という性に聞き覚えがある方もいるようですね。な

んと、ここにおられる天斗選手は麻帆良高校三年であり、学園総合図書委員長を務めている山吹天さんの祖父なのです。さて、全図書委員、ひいては全図書館探検部を裏で牛耳っている通称『図書館島、裏の司書』である天先輩のお爺さんの実力とは！？』

「へえ、面白い渾名だな？」

そういつて、俺は後ろにいる三人を見る。のどかと夕映はブンブンと首を振り、ハルナはそろそろと逃げようとしている。お前か。

「少し待とうな。ハルナ」

「いやあ、出来心で。一年の時、天さんはそんな人かな、って皆に話したら何時の間にか広まっちゃって」

「皆って？何処の皆だ？」

「クラスです。はい」

成る程、さてどうしたもんか。

「ハルナ。水と火と電気。どれが好きだ？」

「へ？」

俺の質問にハルナは腕を組んで。

「水ですね。なんとなく」

そっか、水か。その答えに俺は笑みを浮かべる。瞬間、皆の表情が青くなる。どうかしたのだろうか。

「ハルナは『水責め』が所望か。丁度目の前に水があるし。早速やるか」

「ちよっ！？ストップ天さん。私が悪かつ？！ガボツ？！」

『さて、気を取り直して第七試合Fight!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

朝倉の叫びが聞こえる。ああ、視界の端に写ったパルらしき人物は無視するんだ。まあ、当然よね。

「では、行くぞ？」

言葉と共に天斗さんの姿が消える。

「え？」



『ハリセンを後ろに回して』

言葉の通りにすると、ハリセンから衝撃が伝わる。

「ほう？」

「へ？」

振り向くと、少しだけ驚いた表情の天斗さんが拳を突き出している。だが、その拳は私のハリセンに阻まれている。良く分かんないけど、天斗さんが驚いている間に距離を離す。

『相手に時間を与えてはいけません。戦いとは常に自分のリズムを崩さず、相手のリズムを崩す事が基本です』

「リズムとかよく分かんないけど」

少しだけイラッと来ながら答えると、声は少し間を置いて。

『ガンガン攻める。と言う事です』

それなら分かりやすい。そう思い、全力で駆ける。勢いが良すぎたのか、天斗さんを通り過ぎてしまう。

「つとと、行き過ぎた」

『いえ、そのまま円を描きながら動くのです。そうすれば、相手は貴女の動きを予測し難くなります』

「えっと、円を描くように？」

そういつて、天斗さんを中心に円を描きながら動く。

『おおっと、神楽坂選手。天斗選手を中心に円を描きながら動き始めました！！！！何をするつもりだ！！！！！！！！！！』

ふむ、面白い事をする。確かに相手を翻弄しながら動くのは良い。  
だが。

「その動きが相手に丸見えでは意味はないがの」

足を踏み出す、その刹那に潜り込む。

「っ！？」

「フッ！！」

驚いている彼女に回し蹴りを放つ。この状況では避けられまい。

「わわっ！？」

ソレをハリセンで受け止め、蹴りを放ってくる。その蹴りをバックステップで避ける。

「ほほう、これは中々。想像以上じゃな」

「え？私、ちゃんと戦えてる？」

む？明日菜嬢が困惑気味じゃな。まあ、思いのほか、善戦したのが驚きなのだろう。

「なんだか、良く分かんない内に天斗さんから褒められたんだけど」

『此処は素直に受け取った方がいいでしょう。私がアドバイスしているのは簡単な事だけですし、それを実行できる貴女は凄いですよ』

「そ、そうかな」

そういつて、頭を掻く。瞬間、身体から力が抜ける。

「へ？」

『どうやら、ガス欠のようですね。まあ、初めてでは仕方ないですよ』

声を楽しそうに語る。こっちにしてみれば、笑い事ではないのだが。

『さあ、もう一度。さっき言った様にやってみましょう』

「ええ、全然分かってないんだけど」

『大丈夫です』

その根拠は一体何処から来るのか、小一時間問い詰めたい気分だけど。今は集中した方がいいだろう。

「ええっと、左手に『魔力』右手に『気』だっけ？これを合成。つて、キャッ!？」

両手を合わせた瞬間、風が巻き起こり、スカートが捲れ、慌ててスカートを抑える。

「ふむ『咸卦法』を使えるとは予想外じゃな。なら、ワシも少し本気を出そうかの」

そういうと、天斗さんがゆっくりと私を中心に円を描きながら動く。これはさっき私がやった事と同じ。

「なら、さっきと同じように潰せばいいのかな？」

『いえ、流石にそれは無謀でしょう。此処は相手の出方を見るべきです』

声が少し、緊張気味に語る。確かに、天斗さんと同じ方法で相手の先手を奪う事は出来るけど、それは天斗さんも考えている筈。なら、此処は何もせず、構えを解かず、円を描く天斗さんに集中する。

「さて、行くかの」

その言葉と共に天斗さんは身体を左右に振りながら前に出る。そして、両手を広げ、私の目の前で閉じる。

『猫だまし?!』

声が驚いている。けど、それよりも天斗さんの右手が何時の間にか握り拳になっっている。何か来る。そう感じた瞬間、私の視界は天斗さんから青空に変わっていた。

「……………え？」

背中に軽い衝撃が走る。どうやら、仰向けに倒れたようだ。なら、早く起きなきゃ。そう思ったのに体が思う様に動いてくれない。

「あ……………れ……………？」

声が上手く出せない。それに顎の辺りが鈍く痛いし、頭がガンガンする。

「あまり無理するでない。力加減はしたが、常人なら致命傷物じゃないからな」

天斗さんが私を見下ろしながら、優しく声を掛けて来る。だけど、何処か声が遠い。体がダルイ。目を開くことさえ、億劫になり目を瞑る。暗闇しか見えないのに私が知らない、光景が見えた気がした。



「自宅で映画気分を味わう為だと思うです」

「んじゃ、なんで映画って横長なんだ？」

アマトの質問にユエが考える。アマトは笑って。

「人間って生き物はある一定の横幅を視界に収めると周りを見れなくなるんだ。祖父さんはそれを利用したんだ」

「どういう事だ？」

私の言葉にアマトは頷くと。

「まず、猫だまし。普通の人間なら此処で目を瞑って終わりだけど、さっきの見る限りじゃ、明日菜は目を瞑ってない。んで、祖父さんは腕を広げた瞬間、拳を握る。それもかなりの速度で。それを明日菜は見ちまった。んで、何か来るって考えてその拳だけに集中しちゃったんだ。そこに下から膝が来たって所だな。まあ、俺もちゃんと見えた訳じゃないけどな」

そういつて、苦笑するも。私は驚いていた。戦い、という括りで見たアマトはお世辞にも玄人とは呼べない。素人に毛が生えた程度の認識だ。今でも、戦闘力ではその通りだが。アマトの目もとい『見極める』力は玄人並だ。それは『動く物を遅く見る事が出来る』という特異な能力を抜きにしてもかなり高い。といっても、技を見極めても、直ぐに対処出来るかどうかは別問題であり、ソレを出来るようにするのがアマトの課題だそうだ。

「まあ、これで勝負は決まり」

「

アマトの言葉と会場で爆発の様な物が起こったのは同時だった。すぐに会場の方を見ると、アスナが立ちあがっていた。だが、おかしい。まず、持っている武器がハリセンではなく、巨大な片刃の剣になっている。そして何より、気になるのがアスナの目だ。まるで人形のように何も写していない。遠目ではつきりしないが、多分間違っていない。

『ちよっ！？アスナ、それは不味いつて！！？』

カズミの焦った声が響くも、アスナには届いていないようだ。逆にその言葉を合図にしてアスナが剣を持っている方の手を掲げた瞬間、凄まじい速度で大剣を振り下ろす。タカトはそれを。

『へ……………？』

その声は会場全ての声だろうか。何時の間にか、アスナは地面に倒れていた。何をしたのか、アマトを見るも、アマトもよく分かってない表情だ。

「見えたか？」

「残像だけなら。多分、祖父さんは明日菜の一撃を利用して、投げたんだと思う。それも、かなりの速度で」

「それって、ヤバくないか？」

私が聞くと、アマトはゆっくり頷き。

「下手すりゃ、即死レベルだ」



アマトの言葉と共に試合終了の合図が響いた。

結果的に、明日葉は大丈夫だった。ていうか、祖父さん。『咸卦法』とかいっているので防御が堅くなってるからって無茶し過ぎだ。

「いやあゝ、済まん。つい、熱くなつてな」

そういつて、快活に笑う祖父さん。怒る気が失せてしまった。まあ、アスナもピンピンしている様だから大丈夫だろう。

「んじゃ、俺らは観客席に戻ってるから。ほら、ノーマ行くぞ？」

「少し待て。おい、エヴァ」

「ん？」

ノーマはエヴァを連れて俺達から少し離れる。気になって聞き耳を立てる奴等を軽く殴っている。話が終わり、ノーマが戻ってくる。

「もういいのか？」

「ああ、ちょっと応援しただけだからな」

それなら普通に言えばいいのに。苦笑しながら歩き出す。

「フン、まったくノーマの奴」

さっきノーマが私に向けた言葉を思い出す。

『次の試合。私はエヴァを応援する』

そんな事、言う必要があるのか、と問うと。ノーマははにかんで。

『友達、だからな。取り敢えず伝えたぞ』

そういつて、ノーマは部屋を出て行った。

「友達……………か」

呟く。思えば、吸血鬼になった私は友達などいなかった。それは他者と関わりたくないという理由ともう一つあった。

「私は不老不死。老いもしなければ死にもしない」

それが友達を作らなかつた最大の理由。他者と過ごす、それは私にとって他者の老いや死を見なければいけない事。それが怖かつ

た。どんなに時を過ごしても変わらない私を見る人間の目を見たくなかった。

「弱い、な」

力としての強さなら確かに私は強いだろう。だが、心の強さは誰よりも弱いのだろう。だからだろうか、常人より寿命が長いエディルレイドのノーマに興味を持ったのは当然だった。そしてノーマと一緒にいる自分が幸福だと感じ、そしてそれを悪くないと感じる自分がいた事を、好ましく思っていた。

そんな思考の海に沈んでいる私を引き戻したのは大音量のアナウンスだった。それに顔を顰めながら、会場に向かう。

「ふむ、負けてやるのは癪だな」

呟き、視線の先に刹那が私を待っている。律儀な奴だ。そう、心の中で呟き歩き出す。折角、ノーマの奴が応援してくれるのだ。少しは頑張っても罰は当たらんだろう。

## Re・No:52「真名の別仕事と天斗の力」(後書き)

どうも、フィロです。大分更新が遅くなって申し訳ありません。今回は前回入れられなかった超と真名の話。本当はタカミチ戦の前なのですが、今回は天斗戦の前にしました。特に意味はないんですけどねwwwwwwそして天斗対明日菜戦。これは結構、難産でした。特に戦闘描写が上手く書けたか不安です。そしてノーマとエヴァの会話。エヴァの想い、です。これは自分なりにノーマという友を持ったエヴァの、心象の変化です。上手く書けたかな？では次回の更新をお楽しみに

Re・No:53「幸福とは？」

「私が幸せ者……ですか？」

「ああ」

試合会場に上がった私は突然、隣にいたエヴァンジェリンさんに言われた。

「最近、幸せそうじゃないか。え？」

エヴァンジェリンさんはそういつて笑みを作る。確かに幸せと感じる事はある。

「けど、エヴァンジェリンさんもノーマさんや天さんと関わって幸せそうですよね」

「……………今はお前の事を話しているんだ。私の事は関係ないだろ」

ムスツと不機嫌になり、視線を私から逸らす。そんな子供の様な行動に少し可笑しくなる。エヴァンジェリンさんは真剣な表情を作る。同時に試合開始の合図が聞こえた。

「まあ、こんな話は後で出来る。今は戦うとしよう。手加減などするなよ？」

そういつと同時にエヴァンジェリンさんから強烈な気迫が伝わる。思わず、一歩後ずさる。

「来ないのなら、こちらから行くぞ？」

エヴァンジェリンさんは人差し指を持ち上げる。同時に私の右腕が持ち上がる。

「これは………?!」

またエヴァンジェリンさんの別の指が動く。瞬間、私の右足が持ち上がり、バランスを崩す。

「これは………糸?!」

今のエヴァンジェリンさんは魔法を使えない筈。そして天さんに何度もやられた経験からエヴァンジェリンさんの攻撃手段が分かった。

「理解が速くて結構。まあ、天の様に器用な物ではなく純粋な糸だな。それでも、緩みきったお前相手なら問題あるまい」

「くっ」

身体に『気』を送り、糸から逃れる。

「行きます……………!!!!」

言葉と共に得物を振る。

「ふむ、悪くない」

そういつて何時の間にか取り出した扇子で私の攻撃を受けると同

時に身体を捻り、私の腕を引きながら地面に落とす。

「くっ?!」

関節を極められる寸前『氣』を勢いよく放出させ、その反動で前に跳び、距離を取る。

「うむ、今は良い動きだ」

そういつて、顔の前で扇子を開く。

「っ!」

瞬動で背後を取り、攻撃するもエヴァンジェリンさんは振り向きもせず、扇子で受け。私を転ばせる。

「くっ?!」

顔を上げた瞬間、小さな掌が見え、次いで青空が見えた。

「いやいや、糸を使った『探知結界』とはよく考えた物だ。流石に付け焼刃では天には及ばないが、これはこれで使えるじゃないか」

楽しそうに笑っている。そして扇子を閉じると真剣な表情を作る。

「さて、刹那。私の遊戲に付き合ってくれるのは嬉しいが、さつさと本気で来たらどうだ? こうも、ワンサイドゲームでは客も飽きてしまうぞ?」

その言葉を聞き、立ち上がるも上手く立ち上がれない。それを見

たエヴァンジェリンさんは呆れている。

「まったく、自分がどれほどのダメージを受けたのかさえ分からんとはな。弱くなったものだ」

「私が弱い、ですか？」

私の問いに頷く。

「といっても、私が言っているのは肉体面ではなく精神面だ。以前の、そうだな。少なくとも修学旅行前のお前だったら、もう少し粘れたのだが」

そういつて、無造作に近づいてくる。

「刹那。お前は幸せか？」

「え？」

目の前まで来てエヴァンジェリンさんが小声で語りかける。最初は戸惑ったがゆっくりと頷く。私は幸せだ。何故なら私の事を思っている人が沢山いる。

「そうか、幸せか。ではお前の幸せを奪おうとする奴等が来たらどうする？」

「無論、この剣で幸せを守ります」

「今の軟弱な精神でか？」



嘲笑うようにエヴァンジェリンさんが言う。確かに以前と比べれば戦いに対する気構えが弱くなっているのだろう。けど。

「けど、私には頼れる人たちが沢山います。人は一人では出来ることが限られてくる。私一人では幸せを奪いに来るモノに敵わないかもしれない。けど、私一人じゃ無理なら他の人に助けを求めます」

「……………そうか。随分と変わったな。前のお前は切れ味鋭い刃のような奴だったのに」

「それはお互い様です。エヴァンジェリンさんだって随分と可愛い……………いえ、変わりました」

『可愛い』発言は流石に後が怖いので言い直す。

「む？そうか、私としては変わった覚えはないのだが」

そういつて、真剣に考える。

「ノーマさんと知り合ってからというもの、私の中にある『闇の福音』という理想像が音を立てて崩れているんですけどね」

エヴァンジェリンさんに聞こえないように喋る。

「まあ、私のことは置いて。試合を続行するか？」

「折角ですし、やりましょう」

そういつて、距離を取り、構える。エヴァンジェリンさんも笑って扇子を広げる。

「来い、刹那」

「はいっ」

言葉と共に駆ける。

『勝者！！！！！！！桜咲刹那選手！！！！！！！！』

朝倉の解説に会場が沸く。そしてそれに反比例してノーマが不機嫌になる。

「これでは応援した意味がない」

「いいんじゃないの？応援しただけでもアイツは嬉しかったと思うぜ？」

俺がそういうも、ノーマは相変わらず不機嫌だ。俺はノーマの頭を撫でて。

「んじゃ、応援したのに負けたエヴァに文句でも言いに行くか」

「む？そうだな。この私が応援したのに負けたのだ。文句ぐらい言ってやらんな」

そういつて、歩き出すノーマ。すると、隣にいたクーが笑いながら。

「保護者も大変だな、アマト」

「本当だよ。特にノーマは素直じゃないから尚更だ。さて、エヴァのことも気になるし、見舞いがてら行つて来る」

そういつて、俺はノーマの後を追いかける。

「む？思つたより酷いのか？」

「アバラが数本折れたただけだ。騒ぐほどじゃない」

「それは騒ぐほどだと思ふがな」

エヴァの言葉にアマトが苦笑しながら喋る。

「それよりも、エヴァ。この私が応援してやったというのに負けるとはどういうことだ！！」

「なに、若い奴に華を持たせてやるのは当然だろう？それに勝つと約束したわけではないからな」

「むぐ………」

確かにそうだが。むぐ、納得いかん。

「まあ、悪かったとは思っているよ。期待に応えられなかったからな」

そういつて、済まなさそうな顔をする。そんな顔をされては怒る気も失せてしまう。

「ほら、ノーマ。エヴァが珍しく謝ってるんだから。お前も許してやれよ」

「むぐ。わかった、許してやる」

アマトにも言われる。これでは私が悪いみたいではないか。

「む？そうか、それはよかった。それにしても普段と違う態度というのは肩が凝るな」

そういつて、意地悪な笑みを浮かべ、肩を揉んでいるエヴァ。

「もしや、今のは演技か？」

「ん？当然だろう？なんで私がお前の期待を裏切った程度で殊勝な態度を取らねばいかんのだ？」

そういつて、クツクツと楽しそうに笑う。

「いい度胸だ。ならば私も普段どおりに接してやる。どのへんが痛いんだ？ここか？ここか？」

「いつ？！コラ、バカ！！やめんか、傷に響くだろうが！！！！あつ！！！！！」

「騒ぐともつと傷に響くぞ」

「あぐつ！？ノーマ、完治したら覚えてろ、ってそこは止める！！！！！」

「ええつと、いいんですか止めなくて」

「ああ、二人とも楽しそうだからな。止めるのは駄目だろ」

刹那の言葉に笑いながら返す。

「ふう。やはり汗を掻くのはいい物だな」

「ぐつ！？後で覚えてろよ」

とても清々しい笑顔で汗を拭ったノーマと痛むのか、わき腹を押さえ、目尻に涙を浮かべているエヴァが弱々しく呟く。

「なあ、エヴァ。ふと疑問に思っただけだ」

「ん？何をだ？」

俺は今までのエヴァを見て疑問に思っただけを口にする。

「お前、元は人間じゃないのか？」

「え？そうなんですか？！」

俺の言葉にエヴァより先にネギが驚く。

「根拠は？」

「そうだな。色々あるけど強いて言うなら勘だ」

そういうと、エヴァは楽しそうに笑う。

「そうか、勘か。ふむ、間違っではないよ。私は10の頃まで人間だった。それで他に聞きたいことは？」

「それだけで充分だ」

俺の答えが気に入らないのか、顔を顰める。

「お前な。ここはなんで私が吸血鬼になったのか深く聞くのが普通だろうに」

「確かに興味が無い訳じゃない。けど、聞いていい物と悪い物の区別くらいは出来ているさ。それに」

「それに？」

俺は笑って。

「聞いても聞かなくても、俺はお前に対する態度を改めたりしないからな」

そういつて、笑う。エヴァは俺の言葉に呆れた笑みを作る。

「まったく、とんだお人好しだ」

エヴァがそういうと、アナウンスが流れる。

「んじゃ、俺は観客席に戻ってるわ」

「あ、僕も行きます。確か次、小太郎君の筈だし」

「あ、待ちなさいよネギ。ほら、刹那さんも行くこつ？」

「あ、そんな急がなくても間に合いますよ」

「「慌しい奴らだ」」

私とエヴァが同時に呟く。そして互いに顔を見合わせ、笑う。

「では私も行くか」

「いや、お前には大事な話がある」

「ん？」

私はエヴァを見る。

「お前に私が何故、吸血鬼になったのか、聞いて欲しいんだ」

「私にか？」

エヴァが頷く。そして笑みを作ると。

「勿論、私の話を聞いた後はお前の昔話だ」

「なんだ、私もか？」

「別にいいだろう？ 此処には私とお前だけしかないし。それに…  
…なんだ」

エヴァは少し気恥ずかしそうにそっぽを向きながら。

「友達………だからな。少しでもお前を知りたいのは当然だろう？」

その言葉を聞き、少し嬉しくなる。

「ふふ、そうだな。友達だからな。私たちは」



そういつと、エヴァも笑う。そしてエヴァは一つ一つ思い出すように喋り始める。

Re・No:53「幸福とは？」（後書き）

どうも、フィロです。遅くなって申し訳ありません。今回は刹那とエヴァの戦い。そしてノーマとエヴァのお話です。次回は小太郎とクーネルです。ご期待ください

## Re・No:54「力の差　そして侵入者」

『では第二回戦、第一試合を始めさせていただきます！！！』

「っし！！！いったるか！！！」

気合の言葉と共に小太郎が歩き出す。そして、チラリと対戦相手を見る。

「くれぐれも油断は禁物じゃぞ？」

「分かってる。それよりも俺との約束忘れんなよ。爺ちゃん」

そういつて、ニカツと笑う小太郎。自然とこちらも笑みを作る。

『それでは第二回戦！！第一試合Fight！！！！！！！！！！』

『犬上選手気絶！！！！！！クウネル選手の勝利！！！！！！！！』

アナウンスの声と共に会場が沸くも、俺は運ばれていく小太郎を見つめる。

「アイツがあっさりとやられるなんて」

少し正直すぎる所はあるものの、実力で言えば、俺より上の小太郎が手も足も出ない。

「アイツ何者だ？」

クーがそういうも、答える人間は誰も居ない。そんな中、小太郎が担架で運ばれていく。

「流石に今は声を掛けないほうがいいな」

男つてのはこういう時、声を掛けられると凹むからな。

「あの魔法。あの男、アルビレオ・イマか」

やはりこの学園には秘密があったか。これは報告しないといけないな。

「流石に此处では人目に付くな」

場所は観客席。連絡を取るには此处から離れたほうがいいだろう。

「やれやれ、面倒だな」

少し興味があつただけけれど。まあ、ネットというので中継をやっているのだから問題は無さそうか。そう思い、僕は周りの人間にぶつからないように動きながら会場を抜け出し、人気の無い裏路地に入る。

「さて、と」

呟き、集中する。

『聞こえるかい？テルティウム？』

念を飛ばす。数秒間を置いて返事が返ってくる。

『聞こえているよ。それと目覚めたときに言っただけど、僕のことはフェイトと呼んでくれ。その名で呼ばれるのは嫌いなんだ』

やや、不機嫌な声だ。ふむ、何故その名に拘るのだろうか。所詮、名前なんて僕たちにはあまり意味がないのに。

『君の考えている事はなんとなく分かる。けど、これは気分の問題なんだ。君も僕と同じように番号ではない名前を持てば分かるよ』

成る程。それはまた興味深いな。だが、先ずは報告だ。

『好奇心、というのでこの地に来たが。此処はかなり異質だな』

『とうとうっ』

僕はこの都市の事について簡単な情報を纏める。

『まず第一に此処の結界だ。広範囲の探知結界に加え、捕縛結界の様な、まるで中から何かを逃がさないようにする結界が敷かれている。真祖の吸血鬼が力を制限されているのも、この結界の応用だろう』

『中から？ということは』

『ああ、そしてかのアルビレオ・イマを確認した。彼ほどの人間が此処に居るということは』

『成る程。どうやら其処は当たりの可能性が高いね。それで？君はどうする？』

『言われ、考える。さて、僕は此処で何をするべきか？数分、考える。』

『やはり、もう少し探りを入れてみる。此処が本当にあの方がいる場所なのか分からないからね』

『分かった。デユナミスにはそう報告しておくよ』

『報告は以上だ。これ以上は魔法使いに感知されるかもしれない』

『あ、そうだ。君もこの際名前を決めたらどうだい？』

『名前を？』

『ああ、君。いや、僕たちアーウェルンクスシリーズは名前が特徴的過ぎるからね』

言われ、確かに。と思う。

『検討しておく』

『そうか。では次に会った時、君の名前を聞く楽しみが出来た。では検討を祈るよ。クウイントウム』

念話を切る。表通りに出て歩き始める。

「名前、か」

初めての試みだ。どんな名前にしようか。そう考えながら僕は歩き出す。

## Re・No:54「力の差　そして侵入者」（後書き）

はい。更新が遅くなって申し訳ありません。フィロです。今回は少し短いですね。小太郎を省いたのは試合短縮の為です。まあ、今回のメインは風のアーウェルンクスことクウイントウムの登場です。

まあ、時系列ド無視ですが、ご勘弁ください。物事にはイレギュラーが付き物です。それに少しくらいオリジナル入れないと読者の皆さんも面白くありませんし。私自身、原作をなぞるだけじゃ楽しくありません。さあ、何故クウイントウムなのか？セク子じゃないの！？という意見の方もいますが、これは個人的に好きなアーウェルンクスがクウイントウムだからです。因みに序列は5,4,6,3といった感じです。まあ、ビジュアルで選んでるのバリバリなんですけどねwwwいいですよ、あの髪。

さて、ここで読者アンケート。作者的には初めてかな？内容はクウイントウムの名前です。特に縛りはないんですけど、私が考えると『鍵型の剣を逆手で振り回す少年』や『大剣を振り回す銀髪の青年』しか思い浮かばないのです（二つとも名前に風が関係しているせい）。皆様のご意見待ってます。



Re・No:55「クウイントウムの麻帆良観光」

「その外人さん！！！！たこ焼きは如何〜？」

そんな声に足を止め、振り向くと『特製たこ焼き！！！！』と大きな看板が目を引く、屋台があった。声を掛けてきたのは客寄せと調理を両立している気の良さそうな女性だった。

「タコヤキ？この丸いのがそうなのかい？」

「おお！？君、結構日本語上手だね。そう、これがたこ焼き。蛸の足を小麦粉で包んで一口サイズで焼くんだよ。ふむ、試しに一個食べてみる？気に入ったら買ってね」

そういつて、爪楊枝と呼ばれる物に刺さった、たこ焼きを差し出してきた。それを受け取り、たこ焼きを見つめる。こんがり焼けた小麦粉にソースが掛かり、その上に鰹節が踊っている。何とも香ばしい香りだ。ソレを口の中に入れ、咀嚼する。少々熱いが、我慢できる温度だ。

「む？」

口の中に広がるソースの香りと鰹節の風味がマッチしている。そして柔らかな小麦粉の中に隠れているタコの歯応えが素晴らしい。

「どう？美味しいでしょ？」

たこ焼きを飲み込み、頷く。その後、取り敢えず六個入りを二パツク買い、歩き出す。

「ふむ、旧世界の人間は色んな物を作るんだな」

たこ焼きを食べながら、出し物を見学する。食べ物のお店から飲み物、玩具を的にしている射的。金魚を掬う店、くじ引きをやっている店、広場では漫才で悪の戦士を倒す『漫才ヒーロー』という物がやっている。中々作りこまれていて、漫才初心者の僕でも十分楽しめるものだった。

『クウイントウム』

ふと、自動販売機で買った『マンゴーパイナップル』というよく分からないが味は良いジュースを飲んでいると、念話が届いた。

『なんだい？デユナミス。僕は今、忙しいんだけど』

『ほほう？何か有用な情報でも手に入ったのか？』

有用な情報？そうだね。

『タコヤキというのはとても素晴らしい食べ物だ。そして今見ている漫才ヒーロー』『マンザン』も中々丁寧に作りこまれている。漫才、という物知らない僕でも十分楽しめるよ』

『お前は何の調査をしているのだ！！！！！』

念話越しに怒鳴られる。念話で怒鳴るとは器用な事をする。

『何を怒っているんだい？僕が此処にいるのはこの場所に興味を持っただけだよ。そこで僕が何をしようと僕の勝手。違つかい？』

『む？確かにそうだが、もう少し我らの計画に関する情報は無いのか？』

そう聞いてくるデユナミスに先程テルティウム（フェイトと呼んだほうがいいのかな？）に伝えた情報と同じ事を伝えた。すると、デユナミスは数秒黙り込む。

『クウイントウム。貴様が睨んでいる世界樹。詳しく調べられるか？』

『無理だろうね』

そういつて、世界樹に目を向ける。世界樹の周りにはかなり巧妙な結界が張ってある。

『あの樹の周りには此処に住んでいる魔法使いも知らされていない結界が張ってある様だ。しかも遠目から見ると、抜け穴が無い。見た所、陰陽術と魔法が合わさった物のようだ。かなり厄介な結界だね』

『そうか、だがその様な代物を世界樹の周りに張っている、という事は』

『間違いなく、あの場所の何処かに目的の物があるね』

そういつて、最後のたこ焼きを口の中に入れる。少々冷めてしまったが、味は特に変わらない。

『僕はこのまま、麻帆良の調……観光をするけど、何か要望はあ

るかい?』

『そこは調査と言って欲しいが、まあよい。こちらからは特に無い。そちらで計画に有用な情報が見つければ、順次報告してくれ』

『了解』

そう答えると念話が切れる。広場に目を向けると漫才ヒーローは終わったようだ。

「さて、どうしようか」

そう呟き、ゴミとなったたこ焼きの入れ物と飲み終わった紙パツクを指定のゴミ箱に入れた時、一際大きな歓声が聞こえた。見ると大スクリーンに武道会の映像が流れていた。どうやら僕がいなかった時にやっていた試合を流していたようだ。

「まあ、フードの男がアルビレオ・イマなら順当か。そして気の毒だね。ネギ・スプリングフィールドは英雄と二連戦か」

そういつて、歩き出す。

「は……………離してください」

「いいじゃん、俺たちと一緒に学際見ようぜ?」

そんな声を聞き、声の方を向く。そこには数人の男子に詰め寄られて困っている少女がいた。

「変に関わって目を付けられるのは不味いな」

そう思っていると、彼女が男の手を振り解いた。その一瞬、彼女の右の二の腕に『ある物』が見えた。そして頭部に鈍い痛みが奔る。

「エディルレイドは出来るだけ保護しろ……か。僕たちを創った主は余程彼女たちが大切と見える」

まあ、重要事項なら従わなければいけないな。

ど、どうしたらいいんでしょうか？会場で待っているノーマにジューズを届けないといけないと。こんな事ならアマトさんと一緒に来れば良かったかも。

「君たち、彼女が困っているんだ。そろそろ止めた方がいいんじゃない？」

そんな声に振り向くと、そこには白髪の男の子が立っていました。歳はネギ君と同じくらいかな？

「あ？何か用かがキ？俺たちはこのお嬢さんとお茶するだけだ」

そういつて、男の人が男の子に顔を近づけます。すると、男の子はため息を吐きました。まるで面倒だ、と言わんばかりに。

「君たちが彼女と？冗談はその顔だけにしてくれないか？どう考えても彼女と君たちでは会話の一つも出来ないだろう？」

無表情で淡々と男の子はそう述べる。すると、男の人は顔を真っ赤にして男の子の服を掴む。すると、男の子は呆れた様のため息を吐いた後。

「うおっ?!」

軽々と自身より一回り大きい相手を投げる。投げられた人は地面に頭から叩きつけられる。

「あまり、事を大袈裟にしたくないんだ。それと、服もこれしか無くてね。出来れば、この場から去ってくれと嬉しいんだけど」

「デメエ!!!!」

そう、叫び。男の人たちが襲い掛かる。それを見た男の子がため息を吐いた。彼は男の人達の攻撃を避け肘や拳、膝などあらゆる攻撃を繰り出す。それを受けた人達は、まるで映画の様に次々と放物線を描き、飛んでいく。そしてあっという間に男の人達は撃退されていた。

「あの動き『陳式太極拳』だ!!!!」

野次馬の誰かがそういうと、周りがざわつき始める。

周りの人間が騒ぎ始めた。少々、やり過ぎたな。

「あ、あの………!!」

絡まれていた少女が駆け寄る。

「怪我は無さそうだね」

「えっと、ありがとうございます!!」

深々とお辞儀する少女。

「じゃ、僕はこれで」

「あ!!!!えっと、助けてもらったお礼がしたいんです!!!!」

そういつて、僕の腕を握る彼女。困ったな、振り解くのは簡単だけど。こんな大勢が見ている中でそんな事をしたらどんな事になるやら。

「取り敢えず、ここから離れない?」

「え?そ、そうですね。じゃあ、こっちに」

そういつて、僕の手を引っ張る。意外と力がある事に驚く。

「この方向は………武道会場か」

眩き、彼女の歩調に合わせる。ちて、どろじょつか。



Re・No:55「クウイントウムの麻帆良観光」（後書き）

どうも、更新が遅くなって申し訳ありません。今回はクウイントウムの麻帆良観光とリイリアとの出会いです。因みにこの作品ではエディルレイドという種族は結構重要なポジションなのです。そして書くところかなり大変なので飛ばした準々決勝。では次回もご期待ください。

Re・No:56「準決勝」

「ジュースだけでなく、男まで連れてくるとは。意外と積極的なんだな、リイリアは」

「ち、違います！……この子は私を助けてくれて」

そういつて、リイリアは複数の男に絡まれていた所を助けてもらった事を説明してくれた。まあ、それでも試合が終わってこっちに戻ってきたラサティの視線は依然、鋭いままだが。

「成る程、事情は分かった。それで？リイリアはどうやってお礼をするんだ？」

そういつて、リイリアが持ってきたジュースを飲みながら、ノーマが喋る。

「えっと……………」

そういつて、リイリアは悩み始める。俺はため息を吐いて。

「決めてなかったのか。それで君はえっと？」

そういえば、名前を聞いてなかったな。その少年（ネギと同年の様だから子供かな）は俺に気付き。

「クウ……………いや、カームだ。カーム・アーウェルンクス」

「無風……………<sup>カーム</sup>か。見た所、貴様は外部の人間だが、泊まる場所は

あるのか？」

ノーマの隣、通路の手摺りに寄り掛かった体勢のエヴァが値踏みするような視線で問い掛ける。

「……………そういえば、その事を忘れていたね」

そう、淡々とカームが呟く。まるで野宿でも構わない様な感じだ。それを聞いたエヴァが楽しそうに笑って俺を見る。

「だそうだ。どうする？天」

「まったく『興味があるから、泊まらせてみてはどうだ』だろ？素直じゃねえな」

そういつて、ガシガシと頭を掻く。そして一人置いてけぼりをくらうカームを見る。

「ああ、カーム？お前が良ければだが、ウチに泊まるか？」

「いいのかい？僕は他人だ。もしかしたら君の財産を持っていくかもしれないよ？」

「本当にそう思っているなら聞くわけ無いだろ？何と云うか、お前は見る限り悪人じゃないと思うんだ。勿論、善人だとも思ってない」

素直にそう告げるとカーム以外の人間が哑然となる。

「何と云うか素直な人だね。アマトは」

そういつて、カームは無表情に告げる。けれど、何処か呆れているような声音だ。俺は苦笑して。

「まあな。それでどうする？」

カームは顎に手を当てて。

「そうだね。迷惑でなければ泊まらせてもらうよ」

「迷惑な奴らならかなり前からウチにいるから今更だな」

そういう訳でカームがウチに泊まることになった。すると、観客が騒ぎ始める。会場を見てみるとネギと祖父さんが入場してきた。祖父さんは何時も通り飄々としているが、問題はネギだ。どうも、様子がおかしい。

「不味いね。ネギ君、何があつたか解らないけど試合に集中できていない」

ローウェンの言葉を聞き、自分の勘違いじゃないと確信する。

「どうした？何やら思いつめたような顔をしているが」

「え？えっと………何でもありません」

そういつて、慌てて構えるが動揺しているのは明らかだ。さてこの原因は誰だろうか、そう思つて視線を巡らすと入り口付近でクウネルを見つける。クウネルは口元だけ笑みを浮かべ、立てた人差し指を口の前に立てる。何やら理由がありそうだ。

「ふむ、それなら仕方ない……」

そう呟き、ネギを見る。ネギは真つ直ぐワシを見ているが上辺だけだ。内面では色々な事を考えているのだらう。

「まあ、試合の中で起こすとするか」

そう呟き、無造作に両手を垂らす。それに怪訝な表情をしたネギは開始の合図が告げられる瞬間、表情を引き締め。

「杖よ（メア・ウィルガ）！！！！！！」

そう叫び、彼の左手に杖がやってくる。

Fight!!!!!!

同時に瞬動で背後に移動した。ふむ、悪くは無い。

「なっ!？」

確かに最初の奇襲は成功するとは思ってなかった。けど、体勢は崩れるかもしれないと思ってたのに。

「まあ、初手としては悪くは無いの」

後ろを向きながら、天斗さんは僕の杖を右手で受け止めていた。しかもダメージは全く無い。

「しかしな。何を悩んでいるかは知らんが。片手間でワシの相手が出来ると思ってもらっては困るの」

告げた瞬間、左の米神と右足に痛みが奔る。瞬間、天地が逆転していた。

「え……………」

「先ずは目を覚ませ馬鹿者」

メキッと不吉な音が脇腹から響く。

ドンッ……!という音と共にネギが場外に突っ込み、派手に水飛沫を上げる。

『な……………なんという、一瞬の攻防！！私全く見えませんでした！！というよりネギ選手は無事なのかー！？』

さて、これで目は覚めたかの？

「くっ！！！」

声に視線は向けず、右腕で自らの背後に裏拳を放つ。瞬間、放った裏拳がネギの顔面にめり込む。

「ぐっ！？」

ネギが動こうとしたが、その前に足を払い。バランスを崩す。同時に脇腹に拳を入れる、フリをして無防備な首に手刀を入れ、身体を回転させ、腹部に正拳を叩き込む。そのまま、ネギは数メートル吹き飛び、床に転がる。

「が……………はっ！？」

腹部を抑え、よろよろと立ち上がる。それを見てため息を吐く。

「そろそろいいじやろう。ちゃんと本気で掛かってくるといい」

そついうが、ネギは理解しておらず、攻撃を仕掛けてくる。ため息を吐く。

「お主は物事を深く、長く考えすぎじゃ。確かに時にはそれも良い。一度立ち止まって考え込むのも悪くは無かるう」

ネギの攻撃を捌きながら告げる。

「しかしな。今はその考えを捨て、何も考えず我武者羅に進んでみてはどうかの？」

「何も考えず？」

そういつて、ネギは距離を取る。ワシは頷き。

「お主は確かに人とは違う過去や経験を持つておる。それに立場も特殊だろう。だが」

そういつて、笑みを作る。

「主はまだ子供であろう？子供がそんな小難しい事を考えるでない。どうも此処の者達はそういう特殊な面のお前だけしか見ていない様だな」

そういつて笑う。まったく近衛もこんな子供に何をさせたいのか。暫く遭わんにボケたか？

「お主はもう少し単純になった方が得すると思うんだがのう」

「そんな事いきなり言われても困ります」

その言葉に苦笑する。まあ、今までの考えとは真逆の事だ。いきなりは無理であろう。

「なら、今この試合だけ何も考えず、戦って見せよ」



そういつて、構えを取る。ネギは何か考え、だが直ぐに頭を振り、ワシを見る。真っ直ぐな眼だ。

「行きます」

「来い」

言葉と共にネギが駆ける。間合いに入った瞬間、ネギの腰に蹴りを放つ。だが、ネギはそれを跳んで避け、ワシの蹴り足に手を置くとその場で独楽の様に回転して蹴りを放ってくる。それを後ろに仰け反って避け、ネギの蹴り足を掴んで投げる。

「ふっ」

「っ！？」

空中にいるネギに近づきながら拳を放つ。拳を横に受け流したネギは拳に乗せた『魔法の矢』を放ってくる。それを手で払う。その間にワシの身体を軽く蹴って距離を取る。

「ふむ、動きは良くなったの。じゃが、その程度では無いじゃろう？」

言葉と共に踏み込む。拳を繰り出すが、ネギはそれを手で払い、そのまま時計回りに動いて肘を繰り出してくる。

「ふっ！！」

それを避け、足を払う。だが、それを読んでいたのか、軽く跳んでネギが避け、その場で回転し、ワシの頭上から蹴りを繰り出す。

咄嗟に後ろに跳んで回避。また距離が開く。

「ふう、しかしながら良く動く。まるで猿だな」

「さっ!？」

ワシの言葉に何か愕然とした表情をしている。それを見て笑う。

「さて、少々速いが次で決めるかの」

ネギもそろそろ限界じゃろうからな。そう思って、右手に左手を添え、気を集める。

「この一撃のみ、本気で打つ。死にたくなければ、しっかりと避けるんじゃぞ?」

「はい!!--!!」

真っ直ぐな返事と共に構えを取ったネギは気を纏う。少々丁寧すぎるのが、生真面目な彼らしい。

『こ……これは両者睨み合って……凄まじい緊迫感です』

アナウンスの声が何処か遠い。ここまで楽しめたのは久しぶりだ。

「っ!!--!!」

一瞬、ワシの動きに遅れてネギが動く。ワシが拳を振るう。ネギはそれを瞬きせずに見つめ、首のみ動かして避ける。拳が掠った頬から鮮血が弾ける。そして腹部に衝撃が奔り。意識が飛んだ。

「む……………」

さっきまで気絶していた祖父さんが目を覚ました。

「大丈夫か祖父さん？」

「む？天か。どうやらワシは負けたのか？」

「ああ、細かい事は祖父さんが良くわかってると思うから省くけど、ネギの勝ちだ」

「そうか……………」

呟き、目を瞑る。思い出すのは最後の一撃。確かに本気の攻撃だった。しかしワシは負けた。

「ふふ、若い頃の様にはいかな」

やはり老いたか、無理も無い。ふと、天が嬉しそうに笑っていた。

「なんだ、祖父さん。てつきり悔しがると思ってたけど嬉しそうな顔してるな」

「そうじゃな、若い頃のワシなら悔しがっていただろうな。何、年を取るのも存外悪くは無い。若い者の成長が嬉しくなるからの」

そういつて、上半身を持ち上げる。手を出そうとしたが、必要はなさそうだ。

「それ、そろそろ決勝が始まるであろつ。見に行つてくるといい」

「分かった。祖父さんも無理すんなよ?」

そういつて、俺は医務室を出る。すると学園長とぶつかりそうになった。

「おっと、すいません」

「おお、こちらこそ済まんの」

そういつて、学園長は祖父さんがいる医務室に入つていった。少し気になったが直後のアナウンスに慌てて客席に向かう。

## Re・No:56「準決勝」(後書き)

どうも、フィロです。今回はクウイントウムの宿泊場所とネギ対天斗でした。クウイントウムの名前ですが、色々悩んだ末、カームとなりました。カームとは『無風』を意味する英語です。最初はギリシャカラテンにしようと思っていましたが、フェイトが英語なので英語で統一しました。次回は漸く決勝戦。お楽しみに

## Re・No:57「決勝戦とカームの調査」

「はあゝ、派手だな」

「……………この光景を見て、その発言か。君は呑気だね」

左に立っている天を見ながら、呆れる。

「仕方ないだろ？こんなの見せられてるんだから」

そういつて、苦笑する。まあ、確かにそれは僕も同感だね。

『ぬうおゝ！！！！アルビレオ・イマ~~~~！！！！！！！！！！』

『五月蠅いよ、デユナミス。それと僕の右目を返してくれないか？』

念話を通してハイテンションなデユナミスの声が聞こえる。全く試合が始まった途端これだ。

『まあ、待て。私もこの試合には興味があるのだ』

『全く』

何でも僕達アーウェルンクスシリーズとデユナミスは製造目的が大きく違うらしく。僕達アーウェルンクスシリーズが前線に立ち、デユナミスが後方で指示を出す（といってもデユナミスも十分前線に出れるが）といった感じらしい。故に僕らの五感はデユナミスと共有出来る。効率の良い事だが、これでは満足に試合を見れない。

「ん？」

そこまで考え、ふと気付く。

「何故、僕はこの試合を見たいのだろうか？」

ハッキリ言えば、この試合の見所は無い。戦力調査といつても、サウザンドマスター千の呪文の戦力は見た所、十年前と同様。息子の彼に至っては論外。僕達特有の障壁すら抜けないだろう。それなのに僕はこの試合を見たいと感じている。

「どうかしたんですか？」

「ん？ いや、何でもないよ」

そういつて、会場を見る。そこでは目にも止まらぬ戦いが繰り広げられていた。時に地上、時に空中と激しく近づき離れる、まるで嵐の様に。

「これが英雄の力か」

思わず、呟く。僕たち『完全なる世界』を壊滅状態にまでさせたのも頷ける。

「ネギの奴、嬉しそうだな」

「見えるのかい？」

あの高速戦闘を視認出来るとは思えないが、案の定彼は首を横に振って。

「何となく、そんな気がするだけだ」

そういつて、後頭部を搔く。すると、凄まじい魔力を感じる。視線を魔力を感じた方に向けた瞬間、轟音と遠くで水柱が立っていた。大気に残っている魔力で調べた限り、雷系の魔法を放ったらしい。

「此処の人間は本当に魔法を秘匿する気があるのか？」

軽く頭を抱える。

『クウネル・サンダー選手！！優勝！！！！！！』

朝倉の声が会場に響く。

「それにしても、速過ぎて見えなかったな」

殆ど残像しか見えなかった。

「それでも目で追えるなら上出来だぞ？」

隣のエヴァが俺に言う。すると、手摺りから躍り出て会場に向かう。



「なんだ？ネギの心配か？」

「なに、ちょっとした野暮用だ」

そういつて、エヴァが会場に向かう。

「それじゃ、僕は麻帆良祭の見学に戻るとするよ」

「ん？そうか。案内してやろうか？」

カームは首を横に振る。

「いや、いいよ。こういうのは自分で見たいからね」

「まあ、確かにそうだな。けど、お前家の場所知らないだろ？」

聞くと、カームが頷く。俺は頬を掻いて。

「やっぱ誰か案内付けたほうが良くないか？」

「必要ないよ」

俺の言葉にカームが答える。

「大まかな場所さえ教えてくれれば、それでいい」

言われ、仕方なく家の場所を教える。

「それじゃ、日が落ちたら君の家に向かうよ」

「了解。多分、その時間なら誰がいるだろう？」

俺が聞くと、クーとレンが頷く。それを確認したカームは頷くと。

「じゃあ、また後で」

そういつて、歩き始める。カームが見えなくなってから会場を見ると、何故かエヴァがクウネルに回し蹴りを放っていた。

「さて、何処から調べるか」

試合会場から出て、呟く。といつてもこれ以上調べるのは少々厄介だ。

「世界樹の結界を解くには時間が掛かる。かといつて、調べようとしてもその近くは一般人の出入りを禁止されている」

多分、世界樹周辺では見えない所で魔法使いが複数見張っているだろう。

「無理して動いては駄目か。派手に動いてもメリットは無さそうだしね」

そう呟き、近くのオープンカフェに入る。

「ご注文は決まりましたか？」

「そうだね。アイステイーを一つ」

「畏まりました」

その後、アイステイーを受け取り、一口飲む。

『さて、なにやら水面下で騒がしく動いているようだけど。調べたほうがいいかな？』

『ふむ、その後の行動に支障を来たかどうか分からぬからな。調べておいて損は無いだらう』

デユナミスとの念話をしながら視線を上に向ける。空には飛行船が飛んでいる。

『でも、何処から手を付けようか？』

『手当たり次第で良からう。あまり目立たぬようにな』

なら調べる場所は慎重に選んだほうがいいな。そう結論付けてアイステイーを飲み干し、会計を済ませて歩き出す。取り敢えず、この変な魔力を調べてみるか。

「場所はその飛行船か」

近くの路地に入り、瞬動で建物の屋根に跳び上がる。

「さて、飛行船は殆ど真上、ただ高度がそれなりにあるか」

まあ、問題は無いか。

「ヴィシュ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト 風よ（ウェンテ）」

呟くと周囲の風が集まってくる。その風を操って、舞い上がる。

本来この魔法は風の防御魔法だ。だが、風の向きを変えればこうやって飛翔することも出来る。こんな事せずに『雷化』すればもっと速く動けるのだが『雷化』には少なくとも魔力を使用する。

「これぐらいの魔力なら感知されにくいだろうけど、流石に『雷化』は感知されるだろうね」

別に戦っても勝てるが、無理に騒ぐ必要は無い。

「さて、あの飛行船の上か」

少し周囲を警戒しながら飛行船に近づき、飛行船の上に到着する。

「成る程、効率よく魔力を得る事が出来、外敵には発見され難く、且つ大規模な魔法を行える、か。此処を選んだ人間は中々頭が切れるようだな」

僕は目の前の魔方阵を見ながら呟く。それにしてもこれほどの大規模な魔方阵を何の目的で使うのだろうか？疑問を覚えながら魔方阵の解析を行う。

「なんだ、これ？幻覚、いや認識魔法？一体、何を？」

解析した結果。この魔法は発動と共に効果範囲の人間にごく自然的に任意の事柄を認識させると言った魔法だ。分類上は洗脳魔法に近い。

「しかし何を認識させるつもりだ？」

解析を続け、効果範囲を探る。そこで思わず驚く。

「地球全域だって！？馬鹿げているにも程度があるだろう。そんな大魔法、個人の魔力量を超えている」

しかし、そこまで考えて気が付く。個人の魔力量が駄目なら他から取ってくればいい。例えば、地脈などから。

「確かにこの麻帆良の土地は優れた地脈を持っている。だが、それだけでは到底、世界を覆うことは出来ない」

だが、と考える。だがもし、地脈を通して世界各地にある麻帆良に匹敵する土地とリンクさせる事が出来れば。そして解析した結果は今、考えたとおり。

「確かにこの理論なら可能だ。術者にリスクは殆ど無い。だが、なんの目的で使うつもりだ？」

今更、世界に何を認識させるつもりだ？科学で解き明かされたこの世界に隠されているものと言えば。

「魔法……………か」

呟き、ため息を吐く。

「厄介だな」

言葉と共に考える。この魔法陣を作った人間が何を思っ  
て魔法を世界に認識させるのは興味など無い。問題は魔法を知らしめる、  
ということは確実に『魔法世界』についても認識させるはずだ。

『デュナミス、問題が起きた』

『問題？』

直ぐに念話でデュナミスに報告する。

『ふむ、確かに厄介だな。もし、その魔法が完成でもすれば、我ら  
の計画に大きく支障が出る』

『まあ、魔法で強制的に認識させられたもう一つの世界が何時の間  
にか消えている。というのは流石に不味いからね』

これが魔法やそれらの知識を全く持っていない人間なら問題はない。  
元々無いと思っただけ物が無くなったからと言って問題はないのだ。  
だが、これがあると知った人間であると厄介だ。

『まあ、我等は使命を全うした後は消える運命。そこまで深く考  
える必要は無いが。下手をすれば不安要素が増えてしまう』

『そうだね。もしかしたらネギ・スプリングフィールドがそちらに  
向かうかもしれない』

『その程度の不安要素なら問題は無い。問題はその認識魔法そのものだ』

確かに、と思う。

『どうする？この魔法陣。消し飛ばしたほうが良いかい？』

少々派手になるが、この状況なら早めの花火と間違われるだろう。

『いや、今は待て。そもそもこれほどの大魔法。隠すには限界がある。そしてその地にはアルビレオ・イマと高畑・Ｔ・タカミチがいる。少なからず気付いている物もいる筈だ。そして必ずその者達は行動を起こすだろう。その時に乗じて動いた方がお前も動きやすい。ただでさえ、先の事件でテルティウムが派手に動いているのだ。無理して派手に動く必要は無い』

『了解。じゃあ、僕は街に戻るとしよう。こんな場所に監視の一つも付けないのは不自然だからね』

念話を切ると同時に姿勢制御をしていた魔法を解除する。

「つつ」

同時に物凄い烈風が身体を襲い、飛行船から弾き飛ばされる。無理もない、場所は低いと言っても地上数十メートル。障害物の無い空の上では風を遮る物など無い。

「……………」

そのまま、風に流されつつ落下し、着地する場所を探す。

「あそこで構わないか」

そこは何処かの屋上で誰もいない様だ。

「ヴィシユ・タル　リ・シユタル　ヴァンゲイト　吹け（フレット）  
ウネ・ウチンダス　サルタテイオ・フルウエレア  
一陣の風　風花　風塵乱舞」

極力魔力を抑え、屋上に着地する。魔力は抑えたものの、やはり突風が着地点を中心に巻き起こり、屋上に散らばっている埃やゴミ等を吹き飛ばす。

「……………派手すぎたかな？」

思わず頬を指で搔く。

「隠れてないで出てきたらどうだい？」

背後に向かって声を掛ける。すると、後ろにいた人物はあっさりと現れる。

「あははは」

見ると、頬に汗を垂らしている少女が苦笑していた。メガネを掛け、白衣を着た少女だ。奇妙なのは背中にある機械で、小型のラボラアンテナと三つ指のマニピレータが三本付いていた。そしてそのどれもが上を向き、彼女の両腕も上に向けている。どうやら降伏するつもりらしい。

「参考までに聞きますけど、何故分かったんですか？それでも光学



迷彩と探知魔法のジャミングを掛けているのですが？」

確かに探知魔法の類で彼女を認識しようとしたが上手く出来なかった。僕の探知魔法が効かないところを見ると他の魔法使いでも無理だろう。

「僕は風を使つて周囲の生き物がいる場所をおおまかに感知できる。君を見付けたのは先程の突風だね」

まあ、突風は偶然だけだね。この能力は特異な物だが、別に僕に限ったことじゃない。フェイトは大地の僅かな震動や歩行速度で個人を特定できるし、四番目のクウアルトウムは周囲の温度変化、六番目のセクストウムは湿度変化などで物体を区別できる。

「ええっと、もしかして魔法生徒の方ですか？」

「いや、僕は外部の人間だよ」

僕の言葉に彼女がホッとしたように息を吐く。

「もしかして『アッチ』の方ですか？」

「答える気はないね」

彼女の言う『アッチ』とは多分『魔法世界』の事だろう。

「ええっと、私をどうするつもりでしょう？」

「そうだね。僕はこの学園の関係者ではないから、君をどうこうするつもりは無いよ」

「そ、そうですね」

「ただ、君がこの学園にいる魔法使いたちに警戒するところを見ると『アレ』を準備した一人だろう？流石にあれほどの大魔法を個人だけで作成するには難しいからね」

僕達アーウェルンクスシリーズやデユナミスなら話は別だけど。

「……………見逃してくれませんか？」

「そうだね。この計画が『僕達』にとって特に害の無い物ならば、見逃すところだよ。けど、君たちの計画は僕達の『使命』に邪魔な物だ」

僕の言葉に少女の表情に怯えが混じり始める。どうやら完璧な非戦闘員の様だ。僕は息を吐いて。

「面倒だから、あの飛行船。落としていいかい？」

「それは駄目です！！！！魔法が不完全な状態で発動……………ハッ！？」

「成る程、それはそれで厄介だな」

そういつて、少し考える。やはり此処は見逃したほうがいいのか。

「確かに君たちの『計画』は僕達にとって邪魔な存在だ。だが、僕が表って動くのは得策じゃない」

「えっと、つまり」

「逃げてでもいいって事さ。僕が君を捕まえてしまっても特に意味は無さそうだし」

そういつて、僕は彼女に背を向ける。

「それじゃ、もし戦場で出会ったら僕と戦おうと思わないことだね」  
背中越しに彼女を見る。

「次に君は『忠告のつもりですか?』と言っ」

「忠告のつもりですか……ハッ!？」

彼女の反応に思わず笑ってしまう。まさか、本当に同じことを言うとは。僕は顔を赤くしている彼女をもう一度見てから別の建物に飛び移る。さて、何処で時間を潰そうか。

Re・No:57「決勝戦とカームの調査」(後書き)

どうも、作者です。今回は常時キングクリムゾンな決勝戦とカーム、いきなり超の魔法に気付くのお話でした。まあ、アーウェルンクスシリーズなら普通に気付くよね。そしてアーウェルンクスシリーズの特異体質ですが、勿論オリジナルです。けど、それぞれ固有属性を持っているならこれくらいは普通に出来るのでは？と思っているので気にしてません。そして最後のカームが言ったネタはどれだけの人が知っているかな？では次回もご期待ください

Re・No:58「ネギの悩みと図書館島の出会い」

「ノダテ？」

「やっぱ、知らないか」

試合が終わった後、これから何処に向かうのか、というクーの疑問に答えたのだが、案の定、首を傾げる。

「簡単に言えば、日本風のお茶会だな」

「へえ」

「本来ならもつと高貴な物だが、そこまで深く考える必要は無いな」  
納得するクーにエヴァが補足する。そして何か考えているクーに危機感を覚えた俺は早口に述べる。

「因みにお茶会、といってもお茶の味を楽しむ物だから、食べ物を出てもお茶菓子くらいだ」

「それって御代わり自由？」

「いや、流石に在庫に余裕はあるだろうけど、基本的に無理だろうな」

ていうか、キアが本気で御代わりなどしたら、在庫が切れてしまう。俺の言葉にキアがとても残念そうに項垂れる。そんな事を言っていると、途中でネギと合流そのまま日本庭園に入る。

「うわぁ、スゴイ日本庭園！！！！」

「ふっふっふ、どうだ、凄いだろう？」

「お前が威張る事じゃないだろう」

感激しているネギに何故だか偉そうにしているエヴァを注意してから改めて日本庭園を見る。確かに良い場所だ。

「結構、綺麗に出来てるな」

「ハイ？あの、天さん。この景色を見てそれだけなんですか？」

俺の一言にネギが驚いている。周囲の人達も同じ反応だ。

「京都出身は言う事が違うな」

「いや、でも作りはしっかりしてると思っぜ？流石に平等院のアレとは天地だが」

アレとは平等院にある『浄土式庭園』と呼ばれる日本庭園だ。俺の言葉にエヴァはため息を吐いて。

「一学校のサークルと国宝を比べるな」

そう言われ、苦笑する。

「なぁ、アマト。あの和服って奴、俺らも着れるのか？」

すると、クーが聞いてくる。まあ、興味を持つのも無理はないか。

「出来るんじゃないのか？おい、エヴァ。着替え場って何処だ？」

「知らん」

おい、茶道部。

「皆さん、よくぞいらっしやいました」

声に視線を向けると着物に身を包んだ茶々丸がお辞儀している。

「丁度良かった。なあ、茶々丸。着替え場は」

『ネギ君、お疲れー！！！！』

俺の言葉は元気な少女たちに阻まれる。見ると、3 - Aの生徒に質問攻めにされているネギがいた。俺はため息を吐いてもう一度着替え場の場所を聞き、ネギのところに行く。

「おい、ネギ。着替えの場所分かったぞ」

「え？あ、ハイ。ありがとうございます。あ、そうだ。皆さんも野点に参加しませんか？」

「わあ、着物着てみたかったんですよ」

「へー、中々着やすいね」

「おお、普段着ている服よりズボンが長い気がするけどな」

「ズボンじゃなくて袴だ。それとネギ、帯の締め付けが甘いぞ」

そういつて、天さんは帯を締めなおしてくれた。改めて見るとやっぱり天さんは着物を着慣れているのかとても様になっている。

「んじゃ、俺は先に庭園に行っているからお前たちも来いよ？」

「あ、はい」

僕達よりいち早く脱いだ服を片付けた天さんは着替え場を出て行く。それにしても着物を着ての作業はちょっと大変だ。

「さて、速めに戻ってきたが、いるのはエヴァだけか」

「ノーマたちの相手は茶々丸が引き受けているからな」

華やかな着物に身を包んだエヴァが座っていた。



「せっかくだ。お前が茶を点てる」

「俺は茶道部じゃないんだが」

「細かいことは気にするな」

「気にしろ、茶道部。まあ、ただ待つのも退屈だからな。俺はエヴァの対面に座り、茶を点てる。」

「ふむ、中々美味いじゃないか」

「これでも一通り、祖父さんに教わったからな。合格貰うのにどれだけ時間掛かったか」

「そういつて、天さんが苦笑する。そして僕達に気付いた。」

「お、着替えてきたな。へえ、結構似合うな」

「ちょっと動きにくい……」

「うおっ！？大丈夫か、レン？ていうか、そこで寝たら駄目だって」

「確かに綺麗な服でお洒落かもしれませんが、これではいざという

時に武器が取り出しにくいですね」

「先輩、前々から気になってたんですけど、あんな大量のミサイルやらマシンガンやら何処に隠し持っているんですか？」

「ロー、それは聞かない約束よ」

「やっぱり、姉さんにはワフク似合うね」

「そ、そうか？僕はこういうのは未だに慣れないんだが」

そういつて、クラスの皆さん、あとリイリアさんとラサティさんの友達の方達が座る。

「意外と入る物ですね」

「元々大勢でお茶を飲むための物ですから。後二、三人加わっても問題は無いかと」

金髪のお兄さん、ローウェンさんの呟きに茶々丸さんが説明する。

「レン、寝るな。アマト、何か眠気が飛ぶお茶とか無いか？」

クーさん（本名はクード・ヴァン・ジルエツトというそうだけど長いからクーにしてくれと言われた）が隣で寝そうになっているレンさんを支えながら天さんに聞いてくる。天さんは苦笑しながら、手際よくお茶を作る。

「残念ながらそんな都合の良いお茶は無いかな。まあ、一杯飲めば、眠気も飛ぶんじゃないか？」

そういつて、レンさんの前に出来上がったお茶を置く。レンさんはそれをゆっくりとした動作で一口飲む。

「ぶうえ？！ニガツ！？マズッ！？」

物凄く嫌そうな顔してお茶をクーさんに渡す。

「レンは苦いの苦手か？」

「うん、甘いのも駄目」

レンさんの言葉に天さんが苦笑する。

「おい、天。茶を作るのは構わんが。茶道部である茶々丸のお株を奪うなよ？」

「おい、エヴァ。先に茶を作らせたのはお前だよな？それと茶道部なのはお前も同じだよな？」

マスターの言葉に眉間に皺を寄せながら天さんが答える。思わず、笑ってしまう。

それから3 - Aの女子達がネギに色々悪戯をしたり、ローウェン

とシスカがお茶菓子だけでは満足できないキーアを宥めたり、クーがレンと同じように苦い物が苦手なのが発覚したりと。お前ら、もう少し静かに茶を飲めよ。

「大丈夫か、ネギ？」

「は、はい」

何処が無理してそんなネギに苦笑する。

「あの、僕にも天さんのお茶をくれませんか？」

「分かった」

そういつて、俺はお茶を作る。ネギは俺が作ったお茶を一口飲む。

「なんか、悩んでるのか？」

「え？」

「顔に出てるぞ」

そういつと、ネギが少し考える。

「父さんの事なんです」

「ああ、決勝の時か」

「はい。最後、言われたんです『俺の後を追うのは程々にしておけ』って」

「そう言われて、お前はどう思ったんだ？」

「よく分かりません。でも、そう言われて、戸惑ったのは確かです。それと今更だになって」

ネギは視線を落として。

「今まで勉強したのは何時だって父さんに追い付きたい一心だったのに。それを本人に止めておけて言われたんですから」

ネギは残ったお茶を飲み干し。

「これからどうしたらいいんでしょうか？」

「んなの、自分で考えろ」

俺の即答にネギだけじゃなく、他の皆がズッコケル。おお、この大人数でコケルとコントみたいで楽しいな。

「ち、ちよつと山吹先輩！！！！真剣に悩んでいるネギ先生にそれはないんじゃない。もつと、こう。人生の先達として何かアドバイスとかしないんですか？」

クラスを代表してか明石が講義してきた。俺は茶々丸が作ってくれた茶を一口飲み。

「だったら聞くが、他人が提示した答えに納得出来るか？」

皆が黙る。そう、幾ら他人に意見を求めた所で納得できない事柄

は幾つもあるのだ。

「まあ、俺が言える事と言えば」

俺はネギの胸に指を当て。

「たまには頭じゃなくて『ココ』に従って見たらどうだ?」

「ココ、ですか?」

ネギが自分の胸に手を当てる。

「頭で考えて何も出てこなかったら、『ココ』で動いてみる。自分で自分を決められるたった一つの部品だからな」

そういつて、笑う。ネギは少しだけ俯き、胸に当てた手を握る。

「そう、ですね」

そういつて、顔を上げて笑う。

「なんかスッキリしました」

さっきの無理しているような笑顔ではない、笑顔だった。

「それで、答えは?」

「やっぱり父さんの後を追います」

「確か『立派な魔法使い（マギ・ステルマギ）』になるんじゃない

のか？」

「なりますよ。父さんの後を追いなから」

ネギの言葉に苦笑する。

「さて、そろそろお開きにするか」

「え？もうですか？」

ネギが少し残念そうに呟く。俺は苦笑して、ネギの後ろを指差す。

「流石にアレ来たら、お開きにするしかないだろ」

「アレ？」

ネギが後ろを振り返る。そこには大勢のマスコミが近づいてきた。

「あつ、いたぞ！！！！ネギ選手だ」

「他にもエヴァンジェリン選手にラサティ選手もいるぞ！！！！」

「チツ、鬱陶しい。私は先に行くからな」

言い終わる前にエヴァが駆け出す。それを見たラサティ達も動き出す。俺も立ち上がりながら。

「お前も早く逃げろよ」

そういつて、駆け出す。

やはり先程の少女は捕獲した方が良かったかな？そう考えながら、歩いていると図書館島にやってきていた。

「ふむ、一般人以下進入禁止と思いきや、観光名所として一般公開されているのか」

なら、詳しい人間を捕まえて案内させてみるか。

「おやゝ、図書館島に興味があるのかな。ぼく？」

不意の声に振り向く。そこには長身のメガネを掛け、上機嫌な少女とほんわかした雰囲気少女、前髪で目元を隠している何処か内向的な少女、額を見せている少女が立っていた。

「此処の学生ですか？」

「うん、そうだよ。因みに『図書館探検部』というのにも入っているんだよ。ん？」

何かに気付いたのか、頭から爪先までゆっくりと眺める少女。後ろにいる内向的な少女は何故だか酷く怯えている。

「ううん。君、お姉さんと会わなかった？特に京都で」



「いや、僕は先日までロンドンにいたから。他人の空似、という奴じゃないか？」

嘘は言っていない。僕はロンドンにあるゲートからやってきたのだから。それにしても此処最近で僕の外見に見覚えがあるということ

は。

「因みに聞くけど、京都に来た覚えは？」

やはり、君かフェイト。全く、君のお陰で動きづらくなりそうだな。そんな考えを振り解くように僕は首を横に振る。

「まだ行ったことは無いね。興味はあるけど」

「そつかあゝ。いや、御免ね。変なこと聞いて。なんか君に似た少年に変なことされたからちよつとね」

君はこの少女達に何をしたんだ？

「構わないよ。初対面の人間を怪しむのは当然の反応だからね。僕は気にしていない」

そういうと、メガネの少女は安心したように笑う。

「そういつてくれると助かるよ。それで、なにやら図書館島に興味があるみたいだけど」

口元に笑みを作りながら彼女が聞いてくる。ふむ、取り敢えず彼女でいいか。

「ああ、見学したいと思ってたんだ。けれど、中はかなり複雑という話みたいだからね。変に迷ったりしたら大変だと思って」

「成る程。それで、此処に突っ立ってたんだね」

まあ、適当に誰か捕まえるために周囲の人間を観察していたんだけどね。

「そんなら、ウチ等と一緒に見学せえへん？ウチ等、結構詳しいし」

「いいのかい？何故だか後ろの彼女が怯えているけど」

「ああ、のどかはちよつと男が苦手だから」

そうなのか。けど、何故か僕を見てから怯え始めているようだが。

「僕は特に異存は無いよ。お願いできるかな？」

彼女たちは二つ返事で了承してくれた。といっても、内二人は上の空だったが。

「へえ、一人でこっちに来てるんだ。カーム君、偉いね」

「そうかい？そんな事気にしたことはないけれど」

あれから互いに自己紹介した後、僕はコノカとハルナに案内されながら図書館島を観光している。後二人は何やら込み入った事情があるのか入り口付近で別れた。

「それにしても、そんな歳で海外旅行なんてネギ君と一緒にやな」

「ネギ？誰だい？」

知っているのだが、あえて聞いておく。他人からの情報は少しでも欲しいところだ。聞くとハルナはふふん、と笑って。

「私たちの担任で天才少年。今年で十歳になるネギ・スプリングフィールド先生の事だよ」

「へえ、十歳で教師か……この学校の教育委員会や教師たちは何を考えているんだろうね？」

最後の方は聞こえないように呟く。人間として成熟していない少年に教師が務まると本気で思っているのだろうか？いや、もしかしたら魔法教師たちは他の教師や生徒の父兄に暗示魔法でも掛けているのだろうか？もし、本当にそんな事をしているなら、色々問題過ぎるだろう。それなら生徒として暮らせたほうが彼の為になるんじゃないだろうか？

「まあ、僕には関係ないか」

「ん？何や、カーム君？」

「いや、景色が凄いなって」

「ああ、確かに初めて見たら驚くよね」

休憩所だろうか、自販機の横にベンチがある。そしてそこから何と滝が降りているのだ。しかもその奥には巨大な本棚が並んでいる。確実に湿気る筈だが。不思議なことに近くに置いてある本は湿気ていない。どうやら保存式の魔法を使っているようだ。価値ある書物を保存するためには確かに必要だが。

「滝を作る必要はあるのか？」

まあ、学園長の趣味と割り切れればいいか。そう考え、近くの壁に手を当て、目を瞑る。

「これは魔力か？」

世界樹から魔力を通し、本の保存や地盤の補強に使っているのか。魔力の流れはとても綺麗で水路を流れる水のように流れている。これなら魔力を流している原因である世界樹を探れるだろう。そう思い、解析を続ける。

「っ！？」

瞬間、手に痛みが走る。目を開き、手を確認すると。壁に当てていた手が血だらけになっていた。どうやら解析や解除を防止する為の防護術式が働いたのだろう。

「これだけで済んだのは深い所まで解析していなかった為か」

一筋縄ではいかないようだ。それに一瞬感じた魔力のパターン。防護術式のはデユナミスが持っていたアルビレオ・イマの魔力パターンと同一だった。もう一つ、防護術式が掛かる瞬間、見付けた魔力パターン。

「これは『千の呪文の男』か。しかし、何故彼の魔力パターンが？」

「ん？ああっ!？」

後ろで大声がして振り返ると、コノカが驚いた表情で固まっていた。その視線は僕の手だ。

「ど、どうしたん？カーム君。血だらけやん!!！」

「いや、これは……………」

どう説明したものか。そう考えているとコノカはテキパキと近くの棚にあった救護箱で僕の手を治療する。

「ほい、完了。でも、なんでこんな怪我したん？」

「ええっと……………」

どう、答えようか。流石に擦り傷で済む怪我ではない。返答を考えていると、不意に頭を撫でられた。見ると、笑顔のコノカが僕の頭を撫でている。

「何を……………?」

「もしかしてウチに言えない事なん？」

流石に一般人である彼女にこの怪我を説明するのは難しい。

「まあ、それなら仕方ないな。まあ、そんな深い傷じゃなさそうやから安心したわ」

そういつて、怪我をしていない手を引くコノカ。

「さ、案内続けよか。まだまだ面白い所あるんよ?」

屈託なく笑うコノカに釣られて笑う。

「コノカ」

「ん?」

「君は不思議な人だな」

僕の言葉に首を傾げる彼女。それを見て僕は小さく笑う。

「次は何処を案内してくれるんだい?」

「ん、そやな」

そういつて、コノカは楽しそうに僕の手を引きながら歩き出す。報告は後で構わないか。

「ライブ、良かったな」

「うむ。いい歌だった」

俺の言葉にノーマが笑顔で返す。マスコミから逃げた後、暫くノーマと麻帆良祭を楽しんだ後、円達に参加しているライブを見て、今は両手に買い物袋を下げて家に戻っている最中だ。

「マドカ達、嬉しそうだったな」

「そうだな。お前も参加すれば良かったのに。確か、誘われてたんだろ？」

俺が聞くと、ノーマはそっぽを向く。

「娯楽の為に歌うのは苦手なんだ」

「そうか。それじゃ仕方ないな」

ノーマの回答に肩を竦める。

「なあ、アマト」

「なんだ？」

ノーマは少し俯きながら。

「私と出会って後悔……とかしてないか？ほら、私と会ってから色々と危険な目にあつたじゃないか？腕も一回斬られた事もあるし」

その事を思い出したのか、声に元気が無い。

「後悔……ね」

正直言えば、ノーマと関わってから色々とあり、未だ気持ちの整理が付かないのが、現状だ。だが、そんな状態でもノーマの問いにはしっかりと答えられる。

「後悔なんてしてないよ」

俺の言葉にノーマがこちらを見る。

「確かに、お前にあつてから色々と危険な目に遭った事もある。けど、その事でお前を責める事は出来ないし、なにより責める必要なんて無い。それにだ」

そいつって正面、俺の家を指さす。釣られてノーマが俺の家を見ると。

「アマトさーん……」

「早く食材を持ってきてください。そろそろキアが我慢できなくなります……」

「早く来いよ……」

シスカ、ローウェン、クーが入り口で手を振っている。



「お前に会ったお陰で、俺も色々な人と出会えたからな。感謝してるよ」

そういつて笑いながら、ノーマの頭を撫でる。その際、買い物袋がガサガサと音を立てる。ノーマは少しの間、俯くと。

「ふ…ふん！！それはお前の性格のお陰だろう？私が居ても居なくても同じじゃないか」

「かもな。けれど、お前がいなかったら、アイツ等とは今みたいな関係にはなれなかったと思うんだ。だって、お前に会わなかったら、俺は『魔法』なんて不可思議な物に出会わなかったかもしれない」

「その方が幸せかもしれないぞ？」

ノーマの言葉に俺は少し考え。

「それを決めるのは結局、俺だけだな。けど、俺は一度だってお前と出会った事を後悔してない。それだけは本当だよ」

そういつて、歩き出す。そろそろ行かないと、本気でヤバそうだ。あ、キアがローウェンに噛み付いた。それに苦笑していると。

「……………ありがとう」

後ろからノーマの声が微かに聞こえた。感謝するのは俺の方なんだろうけどな。

「ほら、ノーマ。お前も早く来い。じゃないと、キアに全部食べ

「られるぞ？」

「分かっている」

頬を少し赤くさせたノーマが急いで俺の横に並ぶ。

**Re・No:58「ネギの悩みと図書館島の出会い」(後書き)**

どうも作者です。更新が遅くなって申し訳ありません。次回からはもう少し速めに更新出来るよう努力します。では、次回もご期待ください。

Re・No:59「超の計画と協力者」

「ふむ、ハカセが遭遇した少年は彼で間違いない力？」

超さんがスクリーンを操作して画像を見せる。図書館島入り口に設置された監視カメラで捕えた映像にあの時、出会った少年が立っていた。

「はい、そうです。彼ですね」

「そうか……厄介だな」

腕を組んで難しい顔をする超さん。

「やはりそれほど、高名な魔法使いなんでしょうか？」

「いや、全く無名の魔法使いよ。というより、アレは本来、魔法使いの敵ネ」

「ということは超さんが言っていた『完全なる世界』の？」

私の言葉に超さんが頷く。

「まあ、彼が出張って来たとしても、そこまで大きく動けない筈、警戒程度で済ませるネ。問題は」

そういつて、もう一つの映像をスクリーンに映し出す。そこには外国人の少年少女が映っていた。

「この、ラブラブな二人がどうかしたんですか？」

「ハカセは以前、私から『エディルレイド』の事は聞いているネ？」

「ええ、強力な武器に変身する女性だけの一族ですよネ？」

「では『七煌宝樹』に付いては？」

確か『エディルレイド』の中で強力な個体で七体しか存在しない。そこまで考えて、映像の意図に気付く。

「もしかして、彼女が？」

「ああ、確か風を操る『メザールランス』だった筈ヨ。そして他にも『エディルレイド』が数体、この学園にいる。その内の一体はノーマさんよ」

「ノーマさんが！？」

確かに、何処か浮世離れた雰囲気だったけれど、その程度だったら3-Aには掃いて捨てるほどいるのだ。

「木を隠すには森の中、ですか？」

「いや、転入を決めた学園長と彼女の転入を薦めたあのご老体はそんな事を考えていないと思うヨ」

苦笑を浮かべながら超さんが答える。そういえば、先日そのご老体を仲間に入れようとして、返り討ちにあったと言っていた筈だ。

「あれ？もしかしてこの学園にいる『エディルレイド』達って一か所に集まってるんじゃない？」

「お、鋭いネ。そう学園にやってきた『エディルレイド』とその『ブレジャー同契者』合わせて、六人は山吹天先輩の家に集まっているネ」

その言葉に一気に脱力する。どこまでも想定外な行動をする先輩である。そういえば、元旦の日に超さんと五月さん、他クラスの何人かで家の大掃除を手伝わされましたね。まあ、疲れた分、終わった後のお雑煮はとても美味しかったです。

「更に件の少年も天さんと接触。彼の家にいるみたいヨ」

「えゝゝゝ、何ですかその戦力」

絶対に麻帆良学園にいる戦力と肩を並べられるじゃないですか。

「大丈夫なんですか？失敗したりしません？コレは流石にイレギュラー過ぎますよ？」

「言われなくても、分かってるヨゝゝゝ」

机に突っ伏して答える超さん。ああ、これはかなり参ってるな。

「お前、ホンマにフェイトやないのか？」

「さっきからそういつているだろう？そんなに僕とそのフェイトと  
いうのは似てるのかい？」

「はい、まるで双子みたいです。ああ、ホンマに残念です  
？カームはんとフェイトはんが双子やったら双子并なる物に挑戦  
できると思うとったのに？ホンマに残念です？」

犬耳が特徴の少年、コタロウの疑わしげの視線とメガネを掛け、  
頬を赤くしてクネクネしているツクヨミさん。そしてその二人を僕  
から引き剥がしたのは、同じくメガネを掛け、胸元が露出している  
服を着た女性、チグサさんがため息を吐く。

「まったく。済まんなあ、二人ともフェイトはんに付き合いがある  
さかい、気にしてるんやろ」

まあ、殆ど外見はそっくりだから仕方ないだろう。しかし、ここ  
まで警戒（コタロウという少年だけだが）されるとは。

「なあ、アマト。フタゴドンというのは何だ？美味しいのか？」

「食い物じゃないのは確かだ」

「むう、それは残念だ。というか、夕飯はまだか？」

それにしても、この家は色々と凄いな。右を見れば『ヴェアヴォルフ関西呪術協  
会』の術師『神鳴流』の剣士、狼男と人とのハーフ。左を見れば『  
七煌宝樹』の内の一体『メザランズ』確かノーマという少女は希  
少属性の『シンサレイズ光属性』の筈だ。そして他にも『エディルレイド』が二

体、内一体は『アークエイル』の保有する強力な個体と来た。更に聞いた所によればネギ・スプリングフィールドもこの家に来ているという。これは流石に出来過ぎだろう。デユナミス辺りが『ドッキリ!!!』と書かれたプラカードを掲げて出てきても、驚かないだろうな。

『クウイントウム。聞こえるか?』

『プラカードの用意は出来たかい?デユナミス』

『?何の事を言っている?定時連絡はどうした?問題でもあるのか?』

絶妙のタイミングでデユナミスからの念話が来たせいで、変な事を言ってしまった。取り敢えず、此处から離れた方がいいだろう。

「済まない。手洗いは何処だろうか?」

「ん?その角を右だ」

「ありがとう」

調理しているアマトにトイレの場所を確認し、トイレに入る。

『デユナミス。色々事が予想外の方に動いている』

『なに?詳しく話せ』

催促するデユナミスを落ち着かせ、なるべく簡潔に告げる。



『下宿先で『七煌宝樹』と出くわした』

『……………は？』

おお、デユナミスの面白い声を聞けるとは。すると、外から食事が出来たと、言われた。

『食事が出来たみたいだ。行つて来るよ。それと、テルテイ……………フェイトが近くにいるようなら伝えてくれ。君のお陰で苦勞が絶えない、とね』

『ちよつ……………！！待てクウイントウム。もう少し詳しく……………』

一方的に念話を断ち切る。さて、この芳しい匂いの正体は何だろうか？

「それにしても、意外と和食も食べれるんだな」

「好き嫌いはあまり無いからね。それに和食というのにも興味があったし」

そういつて、カームが箸を器用に操り、焼き魚を解体している。その右隣では両手で焼き魚を掴んで豪快に喰らいついている小太郎。左側は苦戦しながら解体作業に勤しんでいるノーマがいる。いやは

や、対照的だな、おい。

「なあ、コタロウくん。これほど、素晴らしい食事に対して食べ方が少々乱暴すぎないか？」

「いいやないか、そんなん？ちゅうか、お前大根下ろし取り過ぎや。他の奴の事考えろや？」

「大根下ろしすら食べられないお子様な君には関係ないだろ？それに君もかなり肉を取っている様に見えるが？もう少し野菜とのバランスを考えてみたらどうだい？」

「そんなん、お前に言われる筋合い無いわ！！！！って、俺の肉取るなや！！！！！」

「そんな物、早い者勝ちだろう？それに君の肉だという証拠も無い。世界は厳しい物だよ。いい勉強になっただろう？」

「なんやと、コラア！！！！！」

「ああ、もう！！！！もう少し静かに食べへんのか、このアホ！！！！！」

「ンギヤツ！！！！！」

「ツツ！！！！チグサさん？僕は殴られる覚えは無いんだが？」

「煽ったカームはんも悪い」

いやあ、最初の印象吹き飛ばな。にしても、意外と息合ってる

なこの二人。

「知識と経験はやはり違う物だね？」

「そりゃ、違うやろ？」

小太郎の言葉にカームは薄く笑みを浮かべ。

「実際に食べると、和食とはこれほど、奥深い物とはね」

「そうか？」

不思議そうに味噌汁の香りや味を確認する小太郎。

「まあ、洋食とか食べないと違いは分からないもんだけどな」

「ふん」

そういうと、小太郎は食事を再開する。ノーマを見ると、ようやく解体が終わったのか、嬉しそうに魚を頬張っている。少し周りを見れば、クーとレン、ラサティがリイリアに魚の解体を教えて貰っている。シスカとローウェンは煮物を物珍しそうに食べている。キーアは。

「アマト。お代わり！！！！」

「はいはい」

大量の肉と魚と野菜が乗っている大皿を目の前にしたキーアが特大の丼を寄越してくる。俺はその丼に炊きたての白米を山の様に盛

る。キアが来てから食費が三倍に膨れ上がった。いや、嬉しそうに食べてくれるのはこちらとしても嬉しいんだが、量がな。本当、ローウェンは苦勞してるんだな。

「ああ、本当美味しいわアマト。もう、此処に住んじやおうかな。」

それはマジで勘弁して欲しい。井を受け取ったキアが再び、食事を再開する。

「それで？カームは学祭終わった後、どうするんだ？」

食事が終わり、俺とカーム、ローウェンが皿洗いをする事になった。女性陣は皆、風呂に入っている。居間ではクーと小太郎が格闘ゲームで対戦している。因みに俺が食器を洗い、ローウェンが水で食器の洗剤を流し、カームが食器を拭いている。作業を続けながらふと、気になりカームに聞く。カームは手を止めず、しかし少し間を置くと。

「そうだね。暫くは此処にいると思う。」

「いると思うって。学校はどないするん？」

風呂から上がったのか、千草さんが月詠の頭を拭きながらやってきて聞いてくる。カームは無表情に答える。

「高校までのカリキュラムなら既に終わっているから問題ないよ」

そういつて、拭いた皿を綺麗に並べる。

「でも、学校は勉強だけじゃなくて人間関係を学ぶ場所でもあるんだ」

洗剤を水で洗いながらローウェンが告げる。

「そういつ意味でも学校には行った方がいいんだ」

「まあ、留学する訳じゃないから問題は無いんじゃないか？けど、流石にお前くらいの子供が昼間出歩くのはな」

「ちゃんと対策はあるから問題は無いよ」

そういつて、最後の皿を拭き終わる。

「うし、そろそろ皆も風呂上がっただろう？」

後ろを見ると、女性陣は皆居間で寛いでいた。俺はカームとローウェンの肩を押しながら。

「んじゃ、キアに何か注文される前に風呂に入るか」

「そうだね」

「それで、これからどうするんですか？一応、予備のロボットたちも整備してありますけど」

「そうネ。恐らく、私の計画を天さん達は知らされる筈。もし、知らされなくても出し惜しみはしない方がいいネ」

そういつて、超さんは椅子から立ち上がる。

「本当は使うつもりなど無かったのだがナ」

「致し方あるまい」

新しい声が響く。そちらの方に振り向くと。

「ノーマ………さん？」

「ほう？それほど、私とあの人は似ているのか？それは嬉しい限りだ」

そういつて、楽しそうに微笑む彼女。髪の色、瞳の色ともノーマさんと同じ、顔立ちも幾らか大人びているがノーマさんと同じだ。だが、ノーマさんのツインテールと違って彼女は長い髪を下ろしている。

「また私に力を貸してくれる力？シーマ」

「無論だ。アイツとの約束だからな。例え、お前が拒否しようとも助力するつもりだ」

そういつて、シーマと呼ばれた彼女は超さんの右手を握り、謳う。すると、眩い光が二人を包む。

「ま、まさか……………」

超さんは未来から来た人間だ。なら、同じ未来の人間を連れてきてもおかしくは無い。光が収まるとシーマと呼ばれた少女はいなくなり、代わりに超さんの両腕には二対四枚の翼になっていた。

『さて、私としても『先代』達の実力は分からない。故に気を抜くなよ』

「なに、今直ぐに戦いに行く訳じゃないネ。ちょっとだけ、空の散歩に行くだけヨ」

そういつて、超さんは空いている窓から跳びだし、空へ飛翔した。

**Re・No:59「超の計画と協力者」(後書き)**

お待たせしました。今回は此処まで次回から三日目の始まりです。  
全員活躍させるつもりなので楽しみに待っていてください。



## Re・No：60「超の作戦とネギの秘策」

「んじゃ、アニキが考えた作戦を実行に移すか」

そういつて、カモ殿は刹那殿、木乃香殿と共に歩き出した。他の皆もそれぞれ目的の場所に向かう。

「さて、時間まで拙者は暇になってしまったで御座るが」

「いえ、長瀬さんには私と共にある仕事をお願いしたいのです」

すると、後ろから夕映殿が声を掛けてきた。

「ある仕事？」

「はい。それは」

「

「ふん、超による全世界規模の強制認識魔法ね」

麻帆良祭三日目の朝。朝食も済み、さてこれからどうするか、と皆で話し合っている時に夕映と長瀬がやってきた。そしていきなり超の計画を聞かされた。

「それを俺達に聞かせて、どうしようってんだ？」

「率直に言って、この計画を潰す手伝いをして欲しいので御座る」

長瀬が真剣な表情で告げる。俺は顎に手を置き、周りを見る。皆、途方もない計画に戸惑っている。

「確かに、それは結構厄介だな。魔法が明るみに出るって事は、それに連なる情報も自然と出て来る」

その言葉に頷いたのはローウェンとシスカだ。そう、魔法が世間にバレれば一番被害を受けるのは『エディルレイド』なのだ。下手な魔法使いよりも強力だが、個体数が少ない。そしてノーマ達の故郷である『向こう側』でもかなり酷い扱いを受けていると言う。この被害が単純に数倍以上になるのだ。最悪彼女達で人体実験でもやりかねない。

「確かに、それは俺個人としても不味いな」

「では……」

長瀬が身を乗り出す。

「お前らの言っている事が真実ならな」

俺が告げた言葉に二人が黙る。

「どういつ事だ？アマト」

クーの言葉に俺は肩を竦める。

「少し考えれば分かる事だ。それほど大規模な計画だ。なら、情報の隠蔽にはかなり注意している筈だ。まあ、とうの犯人である超が敢えて、バラすという線もあるが、それではリスクが高すぎる」

「そうだね。もしやるなら徹底的に隠して、何かのイベントで誤魔化す、という風にやるだろうから」

「そういう点も踏まえて、聞きたい。お前らはどうやって超の計画に気付いた？そこら辺をしっかりと知つとかないと。俺達も迂闊に動けない。それくらいは分かってるだろう？」

「……………分かりました。私も知っている限りの事をお伝えします」

そういつて、夕映が話し始めた。

やはり思った通り。此処の魔法使いも動いたか。しかし、情報を得る為に僕が裏の人間だと伝えたのは軽率だったかな。だが、告げた瞬間、皆が同じように納得したのは何故だろうか？

「つと、こんな所です」

すると、説明が終わった。そして当のアマトは組んでいた腕を解いて、深くため息を吐く。

「さて、どうしたもんかな？」

そういつて、周りを見る。

「これは止めるべきでしょうね。私達『アークエイル』としてもコレは認可出来ません」

「そうですね。これで彼女達『エディルレイド』の存在も明るみに出すのは不味いですから」

そういつて、シスカとローウェンが告げる。それに頷くリィリアとラサティ。

「俺にとっちゃ、そんな計画どうでもええな」

コタロウが気だるげに告げる。

「まあ、超の方もちゃんと妨害手段はあるだろうからな」

「修行の一環です」

ツクヨミさんの言葉に興味をそそられたのかコタロウは乗り気になつたようだ。

「お前はどつする、カーム？」

「僕かい？」

素直に驚いた。僕の意見は聞かれないと思っていたのだが。

「何、そんなに驚いているんだよ。お前だって魔法使いだし、それなりに思う所もあるんじゃないか？」

「……………そうだね。僕としてもこの話は無視できるレベルを越えている」

そもそも僕等の『計画』にとって邪魔以外の何物でも無いからね。

「んじゃ、決まりだな。俺達はネギに協力する」

彼の言葉にやってきた二人が安堵する。

「さてと、それじゃ早速、ネギの居る所に案内して貰おうか。それと移動中に大まかな作戦の説明もな」

彼の言葉に二人が首を捻る。彼は笑って。

「こつちも戦力としてならかなり潤ってるからな。単なる突撃じゃ、勿体ないだろ？」

楓に案内されてやってきたのは学園の図書室だった。確かに図書系のサークルやイベントは図書館島で行うので秘密の話し合いなら、おあつらえ向きだ。

「よ、大丈夫かネギ」

「あ、天さん。来てくれたんですね」

そういつて、ネギは荒い息を吐きながら起き上がる。俺はネギが座っているソファに札を張って、向かい合うように持ってきた椅子に腰かける。

「聞いたぞ。お前の作戦。中々面白いじゃないか」

そういつて、笑う。

「あの、それで此処に何しに？」

「なに、お前の作戦に俺も少し手を加えようと思ってな。その報告だ」

「手を加える？」

俺は頷く。

「別にお前の作戦を根本から変えようとは思ってねえ。その作戦に俺の案を入れるだけだ」

そういつて、俺は人差し指を立てる。

「一つは兵力の増強。コイツはちょっとしたイベントとして行う事にする」

「でも、どうやって？明日菜さん達は『お助けキャラ』として参加する予定ですけど」

「いるだろ？時間限定の増援で、しかも一目見ればイベントと分かる奴等が」

楽しそうに言うと、ネギが気付く。

「もしかして『妖怪』ですか！？」

「ああ、但し、勝手に超の軍団を倒して、ポイントを横から奪い去る『第三軍』として扱う。つまり三つ巴の戦いに見せるんだ」

「でも、それに何の意味が？」

俺の言葉に首を傾げながら聞いてくる。

「簡単だ。俺達にとっては唯のイベントでも超達にとっては『妖怪』と麻帆良生徒両方を相手にしなくちゃいけない。そうなれば、情報伝達も遅れるだろ？」

敵が増えれば、それだけ敵の情報が増え、それを区分けする為に時間を割かれる。

「更に防衛地点に最高の腕利きを置いておいた」

「それって、クーさん達ですか？」

頷く。防衛する起点にクー達、エディルレイド組を配置する。エディルレイドを持たないシスカ、小太郎、月詠は『お助けキャラ』

として参加。未知数のカームは一般の人間として参加させている。

「今は皆、それぞれ動いている筈だ」

俺の説明にネギが感心したように頷く。

「流石ですね。僕じゃそこまで、思い浮かびませんでした」

「いや、お前がアイディア出さなかったら俺だってこんな作戦思い付かねえよ。この作戦を思い付かせたのはお前のお陰だ。誇つていい」

そういうと、ネギが照れる。そして何かに気付いたのか、掌を握ったり開いたりする。

「あれ？身体が」

「気付いたか。実はな、そのソファに張った札には大気中の魔力を吸い上げる効力があってな。そのお陰でお前の回復も早い、という訳だ」

千草さんがくれたんだぞ、と付け足す。そして案の定、ネギはグツと拳を握って。

「よし。じゃ、僕も行ってきます！――！」

「そうは問屋が降ろさない、ぞつと」

そういつて、ネギの額に札を張りつける。札を貼られたネギはそのまま、ソファに倒れる。



「あ……まと……さん？」

「悪いな、お前はもう少し寝てろ。切り札は最後まで出ないもんだ」

そう、俺が考えた作戦を加えても無理がある。それにネギは超に何か思う所もあるだろう。自分の生徒なら尚更だ。なら、考える時間も必要だ。俺は携帯のアラームを設定して、すやすやと寝息を立てているネギの横に置く。

「さて、此処は任せていいよな？」

そういつて、後ろを振り向くと、仏頂面のラサティが入り口に寄りかかっていた。その隣では心配そうにネギを見ているリイリアもいる。

「確認だ。ネギが起きて動いたら僕たちも動いていいんだな？」

「疑り深いな。大丈夫だよ、ネギが起きるまでその身辺を守ってくれるだけでいいんだから」

あの超の事だ。ネギの妨害の一つとして色々やる筈だ。

「なら、いいさ。それと、僕達の方も残しておいてくれよ？武道会だけじゃ暴れ足りないんだ」

獰猛な笑みを浮かべるラサティ。それとは対照的に少し怯えているリイリア。俺は苦笑して。

「おお、怖い怖い。分かった、皆にも伝えておくよ。一応、言って

おくけど。アラームが鳴るまではネギを起こすなよ?」

「ふん、分かっている」

そういつて、近くの椅子に座り。何時の間にか本棚から取って来た本を開いている。タイトルから察するに。

「お前、恋愛小説も見るんだな」

「う、煩い!!!!さっさと行け!!!!!!」

顔を赤くしながら叫ぶラサティに苦笑しながら、図書室を出る。さて、これから忙しくなりそうだ。

「確かにお嬢様の魔力を媒介にすれば、数に困りまへんけど、今回は上位の妖怪を呼びますから、少々勝手が違うんです」

「そうなん？」

召喚術なんて皆同じじゃと思つとつたわ。ちい姉さんはいいですか、と前置きして。

「下位の妖怪を呼びだすなら、別に畏まった儀式をせんでも魔力を媒介にすれば出来ます。京都でお嬢様を利用して妖怪を呼び出した時も同様です。けど、その後、ウチが呼び出した『リヨウメンスクナノカミ』は別です。アレはお嬢様の魔力を火種として地脈から魔力を引き上げたんです」

「チミヤク？」

ウチの言葉にちい姉さんは笑みを浮かべる。こうやって知らない事を素直に言葉にしてくれるのは説明し甲斐があつて嬉しい、つて前言つてたな。

「地脈、又は龍脈と呼ばれます。まあ、言つてしまえば、星の血管みたいな物です。地脈を流れている魔力は無尽蔵で殆ど、底がありません。けど、誰もが自由に使える訳ではありません。扱えるのは自分自身もそれなりに魔力が無いと不可能なんです」

「なんで？」

単に魔力を使うなら誰でも出来ると思ふんやけど。

「そつやな。自分の魔力で地脈というドアをノックし、中から魔力

を出させる。そのノックをするのにかなりの魔力が必要なんです」

「成る程」

何となく分かった。

「さて、それじゃ。召喚するさかい、魔力を地面に流して下さい」

「魔力ってどうやって流すんやっただけ？」

ウチの言葉にちい姉さんがズッコケル。

「そうやった。肝心な事忘れてたわ。いいですか、お嬢さん。目を瞑って、ウチの言葉を聞きながら集中してみてください」

言われた通り、目を閉じる。

「ええでつか、魔力は言わば、水です。自らを水道の蛇口と思って下さい」

蛇口やな。

「そしてゆっくりと水（魔力）を地面に流すんです。焦ったらいけません」

言われた通り、ゆっくりとイメージする。瞬間、地面の下からドクン、と鼓動が聞こえる。驚いて、目を開くと地面が淡く光っている。

「成功。中々筋がええですな。これなら式神召喚も早く出来そう

やな」

そういつて、ちい姉さんは先程描いた陣の中心に立ち、五つの方向に札を投げる。投げられた札が地面に落ちると五つの札が五色の光を放つ。青、赤、黄、白、黒それぞれの色は同色の輝きを大きくする。そして違う色同士の輝きがぶつかると、輝きの拡大が止まり、それぞれの色は繋がり丁度 のような形になる。

「これなんなん？」

「お嬢様『五行思想』はい、復唱！！」

言われた単語の内容を思い出す。

「えつと『万物は木、火、土、金、水の五つの元素によって成り立つ』やったっけ？」

「宜しい。この作業の意味は今から召喚する上位の妖怪の為に器を用意する為や」

「器？」

「そう、妖怪ちゅうんは力は強大やけど、実際はとても脆い存在なんや。そうやな、幽霊みたいなもんや。そやから、妖怪は昼より、夜の方が力を発揮できる。『百鬼夜行』なんて言葉はそこから来ている、って説は別にええか。まあ、今から召喚する妖怪の為に身体 of 許を作っている、と言う訳ですわ」

「でも、前の時はそんな事せんかったよね？」

それを聞いてちい姉さんは納得するように頷く。

「あの時は周囲に五行の属性総てが揃ってたんよ。物事は総て五つの属性で構成せな効力を完全に発揮できん様になつとるんや。召喚も、封印も全部、五行が深く関わつとる。せやから封印した物を復活するのにわざわざ、新しい器を用意せんでもええんです。元々封印用の物で事足りるんやから」

「はあ」

感心していると、ちい姉さんが小さく呟いている。すると、陣の輝きが大きくなり、ゆっくりと陣から鬼さん達が現れた。中には天狗なんかもある。数は見えるだけで数十。確か、陣はこの公園全部やから、合計百体位いるんやろうな。正に『百鬼夜行』やな。今は昼やけど。

「ほほあ、今回はまた大勢で呼ばれたの」

「さて、どうやら龍脈を通して呼ばれたようだが？」

頭をポリポリと掻きながら周りを見回している赤鬼。そして自らの手を握ったり開いたりしている天狗。他にも色んな妖怪がいる。

「はいはい。注目!!」

パンパンとちい姉さんが手を叩く。妖怪の皆が注目する。

「これからあんさんらは鉄の人形と戦って貰います」

「なんや、大勢呼ばれた、思ったら人形遊びか」

「他にもあるのだろう?。」

「勿論、あんさんらには人形の他にこの人らと戦って貰います」

そういつて、全ての妖怪に見える様に掲げたのはパルが書いた今回のイベント参加者が着る戦闘服の様な物。

「それを着た人間と戦えば良いのか?。」

「ほほう、乱戦か。腕が鳴るわい」

そういつて、豪快に笑う鬼。

「因みに制限は人間を殺さない事。骨の一本二本は大目に見るさかい、遠慮なくやってええよ」

そういつて、ちい姉さんはウチを見る。すると、その視線を追って妖怪がウチを見る。ちよつと緊張するわ。

「えっと。皆頑張つてな!!。」

「ハッハッハ!!! こないめんこいお嬢ちゃんに声援送られたからには頑張らアカンの」

「で、あるな」

そういつて、鬼さん達はゆつくりとイベント開始場所まで歩き始める。

「凄いな。これならウチ等の勝ちだな」

「それはどうやらな」

ちい姉さんは顎に手を当てて答える。

「確かにあれ程の上位妖怪が戦えば、相手は不利や。けど、それがイコールこっちの勝利とは限らん。超っちゅう子はかなりの天才なんやろ？せやったら、隠し玉の一つや二つ。持っっても不思議やない」

そういつて、鋭く眼下の湖を睨む。

「まあ、ウチ等の役目はイベント終了までの間、此処を死守するだけや。これからやで、お嬢様」

そういつた瞬間、陣に変化が起きた。陣の色が五色から闇一色に変わり、風の様な魔力が吹き荒れる。

「な、なに？」

「これは召喚の横入り？！んな、無茶な！！！」

唐突に起きた変化はやはり唐突に終わり、陣の中心には人影が立っていた。

「おや？召喚に飛び入りしてみたら、これは久しぶりだね」

そういつて、にこやかな笑みを浮かべるお爺ちゃん。その姿に見覚えがあった。すると、ちい姉さんが歩き出す。お爺ちゃんも歩い



て、お互い、後一步の所で止まった。

「ほんに、久しぶりやな。んで、この場に来たっちゆうことは、召喚に応じた、それでええんやな？」

「勿論だとも、レディ。それで私の役目はなにかパオツ?!」

お爺ちゃん、ヘルマンさんの言葉を遮ってちい姉さんがビンタする。凄くいい音したな。

「今のはウチの腕を折った分です。んで」

「ホブツ!？」

よろけたヘルマンさんの股の間に垂直の蹴りが入る。少し遠いこ  
つちまで音が聞こえるんやけど。

「これがあの時に粉々に砕かれたウチの年上としてのプライドの分  
です。さて、それじゃ本題に入りますか」

「う……………うむ」

だらだらと汗を流しながらヘルマンさんが立ち上がる。若干、内  
股が気になるけど突っ込んだらアカンよね。

「ふむ、では私も先に呼ばれた彼らと同じようにすればいいのかね  
？」

「ああ、願ひするわ。それと、小太郎はんやネギはんに会っても  
戦わない様にな？」

「……………了承した」

「なんや、その長い間は」

「なんか、面白くなりそうやな」。

**Re・No:60「超の作戦とネギの秘策」(後書き)**

どうも作者です。今回はメインイベントの前準備。そして作者なりの独自解釈です。せっかく『陰陽術』というのを使っているのですから『陰陽五行説』入れないと面白くありませんから。そしてヘルマンさん復活。男性キャラでかなりお気に入りなので彼の活躍にも期待してください。では次回の更新をご期待ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2489m/>

---

エレメンタルジェレイド～麻帆良で輝く光～

2011年12月21日20時49分発行